

きょうごくし いせき
京極氏遺跡発掘調査報告書
—京極氏館跡第1～3次、弥高寺跡第1・2次—

2012.3

米原市教育委員会



京極氏館跡礎石建物 第2次調査区 (SB01・SB02)



京極氏館跡出土遺物（鍾）



京極氏館跡出土遺物（貿易陶磁）



弥高寺跡から琵琶湖に沈む夕日を眺める



弥高寺本堂跡調査区全景



弥高寺坊院跡調査区全景



弥高寺坊院跡出土遺物（青磁碗）



弥高寺本堂跡出土遺物（須惠器・貿易陶磁）



弥高寺坊院跡出土遺物（仏像宝冠）



弥高寺坊院跡地鎮具出土状況

序

米原市は、平成17年に滋賀県坂田郡山東町・伊吹町・米原町・近江町が合併して誕生しました。

市域はおおよそ律令によって定められた近江国坂田郡に相当し、北近江の大河姉川や天野川の源流をなす伊吹・霊仙の両山系から、琵琶湖沿岸まで広がります。近江の最高峰伊吹山をはじめとした山の恵みを背後にひかえ、母なる琵琶湖の恵みを眼前にしたこの地では、県内でも最も早く、縄文時代の早期から今日まで営々と人々のくらしが続いていたことが、これまでの発掘調査でわかってきました。

米原市は東西文化の結節点あるいは東西文化の境界に位置しています。深い歴史とその位置から、いつの時代も歴史の表舞台に登場する場所です。その歴史的な特徴をあげてみると、湖と内湖・里山に囲まれてくらしやすかった縄文時代、古代天皇家と結びついた豪族息長氏の古墳群、東山道(中山道)や北国街道が交差し、琵琶湖の要港・朝妻湊からの舟運で都とつながる地、伊吹山と霊仙山の山岳信仰、そして、京極氏やその家臣団の城館のほか、浅井長政と織田信長の攻防の舞台となった山城群などを挙げることができます。

さて、本書は米原市上平寺および弥高に所在する国指定史跡「京極氏遺跡 一京極氏城館跡・弥高寺跡一」の発掘調査の報告書です。戦国大名のあり方を示す重要な史跡として指定された遺跡の保存・活用を図るための基礎資料となる調査結果が得られました。

報告書刊行にあたり、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成に際しまして、御指導・御協力を賜りました関係諸機関・各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が、今後の歴史研究に多少なりとも資するところとなり、埋蔵文化財の保存と愛護に活用されますよう願うものです。

平成24年3月31日

米原市教育委員会

教育長 瀬戸川恒雄

例 言

1. 本書は、平成17～23年度において米原市教育委員会が実施した、米原市上平寺および弥高に所在する国指定史跡「京極氏遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 現地における発掘調査は、平成17～20年度におこない、整理調査を平成20～23年度におこなった。対象とした遺跡は、京極氏館跡(平成17・18・20年度)および弥高寺跡(平成18・19年度)である。
3. 現地調査は米原市教育委員会生涯学習課歴史・文化財保護室主査・高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記のとおりである。

調査主体 米原市教育委員会

教育長 瀬戸川 恒雄

調査事務局 米原市教育委員会生涯学習課

(平成17・18年度 文化スポーツ振興課、平成19～21年度まなび推進課)

課長 中井 均(平成17・18年度 文化スポーツ振興課)

” (平成19年度 まなび推進課)

児玉 渉(平成20年度)

三田村健城(平成21年度)

横山 信人(平成22年度 生涯学習課)

山田 英喜(平成23年度)

課長補佐 桂田 峰男(平成18～21年度)

” (平成22・23年度 歴史・文化財保護室長)

主査 桂田 峰男(平成17年度)

高橋 順之(平成17年度～23年度)

主事 高畑 光昭(平成17年度)

梅本 匠(平成22・23年度)

調査補助員 的場 育代、世一 みゆき

作業員 三宅 敏行、丸本 正一、三宅 久子、丸本 比佐乃、谷口 由季、
三宅 浩美、三宅 美一、小林 新吾、高橋 直文、川並 理、
松尾 仁兵衛、大橋 徳之、平山 勝子、阿部 修平、後藤 美智子、
筒井 善之、西村 進、多賀 兼、太田 泰子、石田 雄士、
山田 拓臣、李 暁雨、野木 直人、樋口 晃一、大澤 永治、
北川 遼、谷川 真知子、杉山 裕美、松本 晴菜、高野 直子、
東郷 美香

4. 遺物の整理・実測等に関しては、上記調査補助員・作業員のうちの場、世一、太田がおこなった。
5. 遺構・遺物の写真撮影は、寿福写房の寿福 滋氏に依頼した。
6. 石材の鑑定については、八日市地学趣味の会会長・磯部敏雄氏に依頼した。
7. 遺構の実測は、株式会社金城測量に委託しておこなった。
8. 本書の執筆・編集は高橋順之がおこなった。
10. 発掘調査および報告書の作成にあたって、次の方々からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して厚く感謝の意を表す次第である。（敬称略・順不同）
大沼芳幸、小野正敏、久保智康、重田 勉、菅谷文則、高田 徹、高梨純次、田中哲雄、中井 均、仁木 宏、藤岡英礼、松室孝樹、三浦正幸、安田学臣、山寄仁生、用田政晴
9. 調査記録および出土品は、米原市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 地理的環境と歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
1. 米原市の山寺	2
2. 米原市の城郭	3
第2章 調査の経緯	9
第3章 京極氏館跡発掘調査	11
第1節 京極氏館跡の歴史と構造	11
1. 京極氏館跡の歴史	11
2. 京極氏館跡の構造	11
第2節 第1次調査の成果	12
1. 調査経過	12
2. 検出した遺構	14
3. 出土遺物	17
4. 調査のまとめ	18
第3節 第2次調査の成果	21
1. 調査経過	21
2. 検出した遺構	21
3. 出土遺物	24
4. 調査のまとめ	24
第4節 第3次調査の成果	27
1. 調査経過	27
2. 検出した遺構	27
3. 出土遺物	30
4. 調査のまとめ	30
第4章 弥高寺跡発掘調査	34
第1節 弥高寺跡の歴史と構造	34
1. 弥高寺跡の歴史	34
2. 弥高寺跡の構造	35

第2節	第1次調査の成果	37
1.	調査経過	37
2.	検出した遺構	39
3.	出土遺物	39
4.	調査のまとめ	42
第3節	第2次調査の成果	44
1.	調査経過	44
2.	検出した遺構	47
3.	出土遺物	53
4.	調査のまとめ	70
第5章	調査のまとめ	72

挿図目次

第1図	米原市位置図	1
第2図	米原市の山寺位置図	4
第3図	米原市の中世城館跡位置図（伊吹地域）	7
第4図	米原市の中世城館跡位置図（山東・米原・近江地域）	8
第5図	京極氏遺跡位置図	10
第6図	京極氏館跡全体図（調査区位置図）	13
第7図	第1次調査区、ST1、ST2平面図・断面図	15
第8図	SX01、SX02、SX03、SX04平面図・断面図	16
第9図	京極氏館跡第1次調査出土遺物実測図（1）	19
第10図	京極氏館跡第1次調査出土遺物実測図（2）	20
第11図	第2次・第3次調査区平面図・断面図	22
第12図	礎石建物SB01平面図・断面図	23
第13図	京極氏遺跡第2次調査出土遺物実測図（1）	25
第14図	京極氏遺跡第2次調査出土遺物実測図（2）	26
第15図	礎石建物SB02平面図・断面図	28
第16図	庭園遺構SX05平面図・断面図	29
第17図	京極氏遺跡第3次調査出土遺物実測図（1）	31
第18図	京極氏遺跡第3次調査出土遺物実測図（2）	32
第19図	弥高寺跡全体図（調査区位置図）	36
第20図	第1次調査区平面図・立面図・断面図	38
第21図	礎石建物SB01平面図	40
第22図	建物SB02平面図・断面図	41
第23図	石敷き遺構SX02平面図	41
第24図	弥高寺跡第1次調査出土遺物実測図	43
第25図	第2次調査区平面図	45
第26図	第2次調査区断面図	46
第27図	礎石建物SB03平面図	48
第28図	礎石建物SB03断面図	49
第29図	礎石建物SB04平面図・断面図	50
第30図	地鎮遺構SX03平面図・断面図	51
第31図	石段SX04、石垣SA01平面図・断面図	52
第32図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図（1）	56

第33図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(2)	57
第34図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(3)	58
第35図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(4)	59
第36図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(5)	60
第37図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(6)	61
第38図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(7)	62
第39図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(8)	63
第40図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(9)	64
第41図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(10)	65
第42図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(11)	66
第43図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(12)	67
第44図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(13)	68
第45図	弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(14)	69
第46図	京極氏館推定模式図	73
第47図	大内氏館庭園跡平面図	74
第48図	『慕帰絵詞』に見える塔頭	76
第49図	備中松山城天守の火床	76

写真目次

写真1	長寿寺本堂	71
-----	-------	----

図版目次

図版1	京極氏遺跡空撮
図版2	『上平寺城絵図』(市指定文化財／江戸時代)
図版3	(1)京極氏館跡調査前の状況 (2)京極氏館跡発掘調査風景
図版4	(1)京極氏館跡第1次調査区全景(南から) (2)京極氏館跡第1次調査区全景(北から)
図版5	(1)京極氏館跡第1次調査土坑SK01 (2)京極氏館跡第1次調査石敷きSX01
図版6	(1)京極氏館跡第1次調査石敷きSX02 (2)京極氏館跡第1次調査石敷きSX03

- 図版 7 (1)京極氏館跡第 1 次調査暗渠SX 0 4
(2)京極氏館跡第 1 次調査遺物出土状況
- 図版 8 (1)京極氏館跡第 1 次調査出土遺物 (土師器皿 1)
(2)京極氏館跡第 1 次調査出土遺物 (土師器皿 2)
- 図版 9 (1)京極氏館跡第 1 次調査出土遺物 (土師器皿 3)
(2)京極氏館跡第 1 次調査出土遺物 (国産陶器)
- 図版10 (1)京極氏館跡第 1 次調査出土遺物 (国産陶器・貿易陶磁)
(2)京極氏館跡第 1 次調査出土遺物 (貿易陶磁)
- 図版11 (1)京極氏館跡第 1 次調査出土遺物 (金属器)
(2)京極氏館跡第 1 次調査出土遺物 (石製品)
- 図版12 (1)京極氏遺跡第 2 次調査区全景 (南から)
(2)京極氏館跡第 2 次調査区全景 (北から)
- 図版13 (1)京極氏館跡第 2 次調査礎石建物SB 0 1 (南から)
(2)京極氏館跡第 2 次調査礎石建物SB 0 1 (北から)
- 図版14 (1)SB 0 1 の礎石
(2)京極氏館跡第 2 次調査遺物出土状況
- 図版15 (1)京極氏遺跡第 2 次調査遺物出土状況
(2)京極氏遺跡第 2 次調査遺物出土状況
- 図版16 (1)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (土師器皿 1)
(2)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (土師器皿 2)
- 図版17 (1)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (土師器皿 3)
(2)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (土師器皿 4)
- 図版18 (1)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (土師器皿 5)
(2)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (陶磁器 1)
- 図版19 (1)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (陶磁器 2)
(2)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (金属器 1)
- 図版20 (1)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (金属器 2)
(2)京極氏遺跡第 2 次調査出土遺物 (金属器 3)
- 図版21 京極氏館跡第 2 次・第 3 次調査出土遺物 (小円礫)
- 図版22 (1)京極氏遺跡第 3 次調査区全景 (南から)
(2)京極氏館跡第 3 次調査区全景 (北から)
- 図版23 (1)京極氏館跡第 3 次調査礎石建物SB 0 2 (北から)
(2)京極氏館跡第 3 次調査礎石建物SB 0 2 (東から)
- 図版24 (1)SB 0 2 の礎石
(2)SB 0 2 の礎石
- 図版25 (1)京極氏遺跡第 3 次調査庭園遺構SX 0 5 (南から)
(2)京極氏遺跡第 3 次調査庭園遺構SX 0 5 (東から)

- 図版26 (1)京極氏遺跡第3次調査出土遺物(土師器皿1)
(2)京極氏遺跡第3次調査出土遺物(土師器皿2)
- 図版27 (1)京極氏遺跡第3次調査出土遺物(陶磁器)
(2)京極氏遺跡第3次調査出土遺物(金属器1)
- 図版28 (1)京極氏遺跡第3次調査出土遺物(金属器2)
(2)京極氏遺跡活用イベント「上平寺戦国浪漫のゆうべ」風景
- 図版29 (1)弥高寺本堂跡全景
(2)弥高寺坊院跡全景
- 図版30 (1)弥高寺本堂跡発掘調査風景(第1次調査区)
(2)弥高寺坊院跡発掘調査風景(第2次調査区)
- 図版31 (1)弥高寺跡第1次調査区全景(東から)
(2)弥高寺跡第1次調査区全景(北から)
- 図版32 (1)弥高寺跡第1次調査基壇SX01(南から)
(2)弥高寺跡第1次調査基壇SX01(東から)
- 図版33 (1)弥高寺跡第1次調査礎石建物SB01の礎石
(2)SB01の礎石
- 図版34 (1)SB01の礎石
(2)SB01の礎石
- 図版35 (1)弥高寺跡第1次調査石敷きSX02
(2)弥高寺跡から濃尾平野を望む
- 図版36 (1)弥高寺跡第1次調査出土遺物(土師器皿)
(2)弥高寺跡第1次調査出土遺物(陶磁器)
- 図版37 (1)弥高寺跡第1次調査出土遺物(貿易陶磁・須恵器)
(2)弥高寺跡第1次調査出土遺物(金属器)
- 図版38 (1)弥高寺跡第2次調査区全景(北から)
(2)弥高寺跡第2次調査区全景(西から)
- 図版39 (1)弥高寺跡第2次調査礎石建物SB03(東から)
(2)弥高寺跡第2次調査礎石建物SB03(西から)
- 図版40 (1)SB03の礎石
(2)SB03の火床
- 図版41 (1)弥高寺跡第2次調査礎石建物SB04(西から)
(2)弥高寺跡第2次調査礎石建物SB04(南から)
- 図版42 (1)弥高寺跡第2次調査地鎮遺構SX03
(2)SX03の内部
- 図版43 (1)弥高寺跡第2次調査石段SX04
(2)弥高寺跡第2次調査入口南側土塁断ち割り状況
- 図版44 (1)弥高寺跡第2次調査石垣SA01(南から)

- (2)弥高寺跡第2次調査石垣SA01 (東から)
- 図版45 (1)弥高寺跡第2次調査遺物出土状況
(2)弥高寺跡第2次調査遺物出土状況
- 図版46 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿1)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿2)
- 図版47 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿3)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿4)
- 図版48 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿5)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿6)
- 図版49 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿7)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿8)
- 図版50 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿9)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿10)
- 図版51 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿11)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿12)
- 図版52 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器1)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器2)
- 図版53 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器3)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器4)
- 図版54 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器5)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器6)
- 図版55 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器7)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器8)
- 図版56 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器9)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器10)
- 図版57 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器11)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器12)
- 図版58 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器13)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器14)
- 図版59 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (貿易陶磁1)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (貿易陶磁2)
- 図版60 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器1)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器2)
- 図版61 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器3)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器4)
- 図版62 (1)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器5)
(2)弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器6)

- 図版63 (1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器7)
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器8)
- 図版64 (1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (銭貨／地鎮遺構)
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (銭貨2)
- 図版65 (1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (宝冠)
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (青磁碗)
- 図版66 (1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (瀬戸美濃播鉢・常滑産大甕)
- 図版67 (1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (石製品1)
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (石製品2)

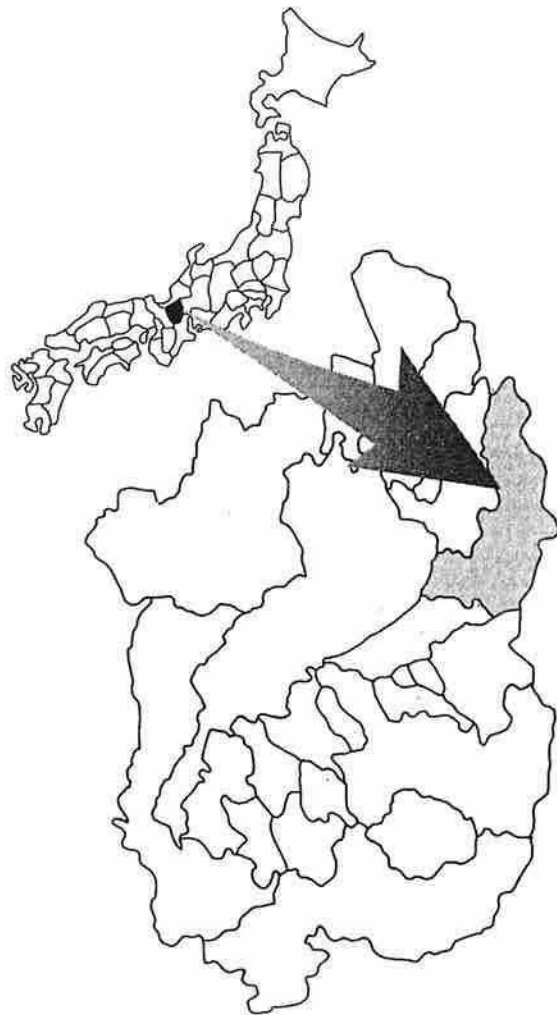
第1章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

米原市(平成17年に滋賀県坂田郡伊吹町・山東町・米原町・近江町が合併)は滋賀県の北東部に位置し、東は伊吹山地をはさんで岐阜県となり、南から不破郡関ヶ原町、揖斐郡揖斐川町、北西は長浜市、南は霊仙山塊と琵琶湖岸で滋賀県犬上郡多賀町および彦根市、西は琵琶湖にそれぞれ接している。市域は東西21.3km、南北31.6kmと細長く、面積250.46km²で、北部(米原市伊吹地域)の集落は、伊吹山地とこれに対峙する七尾山系がつくる姉川渓谷沿いに点在し、伊吹山麓の集落は、伊吹山から流れ出る数本の河川が形成した扇状地の扇央部や扇端部に立地している。中部は山東盆地ともよばれる平野部に、300~400m級の孤立状山塊が点在している。東部の柏原地域は、地峡部(関ヶ原地峡)で鈴鹿山地の北端にあたる。南部は霊仙山麓の山地部の谷筋に集落が展開し、西部は琵琶湖岸地域となる。

伊吹山地は、滋賀県の最高峰伊吹山(標高1377m)を南端にして、北へ国見山(1126m)、虎子山(1183m)、射能山(1259m)、貝月山(1234m)と連なり、さらに県下第2位の金糞岳(1317m)をはじめ標高1000~1300mの稜線や峰が、滋賀・福井・岐阜三県にまたがる三国岳(1209m)へと続く地塁性の山地である。三国岳からは越美山系となり、遠く越前・美濃国境の能郷白山へと続く。伊吹山地は、滋賀県側の姉川水系と岐阜県側の揖斐川水系の分水界であり、古くから近江と美濃の国境であった。

市内の河川は、姉川・天野川・藤古川の3水系に分けることができる。姉川水系は、奥伊吹の新穂山(1067m)に源をもつ姉川が、伊吹山地と七尾山系の中の渓谷で多くの支流を集めながら約20km弱にわたって南北に貫流し、伊吹集落付近で大きく西へふれ、山東地域の水田を潤しながら、横山丘陵北端の龍ヶ鼻付近で長浜平野に出て琵琶湖へ流れ込む。柏原上流に水源をもつ天野川水系は、扇状地を流れる下る弥高川・油里川・政所川が扇端部の湧水を集めて天野川に合流し、梓川・丹生川などを支流にして琵琶湖にそ



第1図 米原市位置図

そぐ。藤古川は、6 kmの間を伊吹山南側中腹の標高720mから一気に流れ下って溪谷を作り、南東に流れを変えて関ヶ原盆地に入り、牧田川、揖斐川を経て伊勢湾にそそぐ。県内の諸河川が琵琶湖に流れる中で、特異な例としてあげられる。

今回報告する京極氏遺跡は伊吹山南麓に位置し、京極氏館跡がある上平寺集落は、藤古川扇状地の扇頂部付近にあたり、伊吹山地に取り込まれたわずかに広がる高台に位置する集落である。中心部付近の標高は315mを測り、集落の西は伊吹山から延びる尾根が台地状に張り出している。東側は藤古川の急峻な断崖で、深さ約30mを測る。南は寺林の集落を経て、扇状地上に水田が広がり、関ヶ原峡谷になる。東には藤古川をはさんで藤川集落がある。ここは北国脇往還の宿場町で、中山道関ヶ原宿で分岐して伊吹山麓を通り、北国街道木之本宿につながる、東海と北陸を結ぶ重要なルート上にある。また、藤古川の溪谷をさかのぼり、伊吹山頂から南東に延びる稜線の鞍部の峠にとりつく上平寺越は、近江と美濃を結ぶ古くからの間道の一つと考えられる。さらに、東国と畿内を結ぶ東山道(中山道)にも近く、地理的に交通の要衝として重要な位置にある。弥高寺跡は、京極氏館跡の背後にある詰の城・上平寺城跡の西側尾根に立地している。

伊吹山地の地質は、古生層の石灰岩相と非石灰岩相の2つに分けられる。石灰岩相は伊吹山と南西部の丘陵に分布している。遺跡が立地する上平寺の北西は、伊吹山の南に張り付く弥高山(標高838.9m)の山麓で、この山塊は伊吹山の石灰岩層とは異なり砂岩層で形成されている。藤古川対岸は砂岩および粘板岩の山塊である。南は伊吹山南麓に広がる扇状地堆積物層が発達しており、古生層岩石の礫を主として、粘土をはさんでいることが多く、時代は洪積世新期のものと考えられている。藤川地区の県境付近には、約130万年前の古琵琶湖層群が堆積している。この層は主として砂礫層からなっており、少量の泥層を含み、この中にコメツガ・ハンノキ・ヒメバラモミなどの植物遺体が含まれている。関ヶ原方面から古琵琶湖に水が流入して堆積したものと推定されている。

気象的に伊吹山付近は、若狭湾と伊勢湾が迫っている本州でもっとも狭い部分にあたり、まわりは中部山地と霊仙・鈴鹿山地、丹波山地に囲まれている。この狭い部分を目指して、冬は若狭湾から北西の季節風が、夏は伊勢湾から南東の風が入ってくる。米原市伊吹地域の気候は、ほとんどの地域が日本海側気候区北陸型に属すといわれ、気温が低く降水量が多いうえ、特に冬期の積雪が多いことが特徴とされている。伊吹地域の南部は最高気温と最低気温の差が北中部にくらべるとやや少なく、平均気温もやや高くなって降水量も少なくなるが、上平寺周辺は、伊吹山系と霊仙・鈴鹿山系との接点に位置するとともに関ヶ原の狭隘を吹き抜ける風の道にあたっているために、積雪量が多く豪雪地帯となっている。

第2節 歴史的環境

1. 米原市の山寺

米原市には、伊吹山そして霊仙山という、山岳信仰の霊場とされるふたつの名山がある。どちらにも、修験道の開祖といわれる役行者の伝承があり、古代以来の山岳信仰と山林修行の伝統、山に対する信仰の広がり、この地域の歴史を理解するための重要な視点である。

伊吹山(標高1377m)は古くから、神の宿る神聖な山として信仰を集めてきた。伊吹山の神は、日本武尊の神話でも、英雄タケルを退けた「荒ぶる神」として登場する。

平安時代の初めには、比叡・比良・神峯・愛宕・金峯・葛木などの諸山とともに、薬師悔過の修業場として、「七高山」のひとつに数えられた。このころ、山に対する原始的な信仰と、9世紀頃に伝わった密教とが結びつき、厳しい修行の場として、たくさんの寺院が山中に建立されるようになる。このような山岳寺院は、北近江の管山寺(長浜市余呉町)、己高山(長浜市木之本町)、大吉寺(長浜市浅井町)や、南近江の金勝寺(栗東市)や比叡山延暦寺(大津市)などがあるが、伊吹山の弥高寺跡が最も典型的な姿を留めている。

九世紀頃、伊吹山の中腹には、伊吹山寺と呼ばれる定額寺院があったことが、記録に見える。定額寺とは、朝廷が認めた寺院のことで、三修という高僧が、伊吹山寺の伽藍の荒廃と法灯の断絶を憂えて、指定を願い、元慶2年(878)に認定された。

「伊吹山寺」とは、弥高護国寺(米原市弥高)・太平護国寺(旧太平寺)・長尾護国寺(大久保)・観音護国寺(朝日/元の所在地不明)という、俗に伊吹四ヶ寺と呼ばれる寺々の前身的な寺院である。伊吹山の山岳信仰は、この四ヶ寺と、伊夫岐神社(伊吹)・三之宮神社(上野)を中心に展開する。

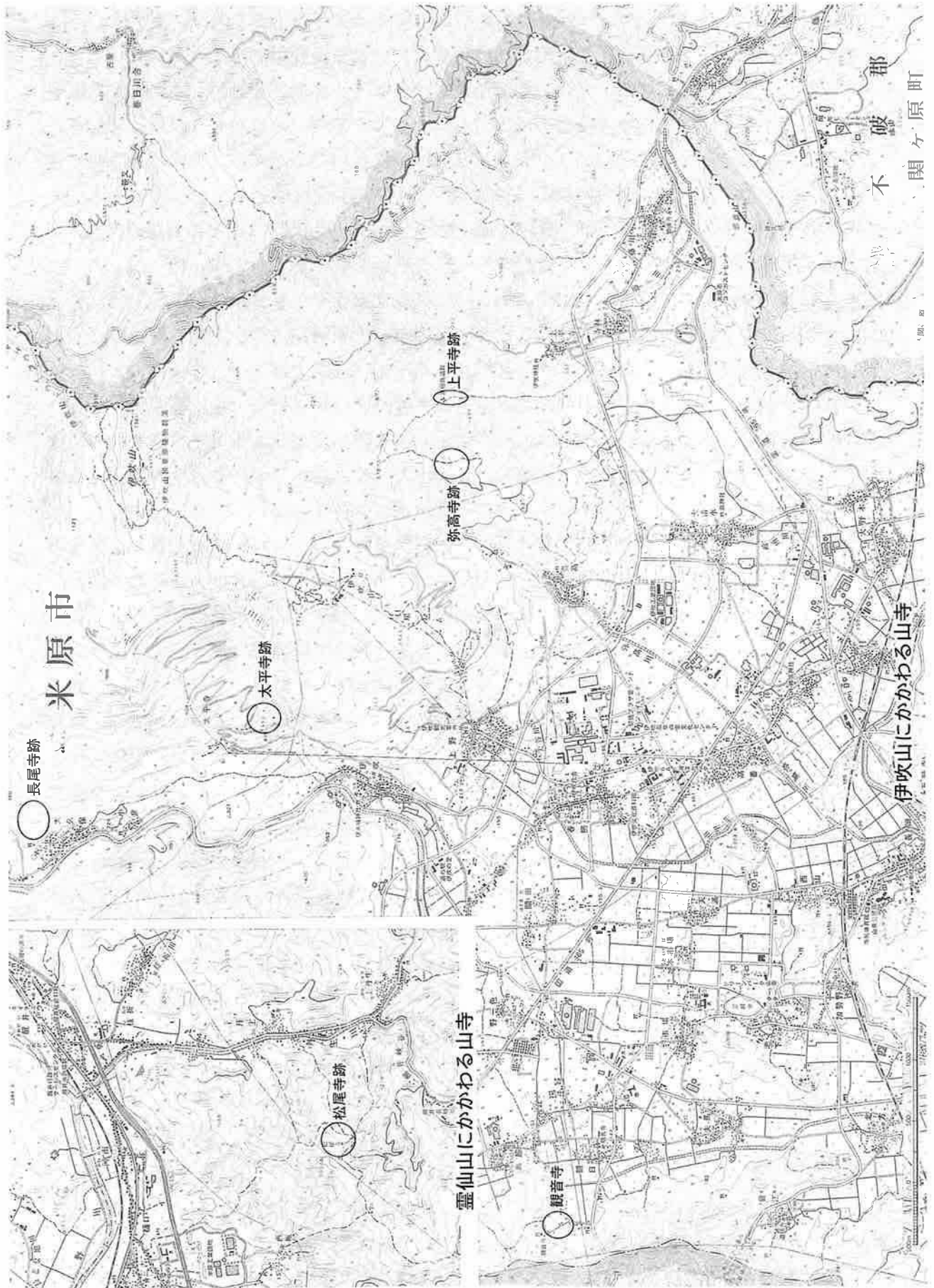
中世になると、山伏集団が組織化されていく反面、修行者の「一の宿」をめぐる四ヶ寺の勢力争いや、本末寺関係の論争が起こる。正元年間(1266頃)に観音寺が現在地の米原市朝日に移転したあと、弥高寺と太平寺が勢力を誇り、徳治3年(1308)には両寺が本末寺をめぐる論争の講和を行なっている。一説に太平寺を京極家始祖の氏信が城塞化し、その後も京極氏の山城的功能を果たしていたといわれている。『大原観音寺文書』には「且可致合戦之忠勤云々間令参上太平寺、云城郭結構」(元弘三年(1333)六月付「観音護国寺衆徒等申状」)という文書があり、城郭として利用されたことがわかるが、現地では堀などの城郭遺構は確認できないことから、南北朝期の山岳寺院をそのまま利用した立て籠もる拠点として利用したのかもしれない。弥高寺は、明応4年(1495)に京極政高が弥高寺から出兵し、翌年には京極高澄が同寺に布陣するなど、京極氏が城郭として利用している。現地には空堀や堀切・竪堀群、虎口状の大門跡、土塁など城郭機能と思われる遺構が明瞭に残っている。その後、兵火による焼失もあって、次第に山を降りていったものと考えられる。

さて、伊吹山を定額寺に導いた三修の弟子に、名超童子・松尾童子・敏満童子があり、松尾童子は、霊仙山麓の上丹生に松尾寺を建立したと伝えられている。

松尾寺山を含む霊仙山には、天智天皇の頃に役行者が入山し、養老元年(717)、越の泰澄が本尊を安置したと伝えられる霊山寺があったとされる。神護景雲3年(769)には、法相宗の宣教が山麓に、観音寺・安養寺・大杉寺・仏性寺・荘厳寺・男鬼寺・松尾寺の七別院を建立して、山岳信仰の拠点となったが、松尾寺跡と荘厳寺跡以外は、遺構自体が確認されおらず、その全容は不明である。

2. 米原市の城郭

ここでは、北近江の中世史を概観するとともに、その時々登場する市内の主要な城館を



第2図 米原市の山寺位置図

織り込んでいきたい。

鎌倉時代、近江守護職を代々世襲していた佐々木氏は、仁治2年(1241)、信綱の息子の代に四氏に分流し、大原氏、高島氏、六角氏、京極氏となる。このうち、佐々木氏嫡流として近江守護職を伝統的に継いだのは、小脇館(八日市市)、ついで観音寺城(東近江市五個荘町・近江八幡市安土町)を居城とした六角氏である。大原氏は、大原荘の地頭として大原館(米原市本市場)を構えるが、将軍の近習として鎌倉や京都に住まう在京御家人・奉公衆として活躍した。

一方京極氏は、四男氏信が愛知川以北六郡を与えられ、柏原(米原市清滝)に館を構えたことに始まる。その後、鎌倉幕府滅亡から南北朝時代における京極高氏(道誉)の活躍もあって、次第に台頭し、室町時代には湖北三郡(あるいは北近江半国)の守護権と飛騨・出雲・隠岐の守護職を有して、本家である六角氏の力をしのぐようになった。そして、戦国時代の幕開けとなった応仁文明の乱の中では、京極持清が六角氏に代わって近江一国守護に任じられ、京極氏の勢力を大きく伸張させた。この頃の京極氏の本拠地は基本的には柏原館であるが、建武4年(1337)、高氏は甲良荘に館(勝楽寺城)を移し拠点としている。

しかし、文明2年(1470)に持清が死亡すると、家督をめぐる政経と高清との間で一族内の争いが起こり、北近江は内乱状態に陥る。この内乱は永正2年(1505)、日光寺の講和によりようやく終結し、以後、京極高清が上坂氏を執権的立場において安定した政権を築くことになる。上平寺の京極氏館は、明応元年(1492)改めて京極家の惣領職を認められた高清が、京極材宗と和睦して、文明年間以来続いた一族の内紛を納め、政権を確立したことで構築・整備したものと考えられる。同時に、山腹の詰めの城・上平寺城、台地上の家臣団屋敷群とともに、城下町を整備したと思われる。

さて、応仁文明の乱以降、室町幕府の権力は失墜し、代わって地方豪族が力をつけ、時には主家をしのぐようになる。このことは、日光寺の講和により江北に安定した政権を確立させた京極氏においても例外ではなかった。

大永3年(1523)、浅見氏ら国人の攻撃で、高清が尾張に追われたいわゆる「大吉寺梅本坊公事」以降、北近江では浅井氏が台頭する。京極氏は浅井氏に「御屋形様」として象徴的に扱われ、一般には小谷城を拠点にした浅井氏三代に北近江の政権が替わったといわれているが、文書からの検証では、天文20年(1551)頃まで坂田郡南部を中心に京極高広による政権が機能しており、その居館が河内城(米原市梓河内)であった可能性があり、八講師城(同)は京極氏の詰の城として築かれたという。しかし、浅井長政の代には、完全に京極政権の姿は消えてしまう。

こうして、京極氏が没落し、新たに浅井氏が勢力を伸張していくことになるが、この政情の変化について六角氏が度々、北近江を攻める。しかし、京都の情勢にも注意を払わなければならなかった六角氏は、北近江に兵を留め置くことができず、最後まで近江を制圧することができなかった。米原市の南部に所在する鎌刃城(番場)・太尾山城(米原・西円寺)・菖蒲嶽城(番場・彦根市中山町)や旧坂田郡城南端の佐和山城(彦根市)は、京極氏と六角氏、浅井氏と六角氏の争奪の場となり、度々その帰属を代えている。このうち、鎌刃城については発

掘調査が実施されており、礎石建物や石垣、枡形虎口などが検出されて、近江の築城技術の先進性が確認された。また、太尾山城でも櫓と考えられる礎石建物などが確認されている。

南近江の六角氏は、永禄6年(1568)、当主義賢の子・義治が、重臣の後藤氏の権勢を恐れて謀殺したために、家臣団の反発を招き(観音寺騒動)、以後、六角氏は衰退する。さらに、浅井長政の進出、ついで織田信長の攻撃を受け、永禄11年(1568)、ついに鎌倉時代より近江で権勢を振るった六角氏の時代は終わりを告げた。

永禄4年(1561)、織田信長は浅井長政と同盟を結び、美濃の斎藤氏を攻略、さらに、永禄11年(1568)には、亡命していた足利義昭を征夷大將軍にするという大義名分を得て、入京を果たした。

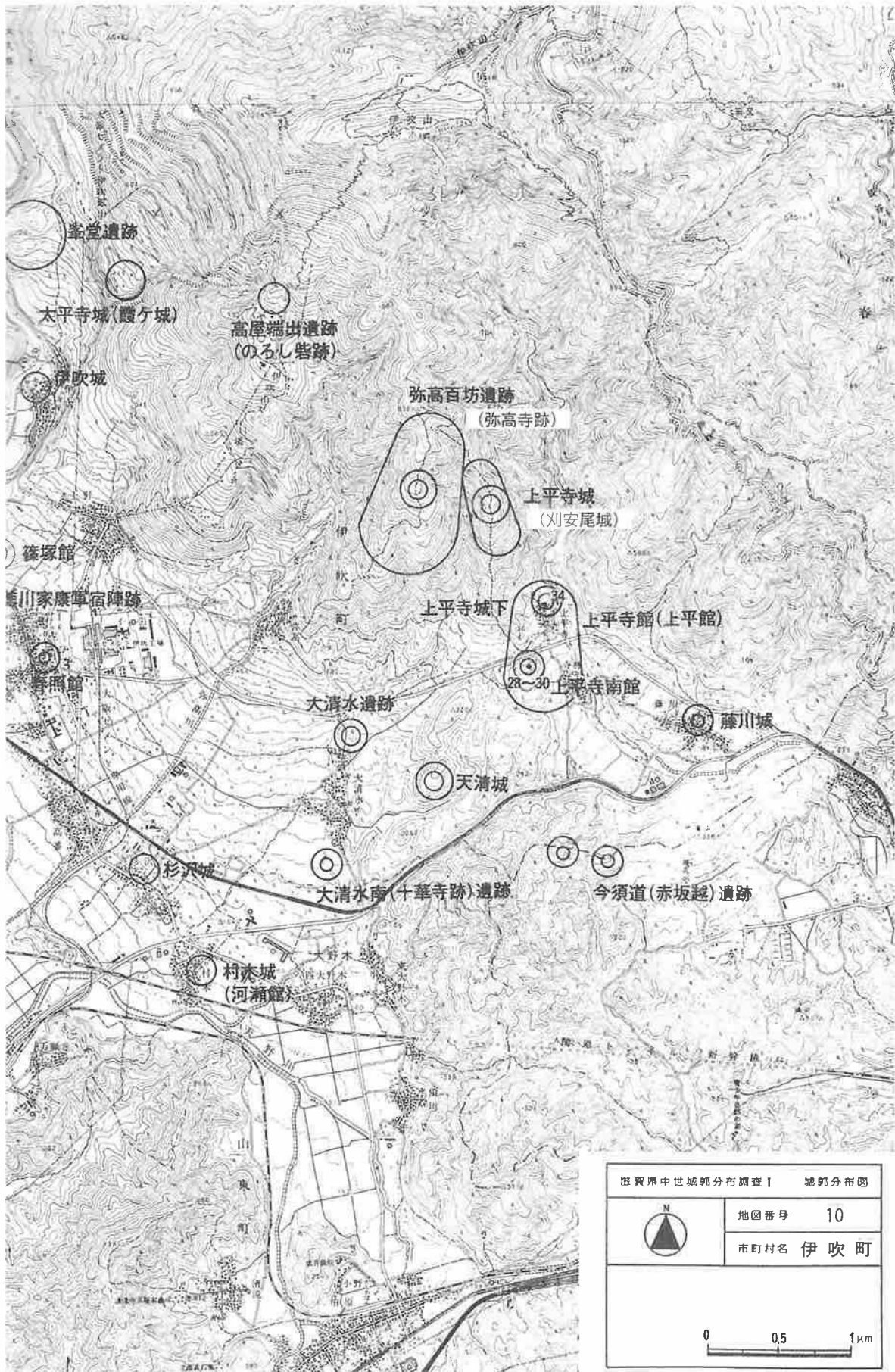
しかし、元龜元年(1570)4月、信長が越前の朝倉氏攻めを始めると、朝倉氏とも同盟関係にあった浅井氏が突如織田軍を攻撃して、信長は一時撤退を余儀なくされた。しかし、6月には浅井攻めの体制を整え、これに対して浅井氏は、朝倉氏の援助と築城技術を導入して、江濃国境の上平寺城と長比城(柏原・長久寺)を改修して信長の近江侵攻に備える。しかし、両城を守備していた堀秀村と家臣の樋口直房がすでに内応していたために、闘わずして開城してしまう。信長は徳川家康の援軍を得て、浅井方の横山城(村居田・長浜市石田ほか)を攻囲し、姉川にて浅井・朝倉連合軍を破り、その後、浅井氏の居城・小谷城の攻略に長期戦で挑み、天正元年(1573)、ついに小谷城は陥落、浅井氏は滅亡する。

米原市の中世城館の特徴を見てみたい。

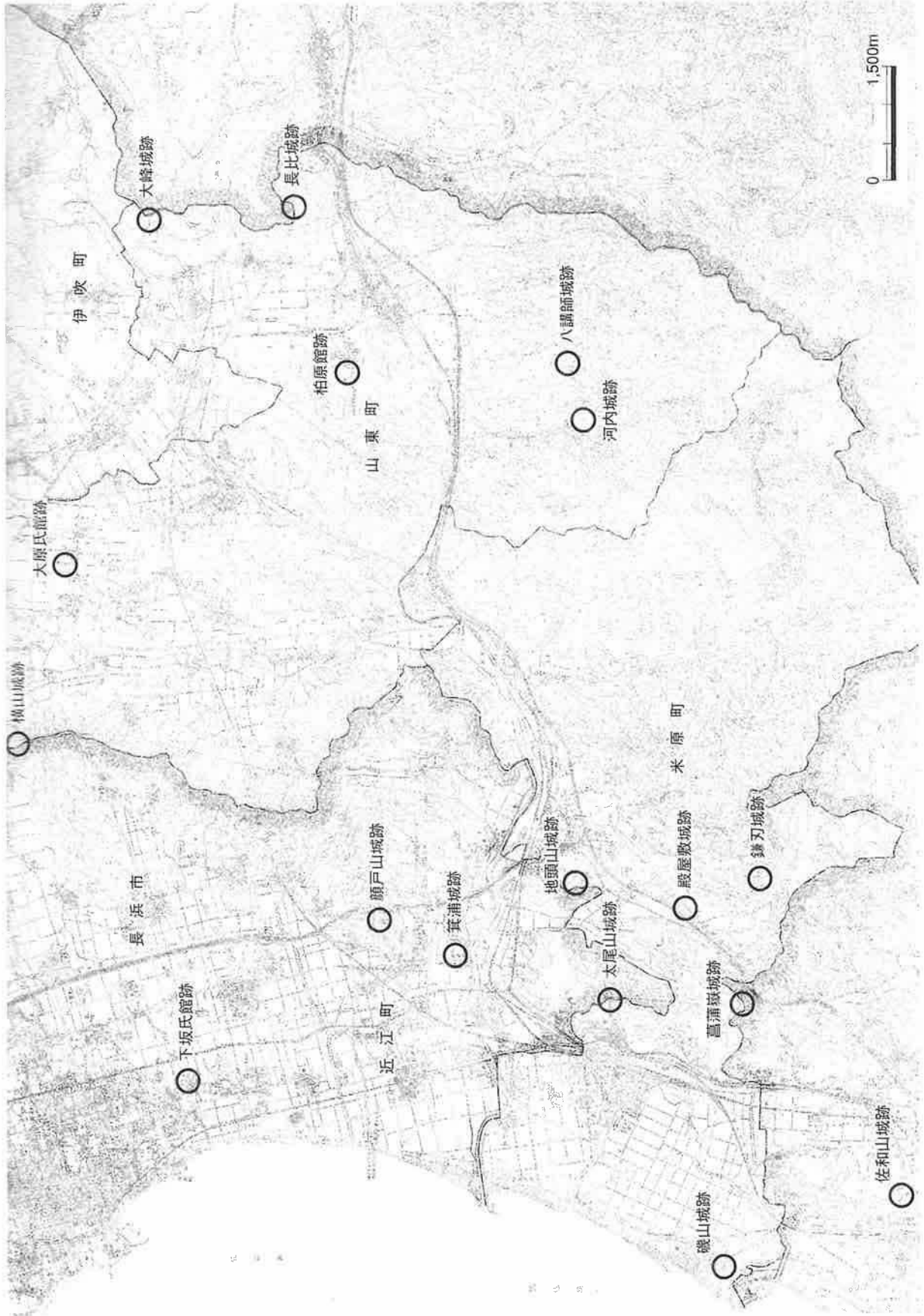
米原市は、前述のように鎌倉時代以降京極氏の拠点であり、柏原館や上平寺の京極氏館、さらに京極高広の河内城が築かれたように、つねに北近江の政治的中心であった。京極氏館は、山城と城下町を背後・前面に控えた良好な遺跡群で、戦国大名の在り方を知るうえで重要な遺跡である。また、室町幕府の奉公衆として力を持った大原氏の館跡も、土塁や堀が現存する平地居館として貴重である。また、京極氏の根本被官筆頭今井氏の箕浦城跡(箕浦・新庄)や箕浦荘の地頭土肥氏の居館・殿屋敷遺跡(番場)などの調査がおこなわれているほか、近江地域には、若宮氏・岩脇氏・宇賀野氏などの平地居館跡がある。

また、米原市は畿内・北陸・東海との結節点にあり、古来より陸路ならびに琵琶湖を利用した湖上の交通の要所として重要な位置にあった。こうした交通の要所には自然と人や物が行き交い、江戸時代には市内を中山道・北陸道・北国脇往還が通過し、六つの宿場町が置かれた。

当然、こうした利便性の高い交通路は、戦時になると軍隊の移動経路として用いられる。戦において、相手より優位に立つためには、少しでも早く相手方の動きを察知することが必要で、戦国時代には、主要な交通路の付近では敵の動きをいち早く察知できるように山上に城が築かれた。市南部は、北近江と南近江の境目に位置し、たびたび争奪の舞台となっている。また、東は美濃に接している。このような国境にある城(境目の城)は、敵軍の侵攻を警戒し、領国に入れさせないよう最前線で防備する重要な拠点であった。前者では、鎌刃城・太尾山城・佐和山城、後者は上平寺城や長比城などがあげられるが、これらの城郭の存在も、米原市の中世城郭の大きな特徴といえる。



第3図 米原市の中世城館跡位置図 (伊吹地域)



第4図 米原市の中世城館跡位置図（山東・近江・米原地域）

第2章 調査の経緯

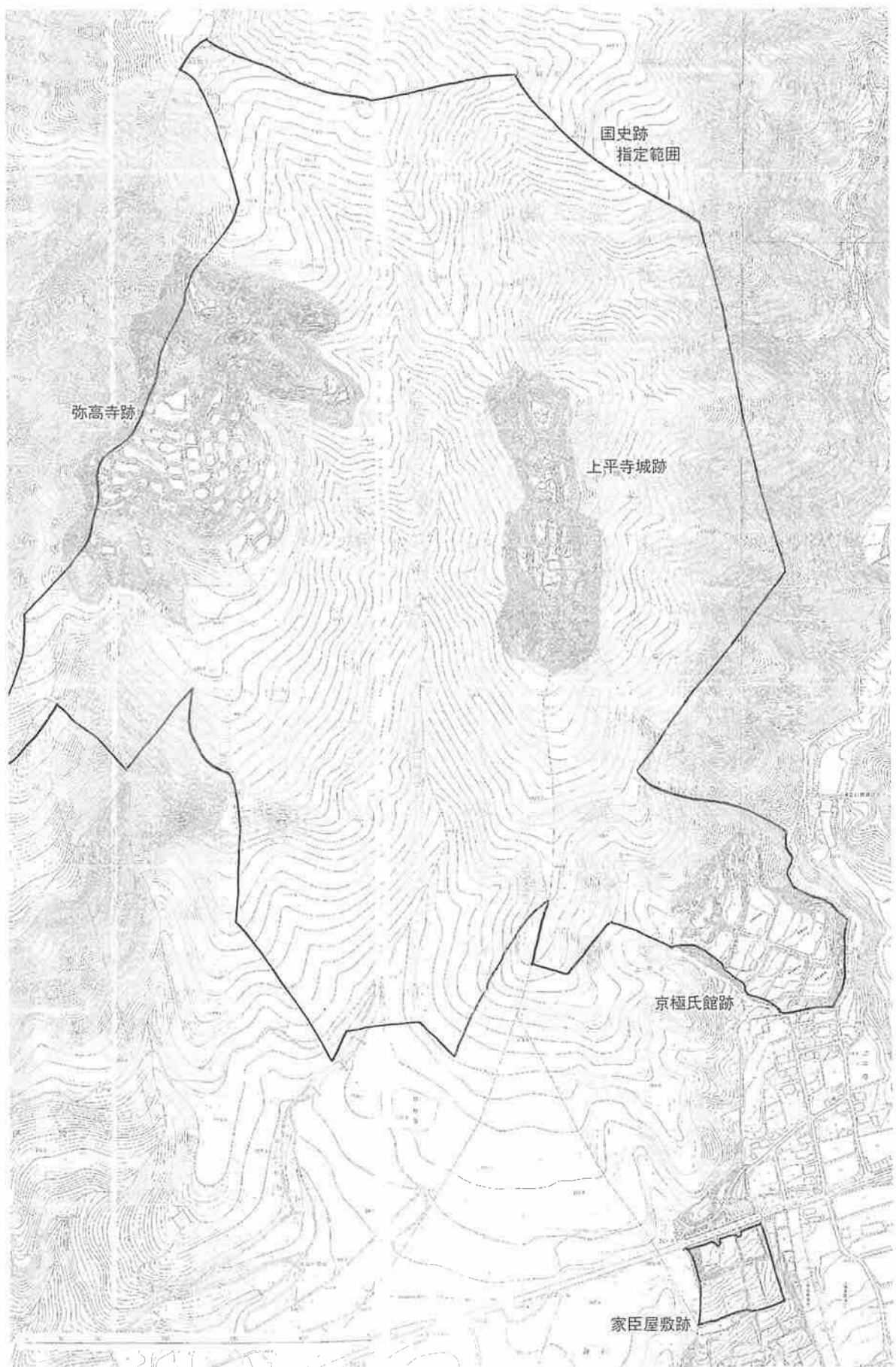
これまで、京極氏遺跡では、広範囲にわたる遺跡群の把握と、今後の保護・活用をはかるために、伊吹町教育委員会で平成7年度から10ヵ年計画で分布調査をおこない、表土遺物の採集と現存遺構の測量、記録撮影により山林内の平坦地(屋敷跡・曲輪跡・坊跡)を確認していった。各遺跡の測量年度と面積は、京極氏館跡(平成7～9年度、50,500㎡)、家臣屋敷跡(平成10～11年度、38,600㎡)、上平寺城跡(平成12～13年度、54,000㎡)、弥高寺跡追加測量(平成14～16年度、80,000㎡)で、これにより主要な遺構はほぼ網羅され、国史跡指定の基礎資料が整った。

しかし、地下遺構確認のための発掘調査は、すべて開発に伴うものであり、指定範囲外である城下町部分を中心だったために、山中に分布する遺跡群の内容や性格の把握までには至ってはいない。以下に、発掘調査の概要を記す。

上平寺遺跡(城下部分)での発掘調査では、平成9年度から12年度にかけて、伊吹町教育委員会で町道建設に伴う発掘調査をおこなっており、掘立柱建物や井戸跡などが出土している。また、平成11・12年度の県教育委員会の調査では、城下町造営当初のものとみられる整地土層や暗渠施設が確認されている。これらの調査結果から、上平寺城下の南限が想定され、江戸時代に描かれた『上平寺城絵図』(図版二)の「越前街道」までおよんでいなかったことが想定された。

家臣屋敷跡では、平成9年度に、絵図の「駒繫」と「若宮」の間の「径」部分で、滋賀県教育委員会による発掘調査がおこなわれ、堀切・土塁を兼ねた石敷きの道が確認された。また、平成11年度の町教育委員会による「駒繫」の確認調査では、京極氏段階に整地された層を確認した。平成12年度の推定「若宮」屋敷の調査では、屋敷内を区切る築地か門とおもわれる石垣遺構と一部礎石を検出した。

今回の調査は、平成16年2月27日に国の史跡に指定された「京極氏遺跡 一京極氏城館跡・弥高寺跡一」(所在地：米原市弥高・上平寺・藤川、面積：約108ha)を構成する、京極氏館跡(上平寺)および弥高寺跡(弥高)において、将来の史跡整備と保存活用のための基礎資料を得ることを目的に、遺構の確認を行なった発掘調査である。史跡内の遺構の残り具合や出土品等から、遺跡の性格を把握するために、史跡京極氏遺跡の中核をなす京極氏館跡において第1～3次調査を平成17・18・20年度に実施し、弥高寺跡では平成18・19年度の2次の発掘調査を実施し、以降、平成23年度まで整理調査をおこない、これらの成果を報告書として刊行するものである。なお、発掘調査に際して、京極氏遺跡調査整備委員会(専門委員/田中哲雄氏、小野正敏氏、三浦正幸氏、仁木 宏氏、大沼芳幸氏)の指導・助言を得た。



第5圖 京極氏遺跡位置圖

第3章 京極氏館跡発掘調査

第1節 京極氏館跡の歴史と構造

1. 京極氏館跡の歴史

前述したとおり、伊吹山南麓地域には、中世に北近江を支配した京極氏に関連する遺跡が集中している。京極高きが15世紀末から16世紀初頭に整備したもので、京極氏の館や庭園を中心とする京極氏館跡、家臣屋敷跡(遺跡名：上平寺南館跡)、戦時の詰め城・上平寺城跡(別称：苅安尾城・桐ヶ城)などの城館遺跡と、これらに伴う城下町跡や、城塞化された弥高寺跡などで、城下町部分を除いて「京極氏遺跡 一京極氏城館跡・弥高寺跡一」の名称で国の史跡となっている。

また、ここから、直線距離で5km南には、京極家の菩提寺・清滝寺徳源院や柏原館(清滝)があり、伊吹山南麓一帯は、京極氏の近江における本拠地として重要な地域であった。

京極氏遺跡の初見は、『江北記』にみえる上平寺城の記事である。「大永三年(1523)三月九日、かりやす尾の御城より御忍にて尾州へ御取退候。大原五郎(高広)殿も御同道候。六朗殿(高慶)はかりやす尾に残し被申候」。これは国人浅見氏等の攻撃により落城したことを指している。築城年代については、『改訂近江國坂田郡志』に「浅井三代記に永正六(1509)とあれど確かならず」とあるのみで明らかではない。持清以降、勝秀、政経、高きと系図上でも混乱の見える15世紀後半代は、京極氏、重臣多賀氏などが入り乱れた内紛が続く。

高きが、この内紛を収めるのは永正2年(1505)のことで、対立していた京極材宗と和睦して北近江を再び統一する。守護館として京極氏館が整備されたのはこの頃であろう。なお、京極氏は初期の本拠である柏原館をはじめ太平寺城(太平寺)や勝楽寺城(甲良町正楽寺)など、山寺(山岳寺院)を城郭に改修しており、山腹の上平寺城跡や山麓の京極氏館跡が山寺・上平寺を改修したものであるとの指摘がされている。

大永3年以降、上平寺城に関する文献は、永禄3年(1560)の「濃州境目かりやす尾と申処、一兩日中二濃州口城二可申付之由風聞候間」(『浅井氏三代文書集』)と、同じく長政が、元亀元年(1570)に織田信長に備えるために上平寺城を改修したことを記した『信長公記』の「去程に浅井備前越前衆を呼越し、たけくらべ、かりやす両所に要害を構へ候」の2点がある。

大永3年の落城で、守護館としての京極氏館の役割は終わり、上平寺城のみが近江と美濃の国境警護の城としての役割を担っていたことが、二つの文献から読みとれるが、元亀元年の改修は、城将である堀・樋口両名が織田に通じていたために、戦うことなく開城している。以後、上平寺城も廃城となったようだ。

2. 京極氏館跡の構造

京極氏館跡は、南北約250m、東西約200mの範囲で、伊吹神社を頂点に下方に広がっている。南端は、絵図に「内堀」として記載されている小水路。東は、藤古川(川戸川)に落ちる

急峻な川戸谷の斜面。南西は、家臣屋敷へ続く尾根と京極氏館跡を区切る風呂屋谷とよばれる谷である。この谷から流れる小河川「覚所谷川」は、京極氏館の内堀を形成して東へと向きをかえて藤古川に落ちる。北は、伊吹山頂に続く尾根で、伊吹神社背後には金毘羅社がある。

屋敷跡および何らかの施設があったと思われる削平地は34ヶ所を数える。別に風呂屋谷に6ヶ所の小区画があったが、砂防工事により消滅している。

絵図によると、中央を貫通する道のほか屋敷跡間に数本の道が描かれており、「養水」と記された水路も示されている。また、絵図の本堂の一段下には、山城への登城道が描かれている。上平寺城下の地名については、小島道裕が古老の聞き取りを交えて詳細に検討されている。京極氏館跡は小字名を「神ノ屋敷」といい、地元では神屋敷と呼んでいて、上屋敷の意味だと考えられている。『上平寺城絵図』の京極氏館跡部分には、「御屋形」「御自愛泉石」「蔵屋敷」「隠岐屋敷」「弾正屋敷」「厩」などの表記があり、このほかに、建造物が描かれた「伊吹大権現」と「本堂」、「御廟所」がある。絵図が描かれたのは、館が廃絶して約100年程度経過した江戸時代の初期とされており、作成時には、伊吹大権現(伊吹神社)や本堂は現存していたが、そのほかは作成者の聞き取りによる記載と考えられる。なお、数カ所に文字や絵が消されている部分がある。

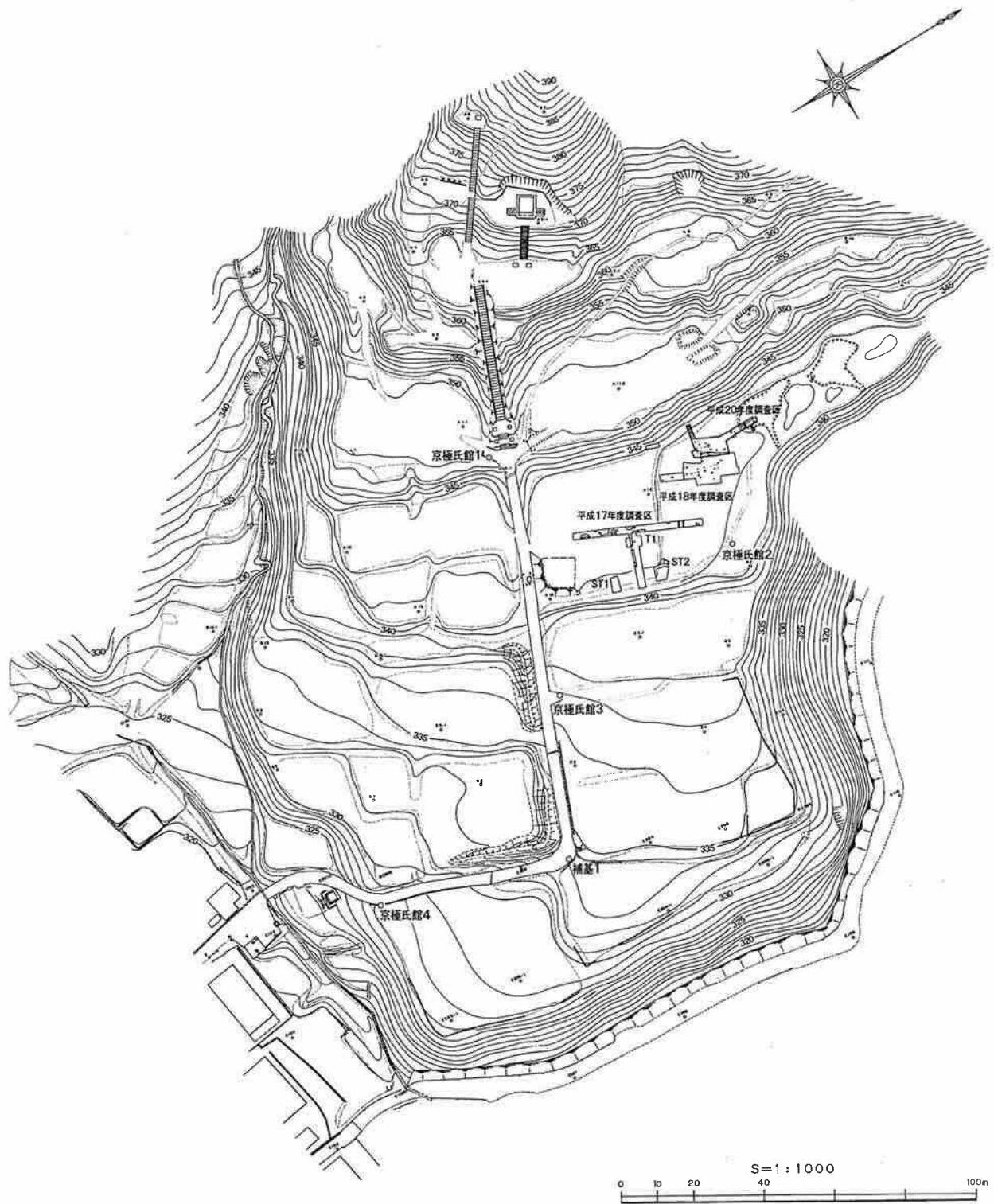
今回、発掘調査の対象としたのは、「御屋形」とされるせまい意味での京極氏館跡である(以後、本章での「京極氏館跡」は「御屋形」部分を指す)。おそらく、京極氏が日常の住まいとしていた削平地で、明治15年(1882)の『滋賀県小字取調書』(『角川日本地名大辞典25滋賀県』に所載)の小分け地名では「京極屋敷」があるが、小島氏の調査では、地元で特にそう呼ばれることはないが、庭園のあるところがそうだとされている。

京極氏の居館跡は、伊吹神社鳥居の東側下段にあたり、標高は約346mを測る。居館跡北側の奥まったところに60m×20mの庭園跡が付属する。居館部分は、最大幅約68m×37mの長方形を呈する。このうち、南側半分は北側より約50cm高く、35m四方の方形区画になっている。この南端には、町の水道施設があり遺跡が破壊されている。また、この区画の北端には、墓石群がある。付近に散在していたものを地主が集めたものという。

第2節 第1次調査の成果

1. 調査経過

京極氏館跡については、過去に数ヶ所で2m四方程度の刈り払いを実施し遺物の採集をおこなった。基本的に掘削は伴っていない。また、地元区でも全体的に丁寧な刈り払いと除草作業をおこなっており、このときに遺物が採集されている。点数が最も多いのは土師器皿である。このほかに、常滑大甕、越前大甕、瀬戸播鉢、青磁輪花文皿、青磁碗、近世陶磁、近世瓦、小円礫などが採集されている。概ね16世紀前半に属する遺物である。今回の調査では、京極氏館跡の構造や遺構の残存状況を確認し、将来の保存活用計画の基礎資料とするため、平成17・18・20年度に発掘調査を実施することとした。



第6図 京極氏館跡全体図（調査区位置図）

平成17年度の第1次調査は、当時の遺構面と建物配置などを確認することを目的に、現況で南北二段に分かれている京極氏館跡の南東部に、幅約2mのT字のトレンチ(調査区)を設定しておこなった。調査面積は約140㎡である。現地調査は、平成17年8月17日から3月24日までおこない、10月8日に、地域のイベント「上平寺戦国浪漫のゆうべ」にあわせて、現地説明会を開催した。

2. 検出した遺構

現況の京極氏館跡は中央やや北寄りで二段になっており、庭園跡を含む北側が約50cm低くなっている。発掘調査の結果、下段では地表面から約40cm下で黄茶色の安定した粘質土層を確認し、この面の直上で大甕片やほぼ完形の土師皿が出土しわずかに土坑・ピット・焼土などを検出したことなどからこれを当時の生活面と判断した。この生活面はさらに南側上段約80cm下に続き、トレンチ中央付近では、礎石とも思われる、約40cm×30cmの平坦な石を1点検出した。このことから、現況では二段に分かれている京極氏の館跡が、当時は1面の広大な面積であったことがわかった。

層序については、南側上段部分では表土・黄茶色粘質土・茶色粘質土となる。土坑SK01は土師器皿片などを多量に含む黒色土と礫混じりの黒色土が埋土となっている。安定した南端からの遺構面は途中で途切れ、下段で検出した黄茶色の安定した遺構面まで、黄茶色砂礫土・茶褐色粘質土・黒茶色粘質土・茶色粘質土が傾斜した状態で堆積していることから、後世(時期不明)に盛り土され、整地されていることが想定される。北側下段では、表土・黒色土・明茶色粘質土の下が遺構面となる。なお、検出した遺構については、掘削をおこなっていない。

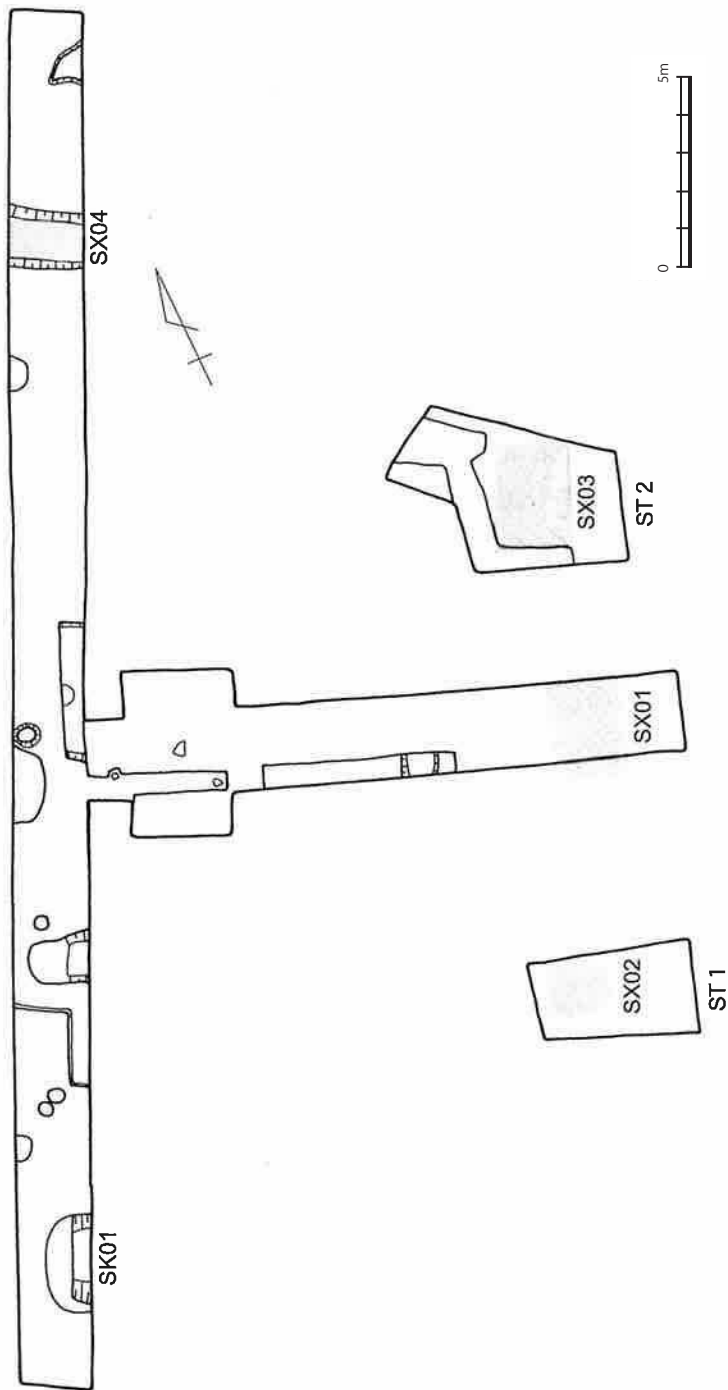
【土坑 SK01】

トレンチ南端の整地土層で検出した直径約2.5mの半円形の土坑で、一部断ち割りから、石・焼石・炭とともに、土師器皿の細片が多量に出土した。整地に際して一括廃棄されたものであろう。

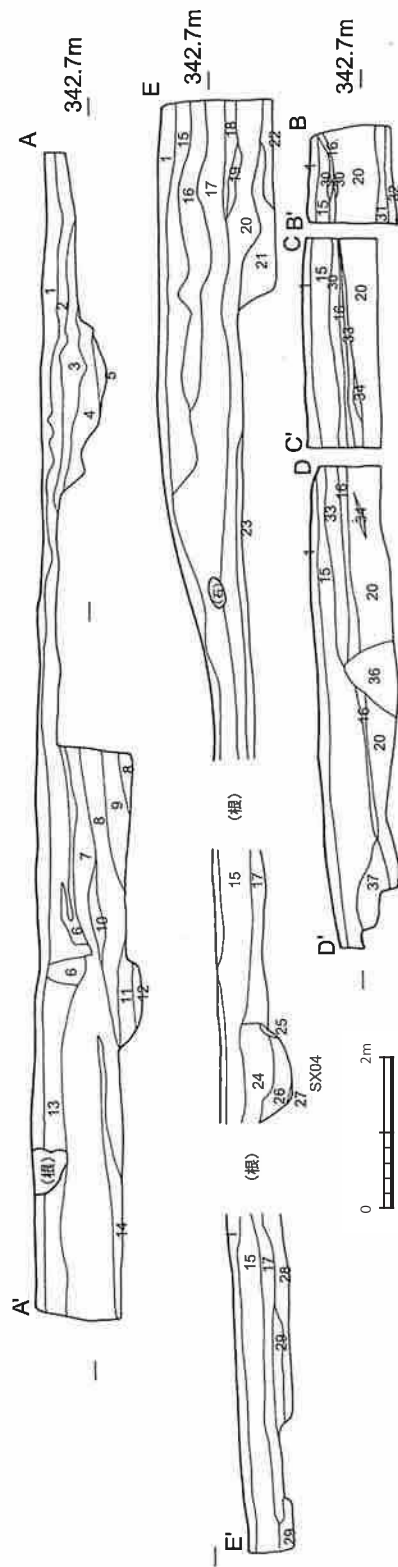
【石敷き SX01、SX02、SX03】

トレンチの東側で、黄色土遺構面にのる石敷きSX01を検出した。これは、館跡の東端を画するように、大小約10cm～30cmの石が、東西約2m(約一間)の幅で敷き詰められている。石敷きは西側に約20～40cmの石を並べて一直線に面をそろえている。東の斜面側は、10cm前後小さな石でラインは不明瞭である。この石敷きは館の東端を画す築地や土塁の基底部と考えられる。

調査では、石敷きの延長を確認するためにトレンチの南側(ST1)と北側(ST2)にサブトレンチを設定した。ST1は南北2.5m×東西4.5mのトレンチで、やはり東西幅約2mの範囲で10cm～30cmの石敷きSX02を確認した。こちらでは西側より東の方がやや明瞭に面が揃えられている。ST2でも、約2mの幅で同様の石敷きSX03を検出した。ここは、現況で二段に分かれている上段の北東端にあたり、トレンチの北端から約40cm幅には石敷き



- 1 表土
- 2 黄茶色粘質土
- 3 茶色粘質土
- 4 黒色土
- 5 黒色礫混り土
- 6 黄茶色砂礫土
- 7 茶褐色粘質土
- 8 黄茶色粘質土
- 9 黒茶色粘質土
- 10 茶色粘質土
- 11 赤茶色粘質土
- 12 茶色粘質土
- 13 黒茶色粘質土
- 14 茶色砂礫土
- 15 茶色粘質土
- 16 暗茶色粘質土
- 17 黒ボク土
- 18 黒ボク土(硬)
- 19 黄混り黒色砂礫土
- 20 黒ボク土
- 21 薄茶色砂礫土
- 22 黄色粘質土
- 23 黄色砂礫土
- 24 明茶色粘質土
- 25 赤茶色粘質土
- 26 茶色粘土
- 27 茶色砂質土
- 28 茶色砂質土
- 29 茶色砂利土
- 30 黄色砂利混り粘質土
- 31 赤茶色粘質土
- 32 黒色粘質土
- 33 黄色粘質土
- 34 黄混り黒色土
- 35 茶色砂利混り粘質土
- 36 黒色粘質土(硬)



第7図 第1次調査区、ST1、ST2平面図・断面図



第8图 SX01、SX02、SX03、SX04平面图·断面图

がないことから、ここで途切れている可能性がある。また、石敷きの北端から西へ続くわずかな石列があることからや、SX01とSX02を結ぶラインは、SX02で約1m西に振れることなどから、ここが築地や土塁のコーナーである可能性が考えられる。そうすると、のちに整地された二段の区画は、もともと何らかの空間的意図があったのかもしれない。

【暗渠 SX04】

トレンチの北側の現地表面から約70cm下で確認した暗渠である。東西方向に走る幅約1.5mの溝の10cm～20cm掘り下げると、10cm～40cmの石を用いた幅約1mの石組み暗渠が組まれていた。深さは不明である。

3. 出土遺物

【土師器】

1～33は土師器の皿である。今回の調査に限らず、過去の発掘調査でも、出土遺物中で出土量が最も多い。ただし、その大半は破片であり、図示できるものは少ない。ちなみに、平成10年から12年までおこなった城下部分の発掘調査では、出土土器・陶磁器類の総数の約82%を占めた。1～19はSK01から出土した一括資料である。灯り採りの灯明皿として使われたことを示す煤の痕跡が付着しているのは4のみで、その他のものは、儀礼の杯としてのカワラケや、皿などとして使われたと考えられる。27・28は、トレンチ中央付近の黒色土層(遺構面)の断ち割り内で出土したもので、他の土師器皿と比べると器壁も厚く、全体にずんぐりとしている。ほとんどの土師器皿が、16世紀前半に属すると考えられるが、やや様相を異にしている。

【須恵器】

39は須恵器である。外面に叩き痕、内面に宛て具の痕跡が残る。

【国産陶器】

34は瀬戸美濃の平茶碗で大窯I期の製品と考えられる。35～37・50は瀬戸美濃の搦鉢で、35・36は窖窯後IV期新段階、37は大窯II期の製品と考えられる。38は越前の大甕の口縁部である。40は越前大甕の体部で「本」の窯印がスタンプされている。SX01からの出土である。41・42は瀬戸美濃茶碗の高台。

このほか、図示できないが、瀬戸美濃大窯I期の搦鉢、備前や丹波産の茶壺がある。

【貿易陶磁】

43・44は龍泉窯の青磁椀で、退化した鎬蓮弁紋が施されている。45は白磁の皿である。46～49は朝鮮製陶磁器で、46は大海茶入れの口縁部で、47は同一個体の底部である。体部外面ならびに口縁部に黒色の釉薬がかかる。49は船徳利の底部であろう。

このほかにも、青磁の酒会壺や唐物と呼ばれる中国製天目茶碗、茶壺として珍重された福釉四耳壺などが出土している。

【金属器】

51は高さ約3cm、直径約1.9cmの竿秤の錘で、本体部はやや縦長の球形をしており、縦方

向に10本の稜線が刻まれている。本体の上には吊り下げのための穴が開いた突出部が付く。52～61は鉄釘か、これに類する鉄製品である。ほとんどがさびて腐食しており、本来の形状がわからない。61は長さ約5.6cmを測る。

【石製品】

62は硯である。63～68は直径3.2～4 cm、厚さ約0.9～1.7cmを測る小円礫である。地元でも採れるホルンフェルス(熱変成岩)製の川原石で、小さいものは基石、大きめのものには玉石などの用途が考えられるが、同じ市内の鎌刃城跡で見ついている基石は、直径約2 cm、厚さ約1 cm弱で規格性があり様相が異なる。第2・3次調査でも遺物包含層中から多く見つかり、庭園に伴うともいいがたく、今後の検討が必要である。69は縄文時代の磨石状の円礫で搗打痕がある。伊吹山麓には縄文遺跡が広く分布し、上平寺城下跡での発掘調査でも縄文遺物の出土が見られる。このほかに、焼けた壁材が出土しており注目される。

4. 調査のまとめ

検出された遺構について

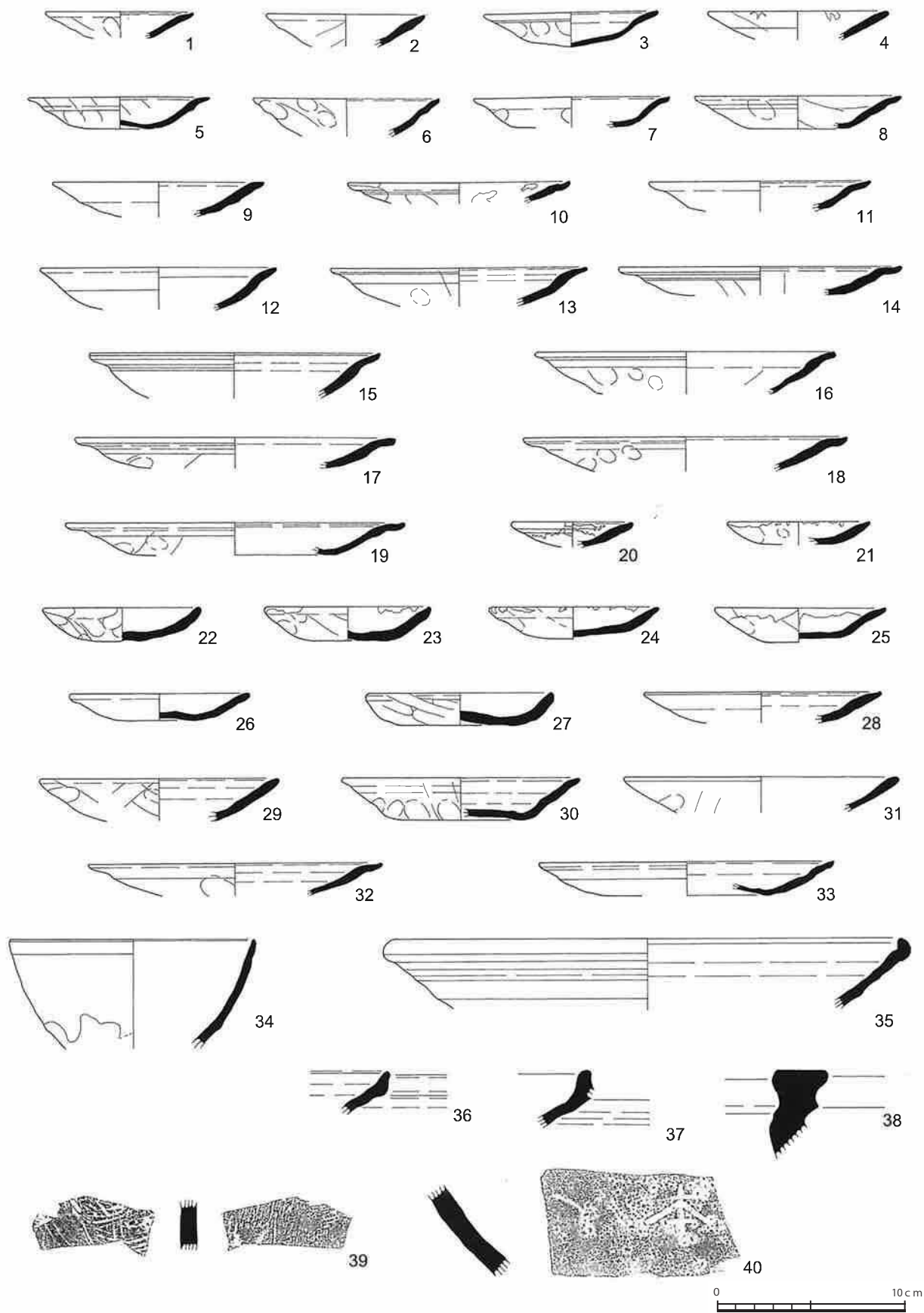
地表面観察では二段に分かれていると思われていた居館部分が、約68m×37mの平坦面全面を一面として利用していることが判明した。これまで、現況二段の遺構面からの判断では、同時期の各地の守護館と比較して小規模な建物しか想定できなかった京極氏館が、平坦面全体を使った広大なものになると思われ、室町・戦国期の守護館は一町(100m)四方の規模が標準的だが、京極氏館の場合は山間部に位置するために地形の制約があり、その規模を満たしていないものの、今回の調査の結果、建物遺構そのものは確認できなかったが、他の守護館に匹敵する建物遺構が今後検出される可能性が高まった。

館跡の東端で検出した幅約2 mの石敷き遺構は館の東端を画する築地か土塁の基底部だと考えられる。遺跡内には、一族の隠岐氏屋敷などで土塁が残っており、京極氏館も土塁で区画されていたと考えられる。

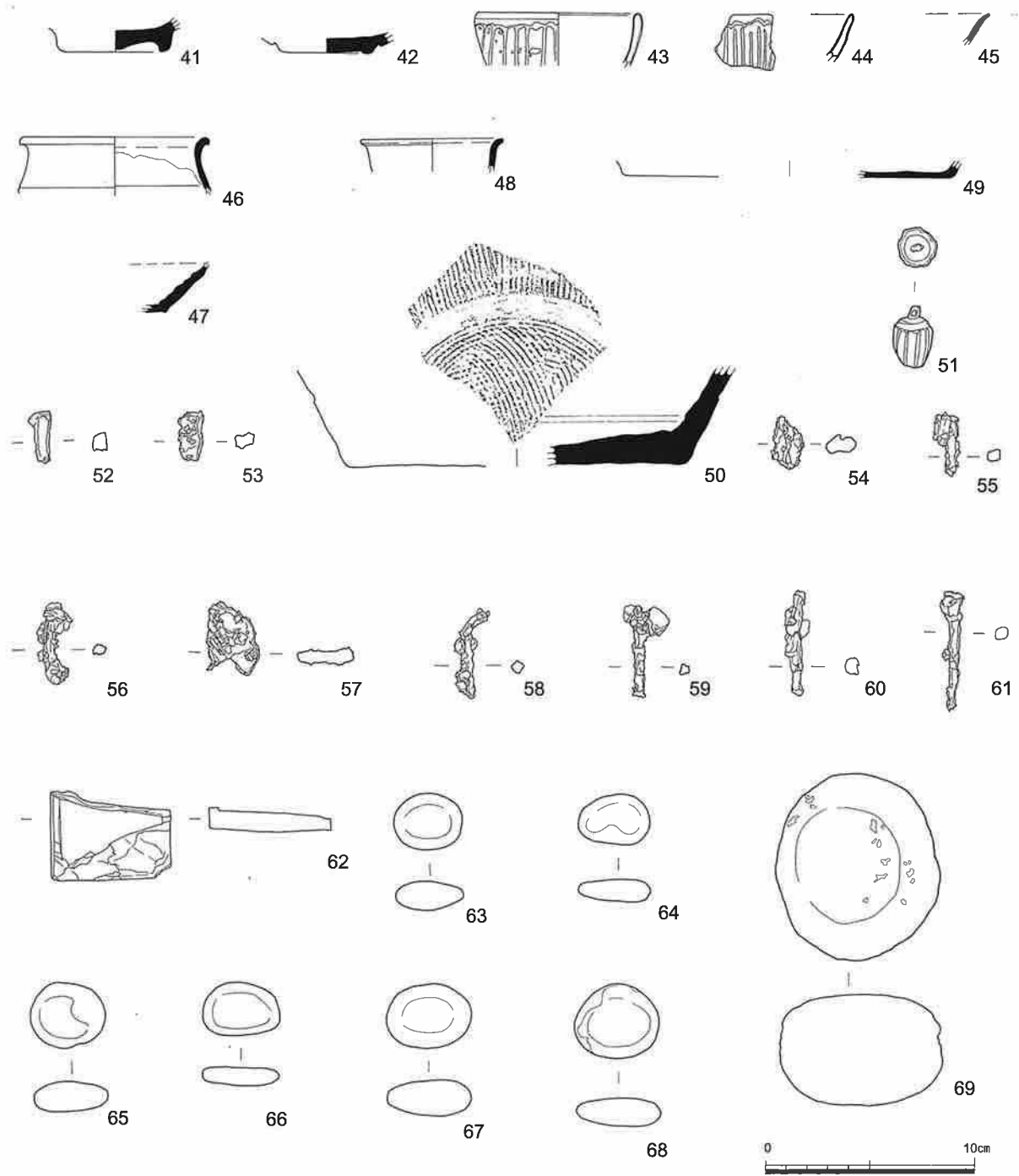
出土遺物について

出土した遺物の多くはカワラケとよばれる素焼きの土器(土師器皿)である。当時の大名は、自らの地位を守るために日々さまざまな努力を払わなければならない、その地位を守るものとして「武力」以上に重要だったのが「権威」といわれている。当時の社会で最も高い権威を持つ人物は、京都の足利将軍で、京極氏は上平寺の居館内に将軍邸のような庭園を設け、多くの客人をもてなすハレの宴などの儀礼を行っていたと考えられる。また、中世の社会では、宴会や儀式の場は人間関係を今よりもずっとはっきりさせる社会的役割を持っており、その宴席で京都風の文化を具現化して見せることで、自らの権力を将軍権力と重ね写して権威付けを図ろうとしたのではないだろうか。

このような場で使用されたのがカワラケで、それ自体は1枚1文ほどの廉価なものである。しかし、カワラケは素焼きで一度使うと汚れてしまうことから、使い捨ての器として清浄の象徴だった。従ってカワラケが大量に出土する場所は、非日常的なハレの儀式が頻繁に行わ



第9図 京極氏館跡第1次調査出土遺物実測図(1)



第10図 京極氏館跡第1次調査出土遺物実測図(2)

れていた特別な空間だったということができる。

また、出土品の中には、唐物とよばれ当時最高級の品であった朝鮮製陶磁器の大海茶入れをはじめ、青磁の酒会壺や中国製天目茶碗、福釉四耳壺、中国製などの青磁片や白磁片など高価な品も出土している。これらは、将軍邸の座敷飾りの規範書「君台観左右帳記」にまとめられた価値観を裏付けるステイタスシンボル(威信財)だったと考えられる。

さらに、竿秤の錘については、全国でもその出土数は少なく、時期は中世末～近世初頭(14世紀末～17世紀初頭)に限定される遺物といわれている。そのほとんどが各地の拠点的な城跡から出土しており、領国内の度量衡を管理するような権力者に関連する遺物といえることができる。

竿秤の錘が出土している主な遺跡には以下のものがある()内は、城主/時代/点数を示す。青森県浪岡城跡(北畠氏/15世紀後半～1590/1点)、東京都八王子城(北条氏/1578～1590/4点)、石川県七尾城(畠山氏/1394～1581/1点)、福井県朝倉氏遺跡(1471～1590/6点)、愛知県清州城下町遺跡(織田氏/16世紀後半/1点)、滋賀県小谷城跡(浅井氏/1524～1573/1点)、大阪府大阪城跡(豊臣氏/1580～1615/1点)、島根県富田川河床遺跡(尼子氏/16世紀後半/1点)。なお、富田川河床遺跡は尼子氏の月山富田城の城下町跡である。

第3節 第2次調査の成果

1. 調査経過

第1次調査では、現況で二段に分かれている館跡の下段の地表面約40cm下で黄茶色の粘質土層を確認し当時の生活面と判断した。さらに、これが上段にも続き当時は1面の広大な面積であったことを想定した。しかし建物遺構の検出にはいたらずその遺存状況や配置などの把握はできなかった。

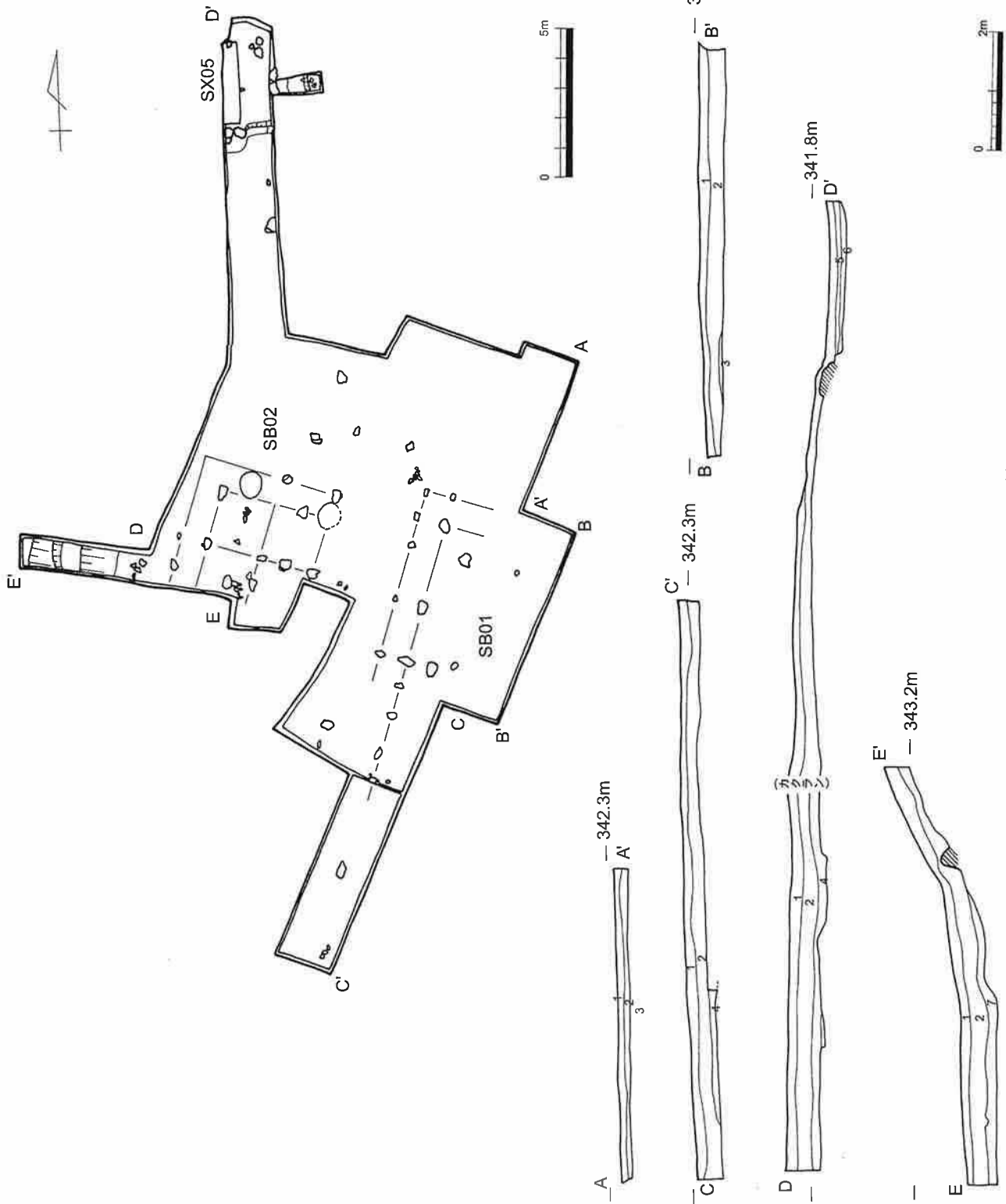
第2次調査では、まず第1次調査で確認した遺構面の庭園側での状況の把握と、建物遺構の保存状況などを確認するために、庭園付近において第1次トレンチと並行するトレンチを設定した。さらに、建物遺構の配置を確認することを目的に方形を基準に拡張して不正形の調査区を設定した。現地調査は、平成18年11月7日から3月29日までおこなった。

2. 検出した遺構

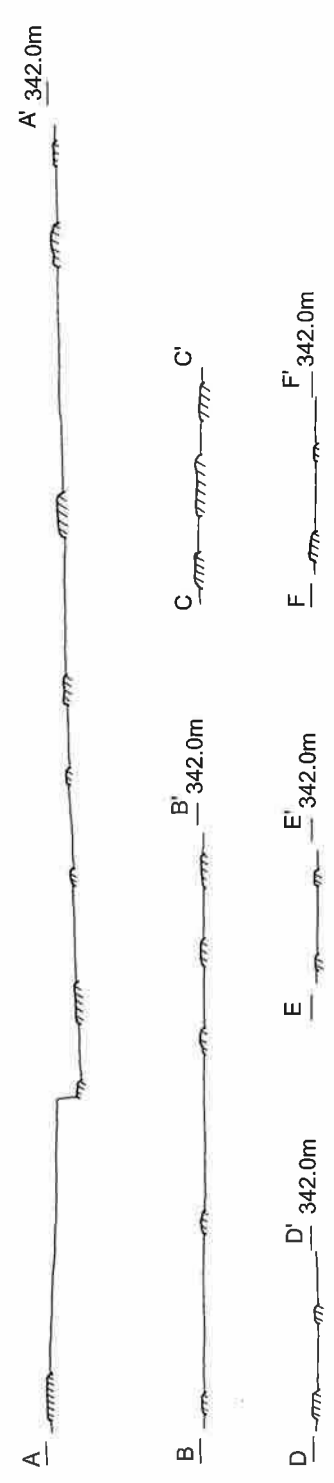
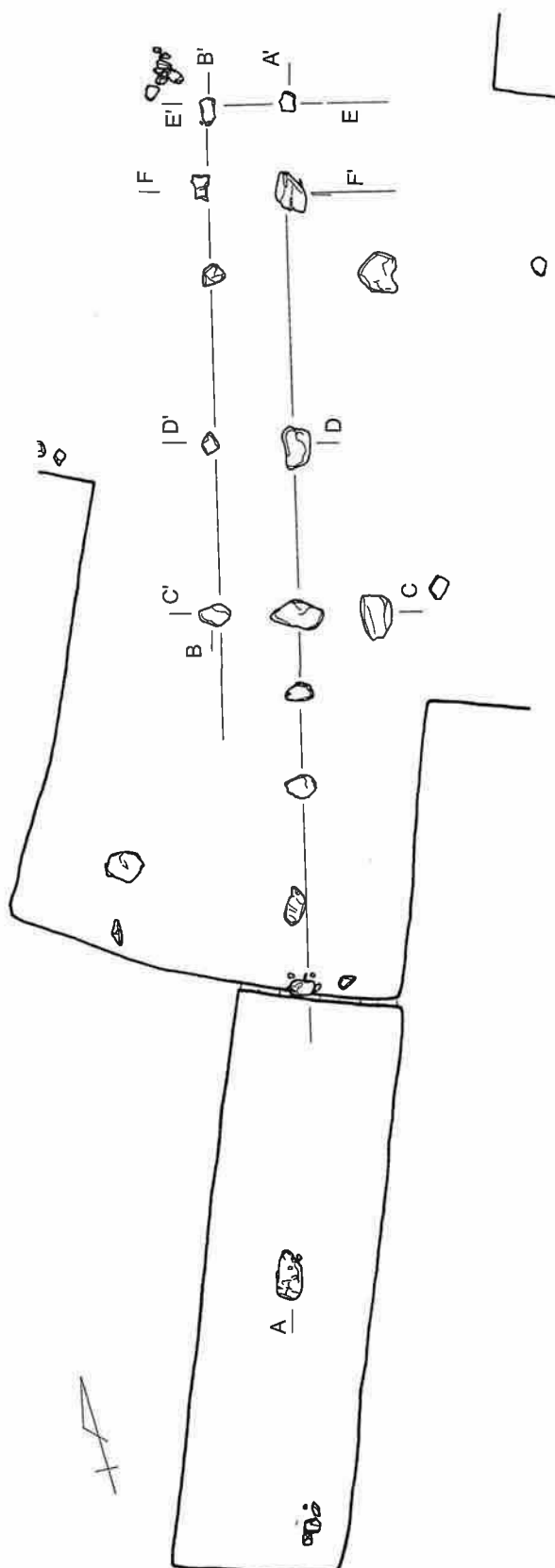
調査区の層序は、砂利混じり茶色土の表土・明茶色粘質土で、赤茶色や灰褐色の粘質土となる。この面に一部で焼土があり礎石がのる。

【礎石建物 SB01】

礎石建物SB01は南北四間以上、東西一間以上の建物となる。西辺と北辺に底部があり、半間ごとに束柱を据えた礎石が良好に残っており、縁をもつ建物であった。一間の柱間は六尺五寸であろう。礎石には硬砂岩製の扁平な川原石が用いられており、ほとんどが火を受けて焼けている。



第11図 第2次、第3次調査区平面図・断面図



第12图 碇石建物SB01平面图·断面图

【礎石建物 SB02】

トレンチの西側でも5点の礎石を確認している。このうち、壁際の2点が一間幅で並んでおり、会所に伴う何らかの小規模な建物の存在が予想される。次節で改めて触れたい。

3. 出土遺物

【土師器】

1～36は土師器皿である。このうち、6・9・10・12・14・15・16・21・23・24・25・27・28・29・30・34は礎石建物SB01付近の遺構面で検出した一括出土資料である。24以外は煤痕がないことから、儀式などで使用されたあとに投棄されたものと考えられる。2・3・5・20の口縁部には煤痕が付着しており灯明皿として使用されたものである。

【国産陶器】

37～39と44～47は瀬戸美濃産の灰釉皿で、40は灰白色の釉薬が施されている皿である。41～43は瀬戸美濃の播鉢で、41は火にかかったようで器壁が焼けている。43の播り目原体は11条である。49は火舎の脚部である。

【貿易陶磁】

50～54は白磁の端反皿の口縁部、55は底部である。56は青磁碗、57も青磁であるが器種は不明である。

【金属器】

60～66は鉄釘で、礎石建物に使われていたものと考えられる。67は平面三角形を呈する扁平な鉄板で用途はわからない。

【銭貨】

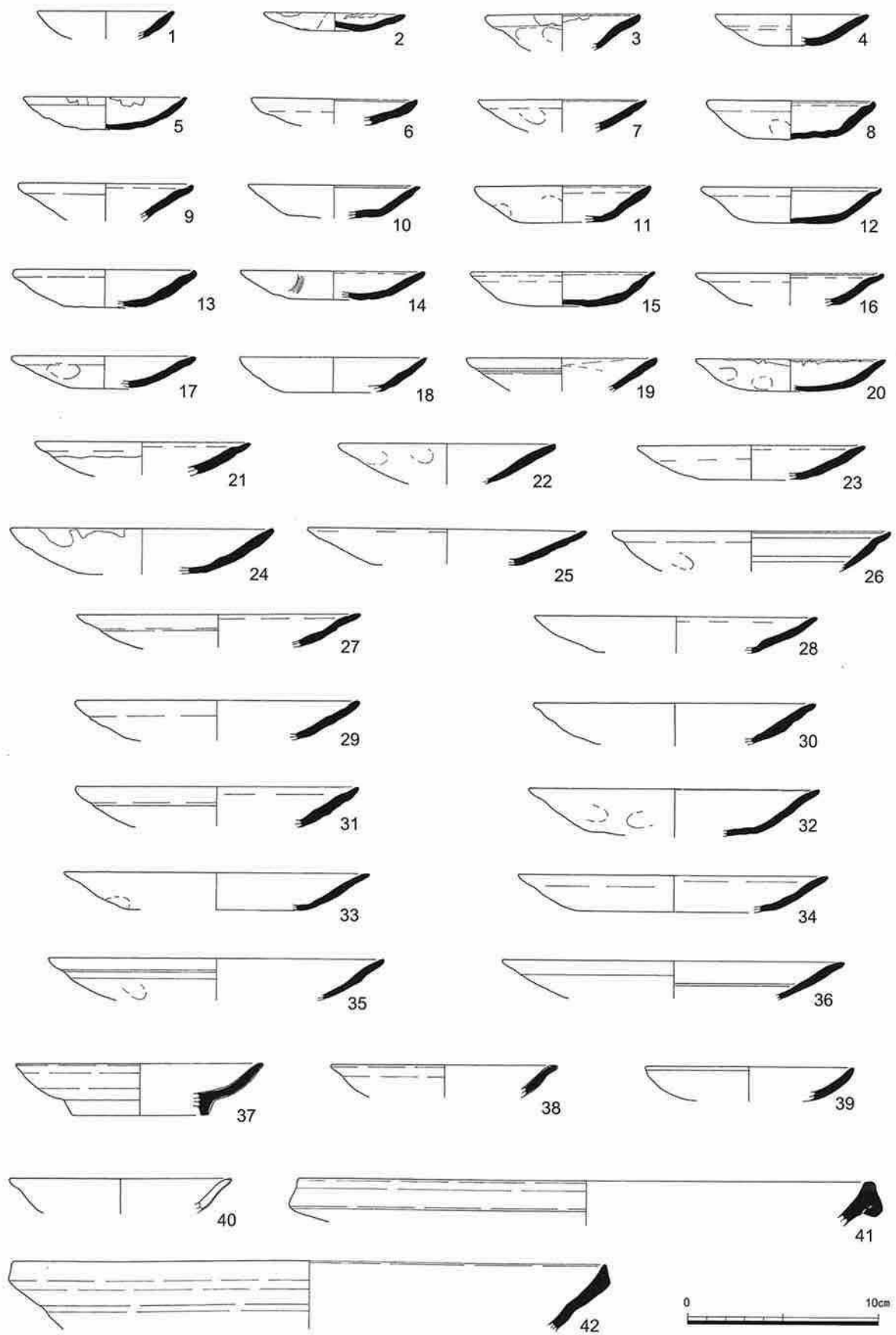
68は明銭の「永楽通寶」で、69は北宋銭の「天聖元寶」と考えられる。

【石製品】

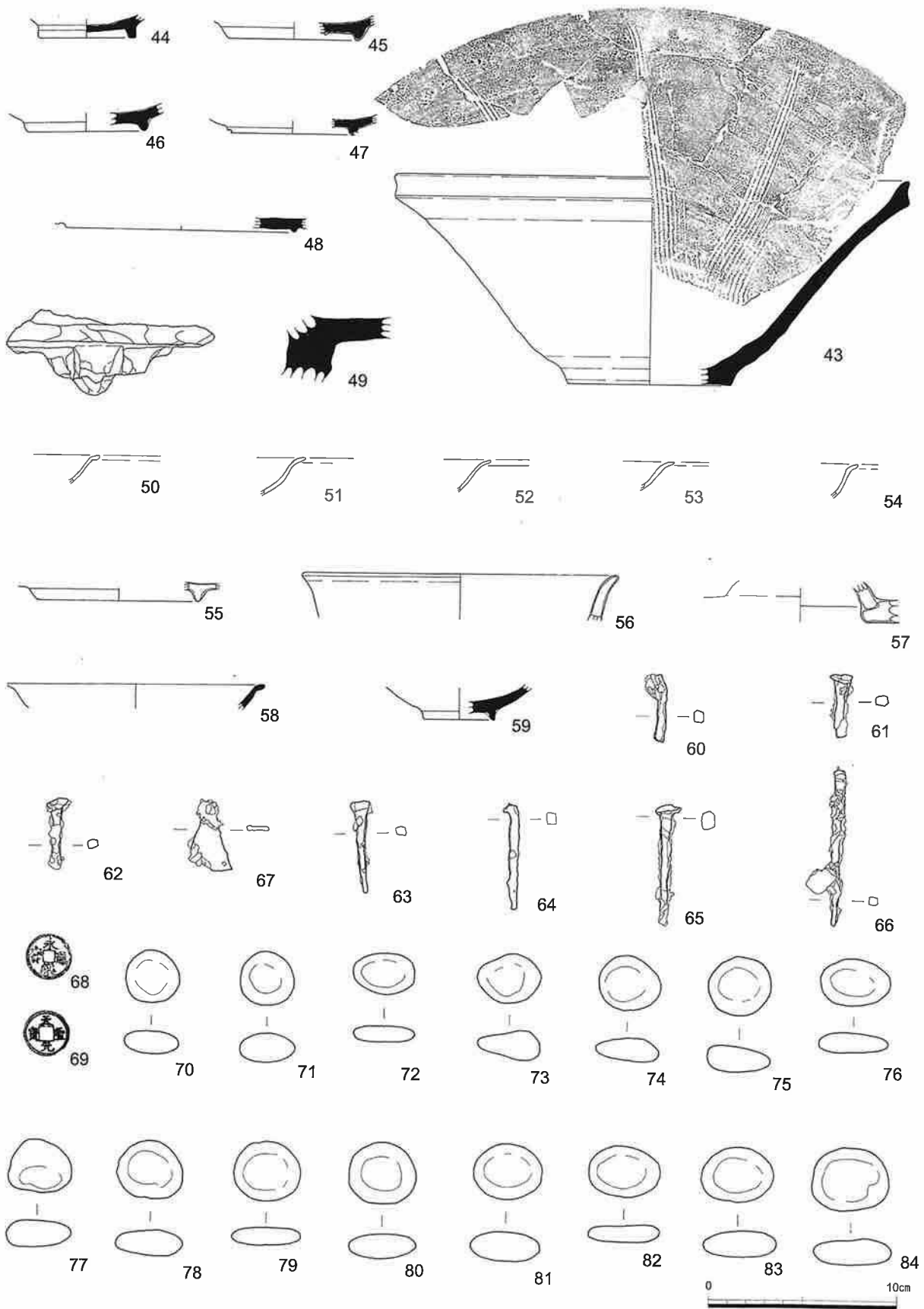
70～84は直径2.8～4cm、厚さ0.8～1.5cmを測るホルンフェルス(熱変成岩)製の小円礫である。表土中や第2層の掘削時に時折出土するが、遺構面からの検出はない。基石とするにはやはり全体的に大きく、用途については今後の検討が必要である。

4. 調査のまとめ

発掘調査の結果、地表面から約30cm～50cm下で暗茶色の粘質土層を確認し当時の生活(遺構)面と判断した。この遺構面の標高は約342m前後であり、第1次調査で検出した遺構面とほぼ同レベルであることから、一面のフラットな面が地下遺構として存在すると判断できる。調査区の北側を除く全面で直径20cm～50cmの礎石を約25点検出し、礎石の配列から、束柱が良好に残る縁のまわる建物と、これと並行する小規模な建物の2棟があったことを確認した。調査区の北半分では礎石がまったく検出されておらず、礎石建物SB01が庭に伴う会所的な建物であり、SB02はこれに附属する小規模な建物だと考えられる。また、礎石は焼けたものが多く、五寸角の柱の痕跡もわずかに確認できた。この火災がいつのものかはわから



第13図 京極氏館跡第2次調査出土遺物実測図(1)



第14図 京極氏館跡第2次調査出土遺物実測図(2)

ないが、大永3年(1523)の家臣団の一揆では「(高直は)かりやす尾の御城より御忍にて尾州へ御取退候。大原五郎(高広)殿も御同道候。六朗殿(高慶)はかりやす尾に残し被申候」とあり焼失していないようである。いずれにしてもSB01とSB02は京極氏館跡では初めての礎石建物であり、今後の調査と整備・活用のための重要な基礎資料を得ることができた。

出土遺物は礎石建物周辺で濃密に分布し、礎石を検出していない北側ではほとんど出土しなかった。儀式の際の杯や灯明皿として使われたと考えられる京都系の土師器皿が圧倒的に多く、一括資料などもあり、礎石建物SB01の性格を遺物からもうかがい知ることができる。

第4節 第3次調査の成果

1. 調査経過

第2次調査の大きな成果は、2棟の礎石建物の確認と第1次調査で検出した遺構面が全面に広がっていることを確認したことであった。しかし、この遺構面と庭園跡との整合性を確認するに至らずに終了したために、現状では礎石建物SB01などより、庭園がかなり高いように思われた。そこで、第3次調査では、第2次調査のトレンチの北側に一部重複する形で、幅2mのトレンチを庭園遺構の汀線落ち際まで延ばして、遺構面と現況の庭園との整合性を確認することを目的に調査区を設定した。あわせて、法面の確認をおこなった。第2次・第3次調査の面積は約190㎡である。現地調査は、平成20年8月18日から11月18日までおこなった。期間中の10月4日に開催された地域おこしのイベント「上平寺戦国浪漫のゆうべ」において、現地説明会を開催した。

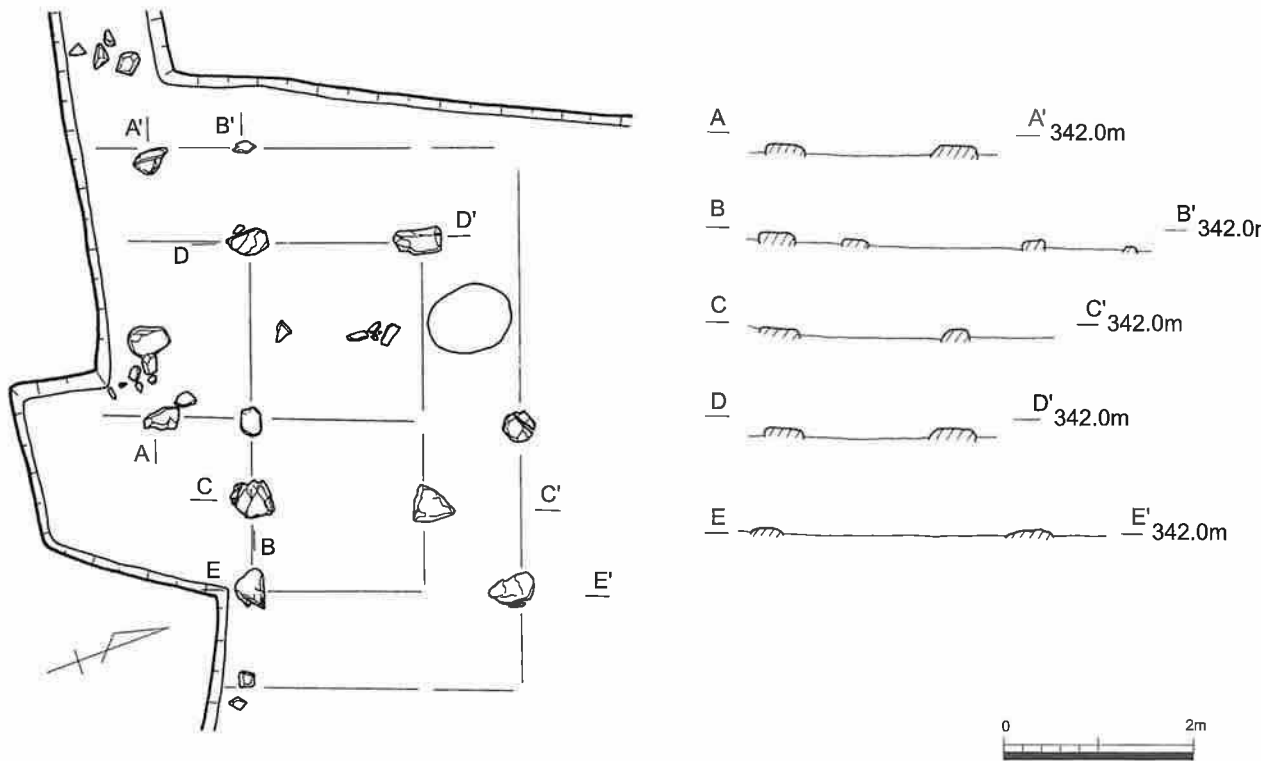
2. 検出した遺構

調査区北側では広い範囲で炭を含む焼土を確認した。

【礎石建物 SB02】

第2次調査の調査区西側に一部重複する形で庭園の汀線までのトレンチを設定したところ、第2次調査区の西端で確認した礎石に伴う数点の礎石が出土したことから、さらに西に拡幅して確認した礎石建物である。東西二間、南北二間以上の小規模な建物で、建物の主軸がSB01と同じであることから、会所(SB01)に付属する建物と考えられる。さらに東西と北の三辺には半間の位置に礎石があることから、SB01同様に縁をもつ建物だったと思われる。この建物は西側斜面落ち際から約2m離れて立地している。

このほかの礎石についても、六尺五寸の間単位で一部並ぶものがあり、いずれも主軸はSB01・SB02と同じであることから関連するものかもしれないが、他の礎石と天場の高さが異なるものもあり、時期の異なるものかもしれない。また、調査区の北側ではほとんど礎石が検出されなかったが、庭園に延ばしたトレンチの真ん中あたりに1点明瞭な礎石があり、ピンポールで周辺を探ってみたものの関連する礎石は確認できなかった。しかし庭園に近接して何らかの建物の存在を示すものである。



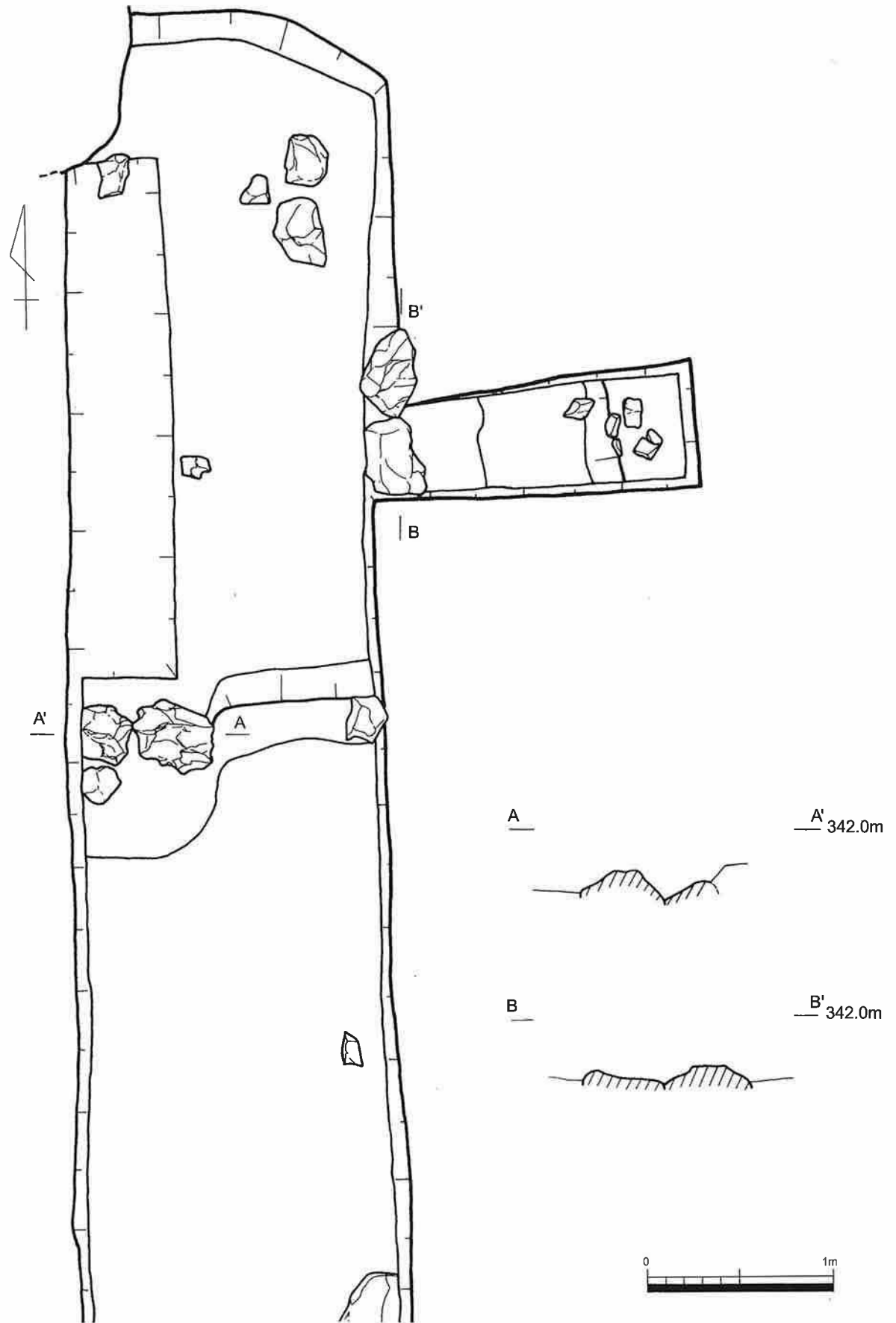
第15図 礎石建物SB02平面図・断面図

【庭園遺構 SX05】

今回の調査では庭園跡の汀線から約3.5m北へ池の部分までの確認をおこなった。調査区北端での池の深さは遺構面から約30cmを測る。

池部分にサブトレンチを入れて土層の堆積状況を確認したところ、1層は茶色砂利土で約3cm。2層は茶褐色粘質土(拳大の礫含む)で約2cm。3層は青灰色粘土で約10cm。4層は茶色粘土で10~20cm。5層は青灰色砂利土となっている。1層は腐食土層で現況の池面、小円礫が2点出土した。2層も腐食土層。3層は堆積したものと思われる。4層が池を築造したときに貼った粘土層と考えられる。5層は地山である。

池の護岸部分には西に2つ、東に1つの石がある。石の池側は茶色粘土(4層)で固定されているが、外側も同様に粘土層になっている。護岸石を据える際に、まず地山を掘削して池側の粘土を貼り、石を置いたあとで外側にも粘土を貼って石を据えたことがわかる。また、この作業によって漏水を防ぐことができる。ただし、東の1石は扁平な形状から礎石かもしれない。さらに、今回の調査では、池の東側にサブトレンチを設けて東側の護岸の確認をおこなった。サブトレンチにかかる2つの石についても同様に外側に粘土を詰めており原位置が保たれていることを確認した。



第16图 庭園遺構SX05平面図・断面図

3. 出土遺物

【土師器】

1～23は土師器皿である。1～4は小型品で器壁が厚く、5以降は薄手の皿で口縁部を横ナデして外反させるものが多い。7・9・10・12・15・18・20には煤痕が付着していて灯明皿として利用されていたものである。

【国産陶器】

24は瀬戸美濃の播鉢で大窯Ⅰ期の製品と考えられる。25は常滑産の大甕の口縁部。26は播鉢の体部で播り目原体は9条である。在地系の瓦質の播鉢で瀬戸美濃産のものをコピーした製品と思われる。27は茶色い釉葉が底部付近までかかるもので瀬戸美濃の大窯Ⅰ期の製品である。28～30は瀬戸美濃碗の高台部分である。

【貿易陶磁】

31は白磁の口縁部である。32は青磁碗で鎬蓮弁紋が施されている。33は青磁の高台部分で15世紀後半代の資料である。

【金属器】

34～39は鉄釘である。40は鉄環で直径3.5cmを測り、全体の1/3が欠けている。長さ3cmの棒状のものが取り付けられている。用途は不明であるが、甲冑など武具の金具と考えられる。

【石製品】

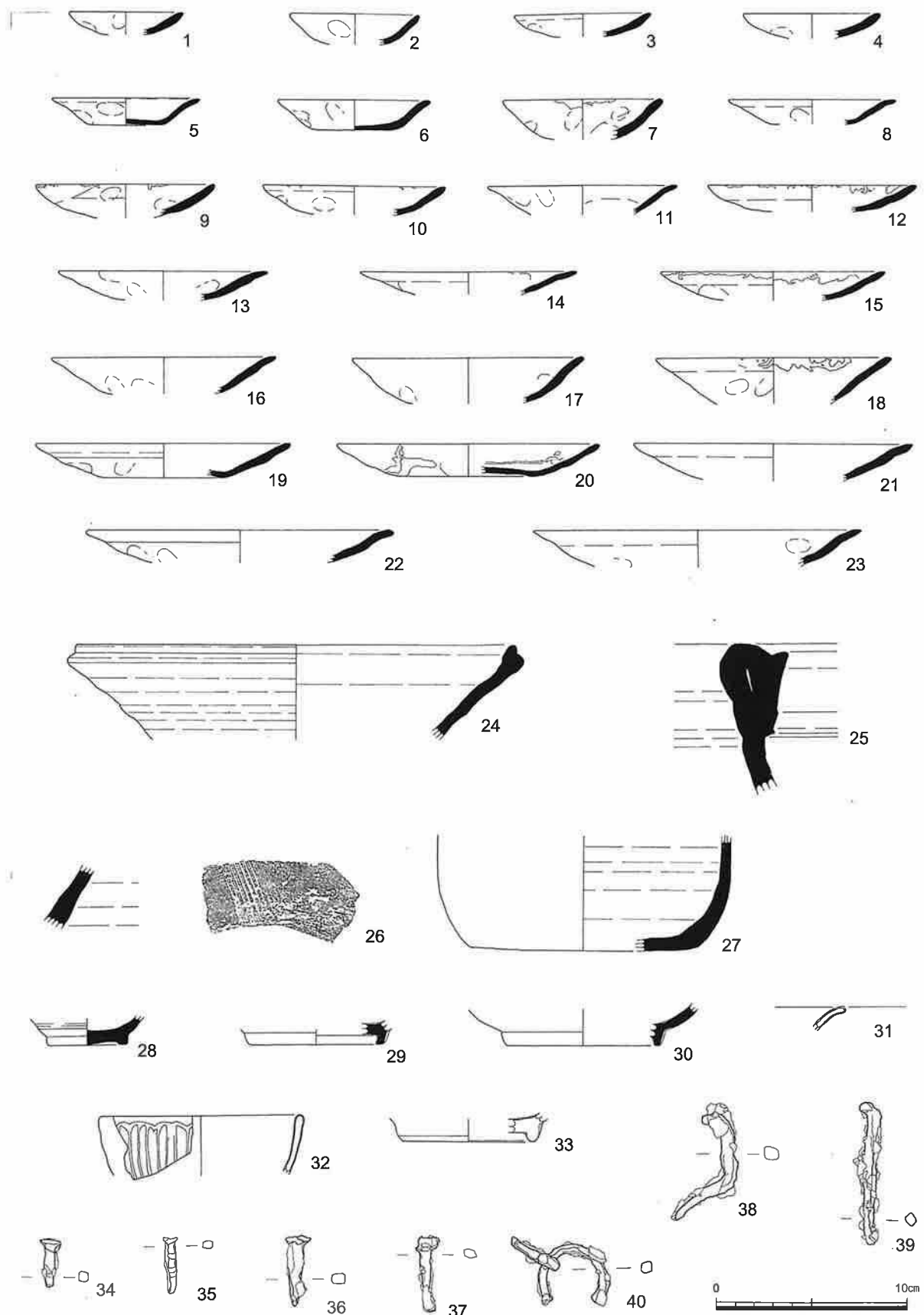
41～100は直径2～4.5cm、厚さ0.5～1.5を測るホルンフェルス(熱変成岩)製の小円礫である。41は直径約2cm、厚さ約0.5cmで平面も円形に近く、鎌刃城跡から出土している基石に類似しているが、その他のものは、大きさ・厚さ・平面の形状もさまざまに基石するには無理があるように思う。43・53が池の表土からの出土である。池の汀線の玉石として使用されていた痕跡は確認できなかった。

4. 調査のまとめ

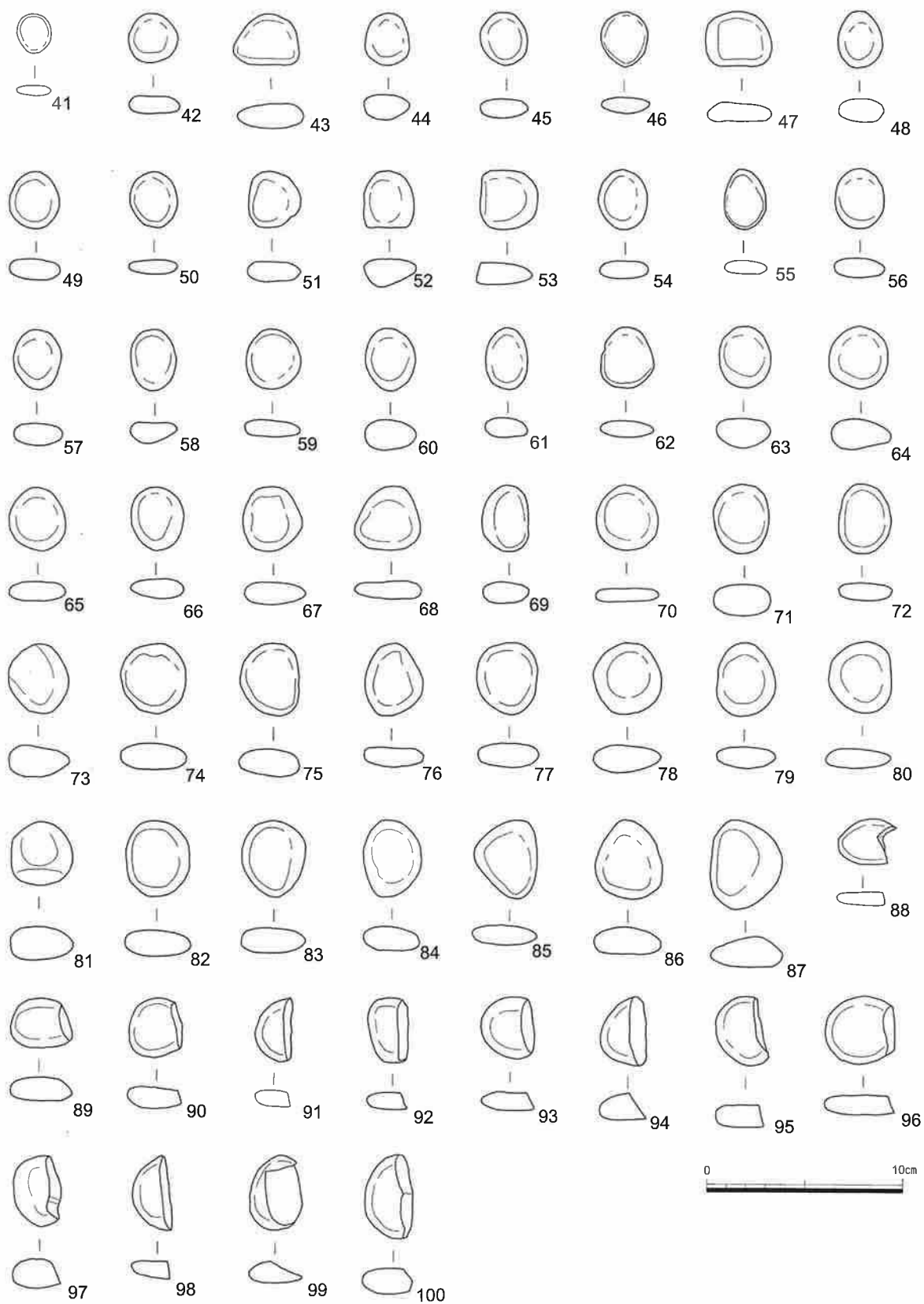
検出された遺構について

礎石建物がある遺構面と池の外側の標高はそれぞれ341.8m前後で、第3次調査の目的である第1次・第2次調査で確認した遺構面と庭園遺構との整合性については、標高差なく遺構が続いていることが確認できた。

しかし、京極氏館跡全体のほぼ真北に位置する庭園跡と、第2・3次調査で会所とその付属建物に想定した礎石建物SB01・SB02の軸線がかなりずれていることが気になることである。具体的には、後述するように今回の調査で検出した庭園の池の護岸部分は直線でほぼ東西に造られ、庭園側トレンチ東端で直角に北に曲がっているようだ。この軸線と建物の南北方向の主軸は約18°東に振れている。京極氏館跡庭園の場合、現状でも南からしか鑑賞することができず、奥の池や景石が見えない状態になっている。SB01やSB02の軸線では、建物から庭園を鑑賞するのがより難しいのである。ただし、2棟の軸線は京極氏館跡の敷地全体の軸線に沿って建てられているのであって、もしかしたら庭園を鑑賞する施



第17図 京極氏館跡第3次調査出土遺物実測図(1)



第18図 京極氏館跡第3次調査出土遺物実測図(2)

設は、庭園に延びるトレンチで確認した1点の礎石周辺か、現在急斜面になっている庭園東側に別にあったのかもしれない。

トレンチの3つの護岸石とサブトレンチの2石をつなぐとほぼ直角に曲がる護岸になるが、このような直線的な護岸をもつ庭園は大内氏館跡(山口県、第47図)や観音寺城(近江八幡市)の平井丸や、勝瑞館跡(徳島県)などの武家庭園でも確認されている。ただし、京極氏館跡庭園の護岸石は戦前戦中に多く抜き取られており、トレンチ護岸部の石がないところの茶色粘土層は抜き取り痕の可能性があり精査したが判然としなかった。また、今回の調査で池が約30cmと比較的浅いものであり、その底は粘土貼りである可能性を確認した。戦国期の武家館の庭園は比較的浅く、底部は石貼りのもの、汀線のみ玉砂利を敷くもの、粘土貼りのものがあるという。第1～3調査区で多く出土する3cm前後の小円礫について、池の玉砂利の可能性を考えていたが、今回の調査では腐食土層から2点出土したものの、底部からは確認されなかった。調査面積がわずかなため、他の部分で敷かれているかもしれないが、小円礫の性格については今後の調査を待たなくてはならない。

出土遺物について

出土遺物の中で圧倒的に多いのは土師器皿で、京極氏館跡という遺跡の性格を物語っている。小破片が多いので図化できたものは3次の調査を通して90点である。このうち煤痕の付着から明らかに灯明皿として利用されたことがわかるのは19点(21%)で、その口径は8～9.5cmに集中している。これは、城下町での発掘調査における灯明皿の口径法量と一致している。このように、京極氏館跡では約8割の土師器皿が儀礼の場のカワラケや盛り皿などとして使われていたことがわかる。城下町(上平寺遺跡)と家臣団屋敷跡(上平寺南館遺跡)での調査で出土した土師器皿の口径を基準に集計したところ、城下町で最も多いのが①6.5cm以上～7.5cm未満の小型品で、次に②8.5cm以上～9.5cm未満の中型品、そして③13cm以上～15cm未満の大型品であった。家臣団屋敷跡では、①と②が逆転していた。今回の調査では、①8cm以上～10cm未満が31点(34%)、②11cm～13cm未満が19点(21%)、③14.5cm以上～16.5cm未満が16点(18%)の順で多く城下町での調査の中型品から大型品に該当する。城下町などで多かった7.5cm未満の小型品は6点(7%)とごくわずかである。城下町の調査でいうところの「小型品」は口縁部が波打っているものが多く、ごく薄手で内面は比較的平滑に仕上げられているが、体部外面には凸凹と指頭圧痕が明瞭に残る粗雑な作りであった。今回の調査ではこのタイプの土師器皿は全く出土していない。「中型品・大型品」は、口縁部を横ナデにより外反させたあと端部を小さく肥厚させ、内面底部と体部の屈曲部にナデ上げる際に生じた凹線がわずかに認められるなどの特徴があり、16世紀前半の京都の土師器皿の影響を受けていると思われるものである。土師器皿だけみても京極氏館跡の優位性がみてとれる。

第4章 弥高寺跡発掘調査

第1節 弥高寺跡の歴史と構造

1. 弥高寺跡の歴史

伊吹山は、いくつかの急峻な支尾根を裾に広げているが、南の中山道、現在では東海道本線・名神高速道路の走る近江と東国を結ぶ狭い平野部に向かって伸びている支尾根が、その中でも眺望といった点では極めてすぐれている。弥高寺跡は、その支尾根上の標高約650m～750mを測る場所に残る。山裾にある現在の弥高集落からは、幅1mばかりの蛇行する山道を、通常の足で1時間余り登ったところであり、現在は林道が遺跡直下まで通じている。逆に伊吹山山頂から下ってくると、角度をかえてややゆるやかになった地点に位置する。

伊吹山寺あるいは、弥高寺に関する沿革について、用田政晴が『弥高寺跡調査概報』のなかで整理しているので、これに従って紹介したい。

永正10年(1514)銘の勧進帳では、白鳳2年(673)に役行者が開基し、天平神護年間(764～)に泰澄が再興したと記されている。『三代実録』元慶2年(878)2月の条には、仁寿年間(851～854)、僧三修が七高山の一つ伊吹山に登り、「一精舎」を建てたとあり、その後、「舎堂」が増え、元慶2年2月13日に、国家公認とでも言うべき定額寺に列せられたという。従って、この頃には、寺院として、規模も内容もある程度整備されたものであっただろうと推定される。

次に弥高寺に関係する記録は徳治3年(1308)までとぶ。同年4月10日、「伊福貴山弥高太平両寺衆僧和与状」(『観音寺文書』)によると、弥高・太平両寺の間に本末寺の相論があったことがうかがえる。この頃、伊吹四ヶ寺のうち、この両寺が勢力を誇っていたと思われるが、主導権をにぎっていたのは、あくまでも弥高寺であったという説もある。

また、嘉暦2年(1327)正月22日、後醍醐天皇からの令旨が伊福貴社に届き(『観音寺文書』)、その中に、弥高・長尾・観音寺の名が見える。

応永7年(1400)、弥高寺が伊吹山峰入りの新道を開設したことに對し、太平・観音・長尾の三ヶ寺がこれを訴え、熊野三山検校が弥高寺と長尾寺の峰入りの宿役を停止している。応永11年(1404)には、伊崎寺・阿弥陀寺・長命寺・安樂寺・石馬寺・千手寺が峰入りの宿場を弥高寺とすることを決議し、応永13年(1406)、仁和寺の永助法親王がこれを承認している。また、永享10年(1438)には、弥高寺の伊吹社遷宮儀式執行に對し、太平・観音・長尾三ヶ寺が連署で反対している。これらのことから、この頃伊吹山寺内に勢力争いがあったことがうかがえる。

弥高寺は明応8年(1499)正月24日焼失、再建後、永正9年(1512)6月失火のため焼失したというが、天文5年(1536)5月の「伊富貴大菩薩奉加帳」(『伊夫気文書』)には47の坊院があり、天文9年(1540)「伊吹三宮奉加帳」(『伊夫気文書』)にも弥高寺の坊名が見られ、寺は何らかの形で存続していたようである。しかし、浅井氏の滅亡(1573年)ののち、ときを経ずして

天正8年(1581)に西山麓に移転し、現在では天文5年の奉加帳にある悉地院が、弥高寺の法灯を伝えているのみである。

なお、弥高寺の本坊跡は、登記簿上、周囲が山林であるにもかかわらず、地目が宅地になっており、かなり新しい時期まで何らかの建物が残っていたのではないかと推定されるのである。

このような永い寺院史のなか、城郭として機能していた歴史がある。応仁の乱以降、北近江守護の京極家および多賀氏など主要家臣が内紛を繰り返し、これに南近江の六角氏や美濃の斎藤氏が介入する。このなかで、弥高寺も山城として機能していたようで、明応4年(1495)に京極政高(高濑の誤りとする説もある)が「弥高寺より進み」、翌年には京極高濑が弥高寺に「御陣」を構えていることが『船田後記』や『今井軍記』にみえる。築城の前提として守護に対する寺院の協力があつたと考えられるが、両者の明確な関係は不明である。また、谷を隔てた上平寺城が元亀元年(1570)の信長進攻まで用いられているが、弥高寺については途中で城郭として放棄された可能性がある。

2. 弥高寺跡の構造

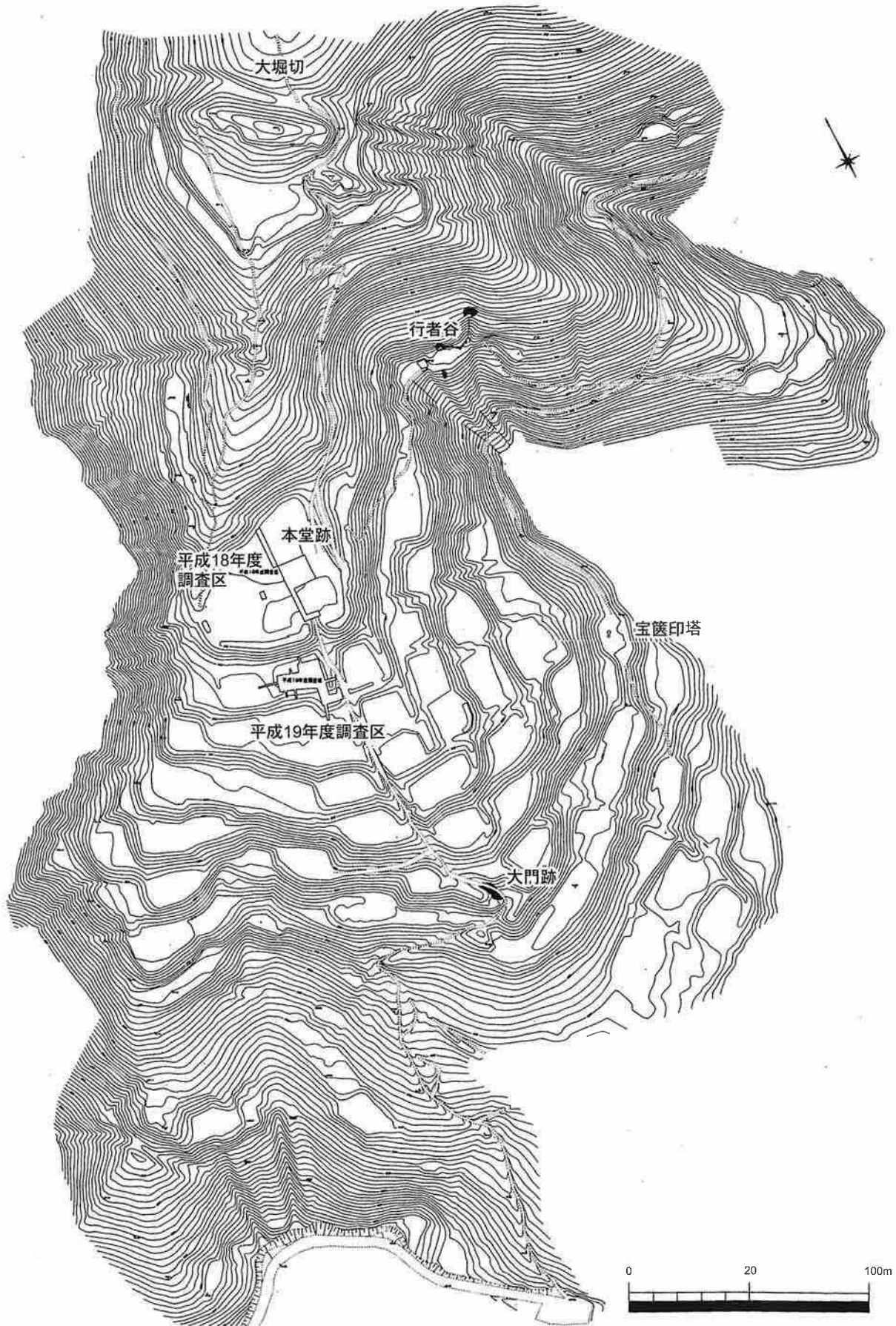
主要な坊跡群は東西約250m、南北約300mの範囲に集中し、本坊跡を頂点として下方へ広がる。中心となる削平地を、地元では「本坊」とよんでいるが、本来は「本堂」であろうと思われるので、ここからは本堂(跡)と記述する。

昭和60年の調査では、この本堂跡も含めて56の坊跡が確認された。本堂跡を別にする、60×13mを計る長大なものから、11×7m程度の小さなものまでであるが、20×15m程度のものが大半を占める。そのほとんどが、坊跡の長辺を等高線にそろえてあるため、中ほどから西側の坊跡は東西方向に並び、東側は南北あるいは東北・南西方向となっている。さらに、昭和62年の補足調査では、東南隅に6つの坊跡が図化された。本堂跡背後には、巨大な堀切と竪堀群を伴う大小の削平地群がある。また、上平寺城へ向う道筋の薬師谷に面した尾根上には、大小6つの削平地と斜面に3つの小削平地がある。現時点で、「弥高百坊」の通称どおり100の削平地があることになる。

門跡および大門跡から本堂跡へ至る道を中央の道とし、坊跡相互は複雑に入り組んだ道により結ばれる。また、行者谷から石段を下り(崩落してう回路になっている)、宝篋印塔および五輪塔が残る坊跡へ至る道があるが、この道をもって東の限りとしており、西側は急峻な斜面でもって遺構群は終る。

本堂跡から背後・上方へ至る道は2本ある。1本は本坊跡の東奥から伸び、上方の大がかりな堀切状遺構に至る道。この道は、山頂へと続く。もう1本は西側土塁上を登り、石仏・石塔群の遺存している墓地跡を左にみて大堀切へ至る道がある。

なお明確な土塁は、本堂跡とその周囲、および中央の道の西側に残るだけで、多くの郭は土塁を備えていない。また、明らかに城郭遺構としてとらえられる竪堀・堀切は、本堂跡背後の削平地群の周辺に大堀切や連続する竪堀群が集中するほか、坊跡群の西側斜面、南西尾



第19図 弥高寺跡全体図（調査区位置図）

根上に見られる。

昭和60・62年の測量調査は、中世後期に山上で成熟した典型的な山岳寺院を捉えたものであり、平成の測量調査は、これに武家勢力による改修の痕跡を追加したものであった。

近年、各地の山岳寺院の調査事例から、山岳寺院は山の中腹に位置し背後のピークを積極的に利用しないことが確認され、これが城塞化された場合は、寺院の坊跡群を利用しつつも、背後のピークに城郭としての防御拠点を新たに設ける例がしばしば見られるという。堀切・堅堀で防御された本堂背後の遺構は、武家勢力が新たに設けた城郭遺構の可能性が高い。さらに、西斜面と南西尾根上に堅堀群を設けることにより、坊跡群全体を取り込んだ城塞化を成し遂げているのである。

さて、弥高寺跡墓地の発掘調査では、13世紀後半～15世紀末か16世紀初めの遺物が出土している。とくに14世紀代が中心で、この時期に山岳寺院として山上で拡大発展したと思われる。金剛輪寺(愛荘町)の調査でも、12世紀後半以降に必要なに応じて坊地の造成が徐々に進められ、整備が概ね完了するのが14世紀頃までと推定されている。墓地の調査からは、ちょうど京極氏が陣を構えた15世紀末以降、墓地としての機能をなくしている。このころから徐々に、弥高寺が城塞化されはじめたのではないだろうか。

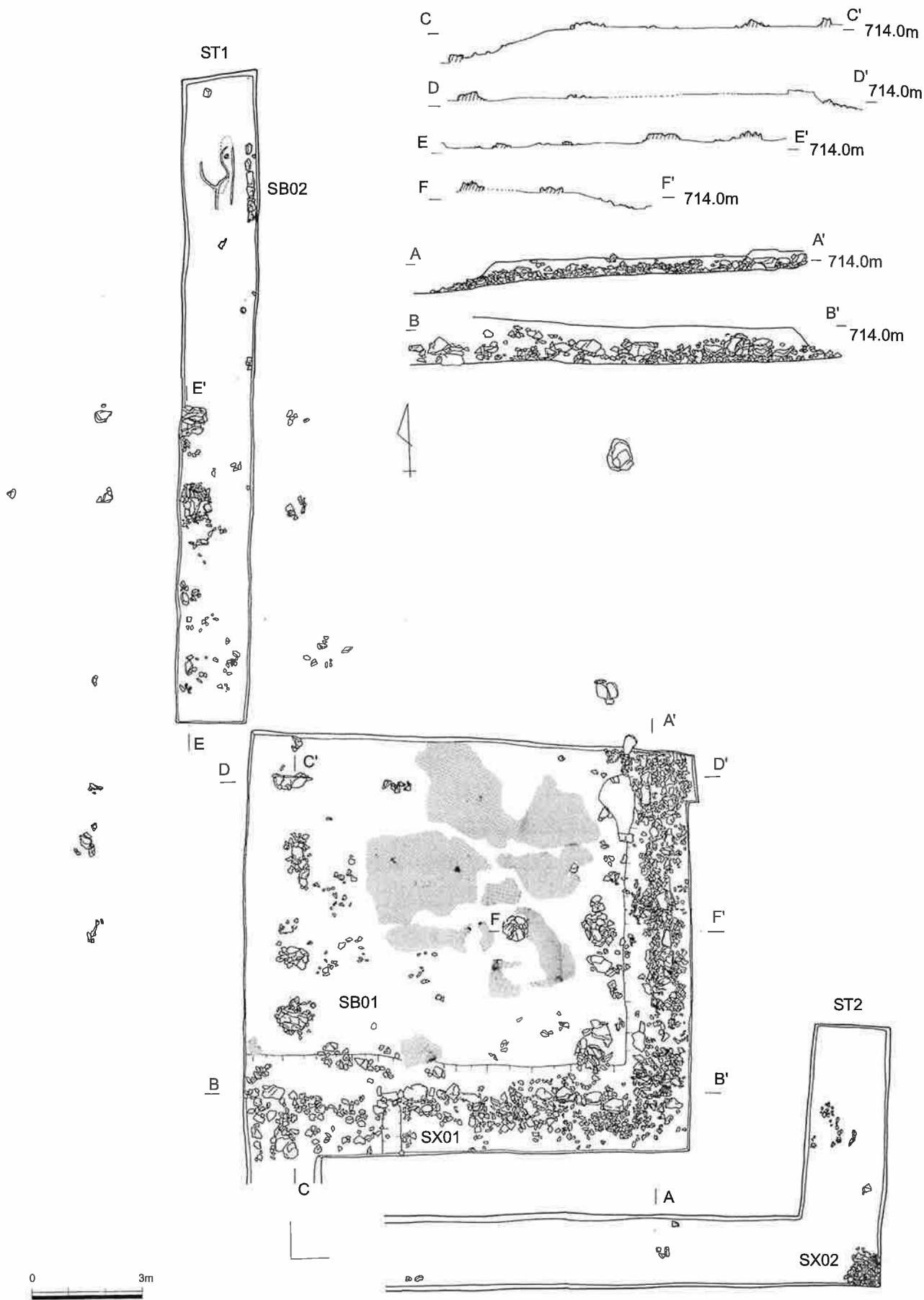
本堂跡背後の大堀切を遺跡の北の結界としたが、弥高区字史『彌高物語』や現地踏査では、さらに上方に「殿山」「長小場」と呼ばれる平坦地があり、標高904mの弥高山山頂は「経塚」と呼ばれている。また、山麓登山道入り口にあり石垣を伴う「大門」や、登山道沿いにも「丸山」「ノタガタ尾」「役山」という削平地があり、今後継続した調査が必要である。

第2節 第1次調査の成果

1. 調査経過

弥高寺跡での発掘調査は、昭和60年に盗掘に伴う墓地の確認調査が行われているだけで、史跡内での発掘調査は今回が初めてである。調査は、弥高寺跡の本堂跡や僧坊跡の構造や遺構の残存状況を確認し、将来の保存活用計画の基礎資料とすることを目的に実施した。

平成18年度の第1次調査は、地元で本坊跡(本書では本堂跡とする)と呼ばれる中心伽藍の基壇状遺構において、当時の遺構面と建物規模などを確認することを目的に、基壇の南東部に約12m×約11mの方形の調査区を設定しておこなった。また、調査区から北へ基壇背後の確認を目的とした幅約2mのサブトレンチ(ST1)と、南へ下段の状況と門跡の確認を目的としたサブトレンチ(ST2)を設定した。調査面積は約210㎡である。現地調査は、平成18年7月27日から10月5日までおこない、11月23日に、全県的なイベント「近江中世城跡琵琶湖一周のろし駅伝」にあわせて現地説明会を開催した。



第20図 第1次調査区平面図・立面図・断面図

2. 検出した遺構

【基壇 SX01】

本堂跡の削平地の山側には、やや東に寄って約20m四方、高さ約1mの基壇状の遺構があり、これが弥高寺の本堂跡とされる。その西側には8m四方の高まりが付属していて、小規模な塔や観音堂の跡ではないかといわれている。基壇上には調査前から数点の礎石が露頭しており、風が強い弥高寺跡では、数百年間埋もれずに残ったものと考えられる。発掘調査では、地表面すぐ下の広い範囲で岩盤が露出し、これを割って基壇を整地している。基壇は南を正面として、約1mの高さを測り、東側では約50cmとなる。基壇の周囲には石が積まれており、南正面はかなり崩れて残りが悪いが、東側では石の高さが揃い目地が通っていて2段石積みとなっている。

【礎石建物 SB01】

基壇上で建物の礎石を9点以上確認したが、その間隔は不揃いで残り具合もよくないために建物の構造はわからない。礎石はいずれも直径約90cm前後で、どれも細かく割れていた。これは、火災のあとに雨などで急速に冷やされた結果と考えられる。多くの礎石もこのときに処理されたと思われるが、抜き取り痕は確認できなかった。礎石は基壇の落ち際まで据えられている。このことから基壇の南と東はぎりぎりまで建物が建てられていたことがわかる。西側については附属する高まりがあるためわからないが、北側については基壇南端から約18m奥で礎石を検出しているが、建物背後を区切る溝などの遺構は検出しなかった。

【建物 SB02】

基壇中央付近の山際、本堂の背後で確認した石列で、約20～40cmの扁平な石6点が約2m10cm南北に並び、南端で折れて東に続いていた。石列の面は西外側に揃えており、一間四方の社殿のような建物と考えられる。弥高寺の本所神(三所権現といわれている)を祀ったものと思われる。長浜市木之本町の己高山観音寺には本堂背後の右奥に、同じく法華寺では背後の中央付近に祀られている例がある。ただし、SB01とは構造も異なり、本堂基壇上で検出したことから、本堂焼失後に祀られた社殿の可能性もあり、永正10年(1513)の本堂再建の勸進帳には、前年の焼失後「一字之完成」とあり、この仮堂かもしれない。

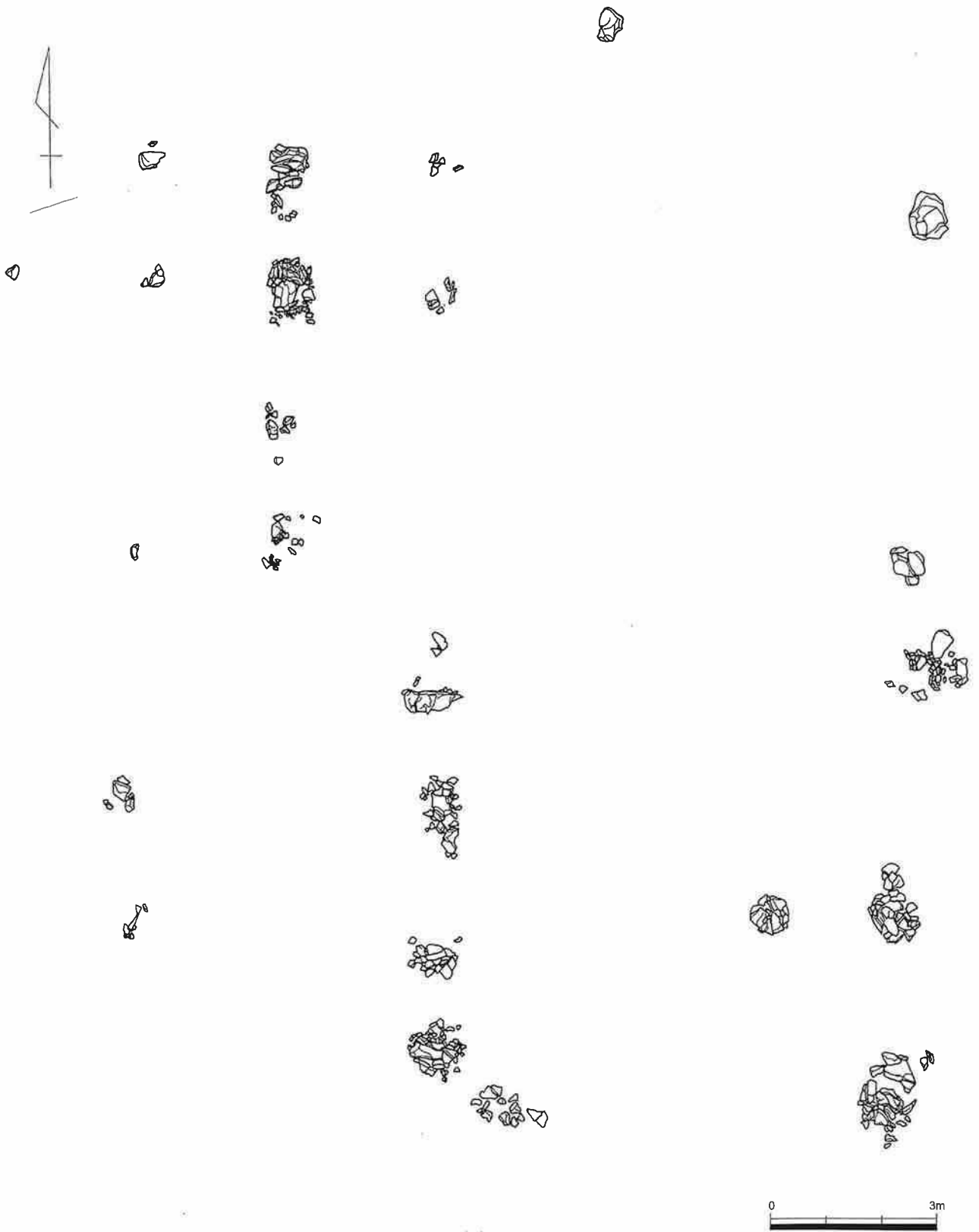
【石敷き SX02】

本堂基壇の前に設定したST2からは、ほとんど遺構も遺物も検出しなかった。SX02は、本堂跡の削平地を巡る巨大な土塁の基底部で検出した石積みで約90cm四方を測る。これは土塁の基底部を固めるもので、京極氏館跡で検出した石敷きSX01～03と同じ性格の遺構と考えられる。石材は基壇の岩盤を利用している。

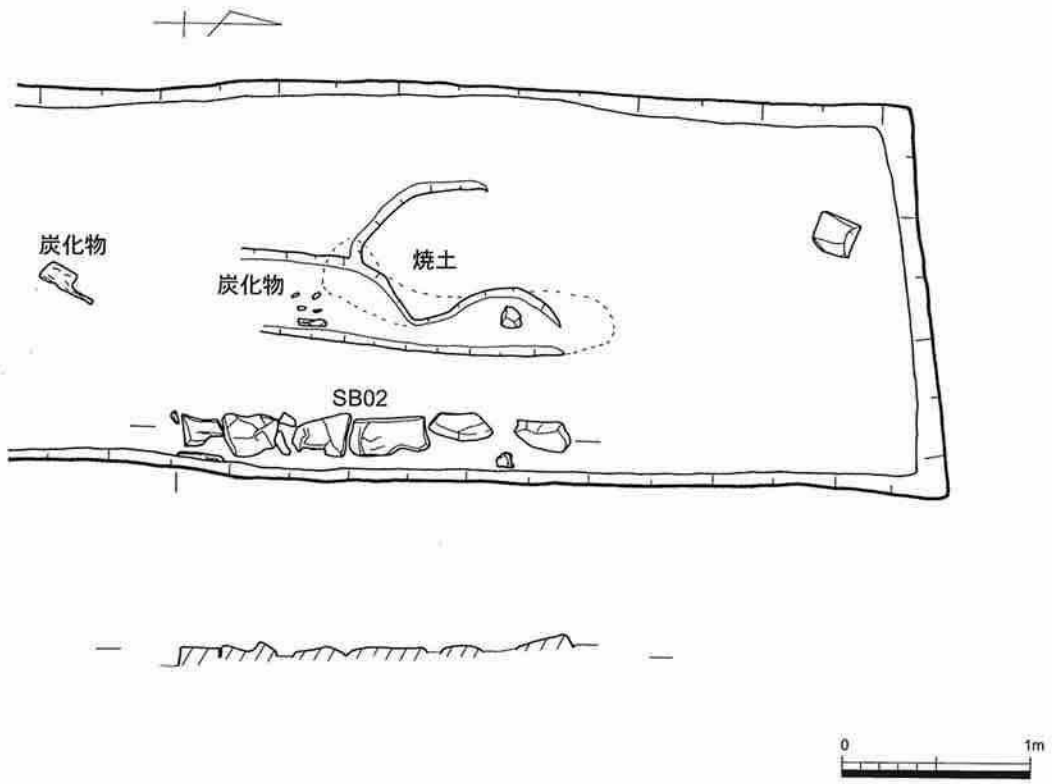
3. 出土遺物

【土師器】

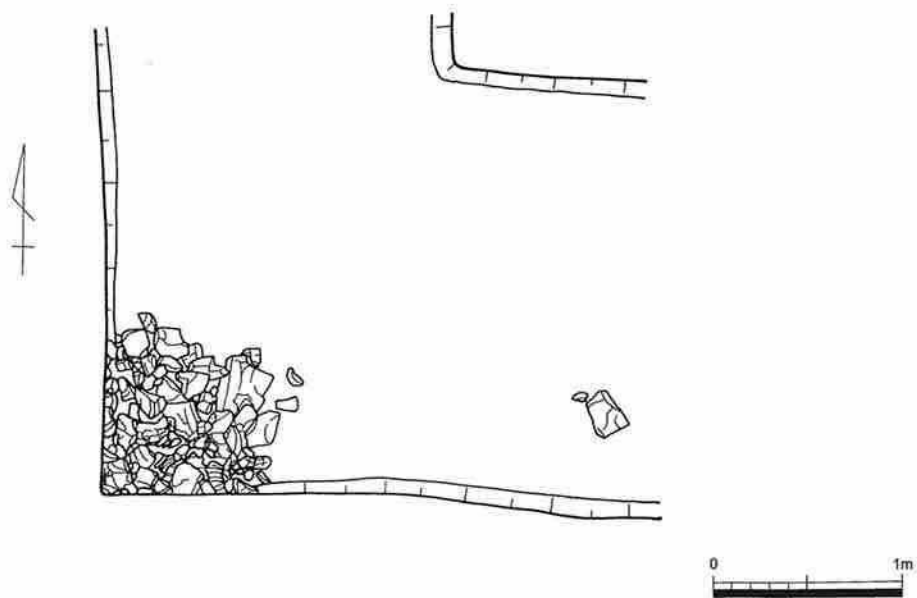
1～11は土師器皿である。出土した土師器皿には2時期あるようで、1・2・4・5は全体が赤く厚い器壁をもつもので平安時代末(12世紀)頃の遺物である。3・6・7・8・9は



第21图 礎石建物SB01平面图



第22图 建物SB02 平面图・断面图



第23图 石敷き遺構SX02 平面图

15世紀末～16世紀前半のものでこちらが大半を占める。2・3・6・7・8には煤痕が付着しており灯明皿として利用されたことがわかる。

【須恵器】

12～14は須恵器である。いずれも小破片であるが外面には叩き痕が、内面には宛て具の痕跡が明瞭に残っている。奈良時代の8世紀の遺物で、下っても平安時代のごく初期のものと考えられる。弥高寺をはじめ伊吹山の山岳信仰関係の最も古い遺物である。

【国産陶器】

15は瀬戸美濃産の香炉口縁部。17は灰釉皿で底部に糸切り痕が明瞭に残る。19は灰釉碗でいずれも12世紀に属す。21は常滑産大甕の口縁部、22は長頸壺の頸部である。23は播鉢で播り目原体10条である。24は焙烙鍋。25は火舎の脚部である。

【貿易陶磁】

26は青磁の花瓶で火を受けて焼けている。このほか図示できなかったが青磁の香炉の小破片など、本堂にふさわしい遺物も出土している。これらは14～15世紀の遺物で伝世品として伝えられたものであろう。

【金属製品】

27～42は鉄釘である。3cmくらいの短いものから13cmの長さのものまであり、大きくて長いものは建物本体構造に伴うものであり、短いものは銕釘であろう。43は鏝である。44は銅環で直径3cmを測り開口している。錫杖の附属品とみられる。45は銅板で建物に使用されていたものと考えられる。

【銭貨】

46は北宋銭の「熙寧元寶」である。

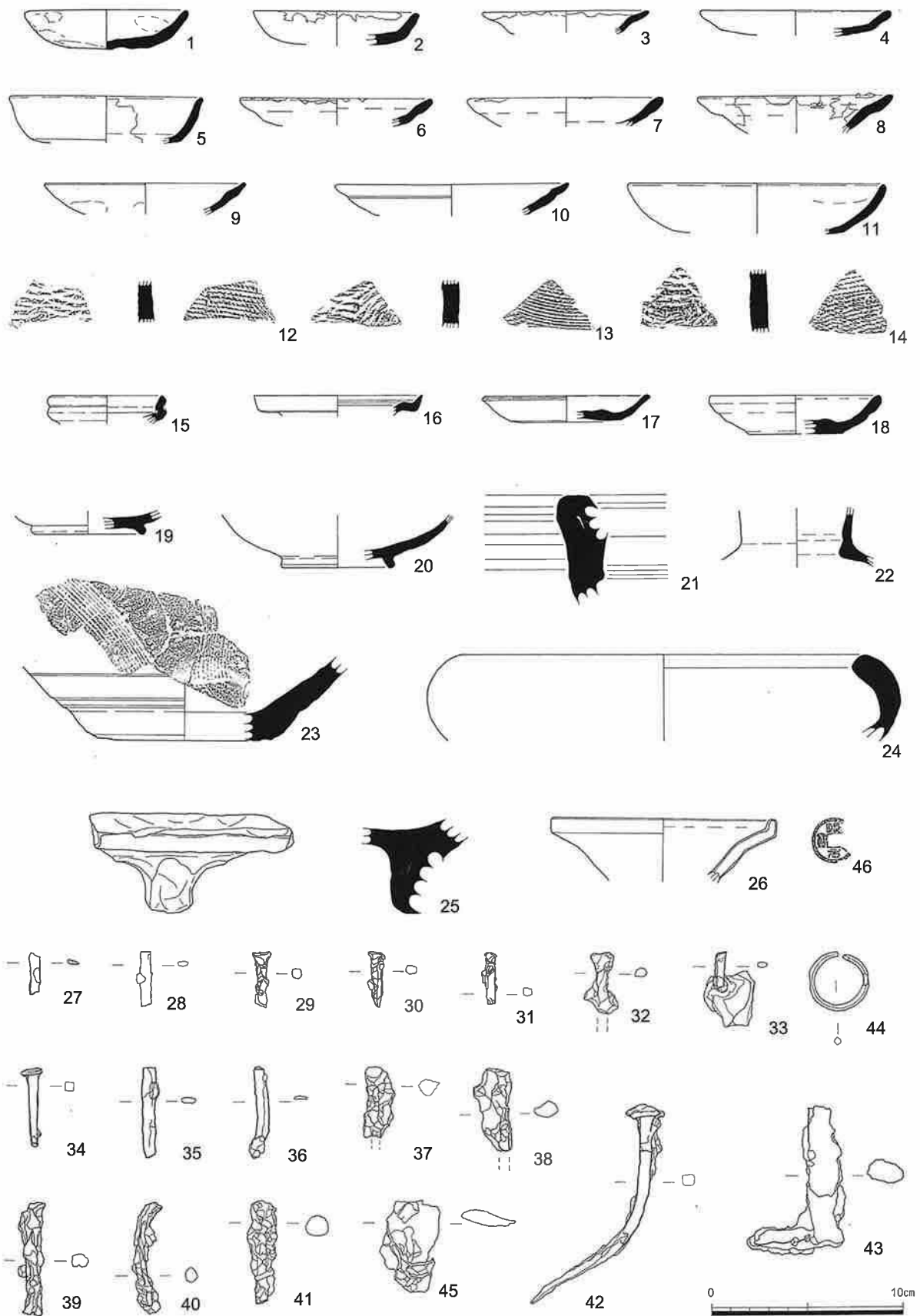
4. 調査のまとめ

検出された遺構について

弥高寺本堂は、天正9年(1512)6月に失火により焼失しており、翌年に勧進帳が作られているが、実際に再建されているかどうかは不明で、今回出土した礎石建物はこの火災によるものと考えられる。調査区からはS T 1の山際をのぞいて炭化物などが出土していないことから、この火災の火事場掃除のあとの遺構と考えている。

この時期の寺院基壇は亀腹状になる。検出した石積み遺構には漆喰の痕跡がないことから、石積みの上に土を盛って亀腹にしたものと考えられる。山岳寺院の基壇の構造が考古学的に解明された貴重な調査となった。とくに東側法面の石列は高さが揃い、目地が通っていることから階段状に石を積んで亀腹の骨組みにしたものと考えられる。

礎石は直径約90cmの大きさに30～45cm(一尺五寸)の丸柱の建物が想定される。礎石の間隔が統一されておらず、今回の調査区では本堂建物の構造はわからないが、軒と信者が入る外陣、諸仏があり僧侶が仏事をおこなう内陣に分かれ、それぞれの柱間が十尺・九尺・八尺・八尺五寸・七尺五寸などと異なる、五間堂の密教系寺院の構造であった可能性が指摘される。



第24図 弥高寺跡第1次調査出土遺物実測図

また、基壇ぎりぎりに礎石があることから、亀腹まで張り出して高床の縁が回っていたものと考えられる。屋根については、瓦が一点も出土していないことから瓦葺きではなく軒に瓦を使う桧皮葺きでもないようだ。豪雪地であり、桧皮では持たないと思われることから柿葺きか茅葺きだと考えられる。己高山諸寺でも瓦は採集されておらず、北近江の山岳寺院の多くは厳しい環境にあわせた屋根だったと思われる。いずれにしてもかなり立派な密教系寺院本堂が想定される。基壇の前に設定したS T 2では遺構・遺物はほとんど検出されなかったことから広い前庭があったと考えられる。

出土遺物について

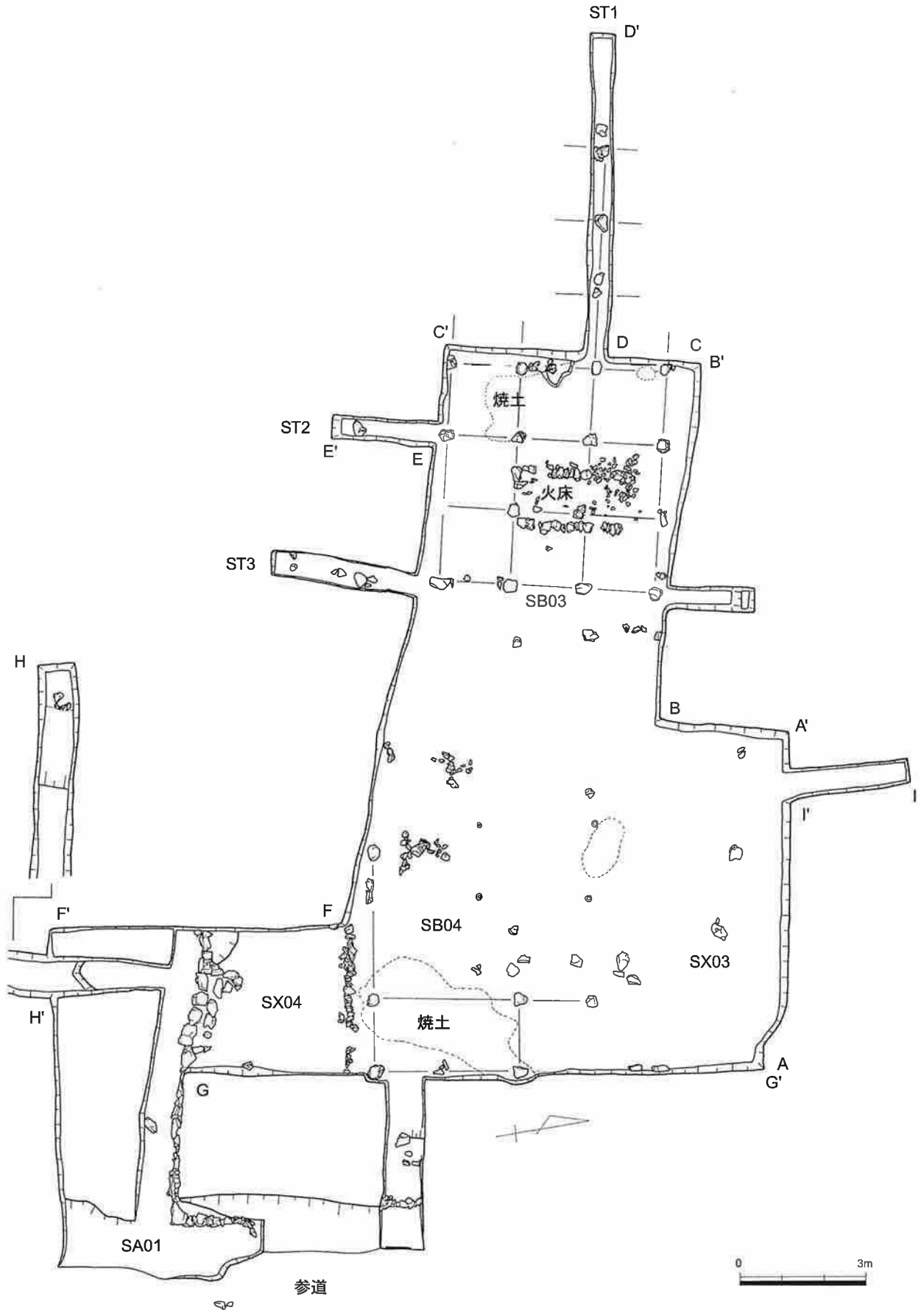
本堂跡からの出土遺物は少なく、これは次節で述べる坊院跡の遺物量と比べるとより顕著で、本堂という生活を伴わない仏事・行の場所としての性格を表している。その時期は12～13世紀のⅠ期と15世紀末のⅡ期の二つに分けられる。Ⅰ期に属する遺物は灰釉の皿や碗、長頸壺や短頸壺、玉縁の白磁、赤色の体部を持つ土師器皿などがある。Ⅱ期の遺物は播鉢や大甕などの陶磁器と大半の土師器皿、古銭などが該当する。Ⅰ期の後半は徳治3年(1308)の「伊福貴山弥高太平両寺衆僧和与状」(『観音寺文書』)にみえる弥高・太平両寺の間に本末寺の相論があった時期にあたり、伊吹山寺の主導権を巡って弥高寺が拡張されたことを示すのではないだろうか。Ⅱ期は京極氏が弥高寺に陣を張るなど城として利用している記録と合うことから、京極氏に利用されはじめた時期にあたり、この時期に何らかの変化があったと考えられる。

しかし最も注目されるのは、8世紀の須恵器が3点出土していることで、弥高寺の本堂跡から出土したことが重要である。山岳寺院では日光男体山や大和の大峰山にならび最古級の事例で、永正10年(1513)の勸進帳に記されている泰澄の再興の時期に重なる。この頃すでに弥高寺本堂跡に何らかの施設があったことが考古学的に明らかとなった。伊吹山の山岳仏教は国内でもかなり早い時期に始り、それは弥高寺跡から他の寺院に展開・発展したと考えられる。

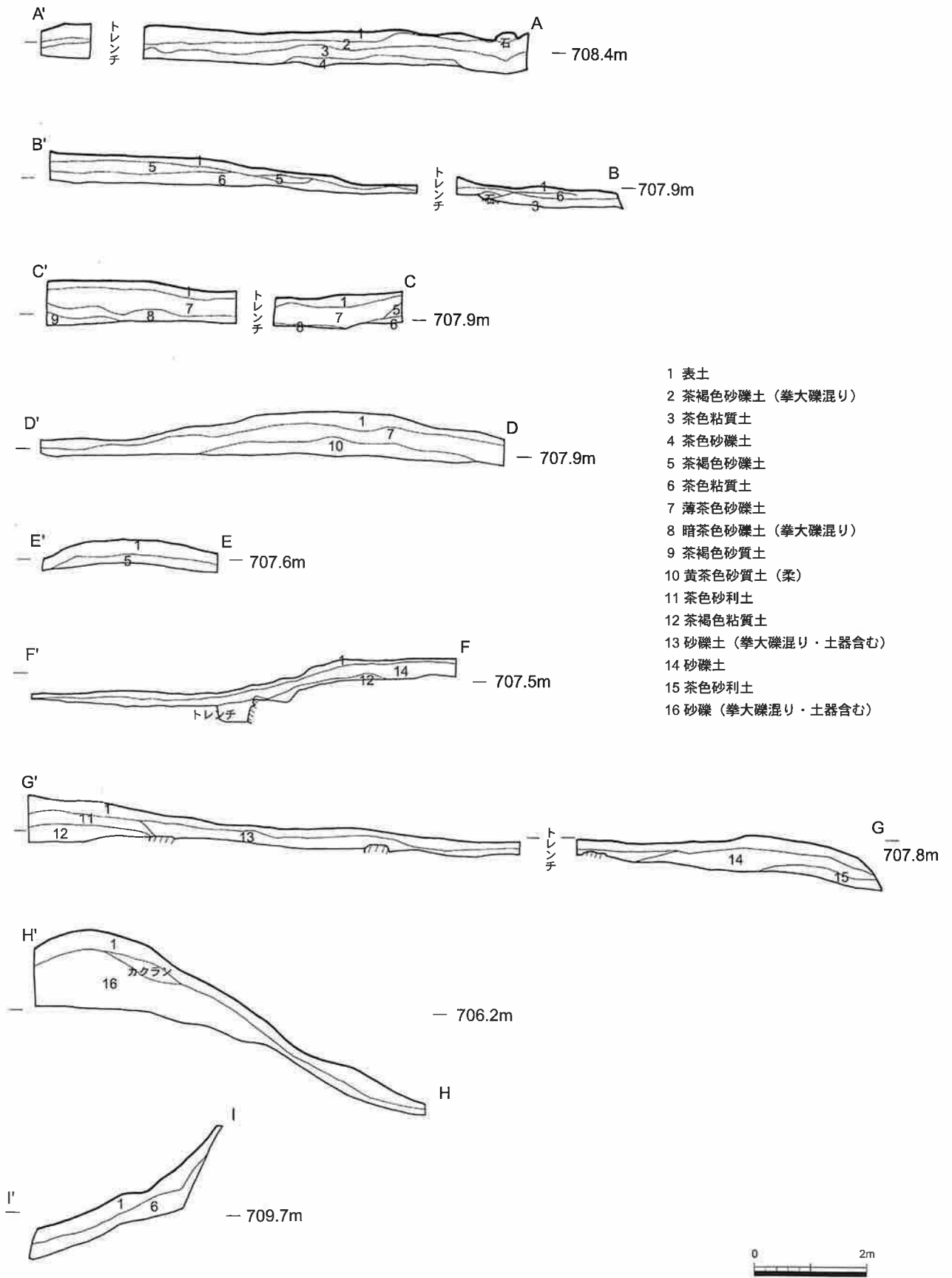
第3節 第2次調査の成果

1. 調査経過

平成19年度の第2次調査は、本堂跡一段下の削平地(坊院跡)において、当時の生活面と建物などを確認することを目的におこなった。調査は約18m×約7mの方形の調査区を基準に、入口部分や法面など適宜必要な部分にサブトレンチを設定した。調査面積は約230㎡である。現地調査は、平成19年6月26日から10月30日までおこない、11月23日の「近江中世城跡琵琶湖一周のろし駅伝」にあわせて現地説明会を開催した(前夜の積雪のため現地で資料による説明のみ実施)。



第25图 第2次調査区平面图



第26図 第2次調査区断面図

2. 検出した遺構

調査区の基本的な層序は表土、拳大の石や遺物を多く含む茶色砂礫土、遺構面となる黄茶色砂利土、調査区の西側では炭混じりの黒色の焼土層が広がっている。また、この坊院跡は東西46m×南北15mの長大な敷地を真ん中付近で土塁によりふたつに区画されている、さらに、南側にも土塁が設けられているが、今回の調査で検出した礎石建物SB03が土塁の下で検出されたことから、もともとこの長大な区画全面を坊院として利用していたと考えられる。

【礎石建物SB03】

礎石建物SB03は南北三間、東西六間の建物となる。一間が六尺五寸の建物である。南側の土塁を断ち割ったサブトレンチST2・ST3でもそれぞれ南北軸を同じにする礎石を1点ずつ検出した。いずれも柱間が若干ずれるので関伽棚などの付属する施設が考えられる。建物の正面は入口がある東側になると考えられるが、こちら側にも礎石があり底が取り付くのかかもしれない。建物の前半分のやや北東寄りに南北1.7m×東西3.3mの石で囲った火床の基礎を検出した。火床の検出は山岳寺院では初めての事例であろう。遺構面には焼土が広がっていて礎石はこの上に乗っていることから2時期の遺構ととらえることができる。また礎石や出土遺物も火に焼けている。

【礎石建物SB04】

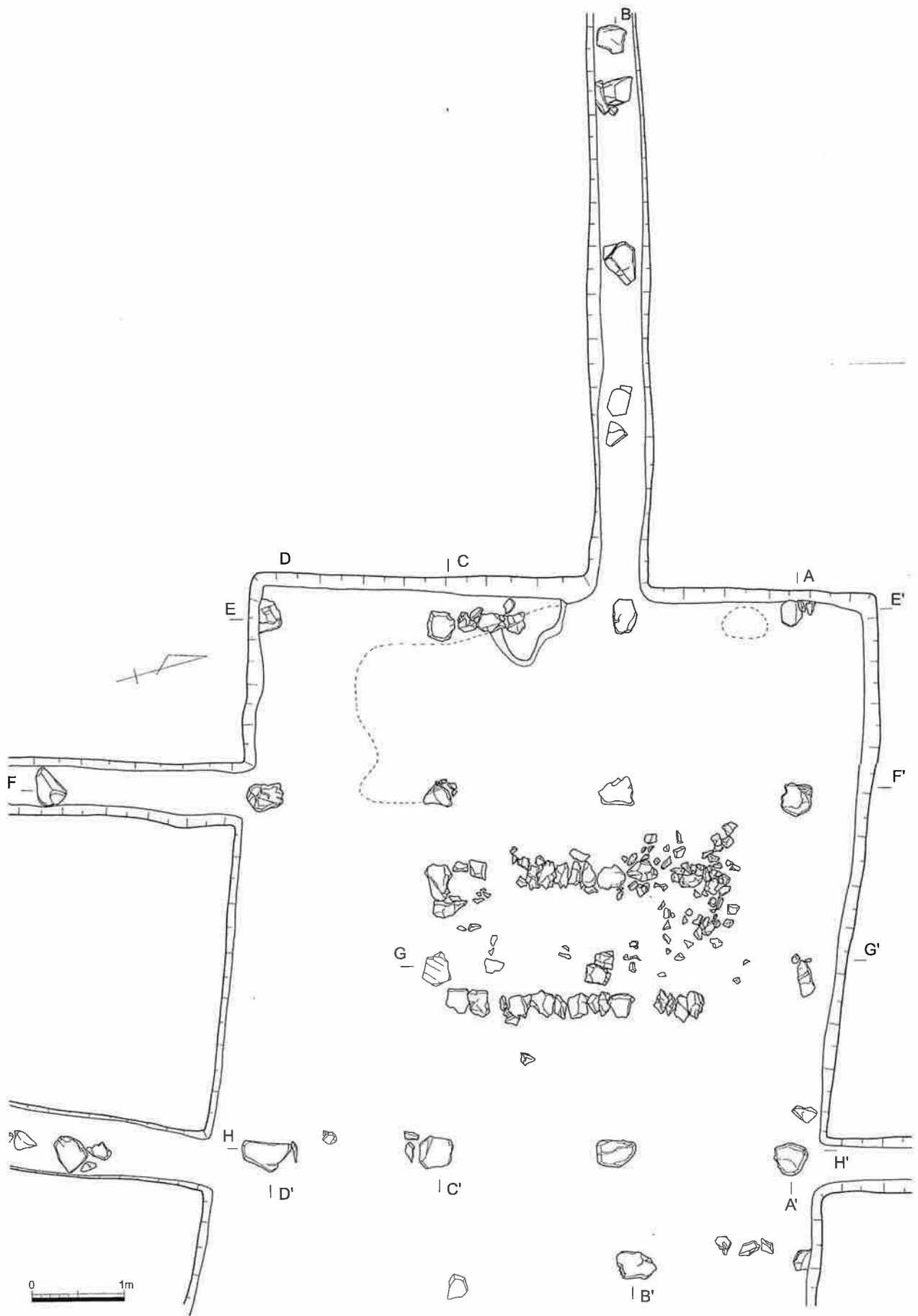
礎石建物SB04は南北四間以上、東西三間以上の建物になると考えられるが、礎石の残り具合が悪く全体構造はわからない。建物は断ち割りで確認した土塁から約1m離れて建てられている。また、SB04の南側には建物から約半間離れた位置に拳大から人頭大の石が東西に並んでおり雨落ちや建物の区画と考えられる。SB03とSB04の間は広場になっているが、この中央付近に直径10～15cmのピットが南北約3m×東西約2mの長方形の四隅に並んでいるがその性格については不明である。

【地鎮遺構SX03】

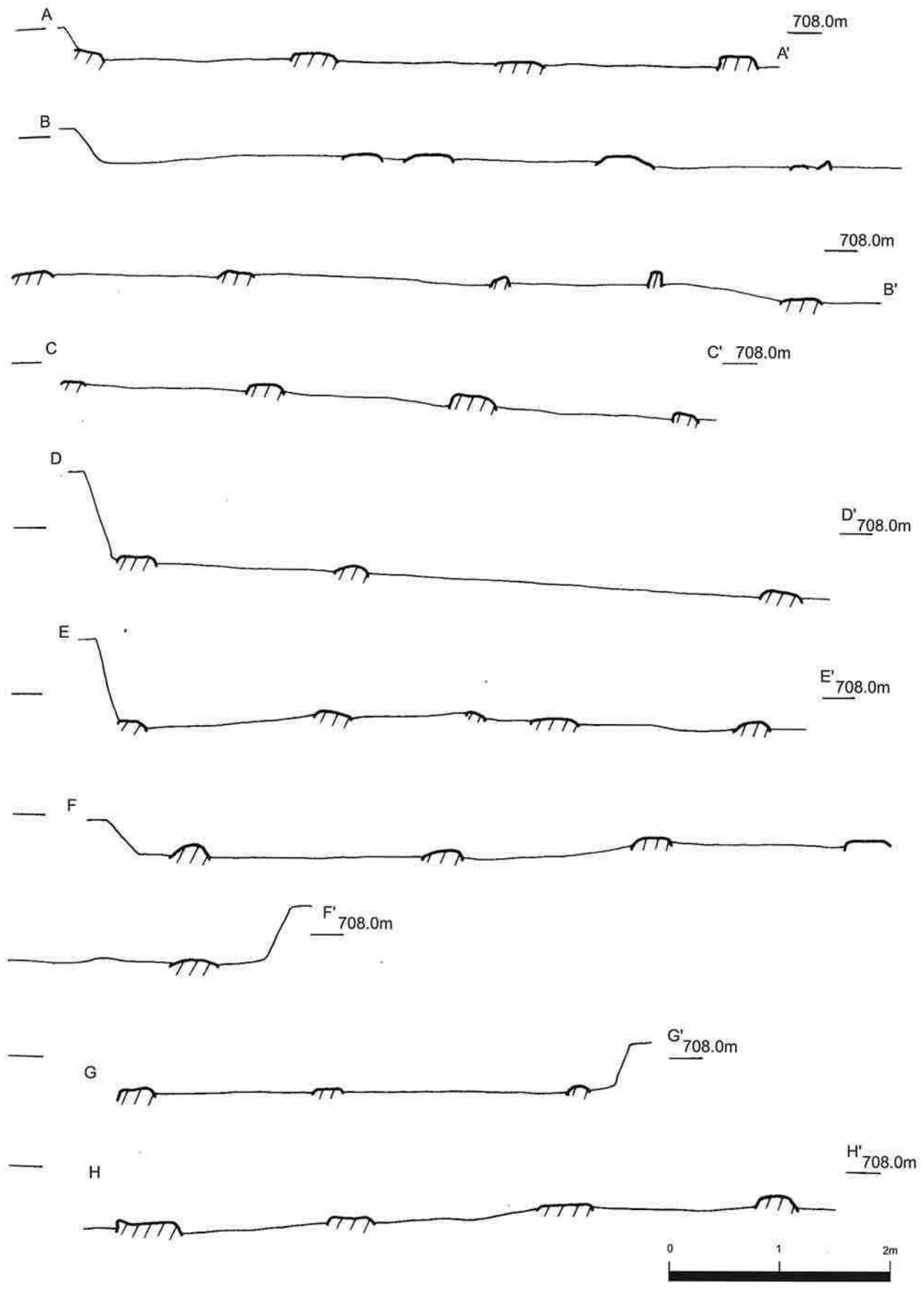
調査区の北東で地鎮のためと考えられる遺構を確認した。長辺46cm×短辺36cmの石が据えられた深さ約11cmの土坑の底に銭貨を埋納したものである。銭貨の種類としては「乾元重寶」(唐銭、初鑄年759年)、「開元通寶」(唐か、845年)、「熙寧元寶」(北宋銭、1068年)、「洪武通寶」(明銭、1368年)、「朝鮮通寶」(朝鮮、1423年)が読み取れる。このことから、SX03は「朝鮮通寶」の初鑄年代より新しい遺構に伴うものとなる。5組に溶着しており、総点数は22枚である。坊院跡の鬼門にあたることから、石の下に銭貨を埋納した地鎮の遺構と考えられる。

【石段SX04】

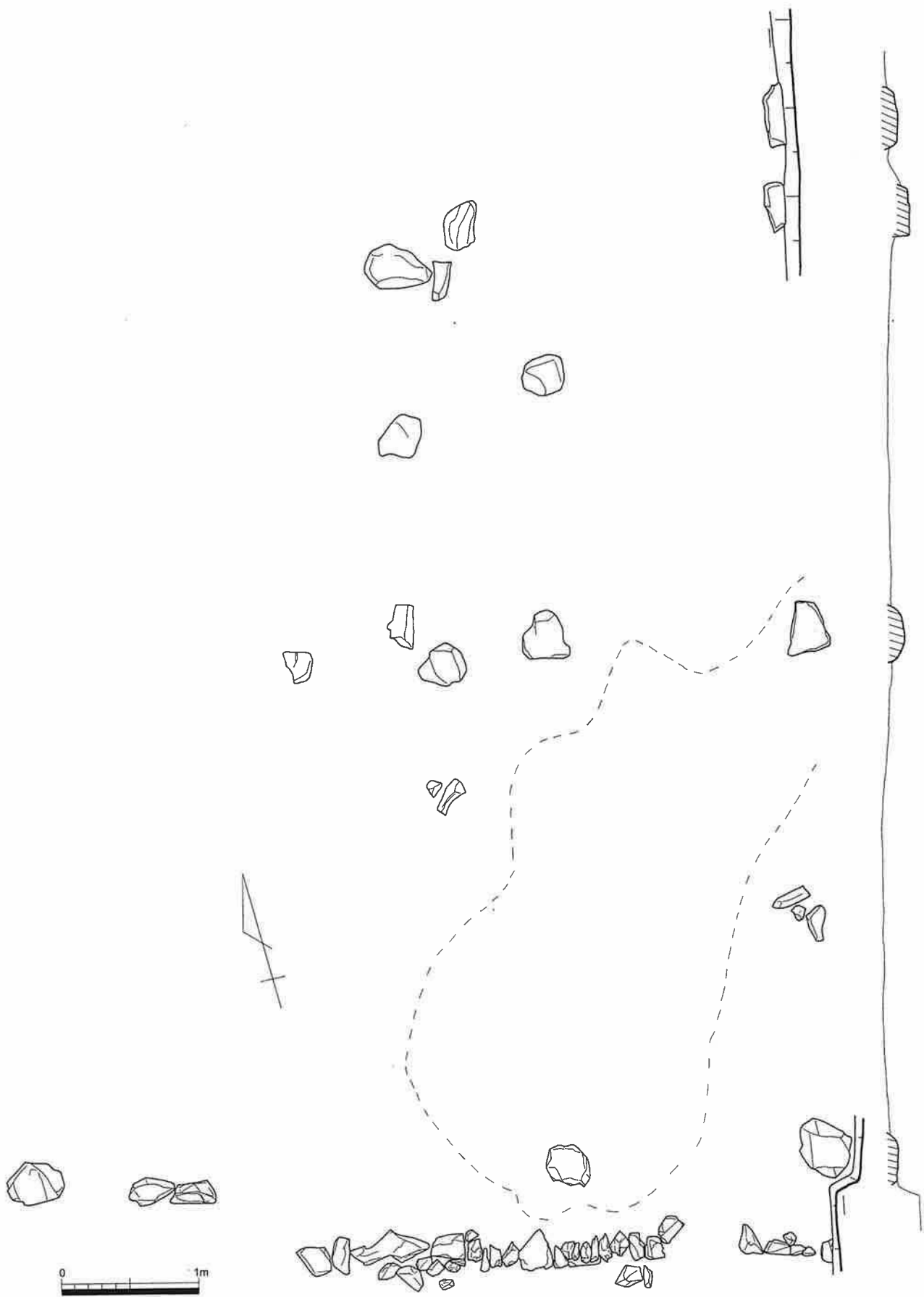
土塁によって柵形を構成する坊院への入口の屈曲部で幅約2.2m～3.5mの2段の石段を検出した。石段は坊院側に続かずにスロープ状になっている。また、入口側にも続かない。さらに、石垣SA01と重複しており時期差がある。



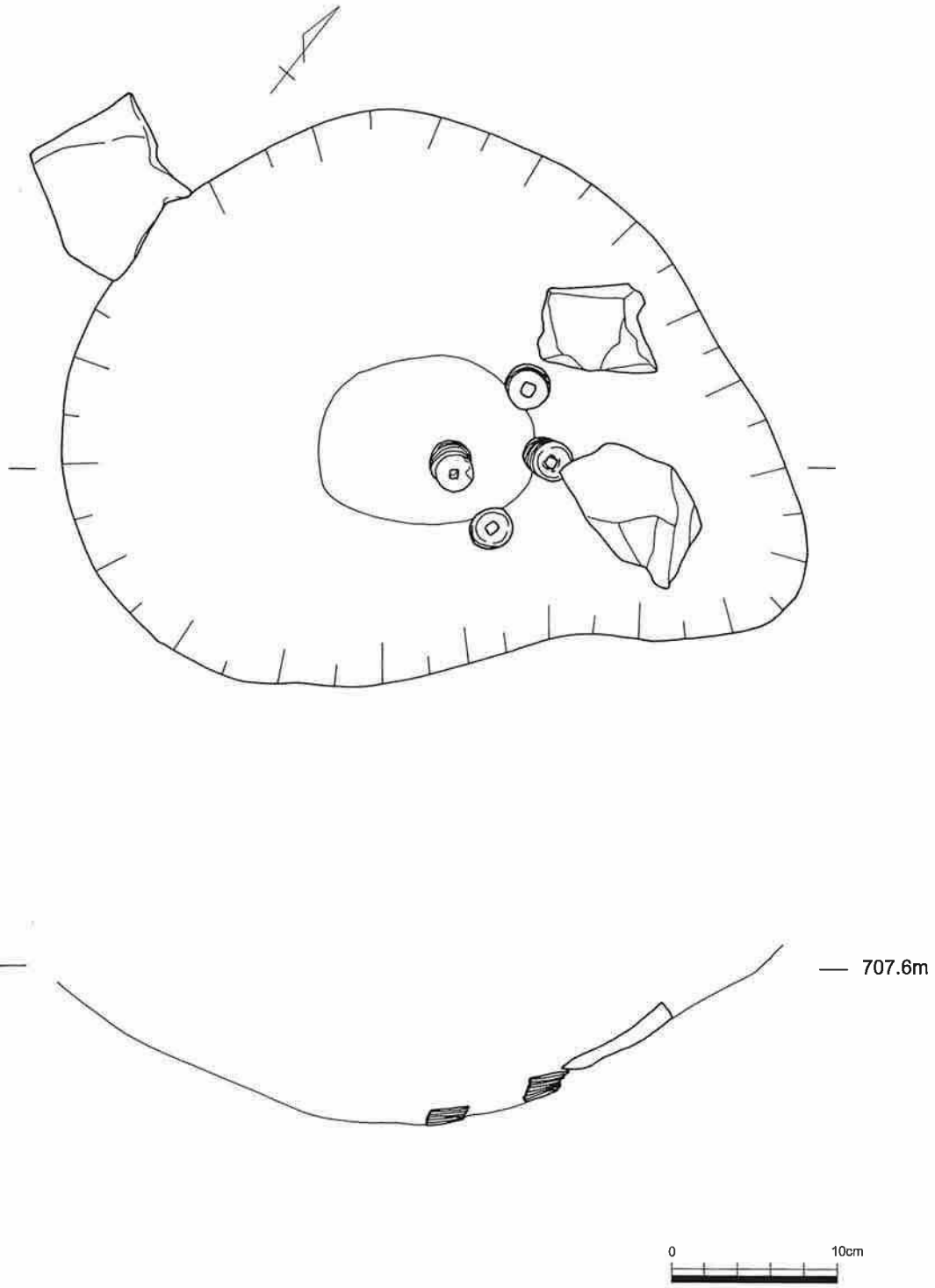
第27图 礎石建物SBO3平面图



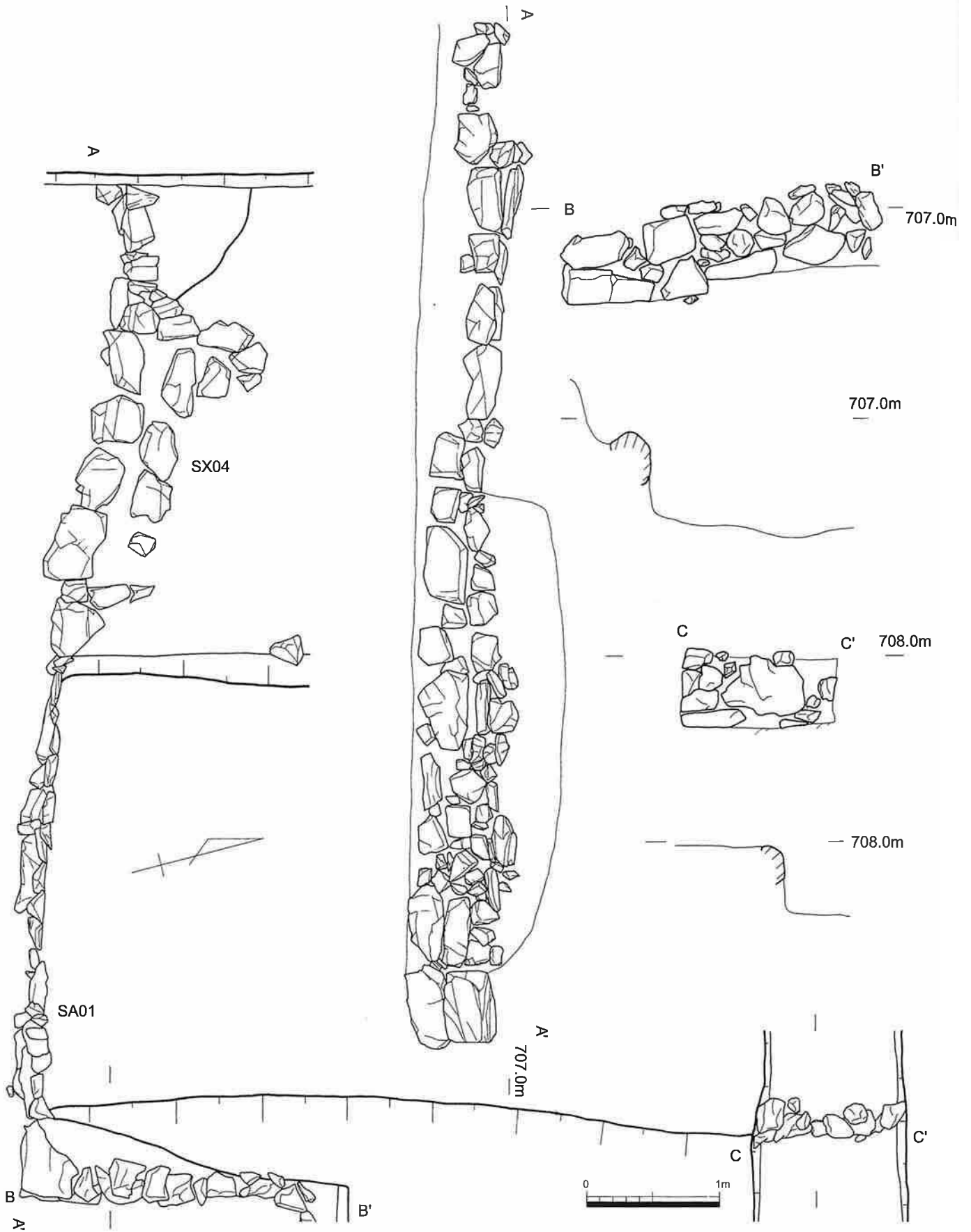
第28圖 礎石建物SB03断面圖



第29図 礎石建物SB04平面図・断面図



第30図 地鎮遺構SX04平面図・断面図



第31图 石段SX04、石垣SA01平面图·断面图

【石垣SA01】

本堂への参道に沿う土塁の下部で検出した石垣で、坊院への入口に沿って直角に曲がっている。高さ約50～70cmで石垣の上部は土塁になっている。石垣は10cm～50cm大の自然石もしくは粗割りしたものを2～4段乱雑に積み上げている。石材は弥高山でとれる硬砂岩が用いられている。約5.5m北で土塁を断ち割って確認したところ、参道側はやはり下部が石垣になっており、現状でも、約120m下った大門跡からここまでの参道両脇に同じような石が露頭していることから、大門および参道の両脇はこのような石垣で築かれているものと考えられる。なお断ち割り部の坊院側内部では石垣が検出されなかった。

3. 出土遺物

今回の調査では、非常に多くの遺物が出土したが、京極氏館跡の調査のように土師器皿が8割を超えるような印象はなく日常雑器の出土量もかなり多い。出土した土器類の種類や器形も複雑で、弥高寺の僧侶が仏事とともに日常生活をおこなっていた空間であることが遺物からもうかがえる。出土土器類には以下のようなものがある。土師器(皿・盤)、須恵器(壺)、国産陶器は碗(瀬戸美濃天目・瀬戸美濃灰釉・山茶碗)、皿(瀬戸美濃・おろし皿・その他)、鉢、盤、花瓶、香炉、茶入、壺、挿鉢(瀬戸美濃・越前)、大甕(常滑・越前)、瓦質火鉢、焙烙鍋。貿易陶磁には青磁碗、青磁盤、白磁碗、天目茶碗がある。

【土師器】

1～155は土師器皿である。土師器皿の時期は15世紀末～16世紀前半が中心である。109は本堂跡で確認した赤く厚い器壁をもつものに似るが、本堂のものと比較すると平安時代末(12世紀)頃まではさかのぼらないであろう。129も底から真っ直ぐ開いて立ちあがる口縁部をもつもので、他の土師器皿とは様相が異なることから若干古く15世紀の遺物であろう。口縁部に煤痕が付着していることから灯明皿として利用されたことがわかる。灯明皿として利用されたことがわかる煤痕が付着したものは22点である。

【須恵器】

156は須恵器の壺で9～10世紀の猿投産の製品であろう。この時期にも何らかの施設があったことをうかがわせる遺物である。157は本堂跡で検出したものと同様の須恵器で、小破片であるが外面には叩き痕が、内面には宛て具の痕跡が明瞭に残っている。奈良時代の8世紀の遺物である。

【国産陶器】

158～166は瀬戸美濃産の天目茶碗で161は火を受けて表面が泡立っている。167・168、170～172、174～177は瀬戸美濃産の灰釉碗で、175は火を受けている。169・173・178～181も碗で、169は瀬戸美濃の碗である。173は白色系の釉薬がかかる。183・186・187は瀬戸美濃産の灰釉皿である。184・185・188・189も皿で、184は鉄釉の皿である。185は白色の釉薬がかかる瀬戸美濃産の皿である。188の底部には回転糸切り痕が残る。193は瀬戸美濃産の卸し皿で、口縁部に薄緑色の釉薬がかかり内面底部に4条の播り目がある。189も播り目はみられない

がおろし皿の可能性が高い。196は灰釉で盤のようなものと考えられる。195・197・198も盤状の灰釉陶器で口縁内部に返しが付くことから蓋を伴うものであろう。190・194・199は鉢である。190は灰釉に鉄釉が混じる。口縁内部に返しがあり蓋を伴うものかもしれない。201～205は花瓶で201・202は鉄釉の花瓶である。205は尊式花瓶で薄緑色の釉薬がかかる。206～208は香炉で、207は口縁部で火を受けている。208は瀬戸美濃産の灰釉香炉で体部を90°屈曲させている。

209は瀬戸美濃産の茄子型の茶入れで鉄釉がかかる。

210～218は壺で、天目茶碗や茶入れなどが出土していることから茶壺として利用されていたものと考えられる。210は鉄釉の壺で火を受けている。212は口縁部で薄緑色の釉薬がかかる。213も薄緑色の釉薬がかかった胴部で肩のところに一条の沈線が巡る。

219～230は播鉢で、219～222・226・227・230は瀬戸美濃産播鉢で、窖窯後IV期の製品で15世紀末からはじまる大窯期の製品はみられない。222の播り目原体は9条、230は10条である。223・228・229は越前の播鉢で、223は片口が明瞭に残る。225は茶褐色を呈する播鉢で9条の播り目原体がある。229は焼があまりかなり使いこまれているようで播り目が消えている。

231～262・479は大甕で、231～251は常滑産で、249はN字状の小ぶりの口縁をもつ。250は調査区の東端、礎石建物S B 0 4の上層で拳大の礫に混じってまとまって出土したものである。252・253は越前の口縁部である。255～262は大甕体部に施された押印や刻文で常滑産または越前産などの製品である。256は1cm×0.3cm長方形が連続する窯印が体部に押されている。257は1.8cm×0.2cmの3条の線の窯印。255・260は格子目状の窯印。262は約3cm×0.5cmの7条一組の窯印が約4.5cm離れて押印されている。259は菊花文に似る窯印。261はヘラで丸く窯印が刻まれている。254は越前産の製品と考えられ、口縁部がわずかに開いて真っ直ぐ立ちあがる器形をもち建水と考えられる。

263～267・269～274は火鉢で、263は菱形の菊花文が押印されている。265は明白褐色の火鉢の口縁部で唐草文のような文様が押されている。264も瓦質の火鉢で同様の文様をもち黒灰色を呈する。267は口縁部の飾りである。274は瓦質火鉢の肩部で直径約2.5cmの連続するふたつの透かし孔がある。口縁部が欠けているが263や264のような口縁が付くと思われる。269・271・273は瓦質火鉢の底部で1条の隆帯が巡る。奈良火鉢と考えられる。266は瓦質火鉢の獣脚部で透かし文のついた飾りが付く。268は焙烙鍋の口縁部である。

【貿易陶磁】

275～286・288～292・294・295は青磁の碗で、275・278・281・283は火を受けて器壁表面がザラついている。277・281は線描による蓮弁文を描く。292は14世紀の製品であろう。295は口縁部に雷文帯を有し、胴部は片ヘラ彫りの文様を有する。288～290は内面見込みに菊花のような印花文が押印されている。

287・296～300は青磁の盤である。296・297・300は口縁部で直立したあと端部を90°曲げている。297には内面に8条の縞状の模様がある。298・299は底部で269・267・300と同一個体になるとと思われる。見込みに沈線が巡っており、中央に印花文をもつものである。287は

花の文様をもつ。298は火を受けている。293は青白磁の大皿と考えられる。

301・302は白磁の碗である。303は中国産の天目茶碗である。

【金属製品】

321の7点は同一個体で仏像の青銅製の宝冠である。入口付近の遺物が投棄されたなかで見つかっており、荒廃等により整理されたものと考えられる。宝冠には下部に蓮弁が、その上に龍と思われる文様が線彫されている。

322～466は鉄釘である。坊院跡の調査では鉄釘の出土数も多い。長さで分類すると、わずかに折れているものもあるが、①長さが3～4cmの短いもので数が最も多い。完存するものは少なくサビの付着も多いが、327～389がこのタイプで、330・355・363・366・386・387・388が完存品である。②は6～8cmのもので正方形の断面をもつ。432～462がこのタイプで、432・440・444・447・448・454・456・461が完存品である。③は10～14cmの長いもので、463～466がこのタイプで、466は最も長く約14センチを測る。464は断面の一辺が約1.2cm以上と太いタイプのものである。

468～471は楔型をした鉄製品である。467・472とともに用途はわからない。473は錫杖か槍の石突と考えられる。長さ約8.5cm、直径約3cmを測る。474は厚さ1mm程度の薄い鉄製品で、残存長約8cm、幅約6cmを測る。やや内弯しており先端を丸く納める。円柱状の柱の飾り金具と考えられる。

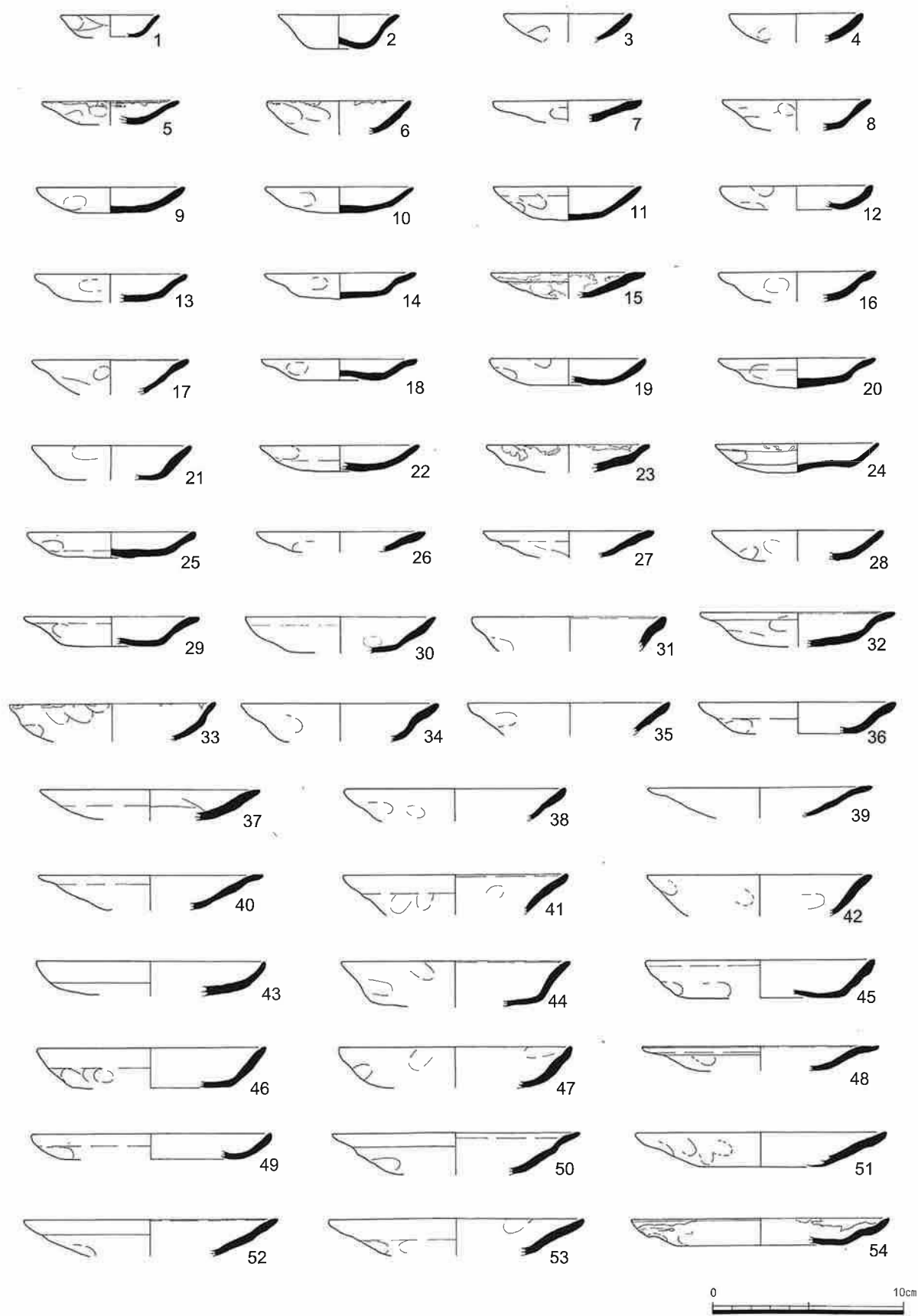
【銭貨】

305～312は、地鎮遺構S X 0 3からの出土で、306は「熙寧元寶」(北宋銭)、307は「軋元重寶」(唐銭)、309は「洪武通寶」(明銭)、311は「開元通寶」(唐銭か)、312は「朝鮮通寶」(朝鮮銭)である。5組に溶着しており、総点数は22枚であるが、305・308・310は判読できない。313～320・475～478は単独で出土した銭貨で、313は「祥符通寶」、314・477は「皇宋通寶」、315・476は「聖宋元寶」、316は「政和通寶」、317は「景德元寶」、318は「元豊通寶」、319は「洪武通寶」、320は「永楽通寶」、475は「天聖元寶」である。319・320が明銭である以外は北宋銭である。

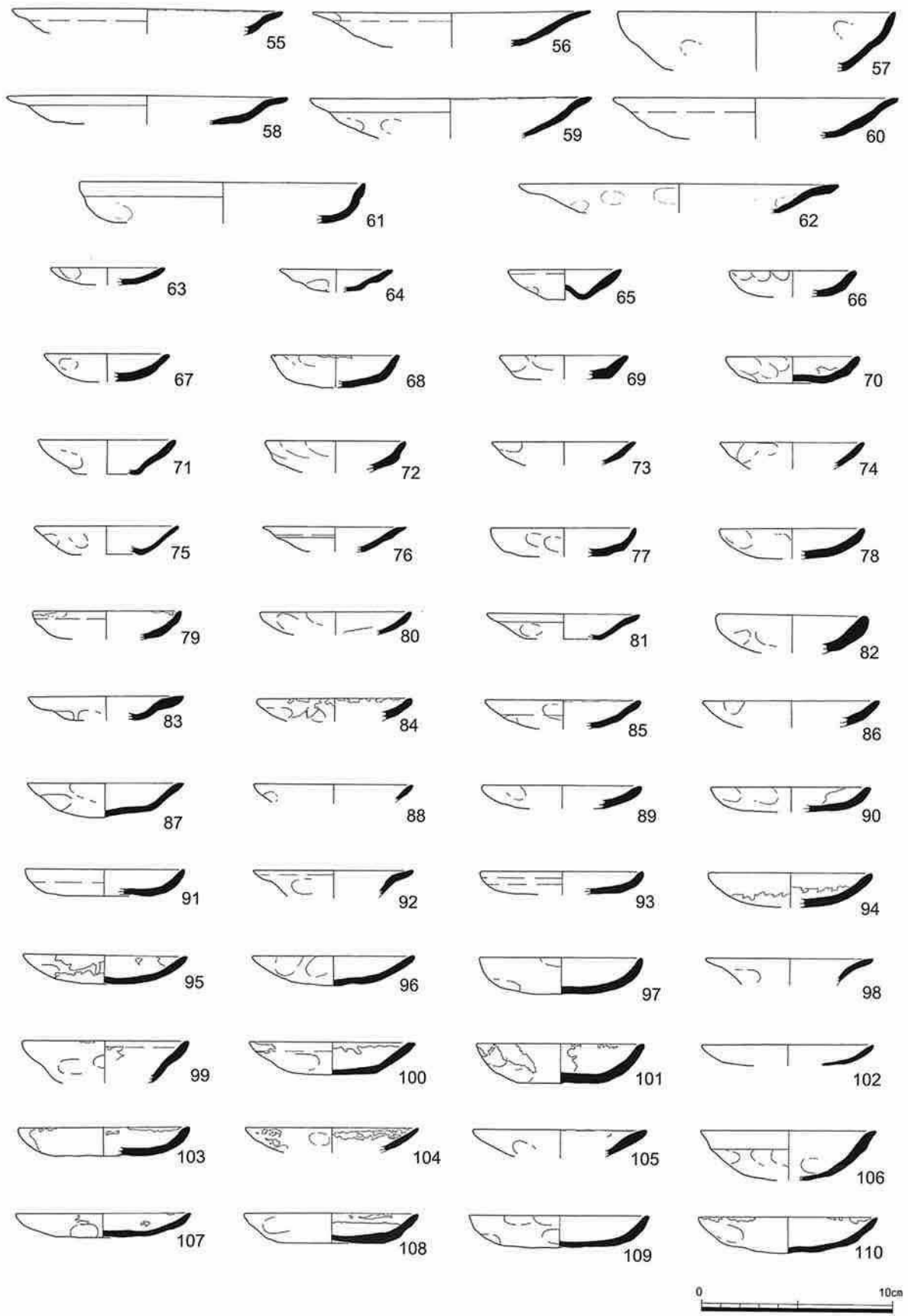
【石製品】

304は基石である。硬砂岩製で楕円形をしており長径約1.9cm、短径約1.4cm、厚さ約0.6cmを測る。これをみても京極氏館跡で多数出土している小円礫が基石でないことがわかる。

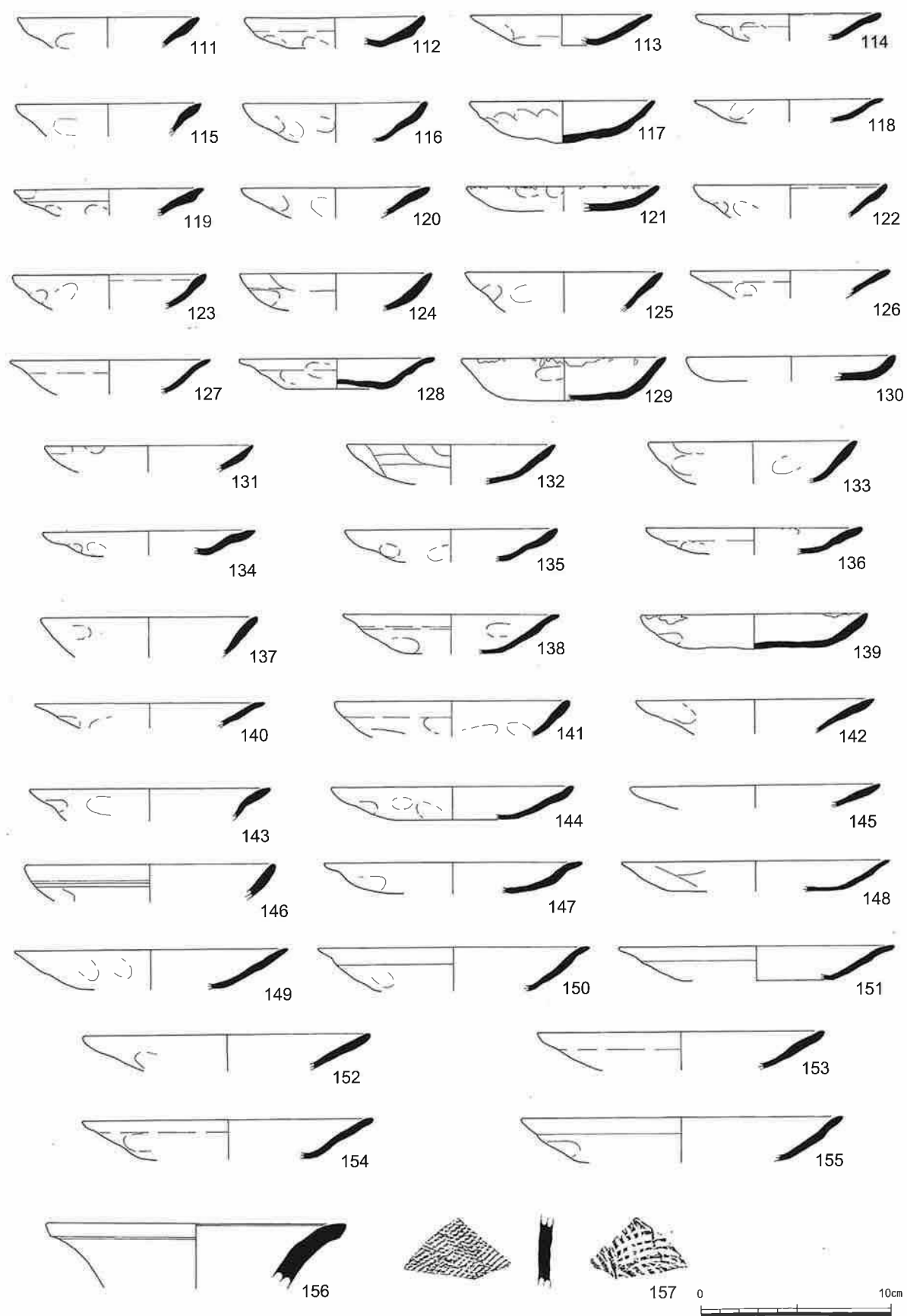
480は一石五輪塔である。残存高は約23cmで地輪の幅は約11.5cmを測る。凝灰岩製と思われる空輪が欠けている。東南端の埋土から出土しており混入品であろう。481は復元すると平面が正方形となると思われる石製品で半分に割れている。高さ約19.5cmで断面は台形状となり、長辺が約26cm、短辺約17cmである。加工が施されているが短辺の面以外は表面の調整が粗く未製品もしくは何らかの台座かもしれない。



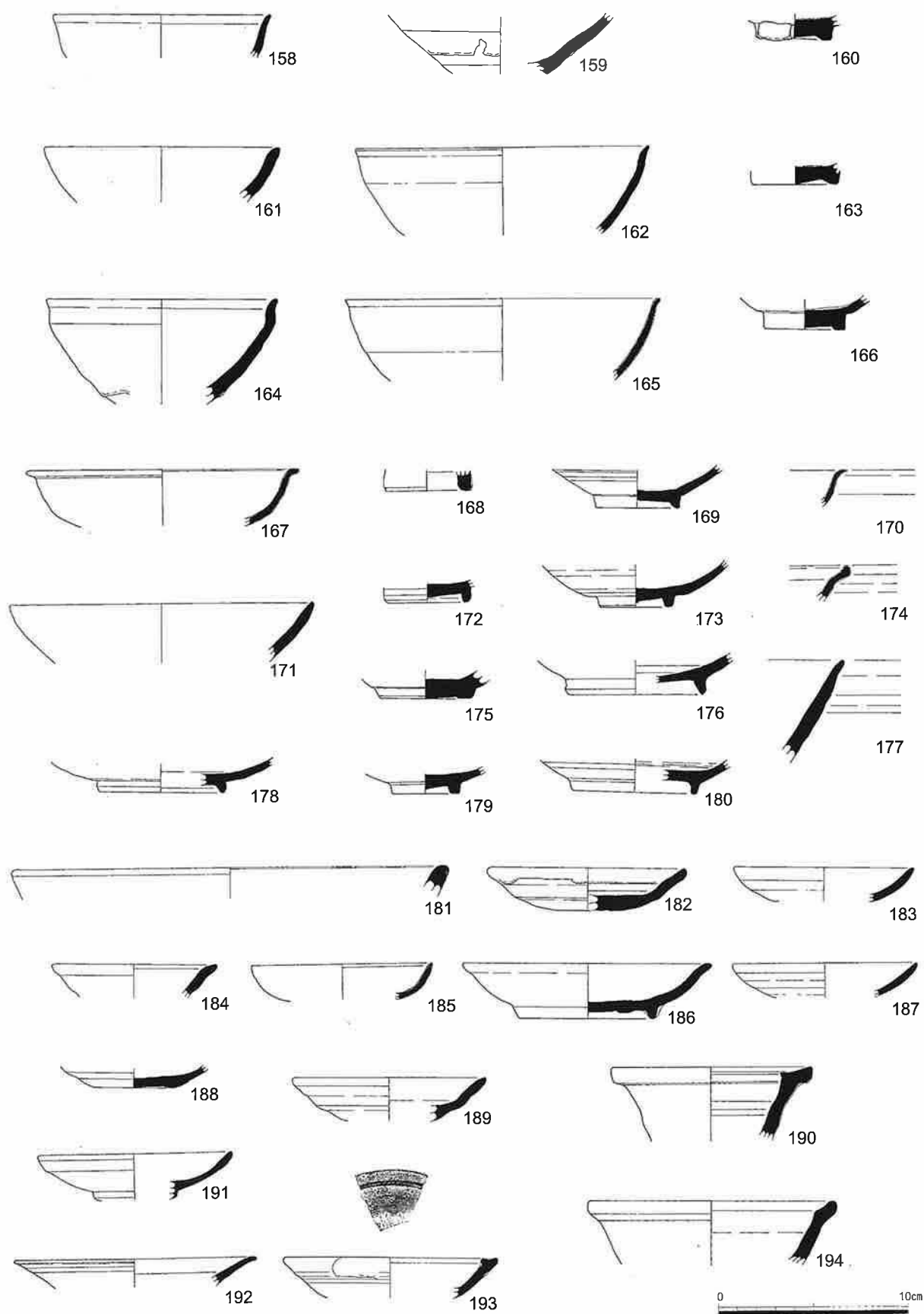
第32図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(1)



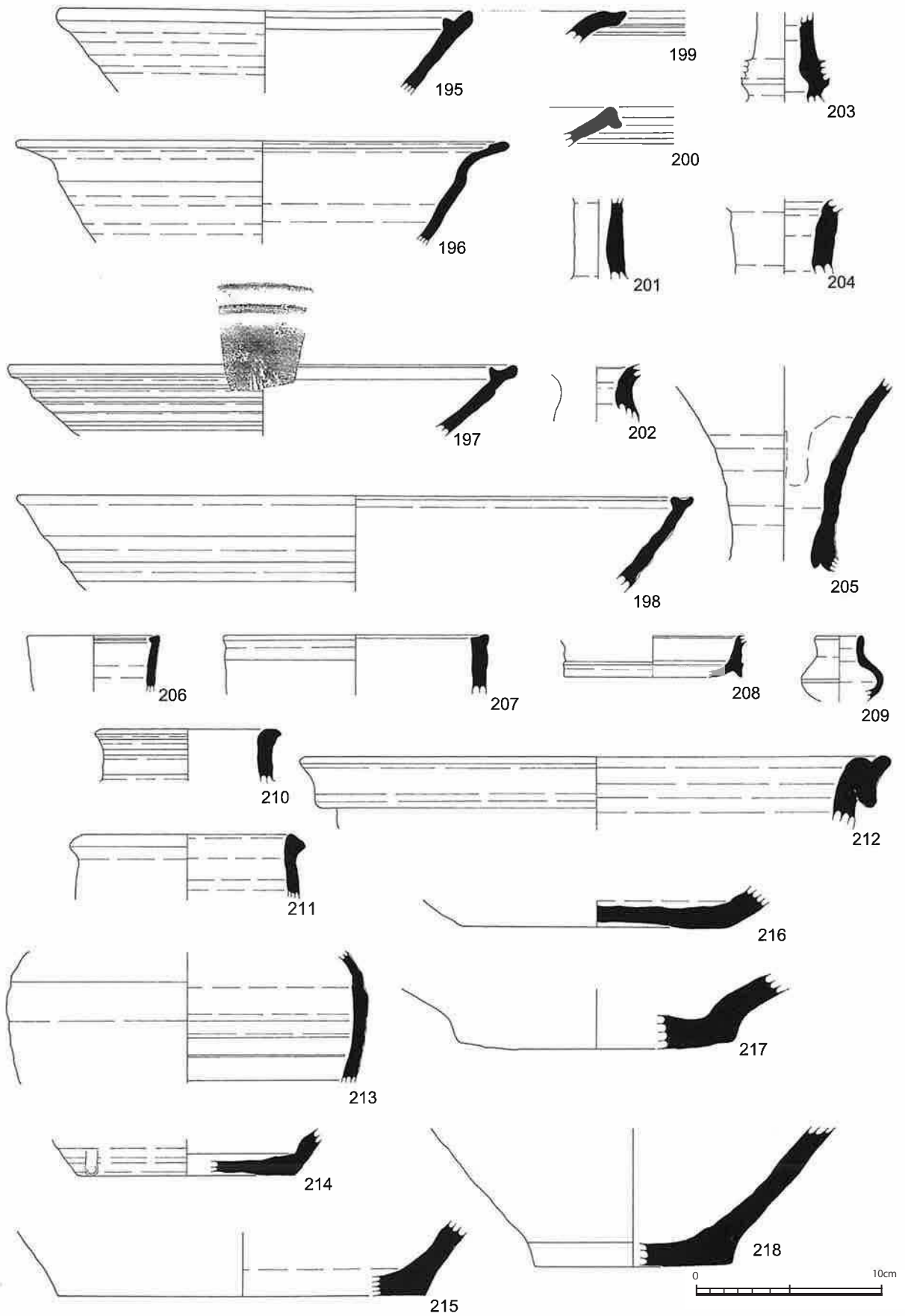
第33図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(2)



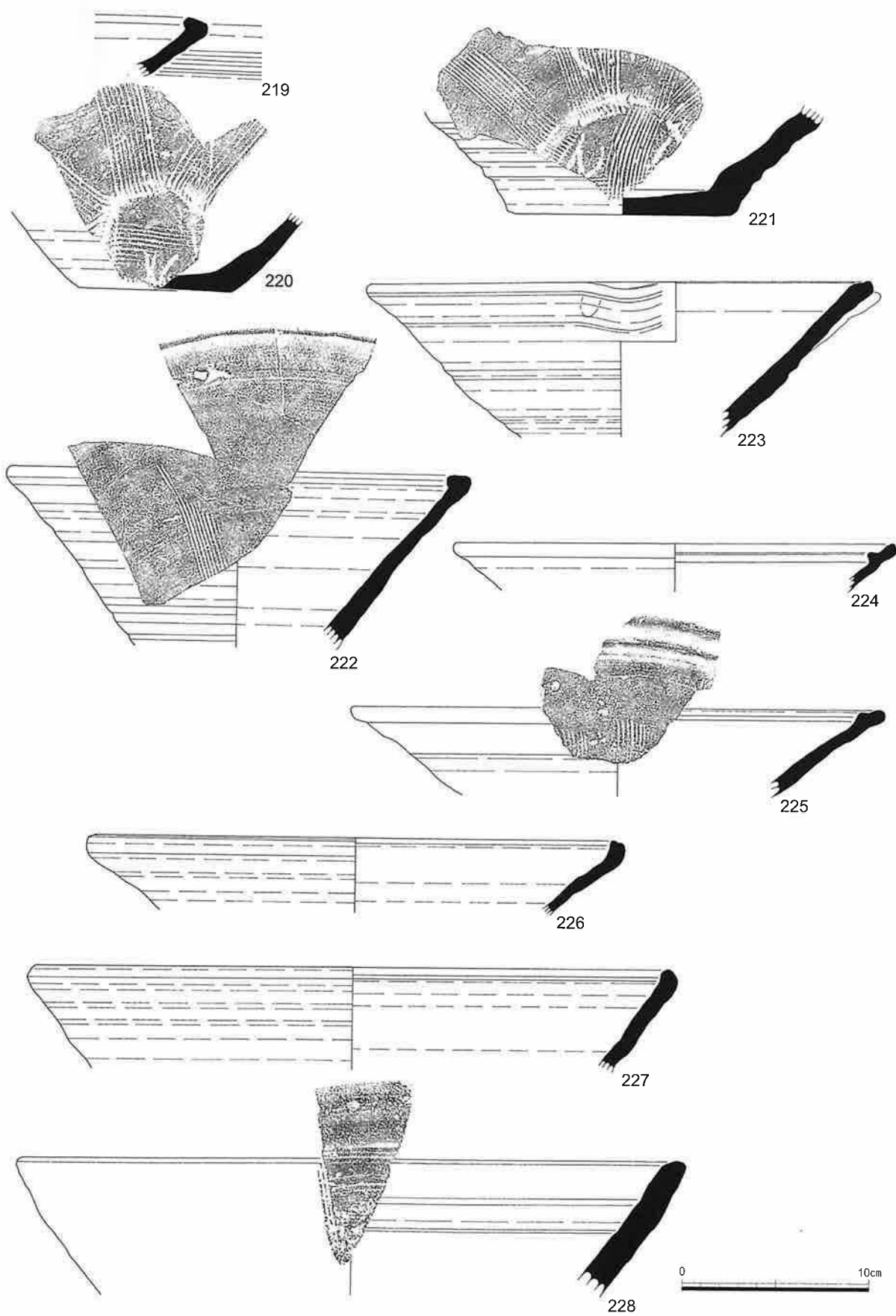
第34図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(3)



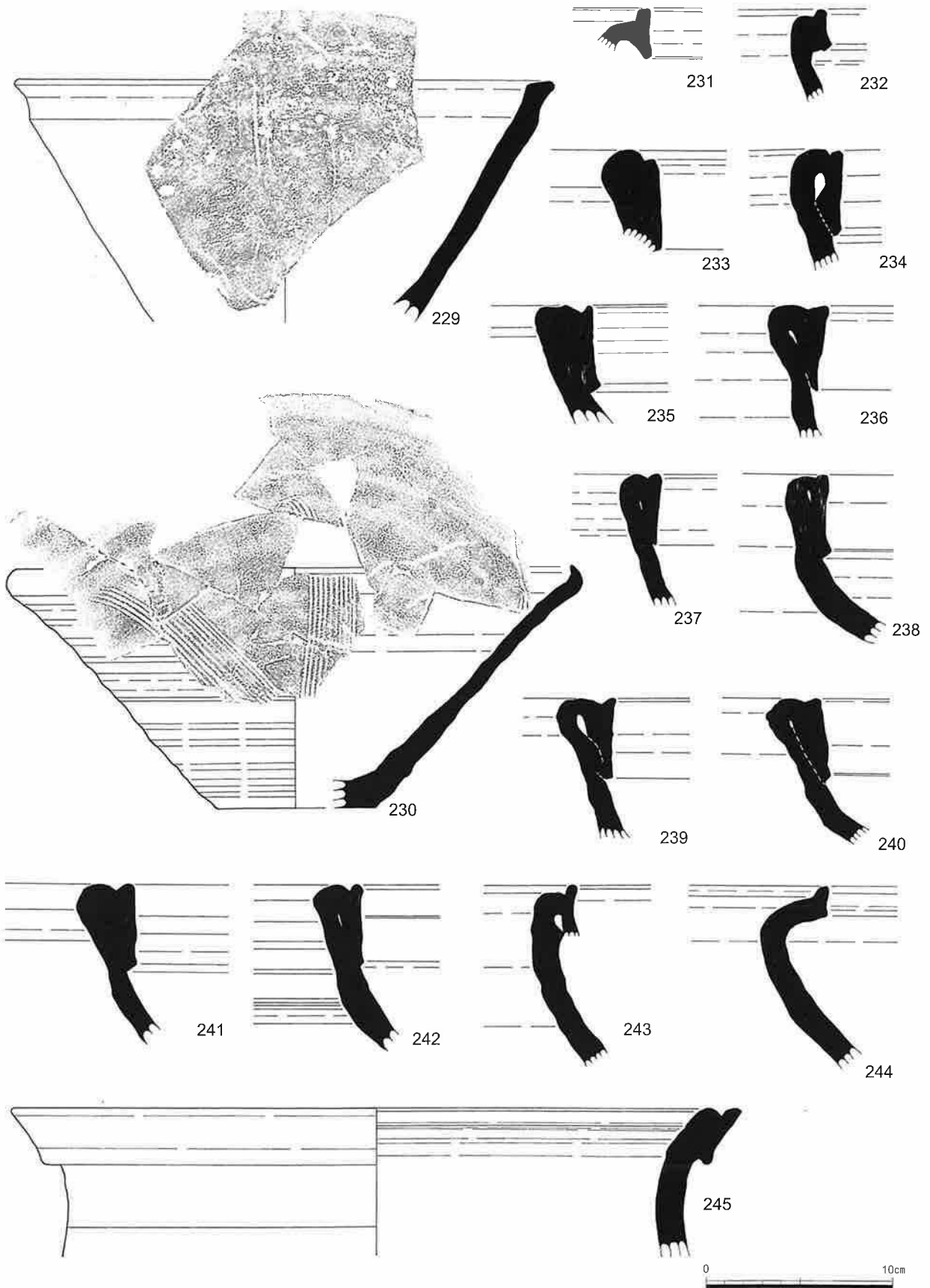
第35図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(4)



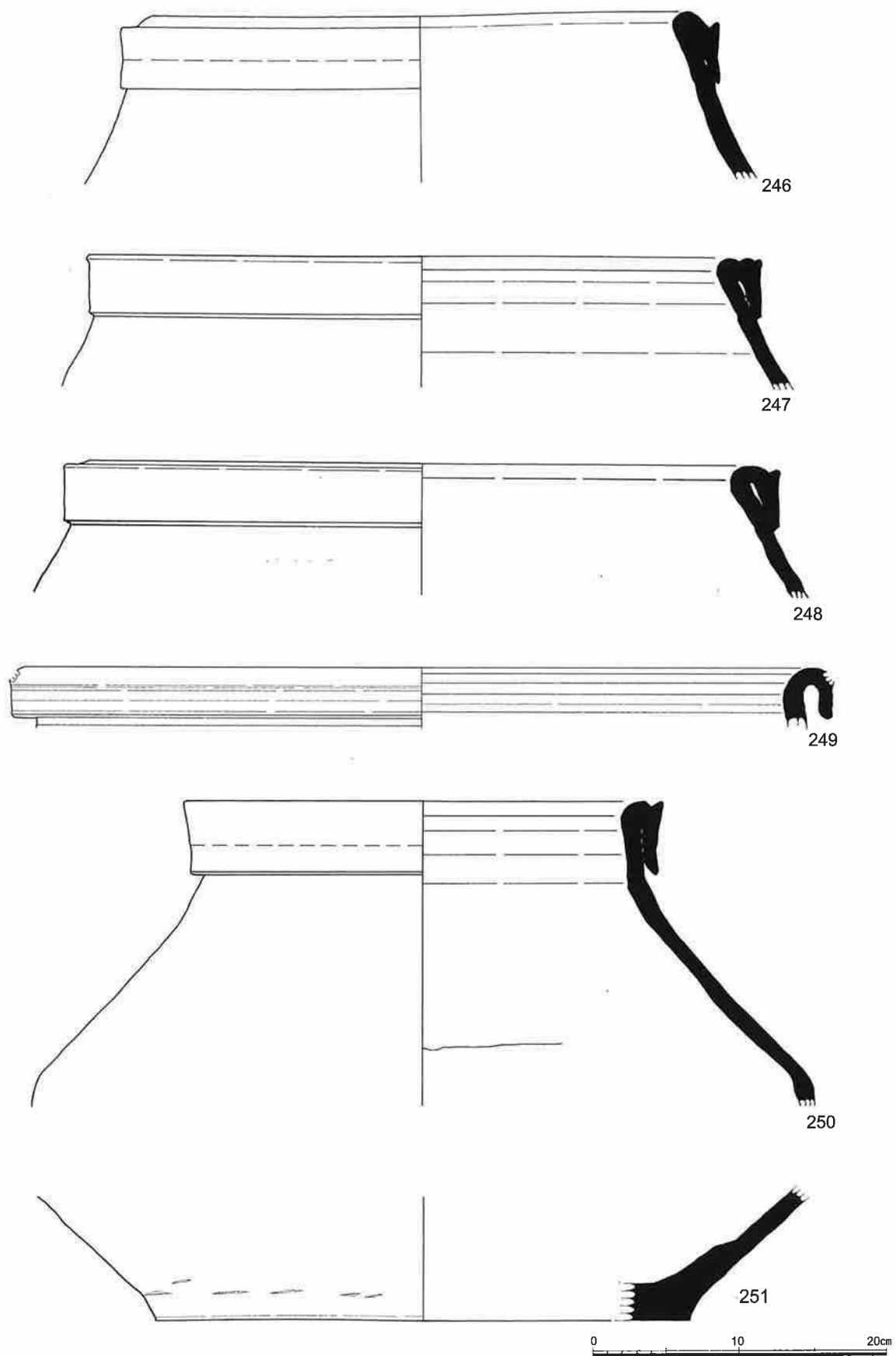
第36図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(5)



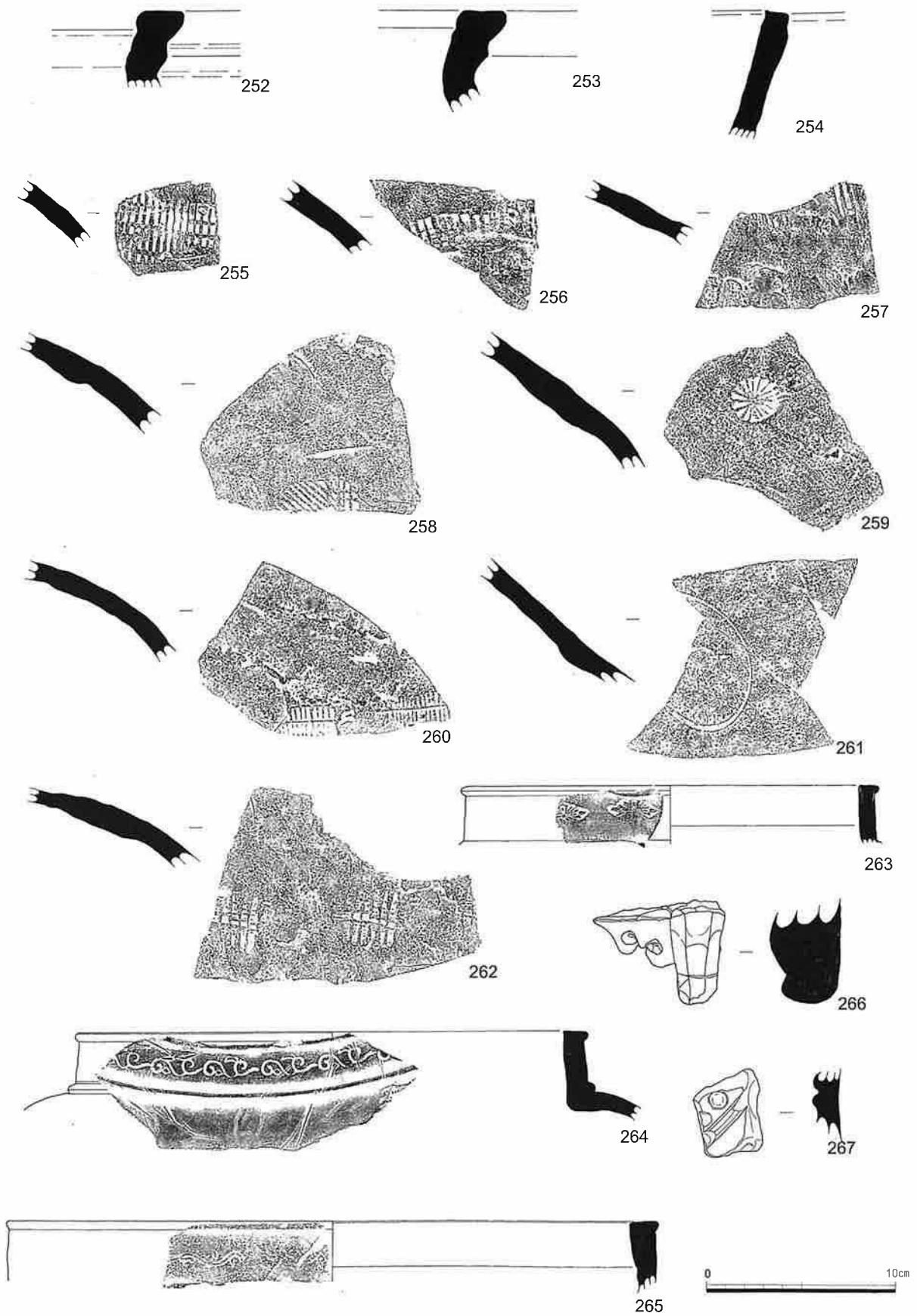
第37図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(6)



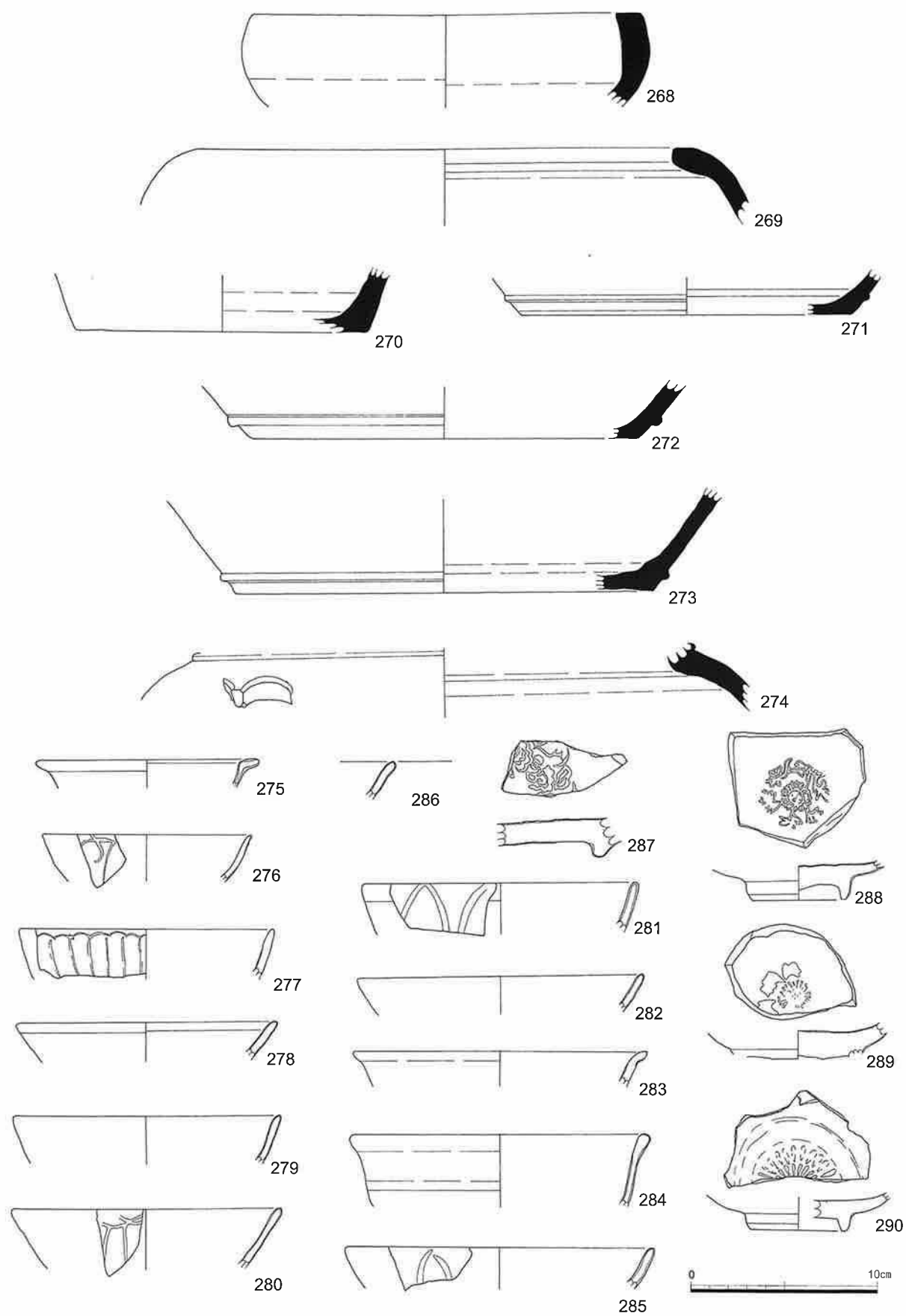
第38図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(7)



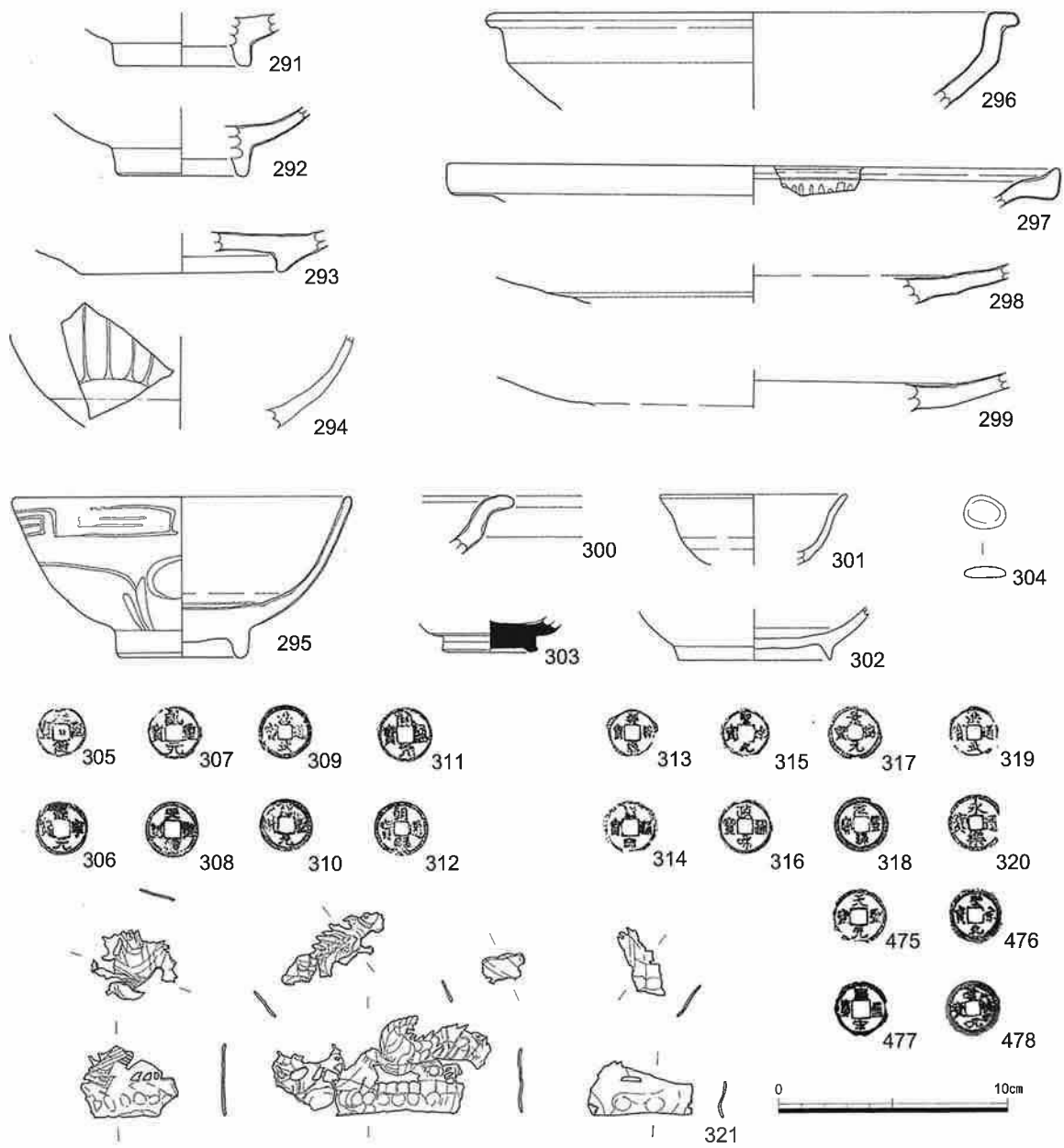
第39図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(8)



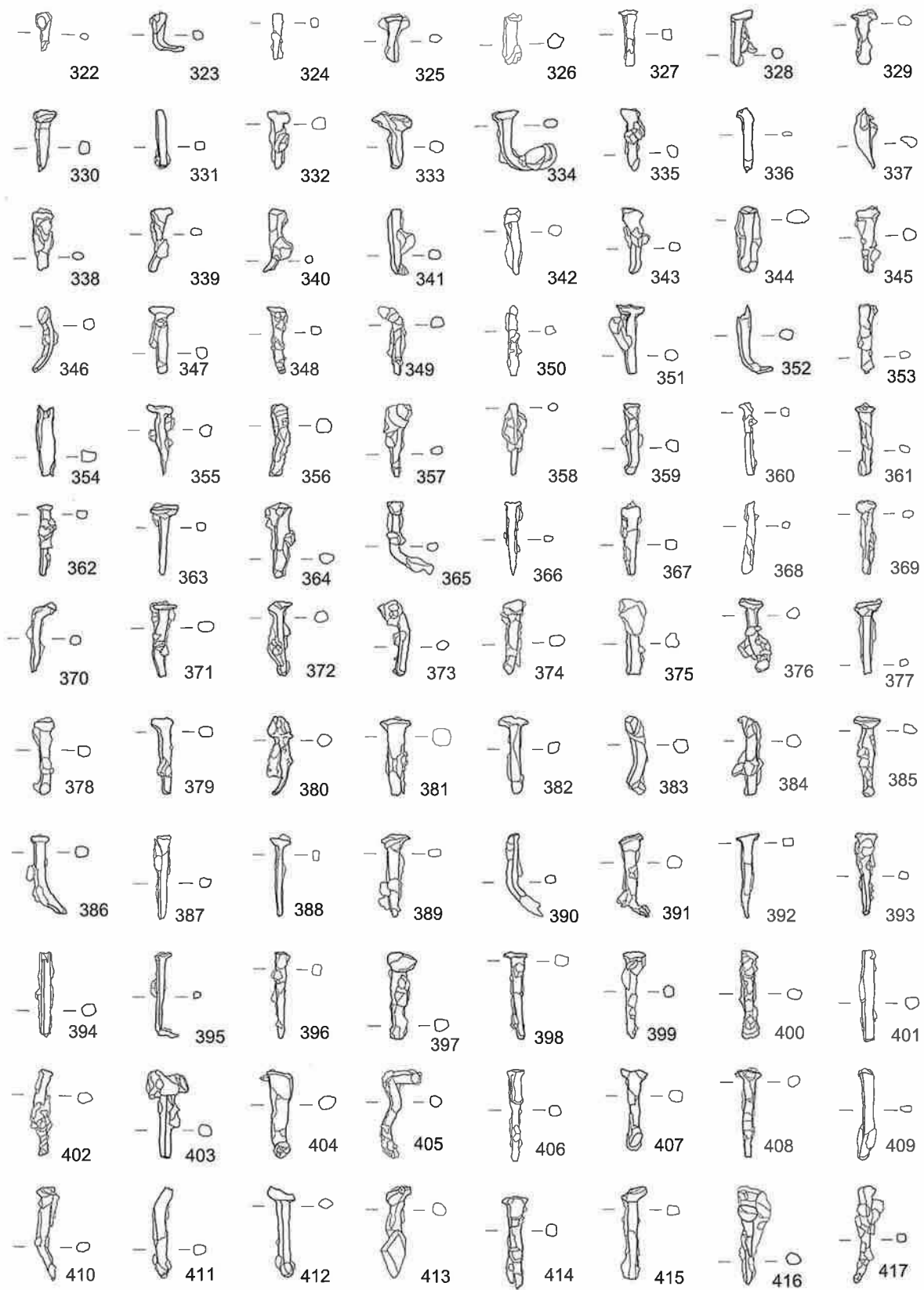
第40図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(9)



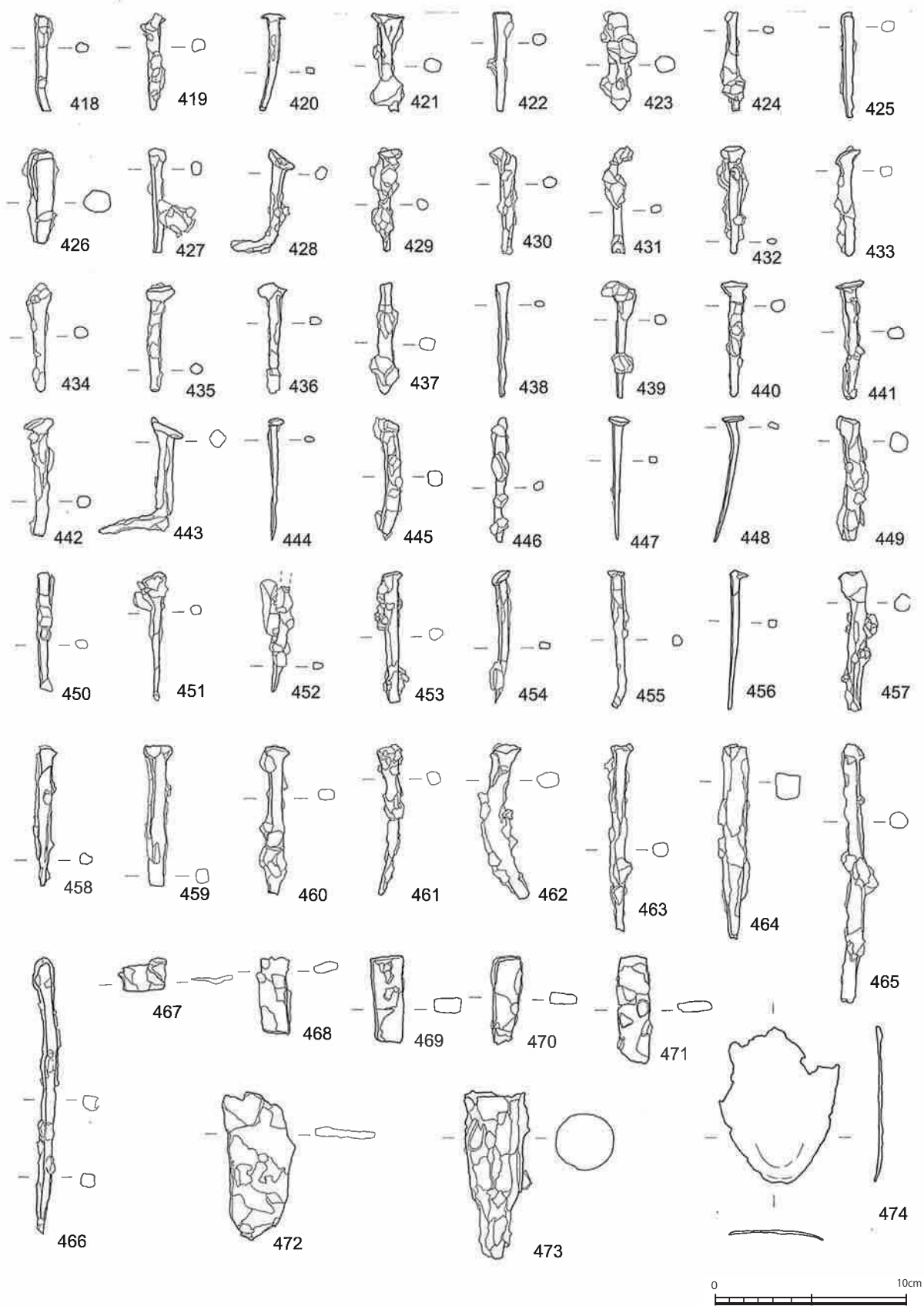
第41図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(10)



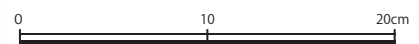
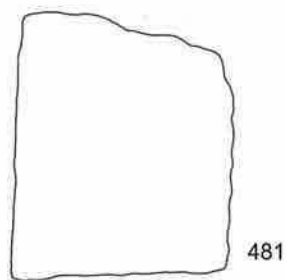
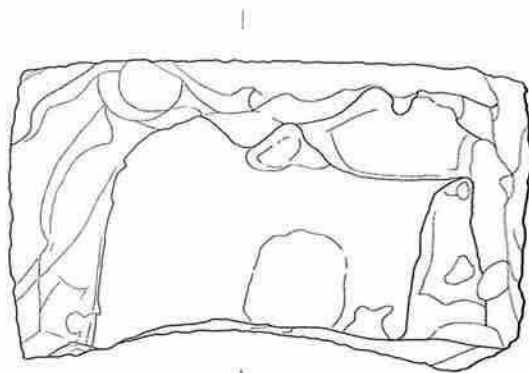
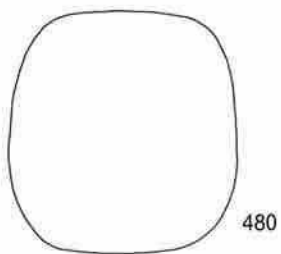
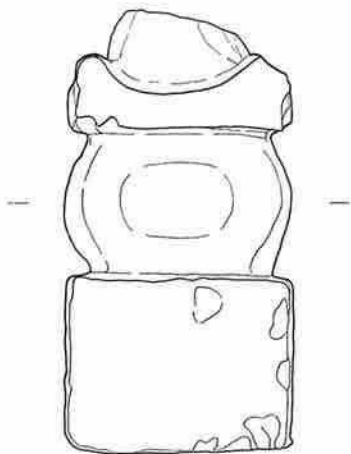
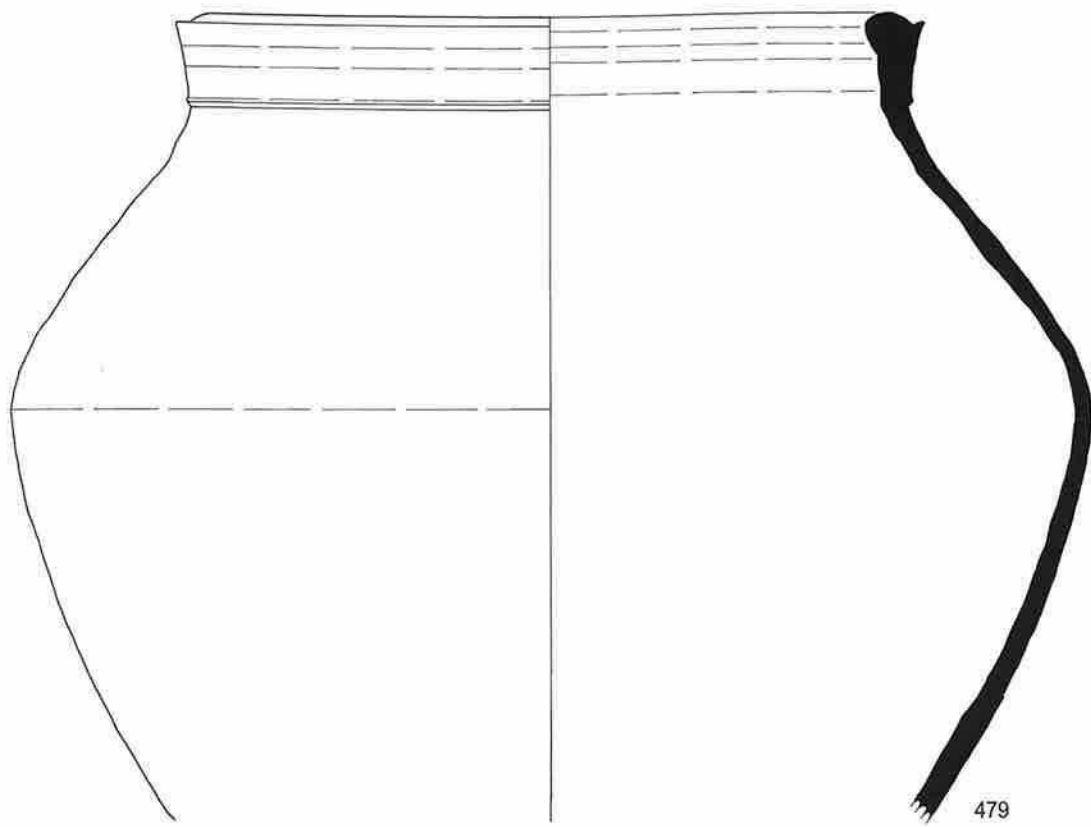
第42図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(11)



第43図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(12)



第44図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図 (13)



第45図 弥高寺跡第2次調査出土遺物実測図(14)

4. 調査のまとめ

検出された遺構について

今回の調査で出土した礎石建物S B 0 3は南北3間×東西6間で、手前に暖房や調理のための火床が設けられた僧坊(庫裏)があり、奥に仏間(仏堂)を併せ持つ塔頭跡と考えられる。仏具が出土していることや仏像の宝冠がみつまっていることから仏間の存在が想定される。火床の基礎部分を検出したが、当時は床面まで石を積んでいてのちの再利用で潰されたのかもしれない。広場を挟んで向かい合うS B 0 4は礎石が欠損しておりその構造はわからないが、弥高寺跡は標高約700mの中腹にあり気候も厳しいことから、塔頭に入る前に衣服を整えたり、簡単な挨拶をするような休憩所を兼ねた神社などの着到殿や城郭の侍溜りのような建物だったのかもしれない。

礎石建物S B 0 3・S B 0 4があった当時の坊舎敷地への入り方は、道から一度屈曲して石段S X 0 4を通り、S B 0 4の前でもう一度西に曲がって広場に入るようなルートが考えられる。広場で検出した小ピットは絵巻にみられる吹流しのような旗竿が立っていたのかもしれない。

礎石建物S B 0 3は焼土層の上ののっており、遺構が2時期あると考えられる。さらに、現状でみられる土塁囲いの平坦面は、削平地全体を利用して建てられていた坊院を廃してかなり大がかりに区画内を改変していることがわかった。入口南側の土塁を一部断ち割ったところ、版築などをすることなくガラ石とともに積み上げただけで応急的なものであることがわかった。さらに、土塁角部には火に焼けたものを含む多くの遺物が投棄された状態で出土した。なかには仏像の宝冠も含まれており、坊院が整理されたことがうかがえる。そしてこの大がかりな区画整理をおこなったのは、京極氏や浅井氏などの在地武家勢力ではないだろうか。これまで、大門跡や本坊背後の大堀切、西斜面の竖堀など、寺院縁辺部のみを城郭として改修しているとされてきたが、寺院内部にも改変の手を加えていたのかもしれない。しかし、出土遺物からは戦国後期後半の遺物が全くないことから、その利用期間・頻度はわずかではなかったか。

なお、石垣S A 0 1は、垂直に立っており隅部が算木積みになっていないことから15世紀中～後半に構築されたもので石垣遺構としては古いものである。石垣と石段S X 0 4は時期が異なり石垣の一部を残して階段にしたとも考えられる。石垣(15世紀)→石段→土塁(16世紀)の順に新しく、石垣の時期にはもう少し上に入口があって、他の坊院跡とおなじように参道から直接入ったのかもしれない。調査で石垣と石段の切り合い関係、それ以前の坊院跡への入口や下の坊院との関係を明らかにしなかった点は反省点として残った。

出土遺物について

遺物は、コンテナ(60×38×15cm)にいっぱい詰めて約12箱分が出土した。土師器皿・火鉢・国産陶器・輸入陶磁器・古銭・鉄釘などで、香炉・花瓶などの仏具、天目茶碗・茶入・茶壺の茶道具もあるが、灯り採りのカワラケ(土師器皿)や貯蔵用の甕、播鉢などの雑器が多く

を占める。機種の構成とともに、第1次の本堂跡の調査に比べ出土遺物の量も圧倒的に多く、仏事・行の場所としての本堂と、信仰空間でもあり僧侶が実際に生活をしている塔頭との違いが遺物からもうかがえる。

遺物の時期は瀬戸美濃産の播鉢に15世紀末からはじまる大窯期の製品が見られないこと、青磁についても14世紀の古い時期から15世紀中葉のころまで、土師器皿は15世紀末から16世紀初頭までみられるが、組合せとしては15世紀第3四半期までで、全体的には14～15世紀と遺物の時期幅はあまりない。また、礎石建物S B 0 3の礎石は焼けており、多くの遺物も火災に遭っている。また地鎮遺構S X 0 3に埋納された古銭で判読できた「朝鮮通寶」の初鑄年が1423年であることも、遺構の年代を考えるうえで参考となる。記録にみえる上記遺物の年代観に近い火災は、永正10年(1513)の本堂再建勸進帳に「明應八年(1499)正月廿四日不慮仏像伽藍登一辺之煙混九天之雲」の火災があげられる。

出土品の中では龍の宝冠が注目される。龍は雨を祈る龍神を現わしており、水神信仰の尊像に付けられていたと考えられる。宝冠の大きさから像高約90cm(三尺)の立像が想定され、簡略化された文様から室町時代のものであろう。現存する仏像でも龍を宝冠とするものは少なく稀有な事例で、伊吹山の水神信仰を実際に示す貴重な発見となった。塔頭S B 0 3の本尊のものかもしれない。



写真1 長寿寺本堂（湖南市）

第5章 調査のまとめ

本書は平成17年度から4年間おこなった国史跡「京極氏遺跡—京極氏城館跡・弥高寺跡—」(平成16年2月27日指定)の発掘調査報告書である。調査対象は京極氏の北近江統治の政務の場所であり日常の拠点であった京極氏館跡(絵図の「御屋形」部分。狭義の館跡)で第1次～第3次の発掘調査と、京極氏が城塞化したと考えられる山岳寺院弥高寺跡での第1次・第2次調査であった。本調査は「国史跡京極氏遺跡調査整備委員会」に指導・助言をいただいて計画的に進め、将来の保存・活用に活かすための基礎資料を得ることを目的におこなってきた。平成20年度以降も、京極氏館跡(絵図の「蔵屋敷」などを含む広義の館跡)における蔵屋敷(京極氏の日常の「ケの空間」が想定されている)や隠岐氏屋敷跡などの確認。弥高寺跡においては、引き続き第2次調査に近接する坊院跡の確認と大門跡の調査。城下部分の家臣屋敷跡の確認など継続した調査を予定していた。しかし、財政状況の変化など諸般の事情により調査の打ち切りを余儀なくされ、これにより委員会も将来構想のめどが立たないことから休止させていただいている。

これらの理由から、調査途中でやり残した未確認部分や課題を多く残すが、一旦各次の調査の成果を報告して、発掘調査の成果をまとめ将来の新しい展開につなげていきたい。

京極氏館跡

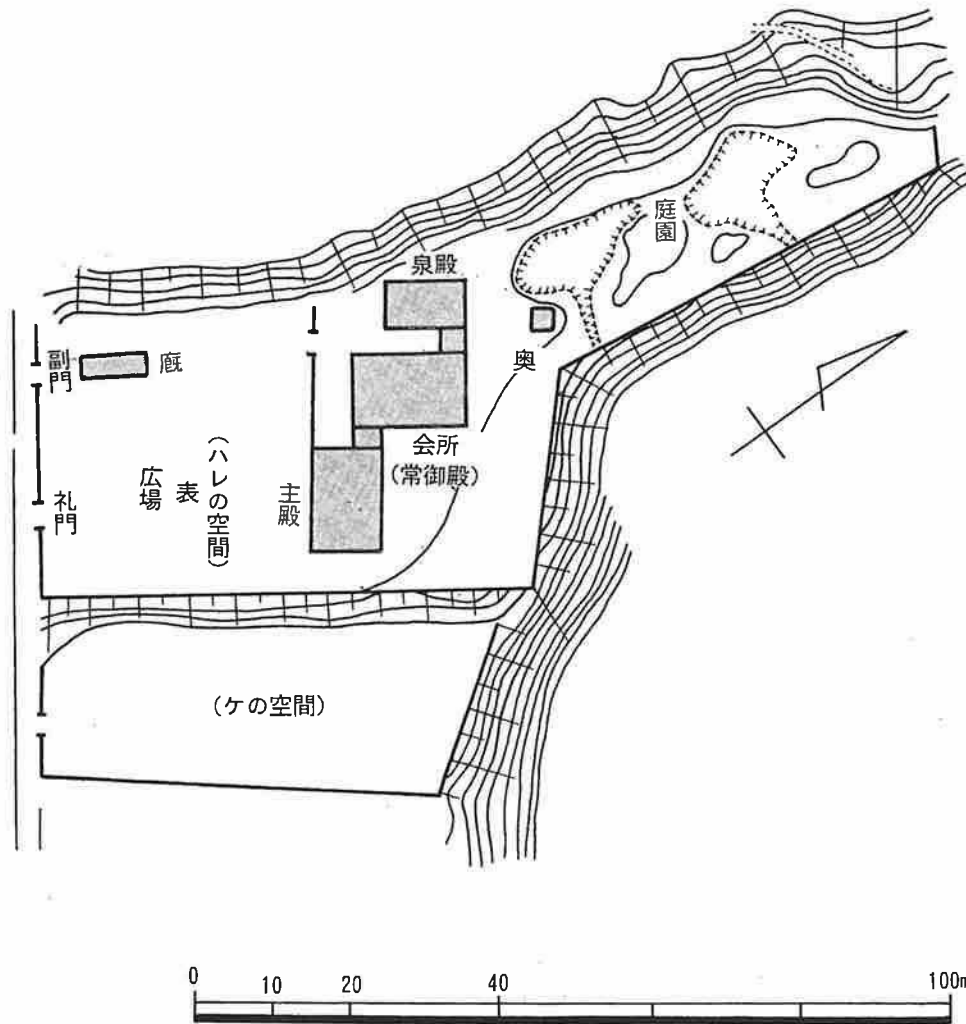
京極氏館跡の発掘調査では、これまで発掘調査がおこなわれていなかった史跡内の遺構の残り具合や出土品等から遺跡の性格を把握するために、第1次調査では当時の遺構面と建物配置などの確認。第2次調査では遺構面の庭園側での状況の把握と建物遺構の保存状況などを確認。第3次調査では遺構面と現況の庭園との整合性を確認することなどをそれぞれ目的としておこなった。その結果、下記のようなことが明らかとなり今後の整備・活用のための基礎資料を得ることができた。

- ①京極氏館跡の遺構面の検出
- ②礎石建物の検出
- ③庭園遺構との整合

など、当初の目的に掲げていた課題についてある程度の成果があがった。

「御屋形」とされる狭義の京極氏館跡は現状で南北二段に分かれている。調査では北側下段の地表下約40cmで黄茶色の安定した粘質土層を確認し、これが南側上段の地表下約80cmまで続き礎石と思われる遺構や土坑・ピット・焼土などを検出した。さらにこの遺構面は、調査区の北西部から庭園遺構の汀線までほぼ同レベルで安定して続いていることから、京極氏館全面の約70m×40mの平坦面を一面として利用していることがわかった。

中井均は各地の戦国期城館跡や庭園跡の調査事例から京極氏居館跡の空間構成を第46図のように推定している(中井均1998、以下「中井案」とする)。居館部分の約70m×約40mとい



第46図 京極氏館推定模式図

う数値は守護館としては小さく、「御屋形」はハレの場だけでありケの場は東側の一段低い区画を想定された。そして、「御屋形」には、中央道路に面して礼門と副門を設け、南側半分の高まりを広場として一画に厩を配置する。北側は主殿があり、庭園に面して会所(常御殿)と泉殿がある。発掘調査の結果、南北の上下二段を意識することなくフラットな広大な一面としてこれらの建物を想定することが可能となった。

さらに、中井案から発掘調査で検出した礎石建物などを検討してみたい。まず、現状の南側上段で検出した遺構は、礎石かとも思われる扁平な石を一点検出したのみで明確な遺構はなくハレの空間の表の部分の広場との推定ができるが、幅約2mのトレンチでは建物遺構等の検出に無理があったのかもしれない。これは北側下段でもいえることで礎石建物の検出はできなかった。

しかし、北西端で設定した第2・3次の調査区では良好に残る礎石建物SB01・SB02を検出した。これらはハレの空間の奥向きの建物群で、SB01は縁が巡る建物で会所を想

定し、隣接する小規模なSB02は会所に付属する建物で湯殿や厠などを考えた。中井案でSB02は会所と回廊で連結された泉殿としている。泉殿とは庭園に突き出し納涼や観月に使用された四方吹き放ちの建物である。また、中井案には庭園の南東端に正方形の東屋がおかれている。今回、庭園の池まで延長したトレンチによって池の南東部がほぼ直角に曲がる護岸であることを確認し、ここに庭園鑑賞用の建物があったことが想定できる。大内氏館跡(山口市)でみつかった西暦1500年頃作庭の規模の大きな池泉庭園も西側と北側に直線的な護岸があり、その部分に庭園鑑賞用の建物の存在が考えられている。

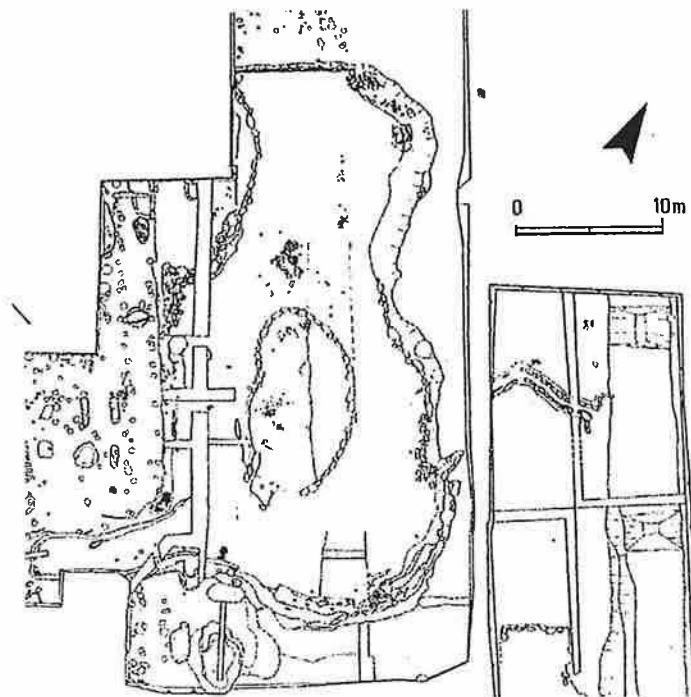
今回の調査では、建物の構造や規模までは確認できなかったが、中井案で示されたような他の守護館に類似する建物群が京極氏館跡に眠っている可能性が確認できた。ただし、山間部に位置し、さらに山寺・上平寺を改修している可能性があることから地形的な制約は大きいと思われる。

出土品にも大きな特徴がある。遺物の大半を占めるのはカワラケとよばれる土師器皿である。京極氏は上平寺に將軍邸のような庭園を設け、宴会や儀式の場をたびたび設定して北近江の国人・土豪層との主従関係を確認し、京都風の文化を具現化することで自らを権威付けたのではないかと考えられる。土師器皿はこのような場で使われた清浄な器で、会所的建物と想定したSB01の周辺で濃密に出土したことからSB01の性格がわかる。16世紀前半の京都の土師器皿の影響を受けていると思われるもので、城下部分や家臣屋敷跡で出土した粗雑な小型品はみられない。

また、出土品の中には、唐物とよばれ当時最高級の品であった朝鮮製や中国製の陶磁器など高価な品も出土している。これらも権威付けのための威信財だったと考えられる。さらに、竿秤の錘については、領国内の度量衡などを管理する京極氏の経済的な側面がうかがえる。

弥高寺跡

弥高寺跡での発掘調査も本堂跡や僧坊跡の構造や遺構の残存状況を確認し、将来の保存・活用計画の基礎資料とすることを目的に実施したものである。第1次調査では本堂跡の遺構面と建物規模・遺存状況などの確認。第2次調査では坊院跡において同様の目的で調査をおこなった。その結果、下記のようなことが明



第47図 大内氏館庭園跡平面図

らかとなり今後の整備・活用のための基礎資料を得ることができた。

- ①山寺（山岳寺院）の基壇の検出
- ②本堂の規模・構造の推定
- ③庫裏と仏堂を併せ持つ塔頭跡の検出
- ④参道石垣の検出

など、こちらも当初の目的に揚げていた課題についてある程度の成果があった。

8世紀に属すと思われる須恵器が出土したことがまず注目される。これは、伊吹山山岳仏教の始まりが全国的にも最古級であることを考古学的に実証する資料となった。そしてそれが弥高寺本堂から始った可能性が高く、現在でも伊吹山中の山寺遺跡の中で最大の規模を有し、歴史上も本末寺争いや「一の宿」争いで主導した弥高寺が伊吹山寺の中心であったことを物語る。

検出した基壇は階段状に石を積んで骨組みとしその上に土を盛ったと考えられる。薄く塗られた漆喰が永年の雨や酸性雨で溶けてしまったかもしれないが、その痕跡がみられなかったことから土盛りの亀腹とした。

発掘調査から想定される弥高寺の本堂は、直径約90cmの礎石をもちその上に30～45cm（一尺五寸）の丸柱の建物で、亀腹の石積みまで高床の縁を張り出し、軒と信者が入る外陣、諸仏があり僧侶が仏事をおこなう内陣に分かれ、それぞれの柱間が十尺～七尺五寸などと異なる五間堂の密教系寺院だった可能性がある。県内の現存建物では、湖南三山の長寿寺本堂（写真1）があり、大規模なものとしては比叡山根本中堂をはじめ湖東三山などの天台系寺院にみられる。なお、元禄時代の記録には「往古七間四面」とあるが、柱間の数ではなくこれは一間を六尺五寸の実数で計算したものであろう。いずれにしても、伊吹山の南面中腹尾根上の広大な敷地に、広い前庭をもつかなり立派な密教系本堂が建っていたのであろう。

ちなみに永正10年(1513)の本堂再建勸進帳によると、明応8年(1499)正月24日の火災で焼失し、再建後ときを待たず永正9年にふたたび焼失している。今回検出した基壇ならびに本堂の遺構はこの火災のあとのものと考えられる。

一段下の坊院跡からは、南北3間×東西6間の僧坊(庫裏)と仏堂を兼ねた塔頭跡と、これと対峙する待合所的な建物を検出し、弥高寺跡で初めて坊院の建物配置を確認することができた。塔頭は奥行き長い妻入りの建物で、西の眼下に広がる琵琶湖、とくにその夕日が沈むさまを西方浄土として意識したような構造である。発掘調査のときに夕日が沈むのを目にする機会があったありがたいような気持ちになった。往時の参拝者もまさにこれを体験したであろう。弥高寺からみるこの雄大で荘厳な景色、往時麓からみえたであろう重厚な本堂と塔頭群。これこそが山寺のもつ魅力であり、神仏の坐す伊吹山へ人々を誘う重要な装置であった。

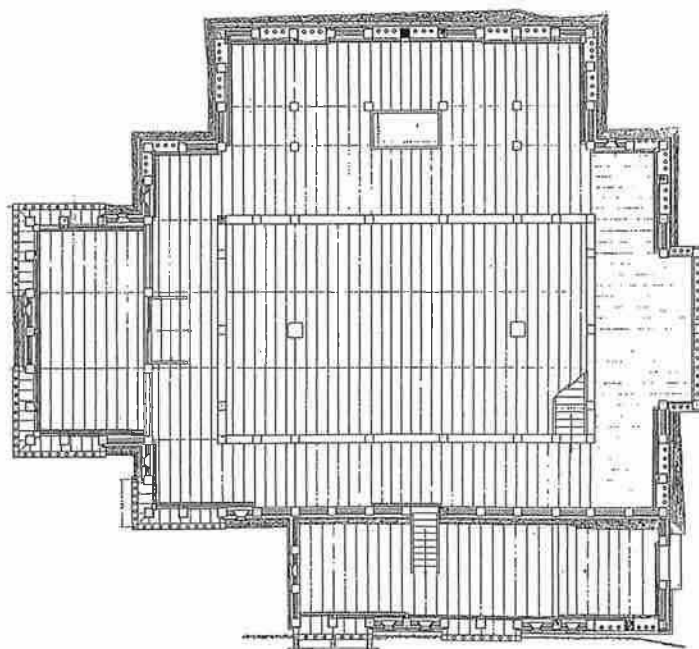
塔頭跡の庫裏で検出した火床(囲炉裏)の遺構は山寺としては初めての検出と思われる。火床は『石山寺縁起』(鎌倉時代)や『西行物語絵巻』(鎌倉時代)などに描かれ、とくに『慕帰絵詞』(室町時代)には僧坊と仏間が描かれ、その中に僧侶や稚児が配置されて、囲炉裏には

鉄瓶・鉄鍋・五徳がおかれている。僧侶の周りには湯呑と天目台。仏間の阿弥陀如来の画像の前には文机の上に蝋燭・花瓶・香炉が置かれている。今回検出した遺構や出土品からはまさにこの『慕帰絵詞』に描かれた塔頭のようなすが復元でき、僧侶の生活の一端がうかがえる貴重な調査となった。なお、現存する火床の遺構は備中松山城天守閣にあるが、ここもやはり高い山の上であり必需品であったといえる。

礎石建物S B 0 3の礎石は焼けており、出土遺物の年代観から15世紀末から16世紀初頭の火災によるものと判断した。創建年代は地鎮遺構S X 0 3出土の古銭から15世紀第2四半期以降が考えられる。現地で見られる遺構はかなり整地されており粗雑に盛られた坊院跡の土塁などは、これ以降に京極氏や浅井氏の手によって改修された可能性が高く、寺院単独の改変というよりも在地武家権力によるものと考えた方が自然かもしれない。



第48図 『慕帰絵詞』に見える塔頭（『続日本の絵巻』9）



第49図 備中松山城天守の火床

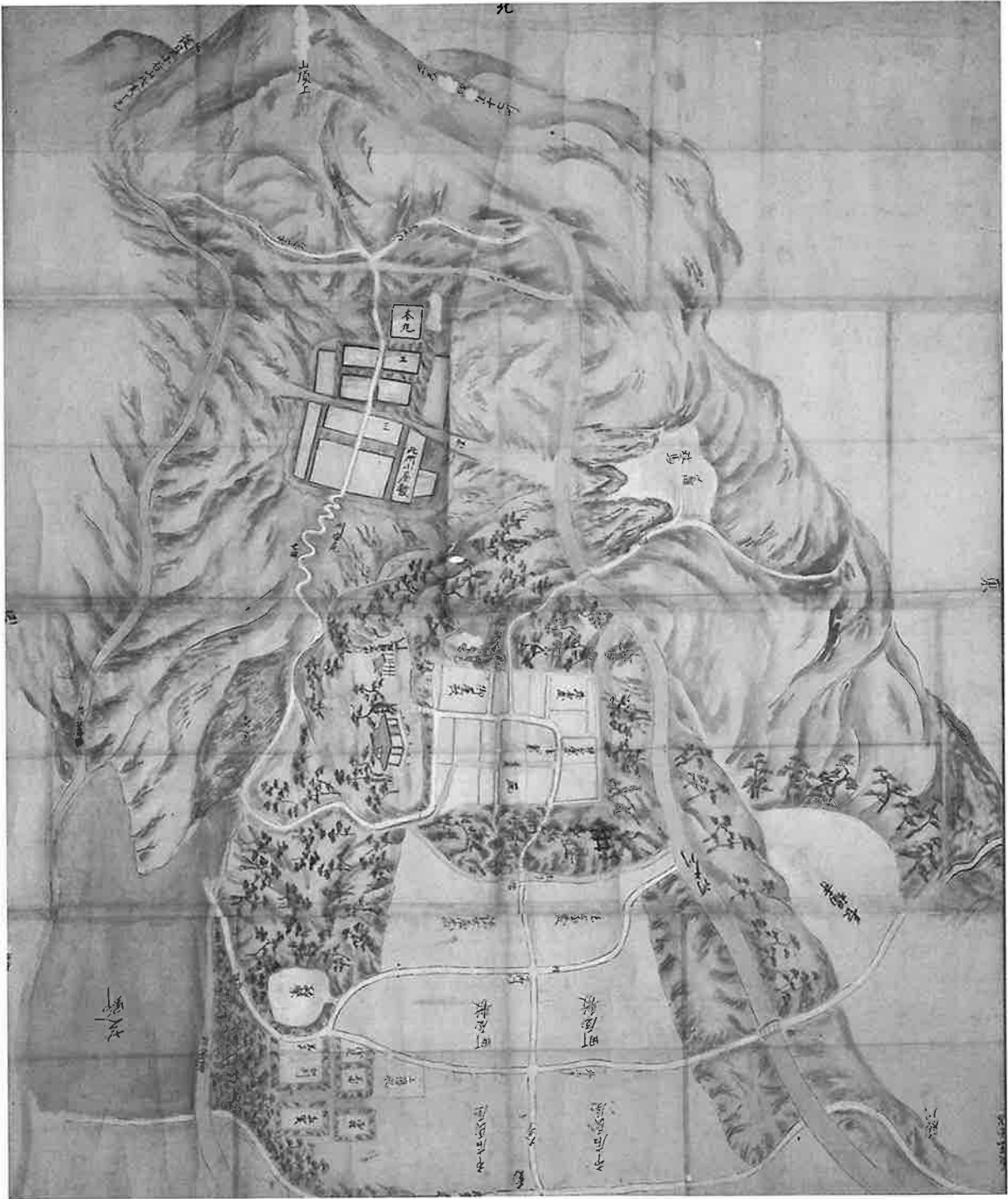
参考・引用文献

- 稲葉隆宣 2000『上平寺南館遺跡』滋賀県教育委員会
- 伊吹町史編さん委員会編 1992『伊吹町史 自然編』伊吹町
- 伊吹町教育委員会編 2003『京極氏の城・まち・寺』サンライズ出版
- 内田保之・日紫喜勝重 2003『上平寺遺跡・寺林遺跡』滋賀県教育委員会
- 小島道裕 1997「上平寺城下について―地名と絵図―」（『城と城下』新人物往来社）
- 高橋順之 1998『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ 上平寺館跡』（同12集）
- 高橋順之 2000『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅱ 高殿地区』（同13集）
- 高橋順之 2001『上平寺遺跡・寺林遺跡』（伊吹町文化財調査報告書第14集）
- 高橋順之 2002『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ 上平寺城跡』（同17集）
- 高橋順之 2004『上平寺遺跡Ⅱ』（伊吹町文化財報告書第18集）
- 高橋順之 2005『国指定史跡京極氏遺跡分布調査報告書―京極氏城館跡・弥高寺跡―』（伊吹町文化財報告書第19集）
- 中井 均・高橋順之 1994「上平寺城とその城下―遺構と絵図からの再検討―」（『近江地方史研究』29,30）
- 中井 均 1998「戦国期城館の庭園」（『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ』）
伊吹町教育委員会
- 中井 均 2006『米原町内中世城館跡分布調査報告書』（米原市埋蔵文化財調査報告書第1集）
- 中西裕樹 2004「城郭遺構論からみた山岳寺院利用の城郭
―戦国期城郭における削平地の配置場所―」（城館史料学会『城館史料学』第2号）
- 米原市教育委員会編 2009『新視点・山寺から山城へ―近江の戦国時代―』
第4山寺サミット実行委員会
- 山寄仁生 2004『弥高のあゆみ 彌高物語』弥高区
- 山寄仁生 2007『蘇る歴史の弥高山』サンライズ出版
- 用田政晴 1986『弥高寺跡調査概要』（伊吹町文化財調査報告書第1集）
- 用田政晴 2005「上平寺城・山岳寺院論の提唱」（『米原市文化財ニュース佐加太』22）
- 用田政晴 2009「伊吹山寺にみる中世山岳寺院祖型」（『米原市文化財ニュース佐加太』29）

圖 版



京極氏遺跡空撮（パンフレットから）



『上平寺城絵図』（市指定文化財／江戸時代）



(1) 京極氏館跡調査前の状況



(2) 京極氏館跡発掘調査風景



(1) 京極氏館跡第1次調査区全景（南から）



(2) 京極氏館跡第1次調査区全景（北から）



(1) 京極氏館跡第1次調査土坑SK 0 1



(2) 京極氏館跡第1次調査石敷きSX 0 1



(1) 京極氏館跡第1次調査石敷きSX 0 2



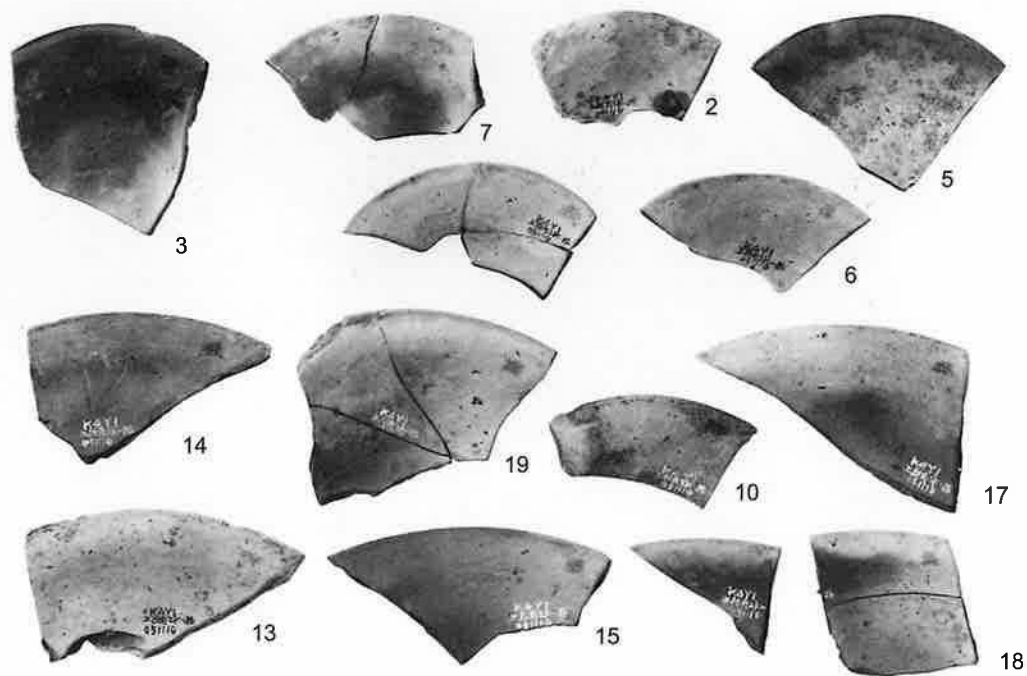
(2) 京極氏館跡第1次調査石敷きSX 0 3



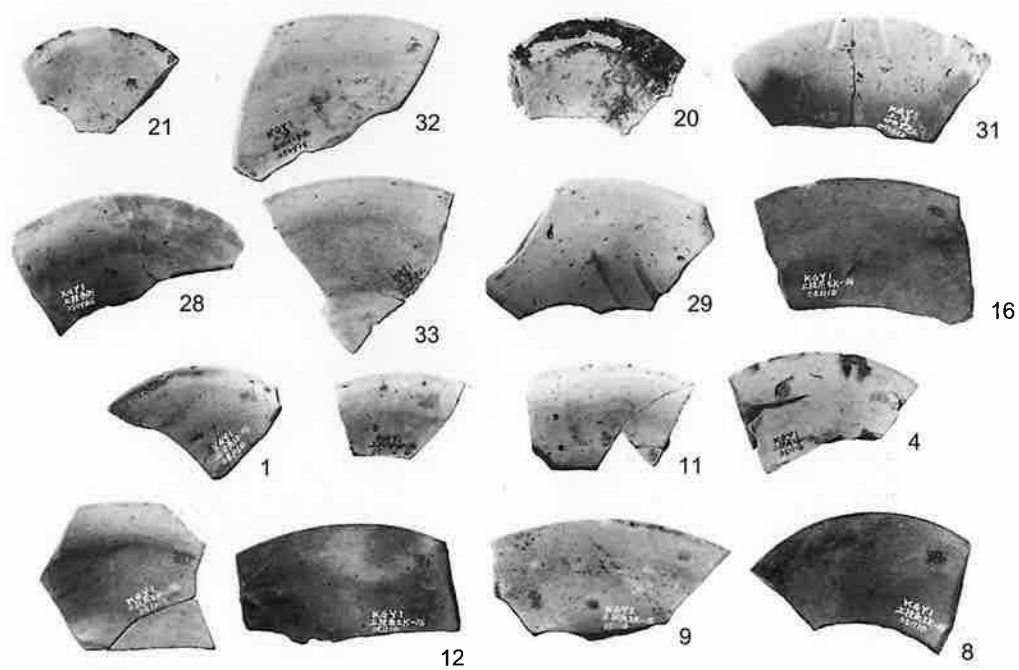
(1) 京極氏館跡第1次調査暗渠SX04



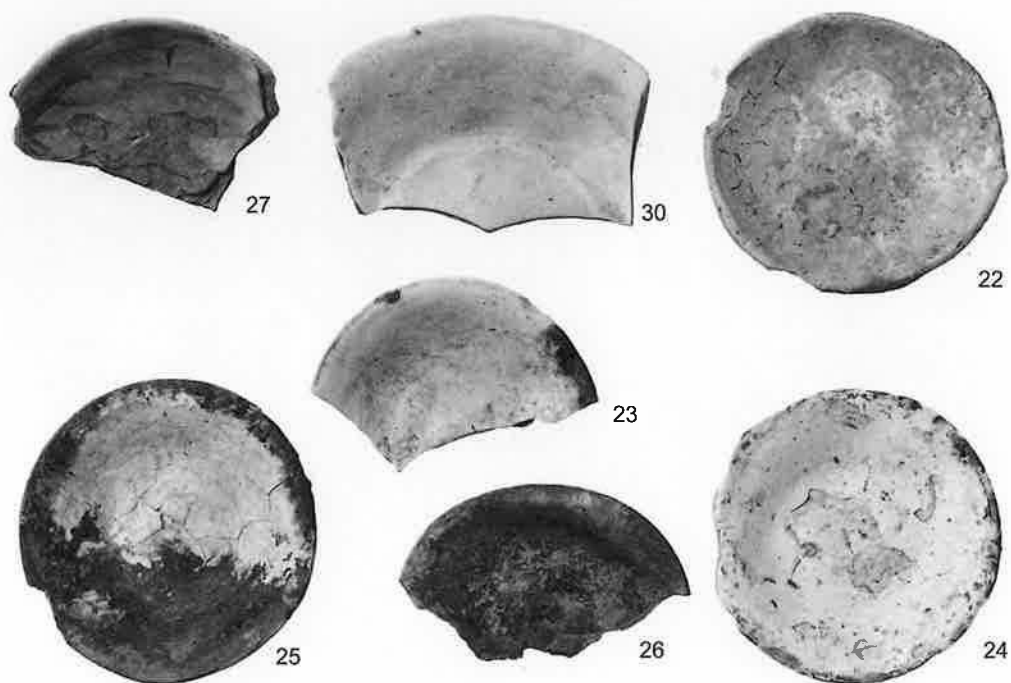
(2) 京極氏館跡第1次調査遺物出土状況



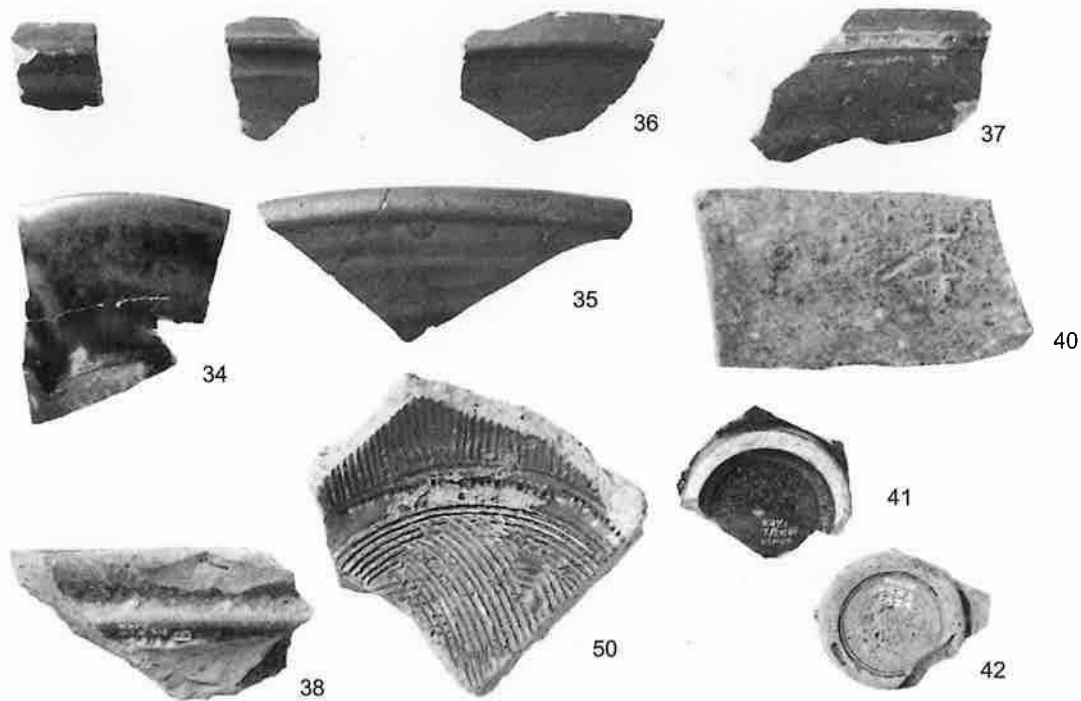
(1) 京極氏館跡第1次調査出土遺物 (土師器皿1)



(2) 京極氏館跡第1次調査出土遺物 (土師器皿2)



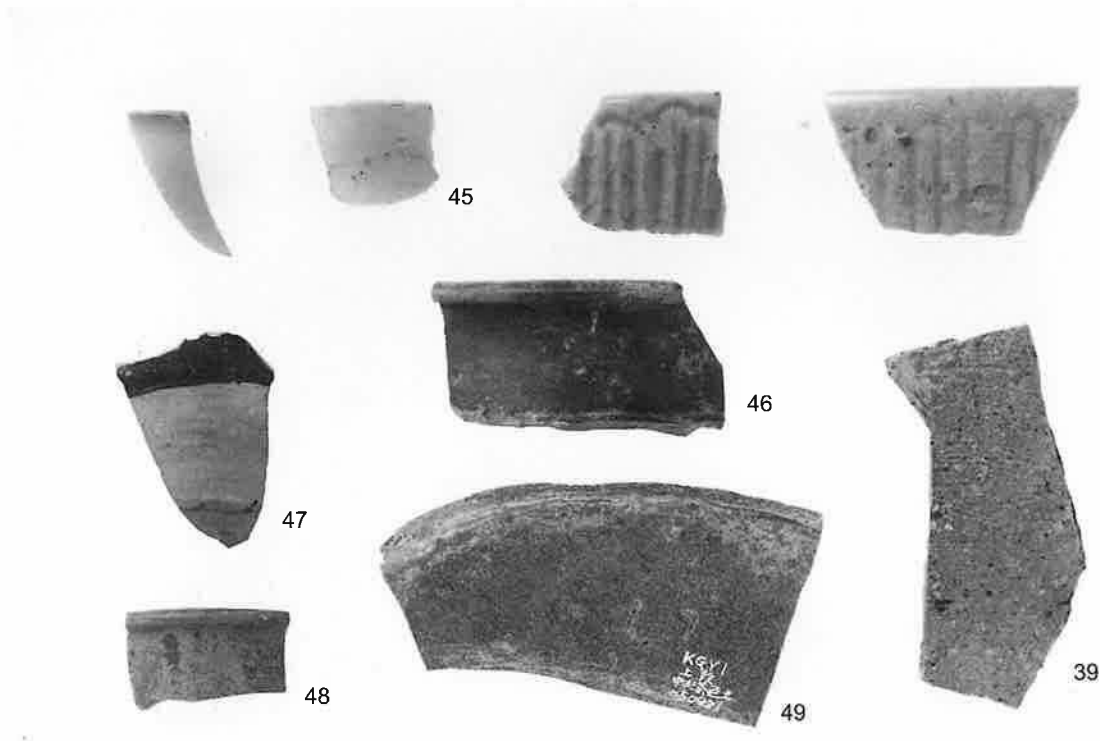
(1) 京極氏館跡第1次調査出土遺物 (土師器皿3)



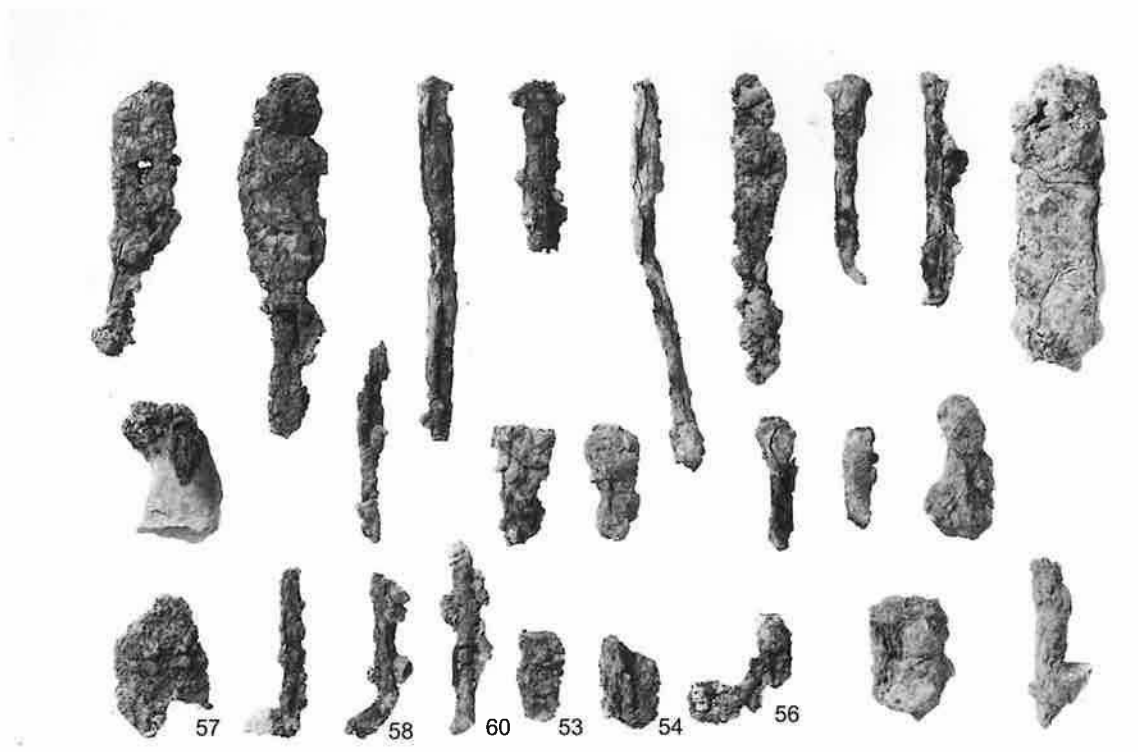
(2) 京極氏館跡第1次調査出土遺物 (国産陶器)



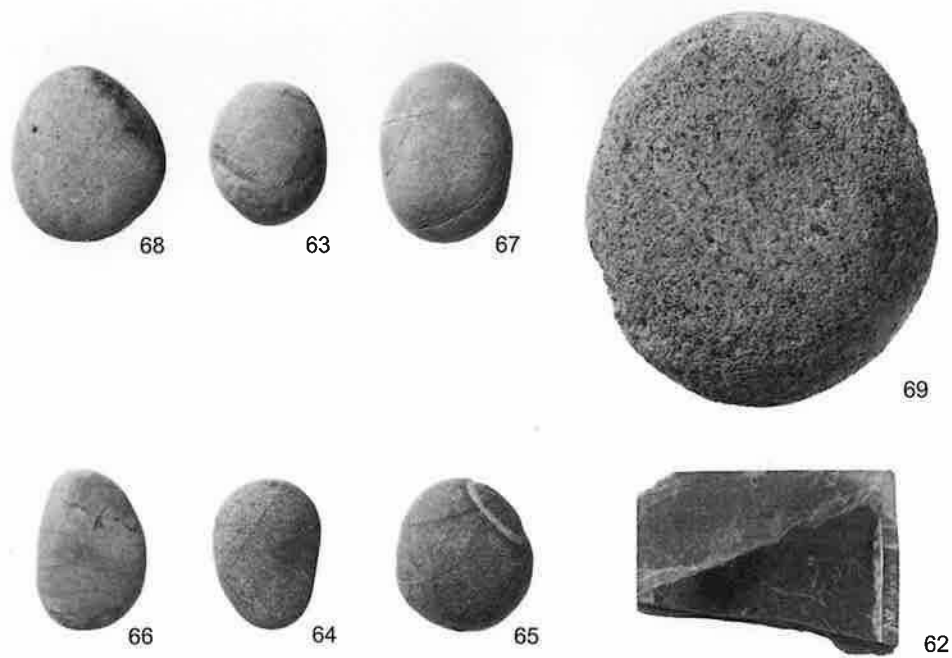
(1) 京極氏館跡第1次調査出土遺物 (国産陶器・貿易陶磁)



(2) 京極氏館跡第1次調査出土遺物 (貿易陶磁)



(1) 京極氏館跡第1次調査出土遺物（金属器）



(2) 京極氏館跡第1次調査出土遺物（石製品）



(1) 京極氏遺跡第2次調査区全景（南から）



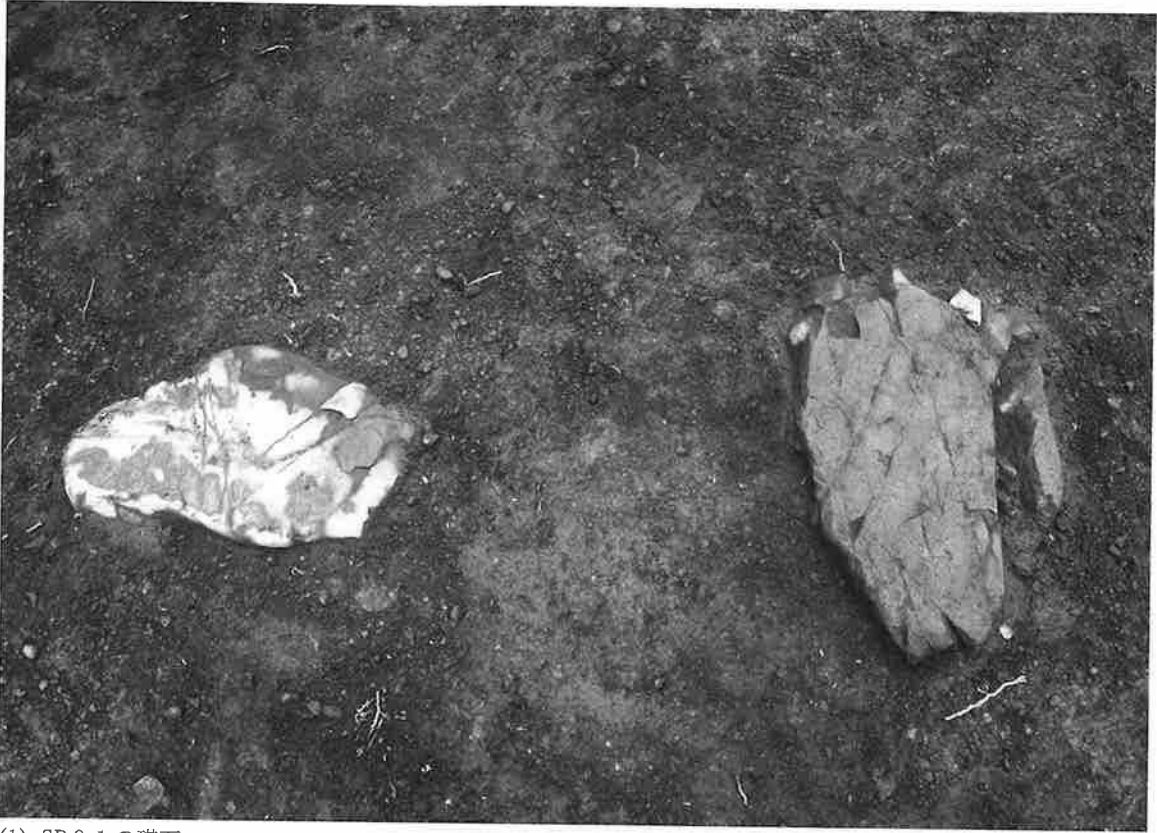
(2) 京極氏館跡第2次調査区全景（北から）



(1) 京極氏館跡第2次調査礎石建物SB01 (南から)



(2) 京極氏館跡第2次調査礎石建物SB01 (北から)



(1) SB 0 1 の礎石



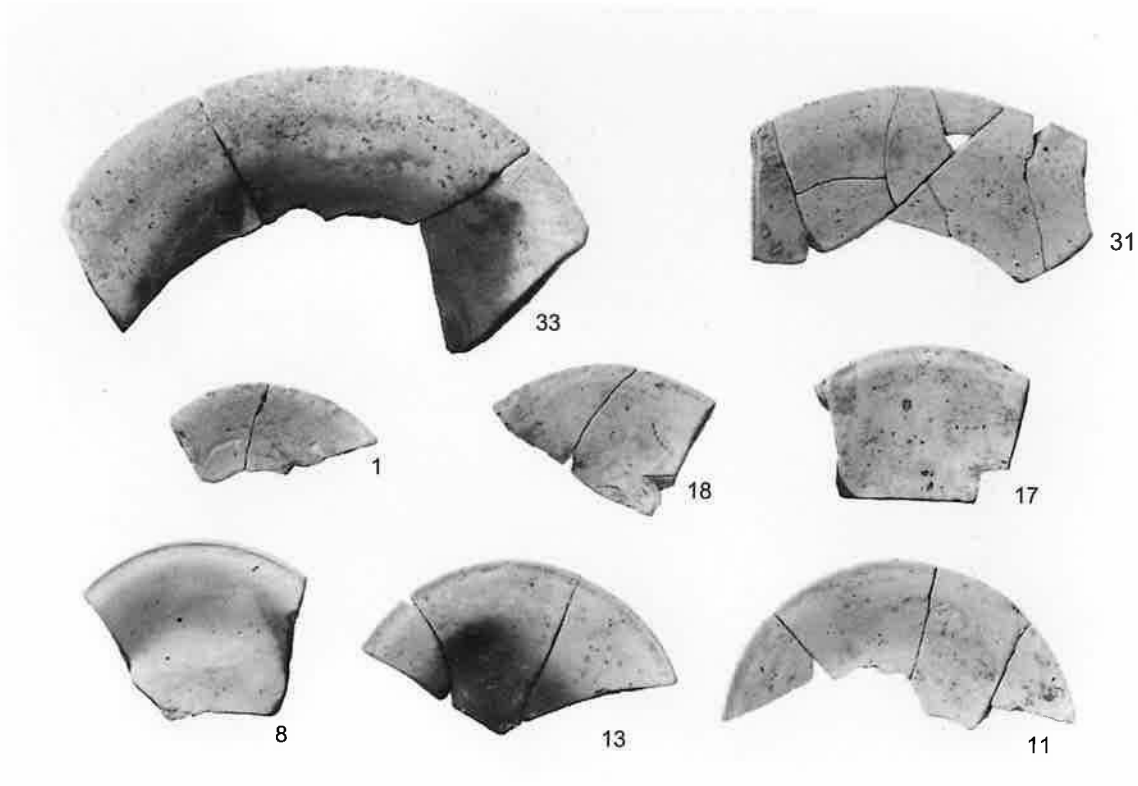
(2) 京極氏館跡第2次調査遺物出土状況



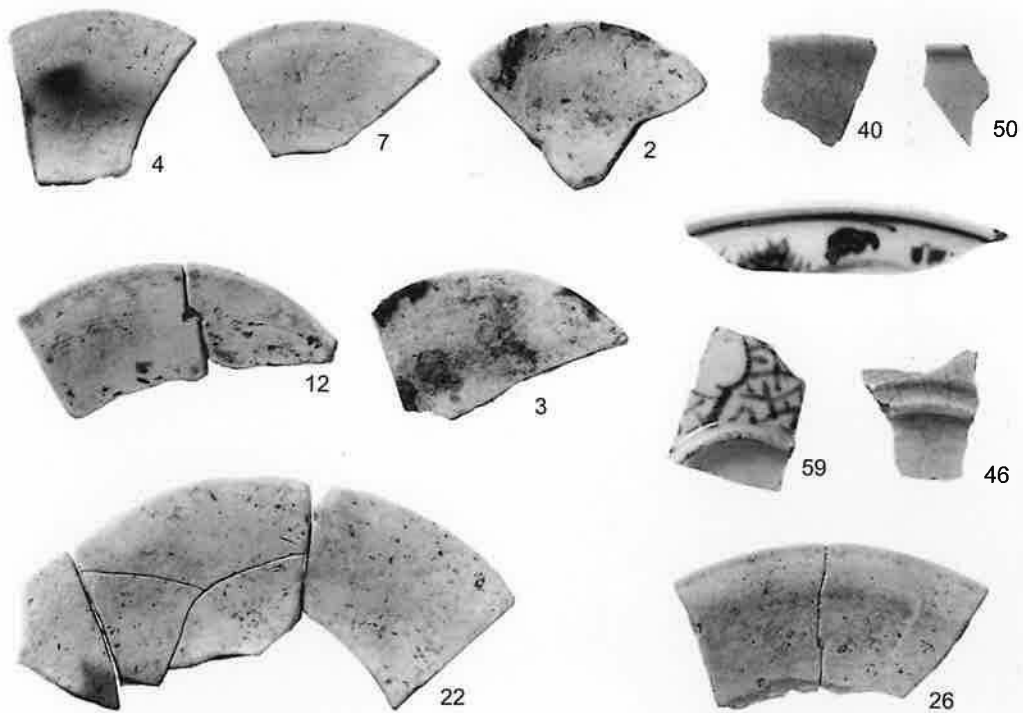
(1) 京極氏遺跡第2次調査遺物出土状況



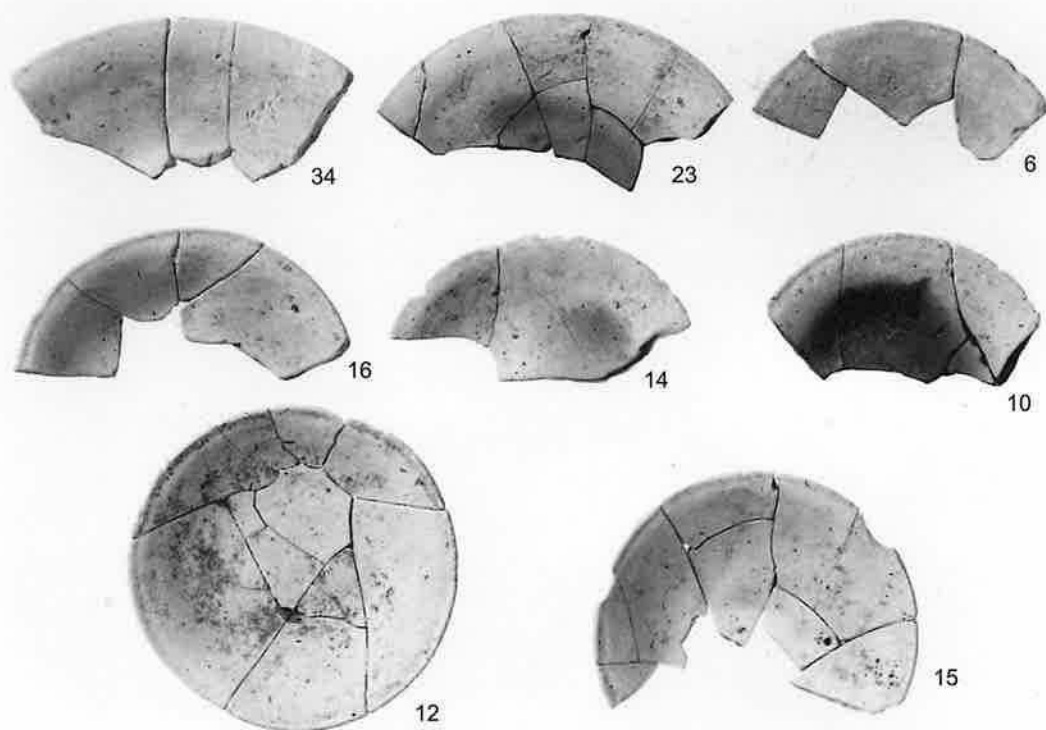
(2) 京極氏遺跡第2次調査遺物出土状況



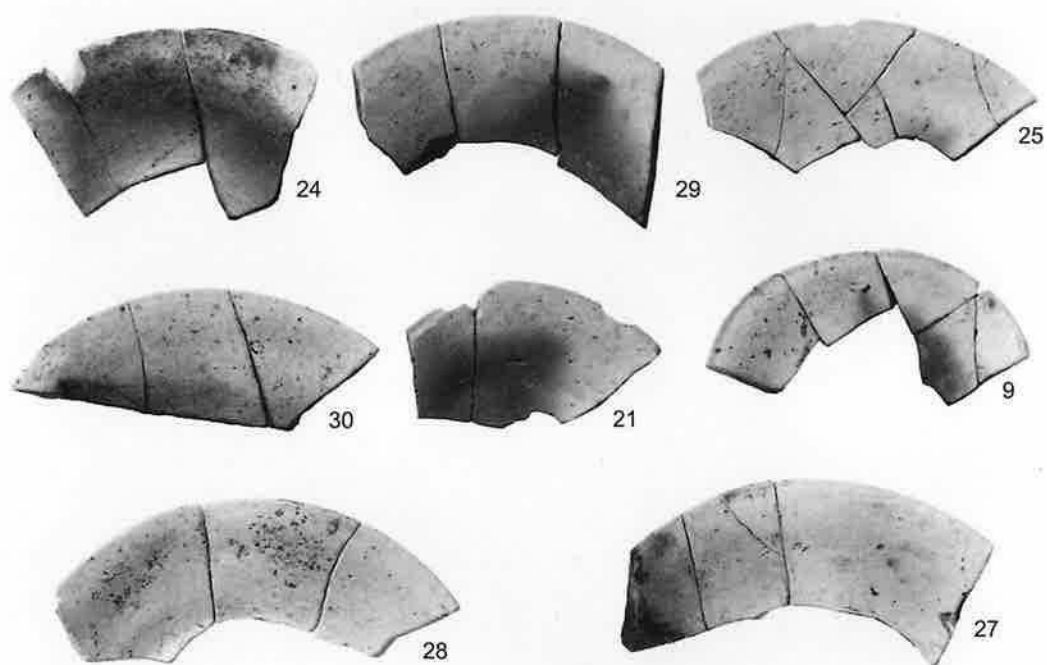
(1) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿1)



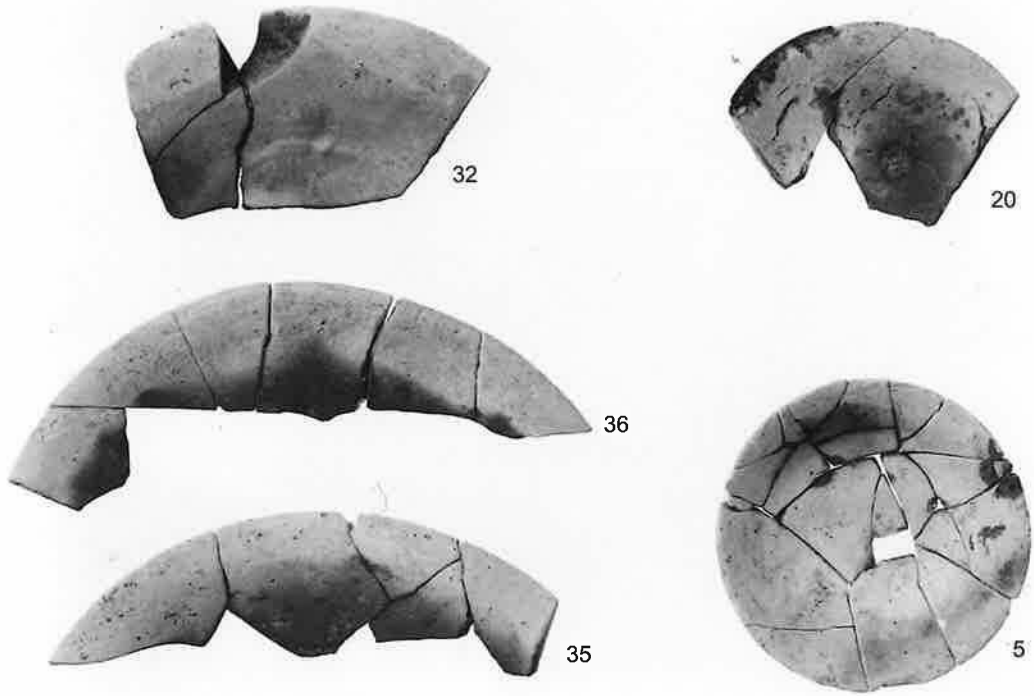
(2) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿2)



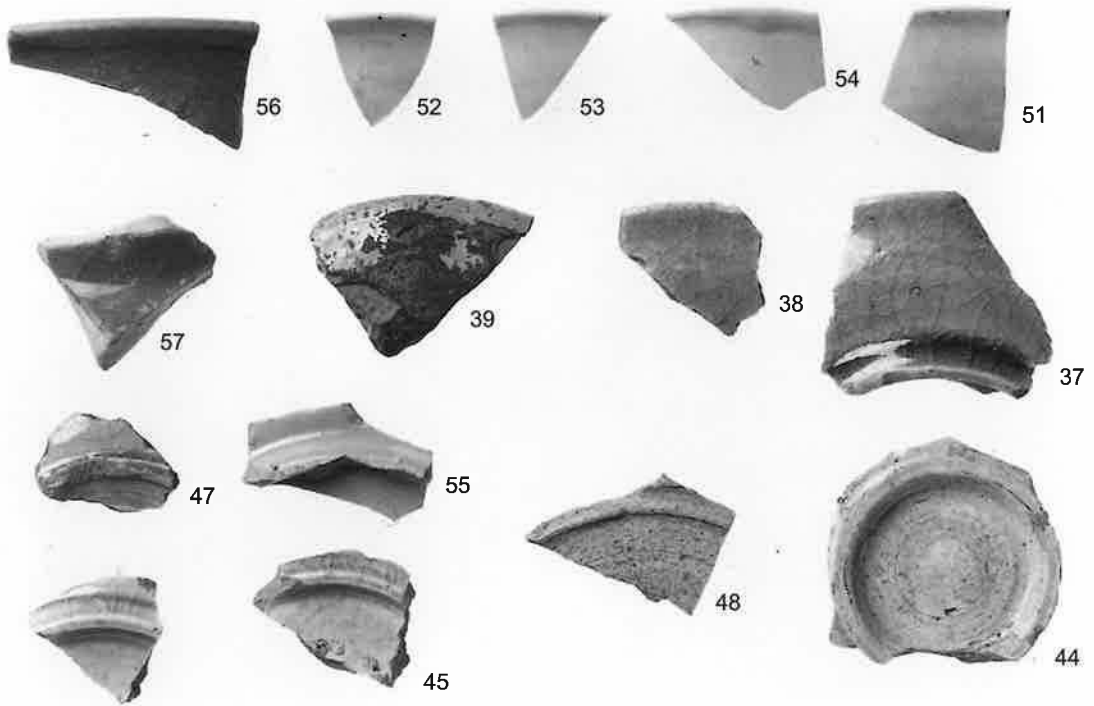
(1) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿3)



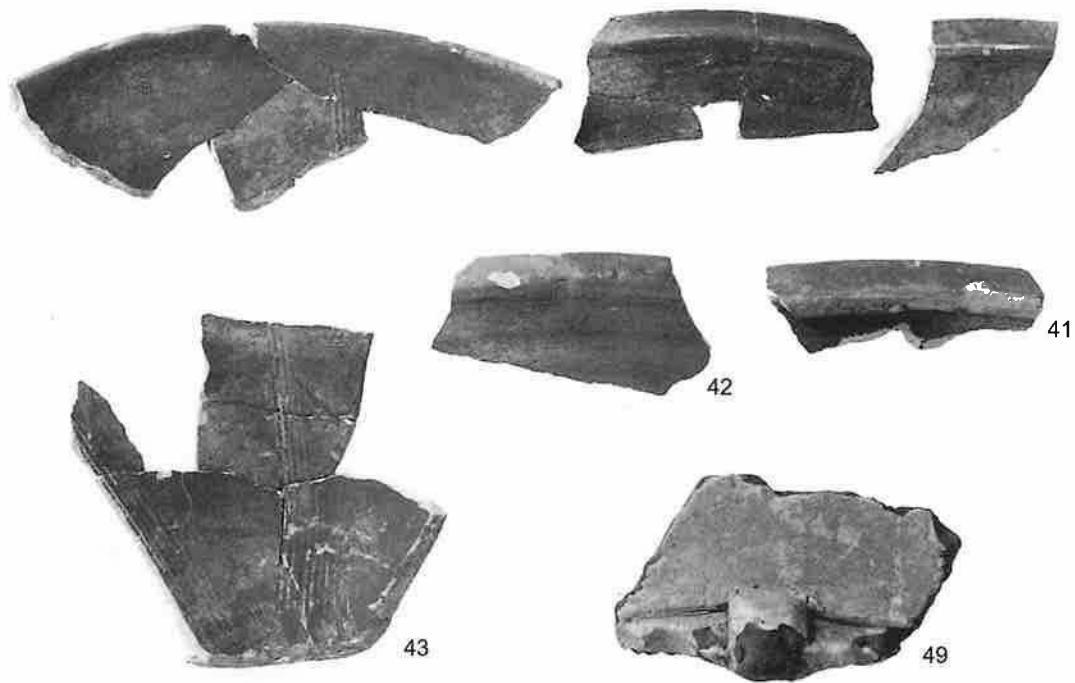
(2) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿4)



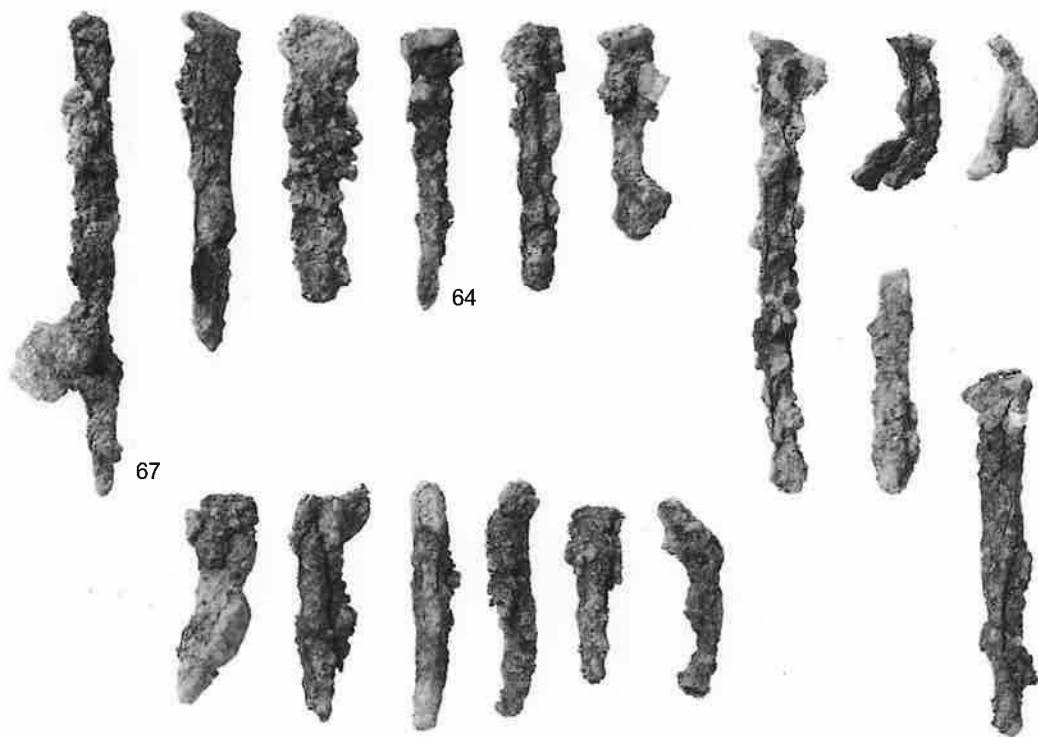
(1) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿5)



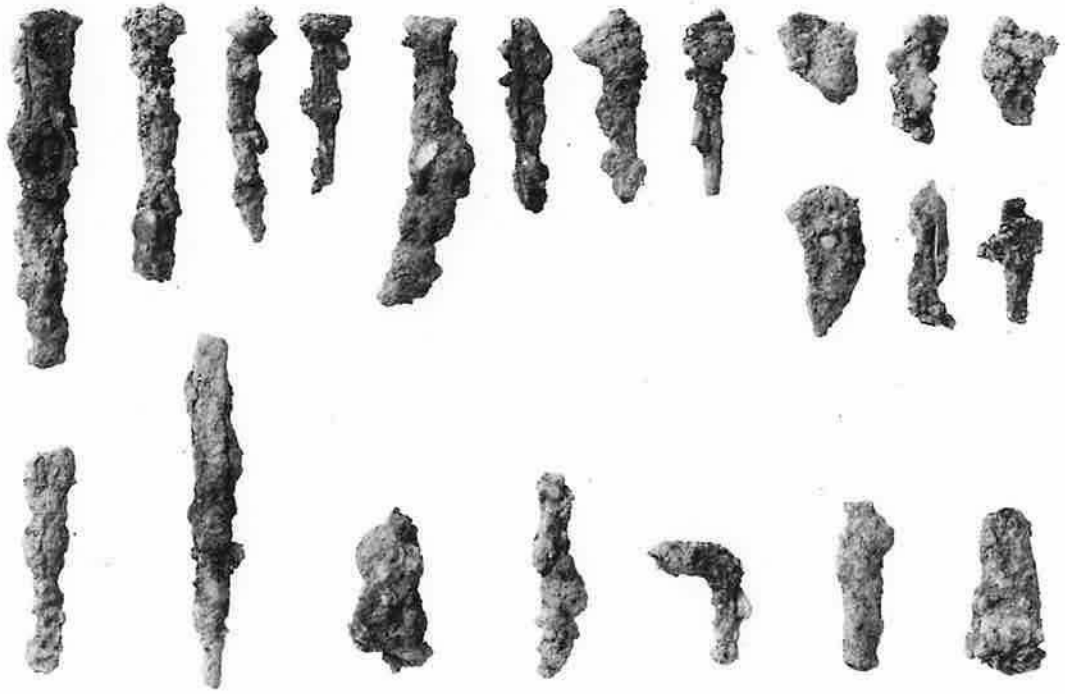
(2) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物 (陶磁器1)



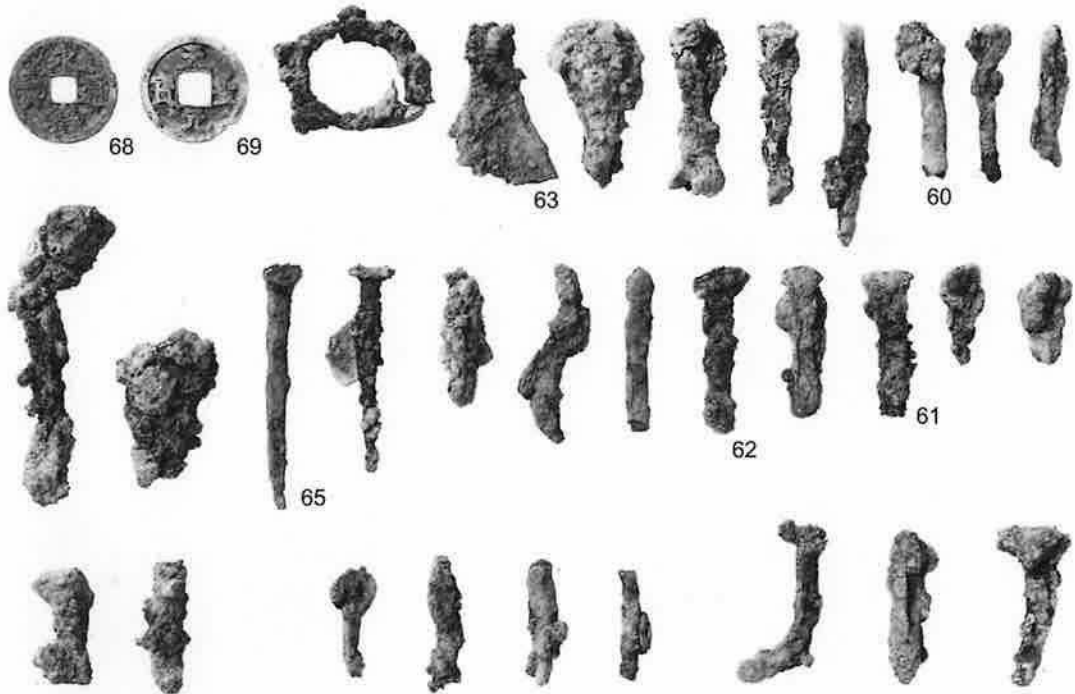
(1) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物（陶磁器2）



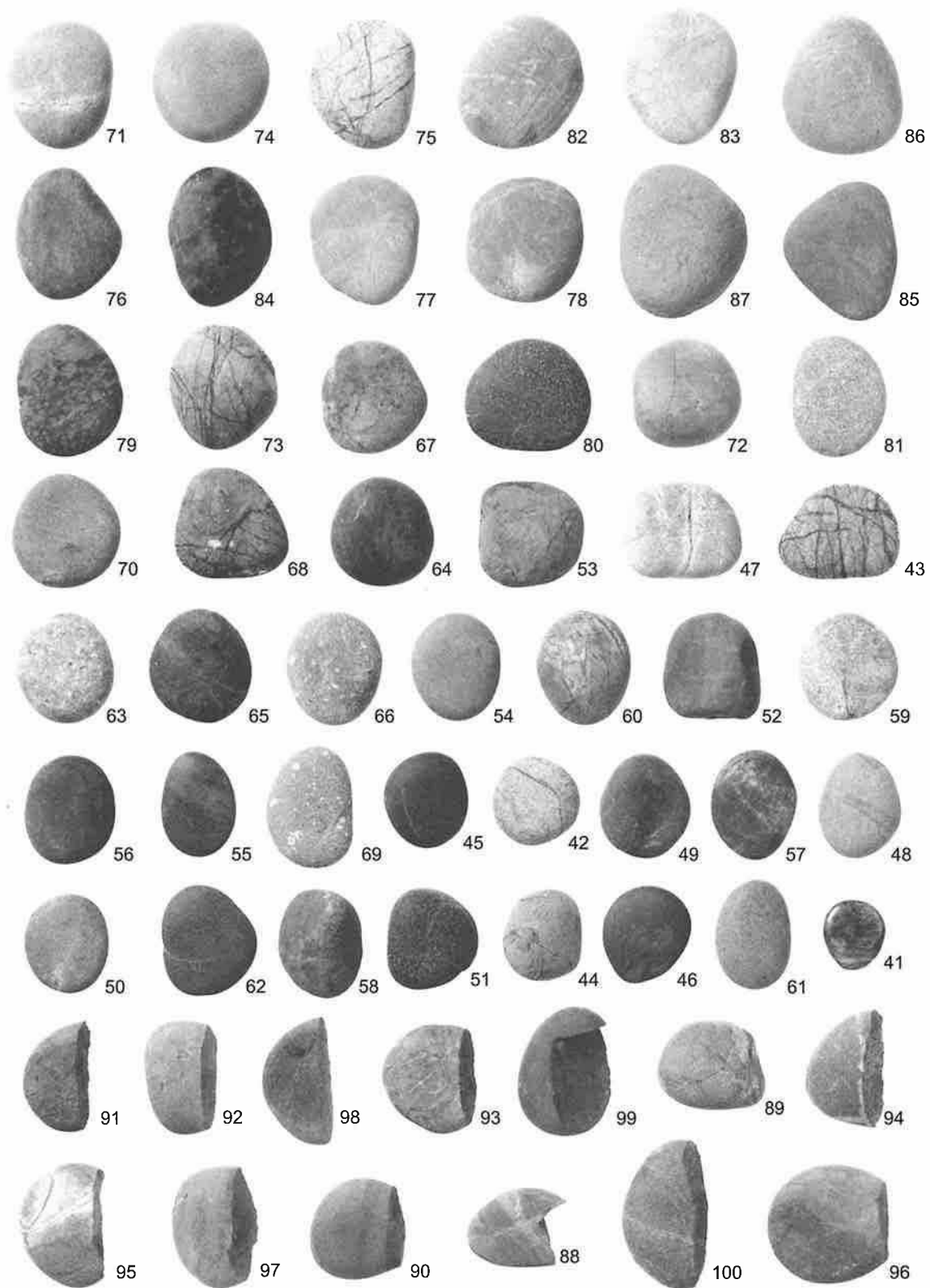
(2) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物（金属器1）



(1) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物（金属器2）



(2) 京極氏遺跡第2次調査出土遺物（金属器3）



京極氏館跡第2次・第3次調査出土遺物（小円礫）



(1) 京極氏遺跡第3次調査区全景（南から）



(2) 京極氏館跡第3次調査区全景（北から）



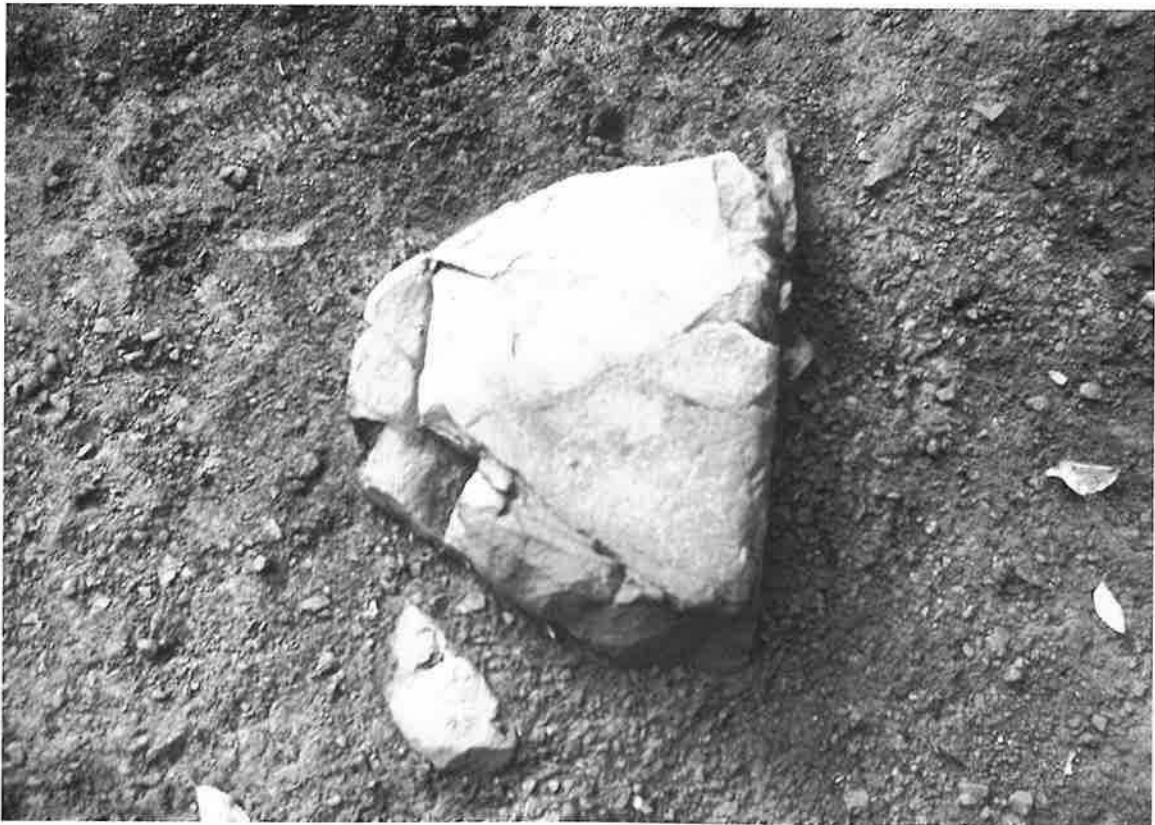
(1) 京極氏館跡第3次調査礎石建物SB02（北から）



(2) 京極氏館跡第3次調査礎石建物SB02（東から）



(1) SB02の礎石



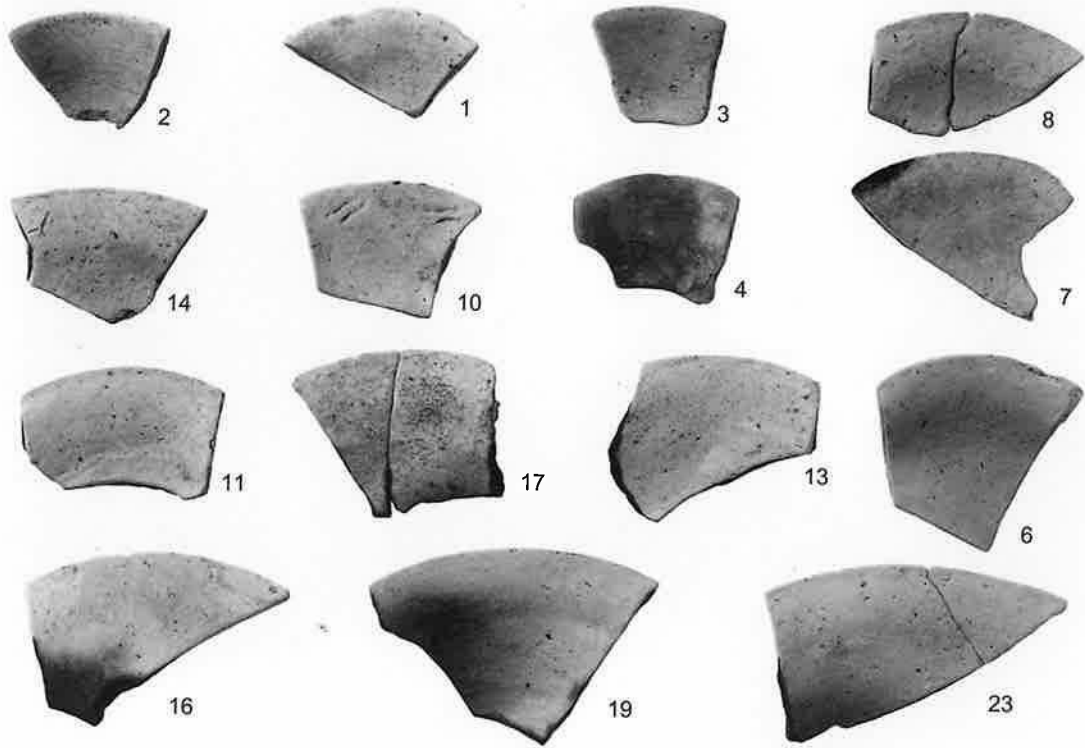
(2) SB02の礎石



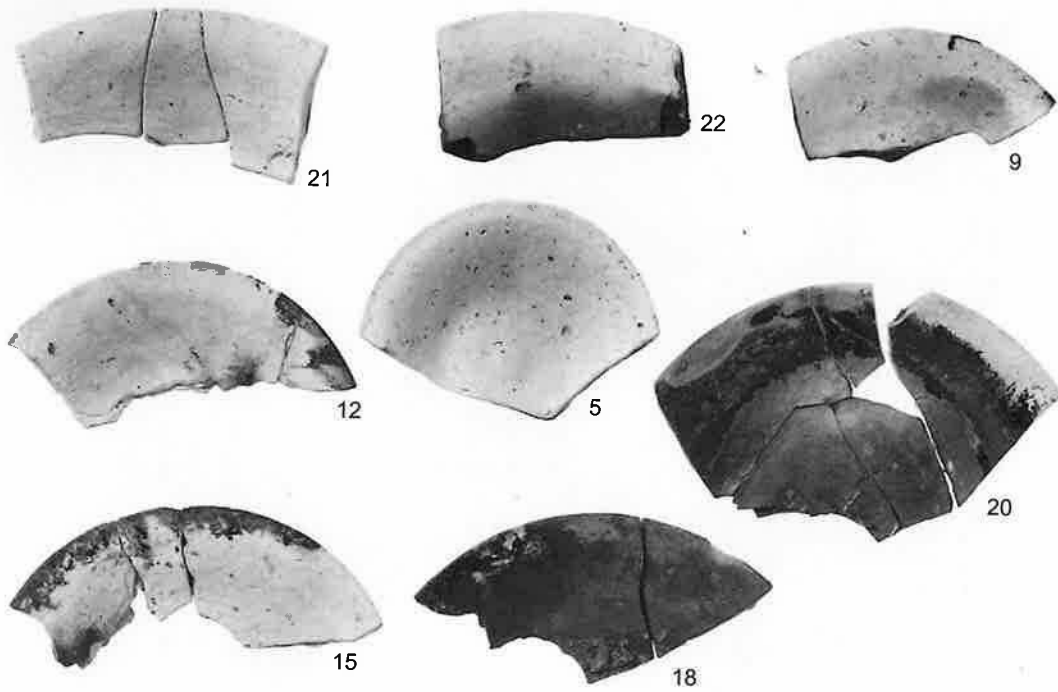
(1) 京極氏遺跡第3次調査庭園遺構SX05 (南から)



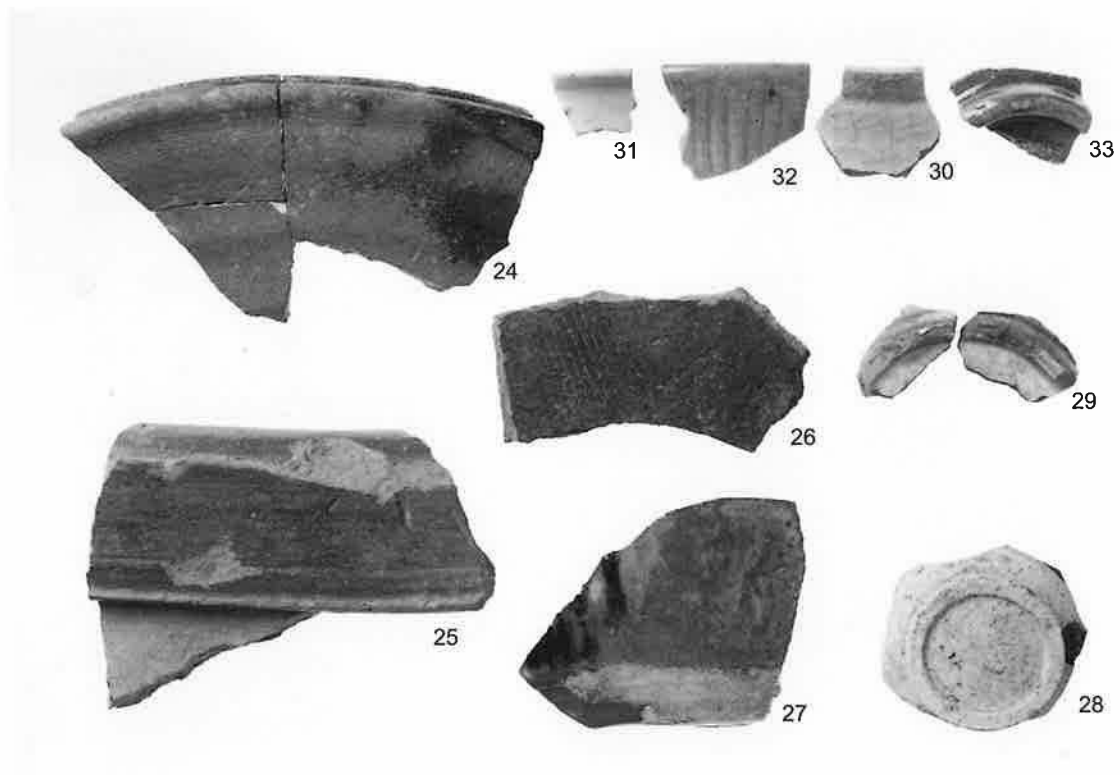
(2) 京極氏遺跡第3次調査庭園遺構SX05 (東から)



(1) 京極氏遺跡第3次調査出土遺物 (土師器皿1)



(2) 京極氏遺跡第3次調査出土遺物 (土師器皿2)



(1) 京極氏遺跡第3次調査出土遺物（陶磁器）



(2) 京極氏遺跡第3次調査出土遺物（金属器1）



(1) 京極氏遺跡第3次調査出土遺物（金属器2）



(2) 京極氏遺跡活用イベント「上平寺戦国浪漫のゆうべ」風景



(1) 弥高寺本堂跡全景



(2) 弥高寺坊院跡全景



(1) 弥高寺本堂跡発掘調査風景（第1次調査区）



(2) 弥高寺坊院跡発掘調査風景（第2次調査区）



(1) 弥高寺跡第1次調査区全景（東から）



(2) 弥高寺跡第1次調査区全景（北から）



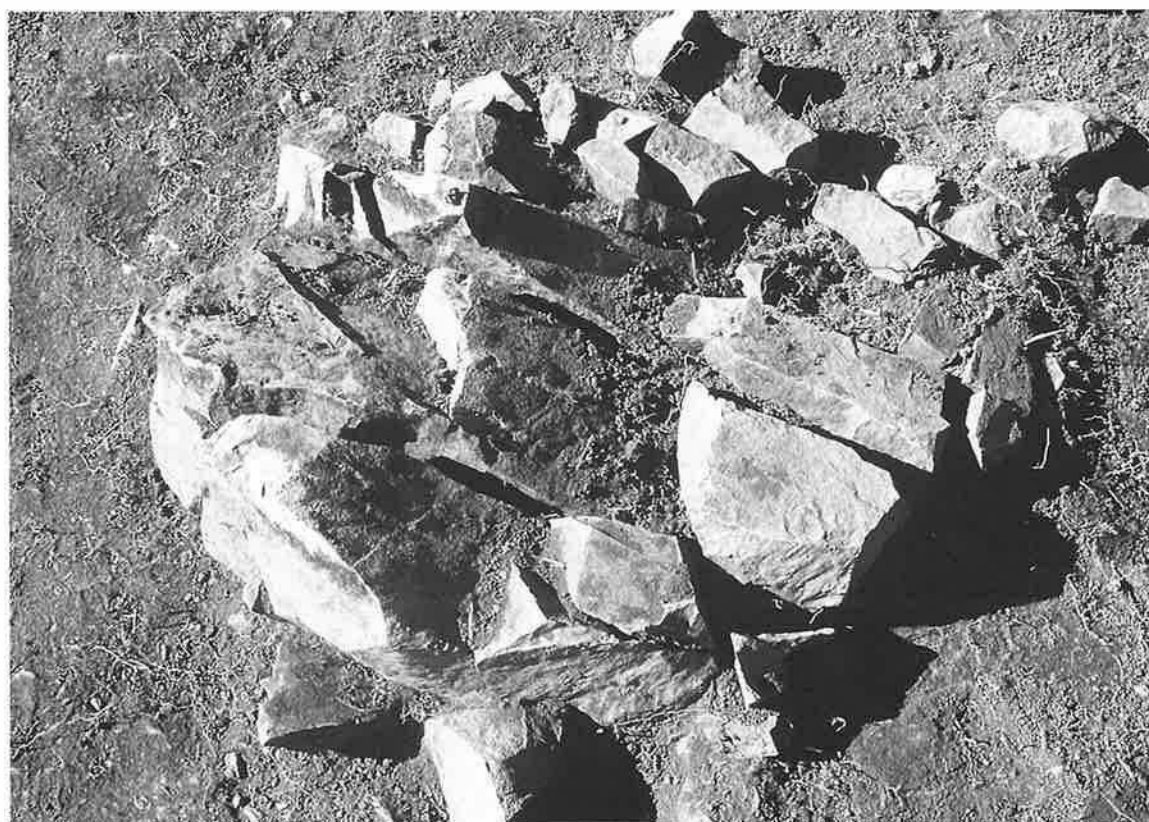
(1) 弥高寺跡第1次調査基壇SX01 (南から)



(2) 弥高寺跡第1次調査基壇SX01 (東から)



(1) 弥高寺跡第1次調査礎石建物SB01の礎石



(2) SB01の礎石



(1) SB01の礎石



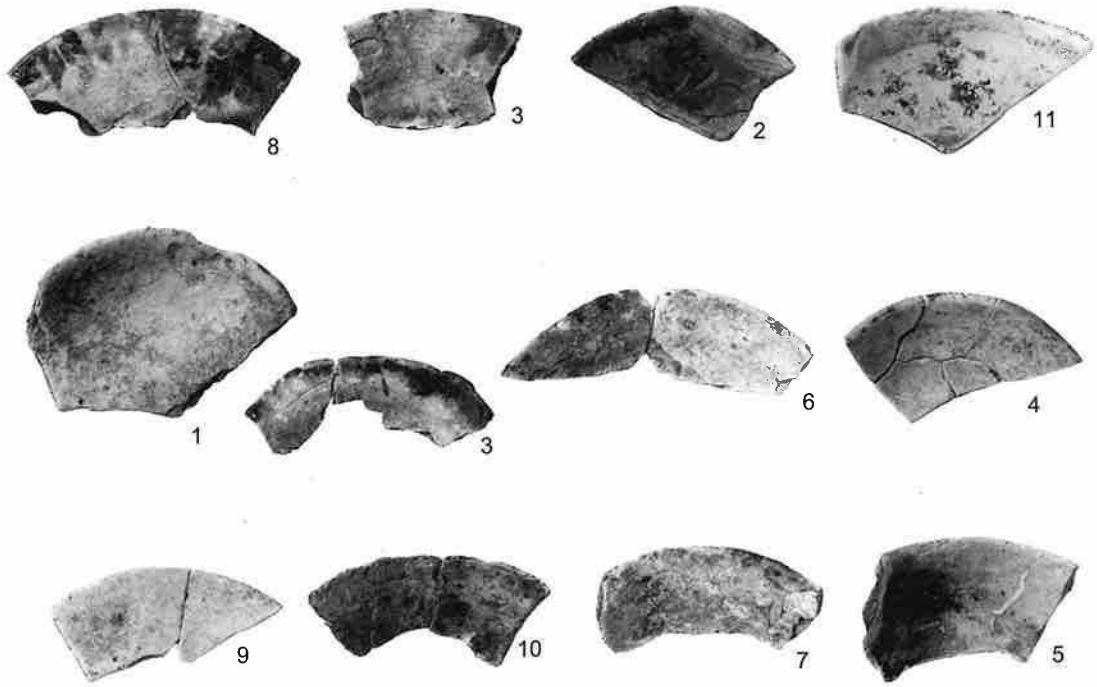
(2) SB01の礎石



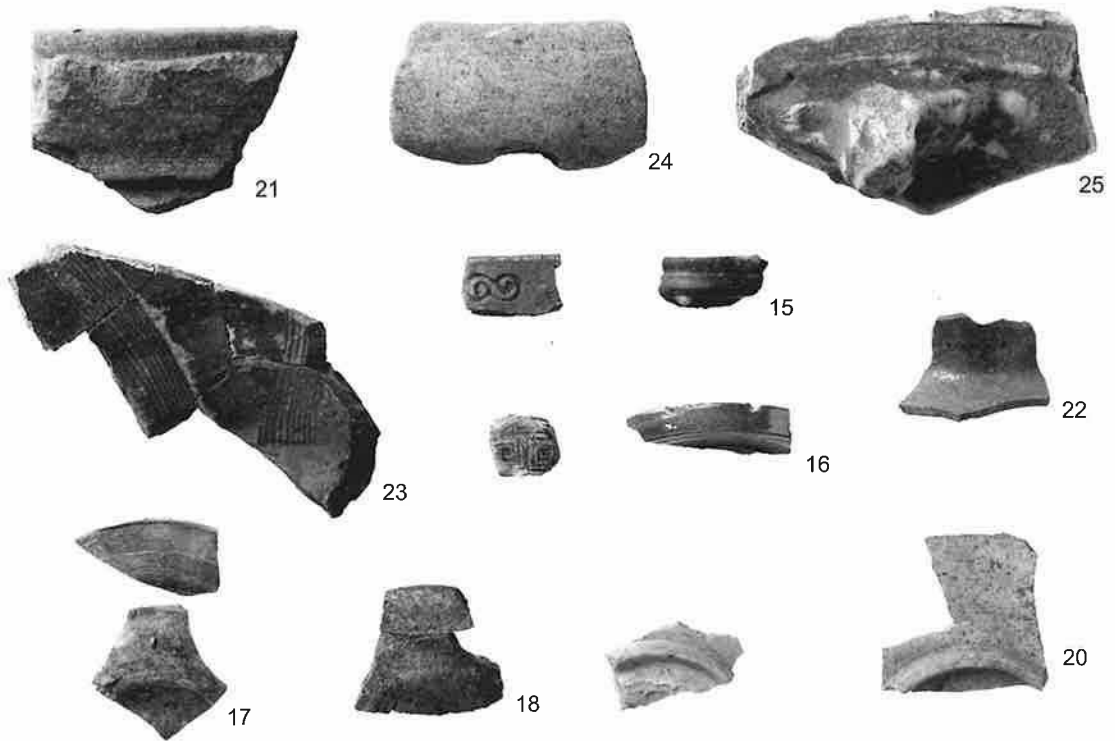
(1) 弥高寺跡第1次調査石敷きSX02



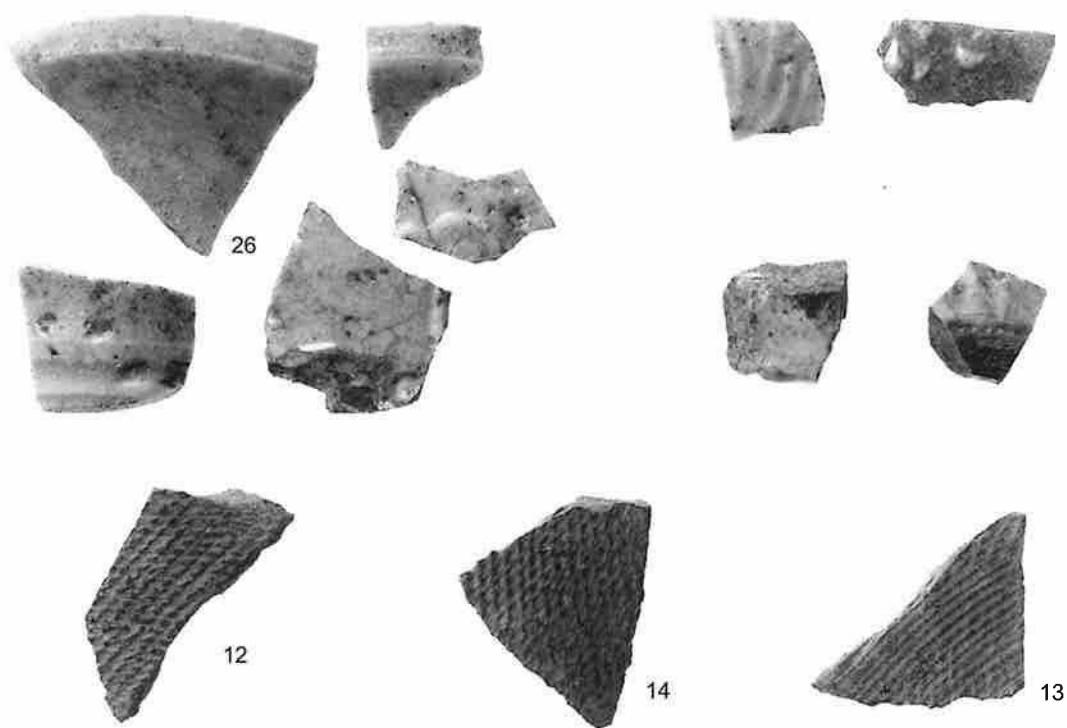
(2) 弥高寺跡から濃尾平野を望む



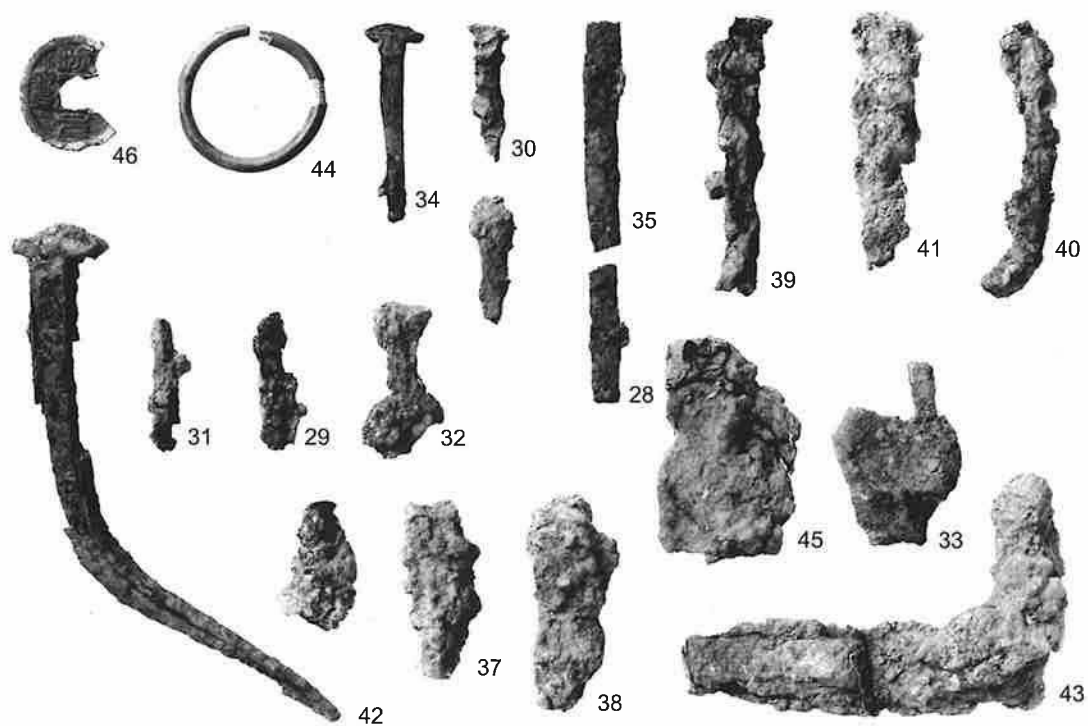
(1) 弥高寺跡第1次調査出土遺物 (土師器皿)



(2) 弥高寺跡第1次調査出土遺物 (陶磁器)



(1) 弥高寺跡第1次調査出土遺物 (貿易陶磁・須恵器)



(2) 弥高寺跡第1次調査出土遺物 (金属器)



(1) 弥高寺跡第2次調査区全景（北から）



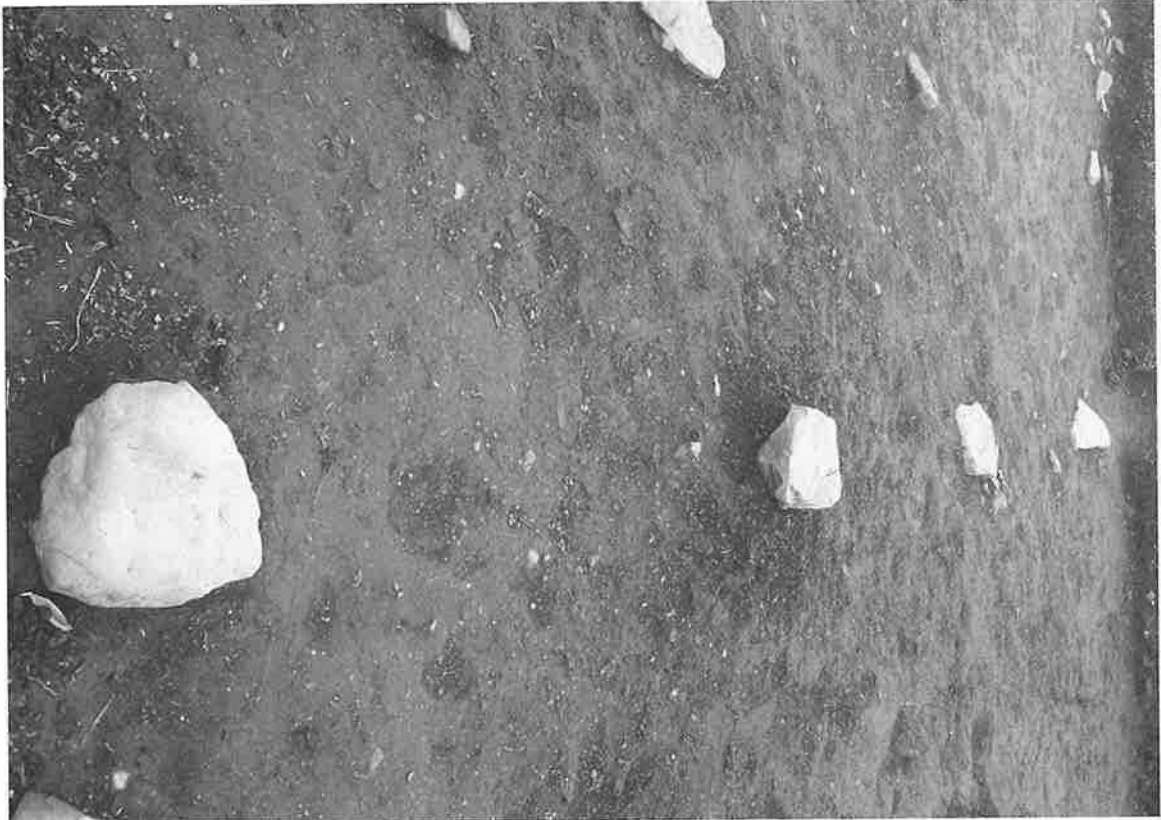
(2) 弥高寺跡第2次調査区全景（西から）



(1) 弥高寺跡第2次調査礎石建物SB03 (東から)



(2) 弥高寺跡第2次調査礎石建物SB03 (西から)



(1) SB03の礎石



(2) SB03の火床



(1) 弥高寺跡第2次調査礎石建物SB04 (西から)



(2) 弥高寺跡第2次調査礎石建物SB04 (南から)



(1) 弥高寺跡第2次調査地鎮遺構SX03



(2) SX03の内部



(1) 弥高寺跡第2次調査石段SX 0 4



(2) 弥高寺跡第2次調査入口南側土塁断ち割り状況



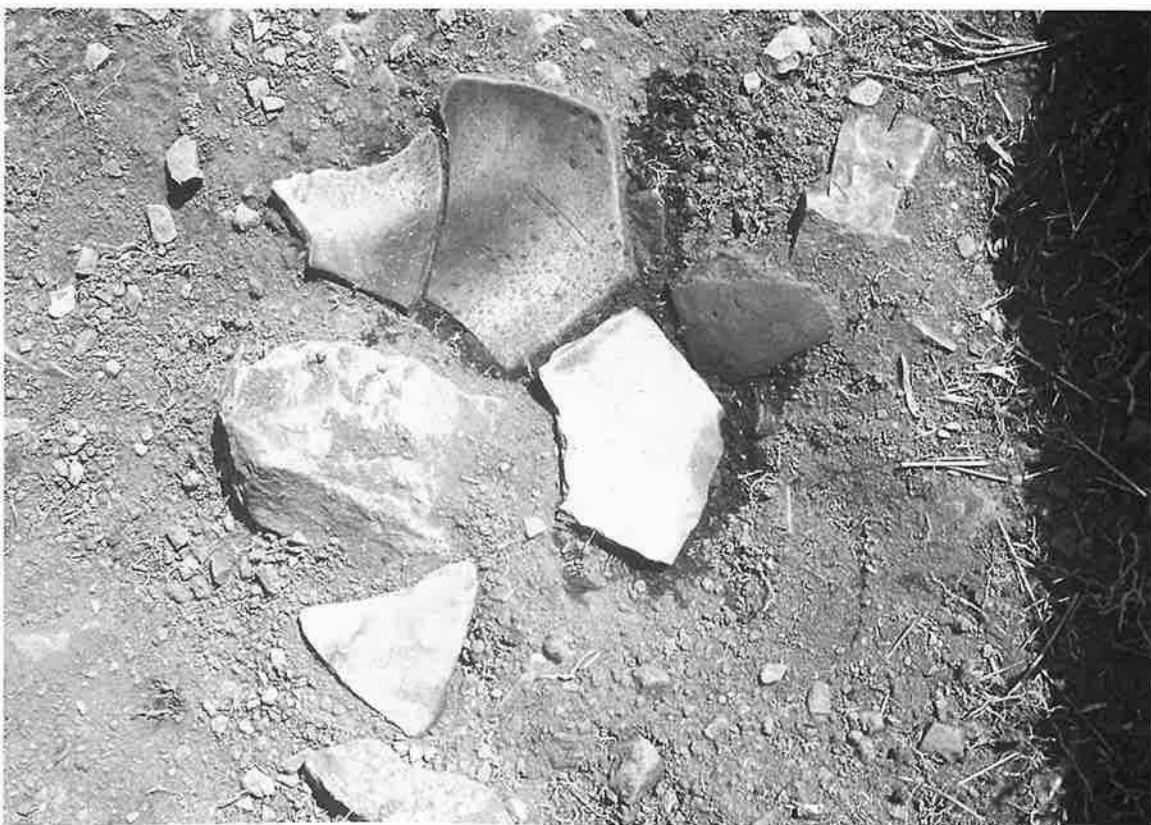
(1) 弥高寺跡第2次調査石垣SA 0 1 (南から)



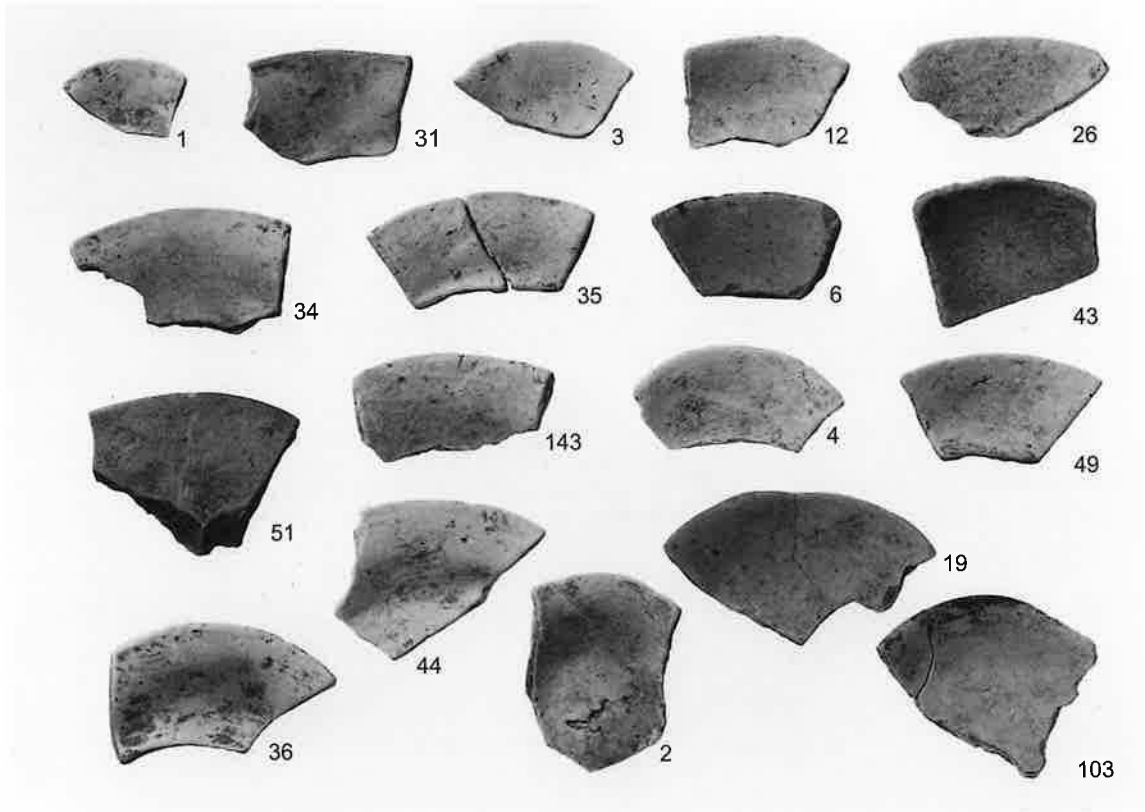
(2) 弥高寺跡第2次調査石垣SA 0 1 (東から)



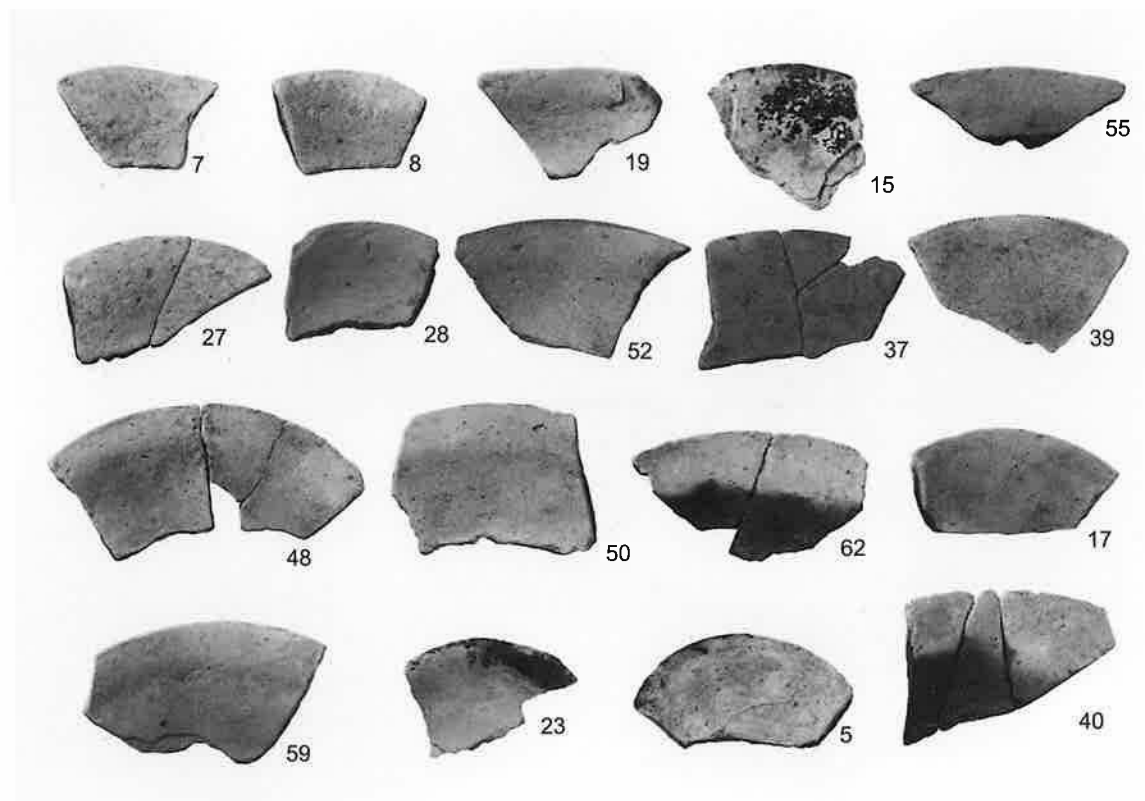
(1) 弥高寺跡第2次調査遺物出土状況



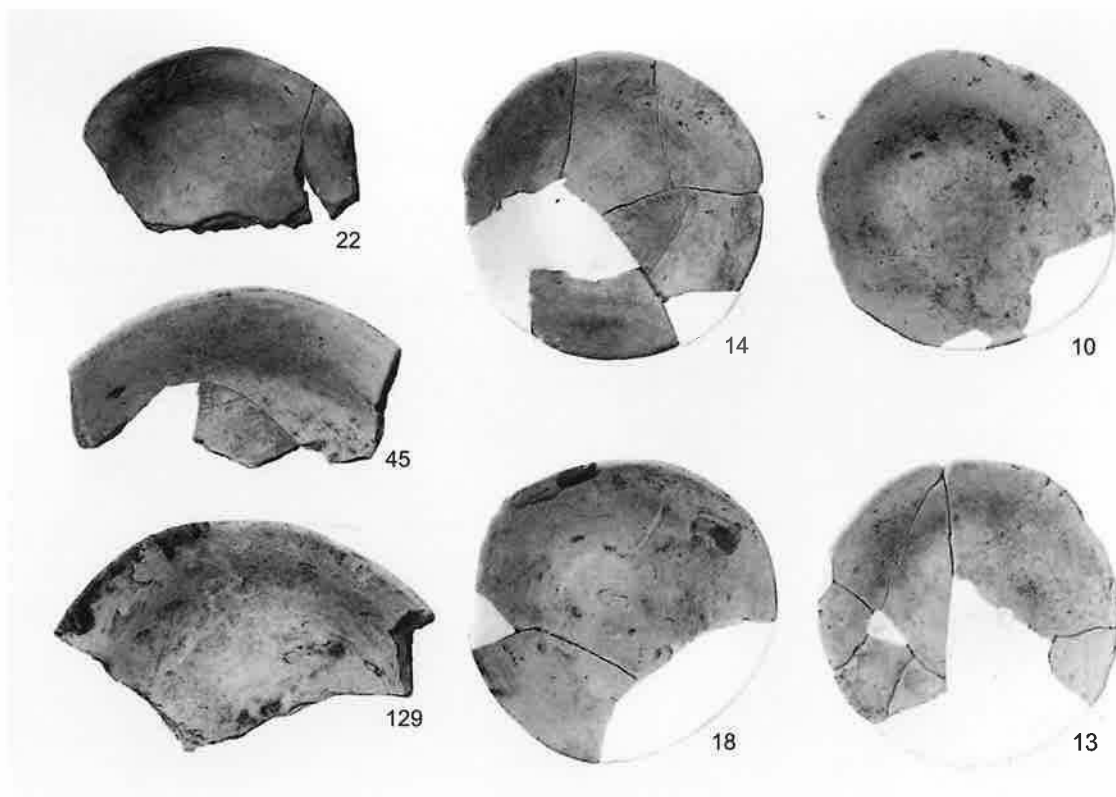
(2) 弥高寺跡第2次調査遺物出土状況



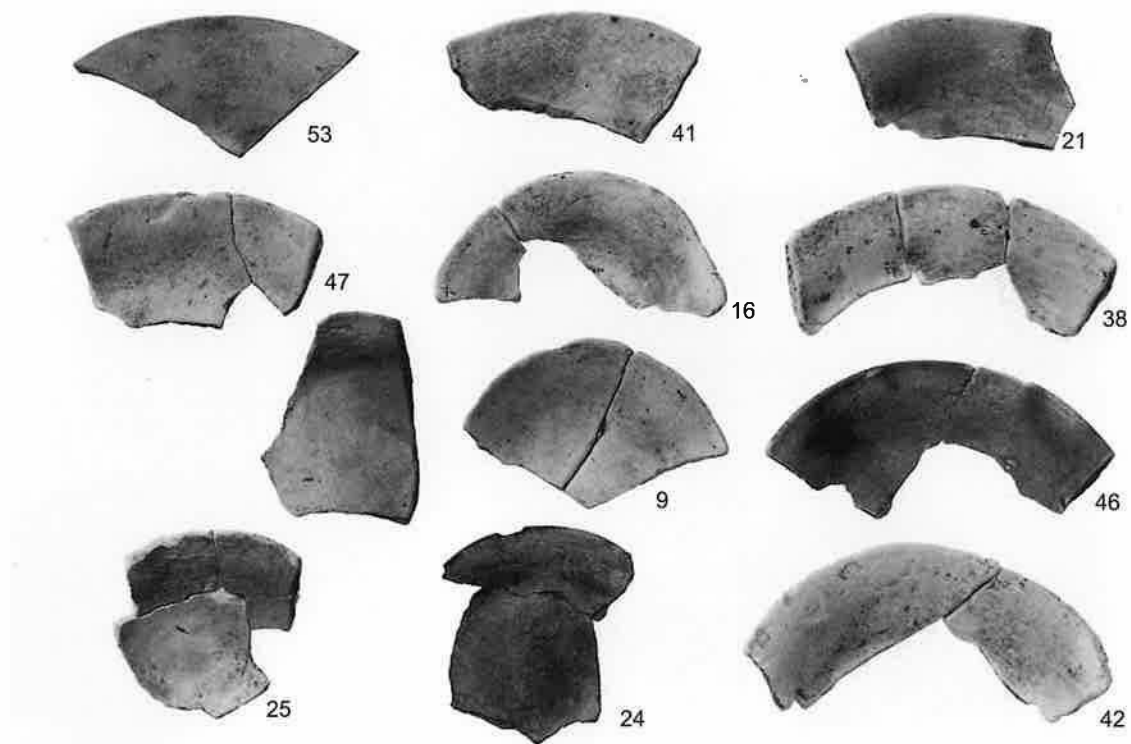
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物（土師器皿1）



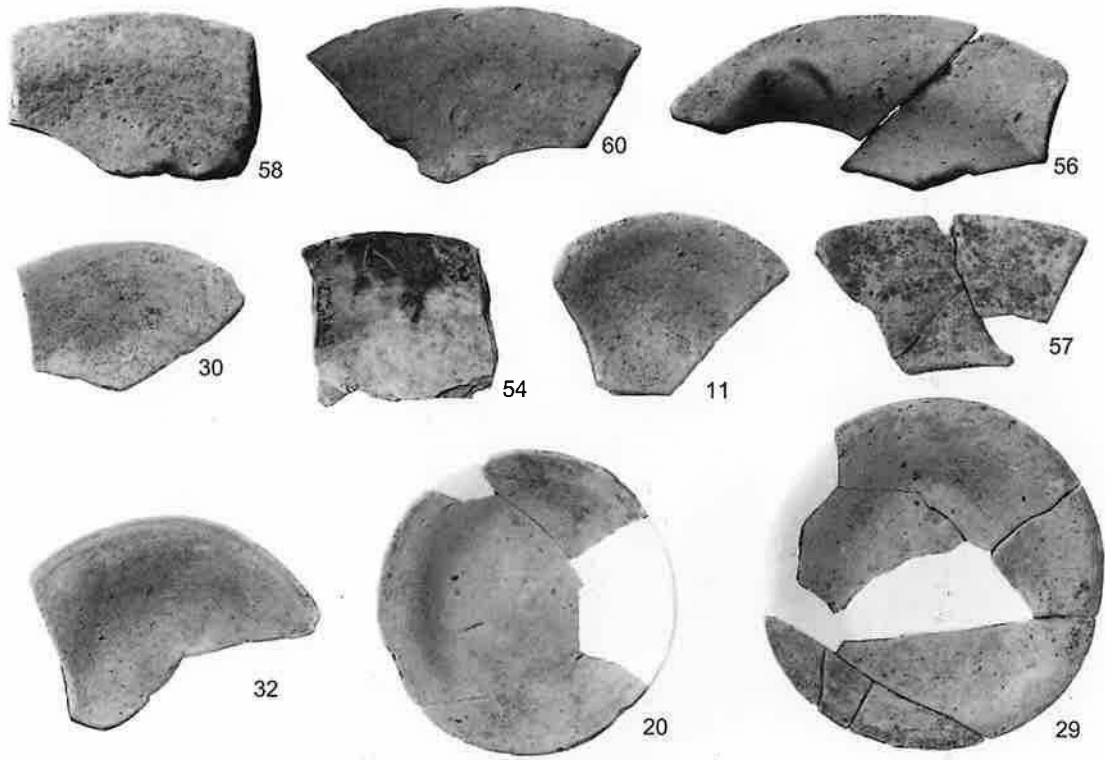
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物（土師器皿2）



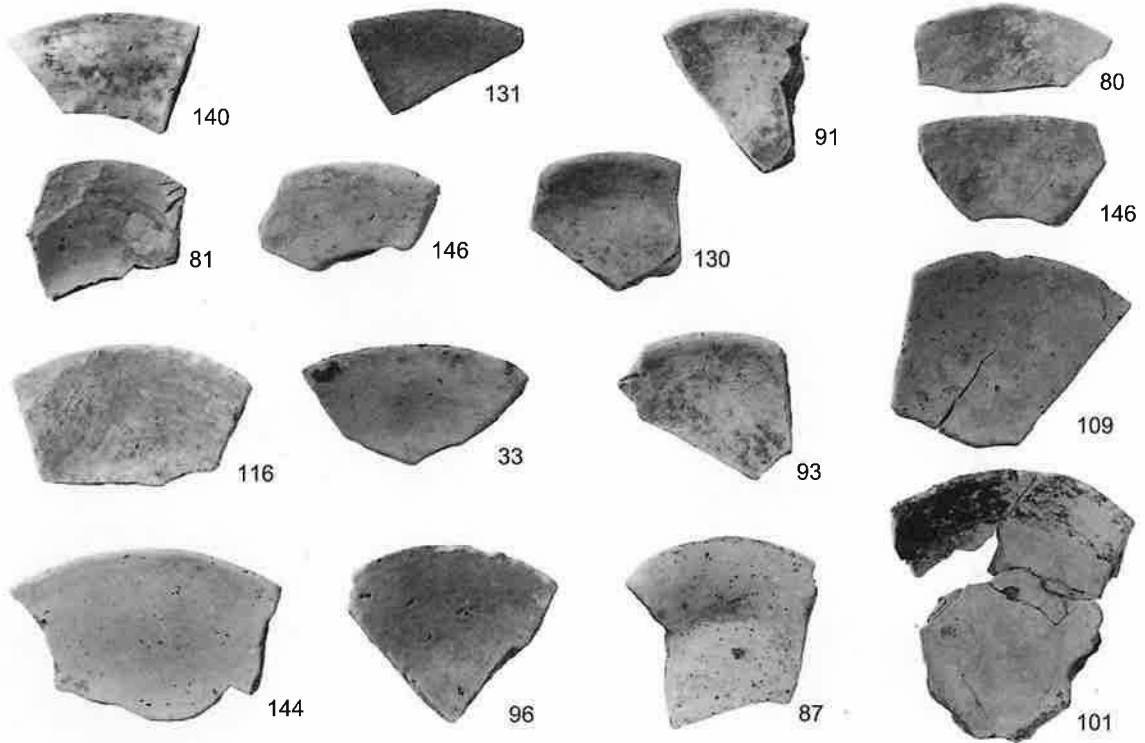
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿3)



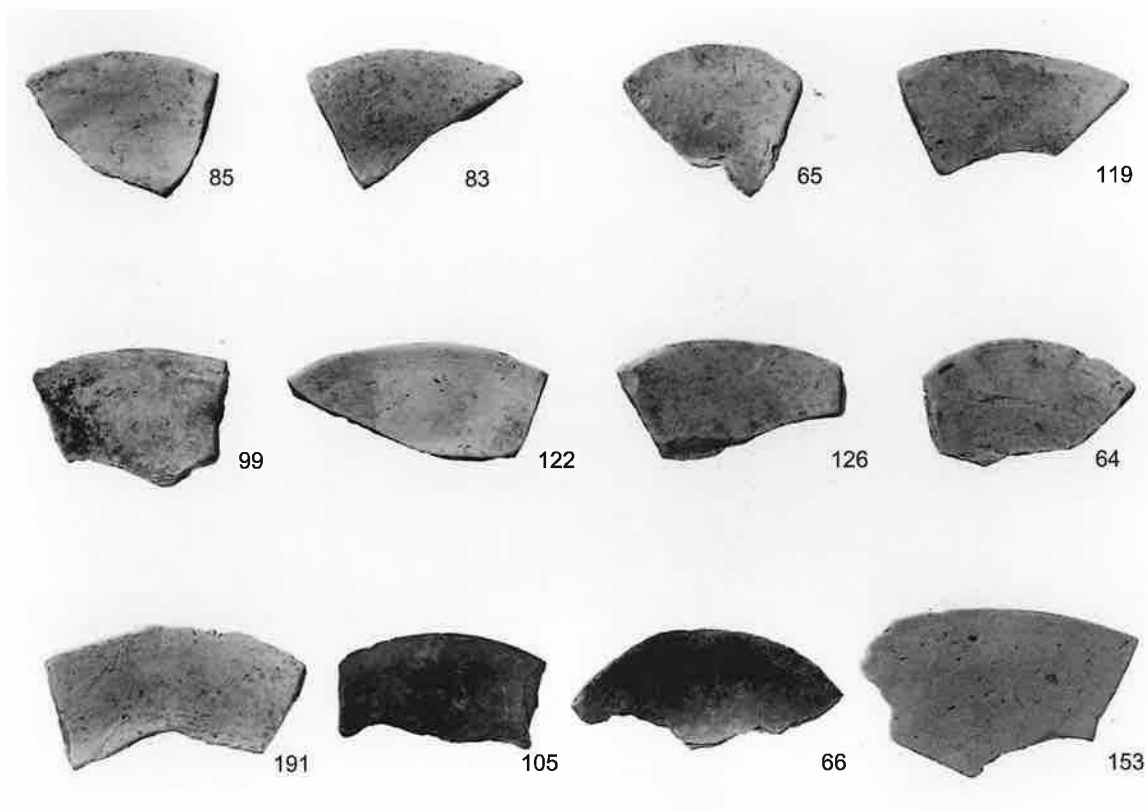
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿4)



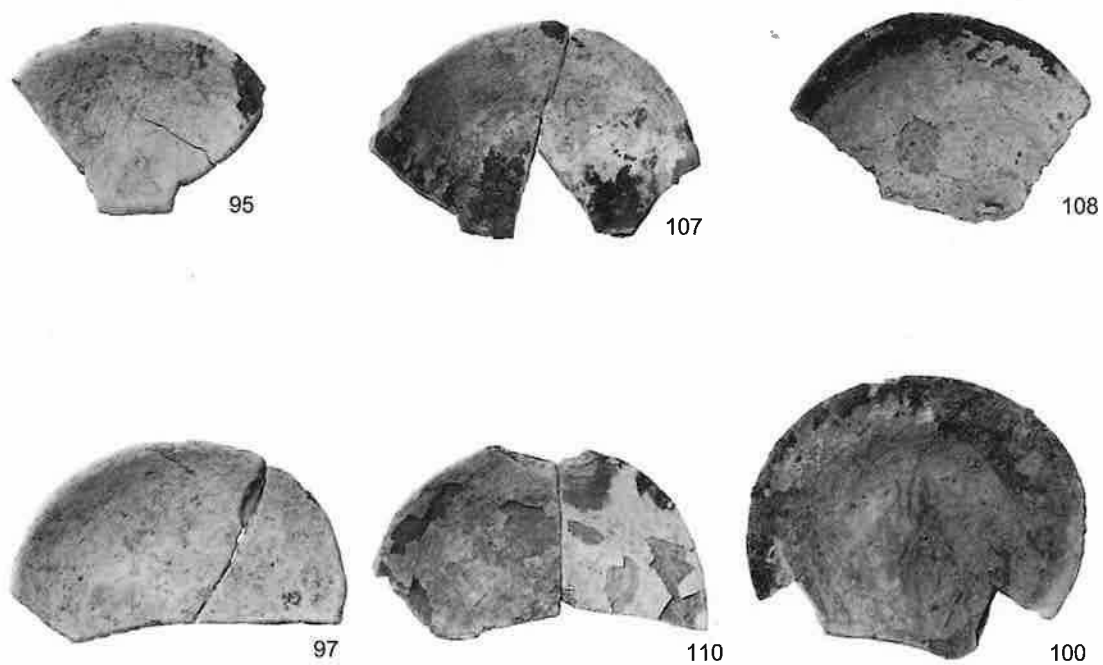
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿5)



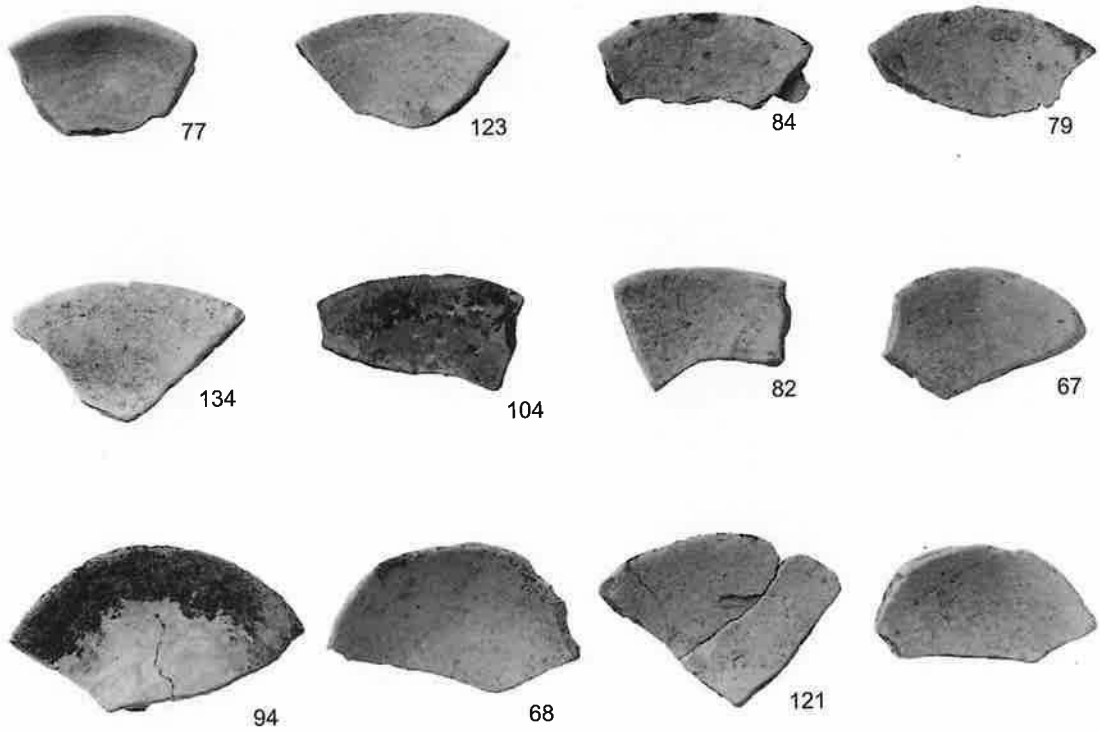
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿6)



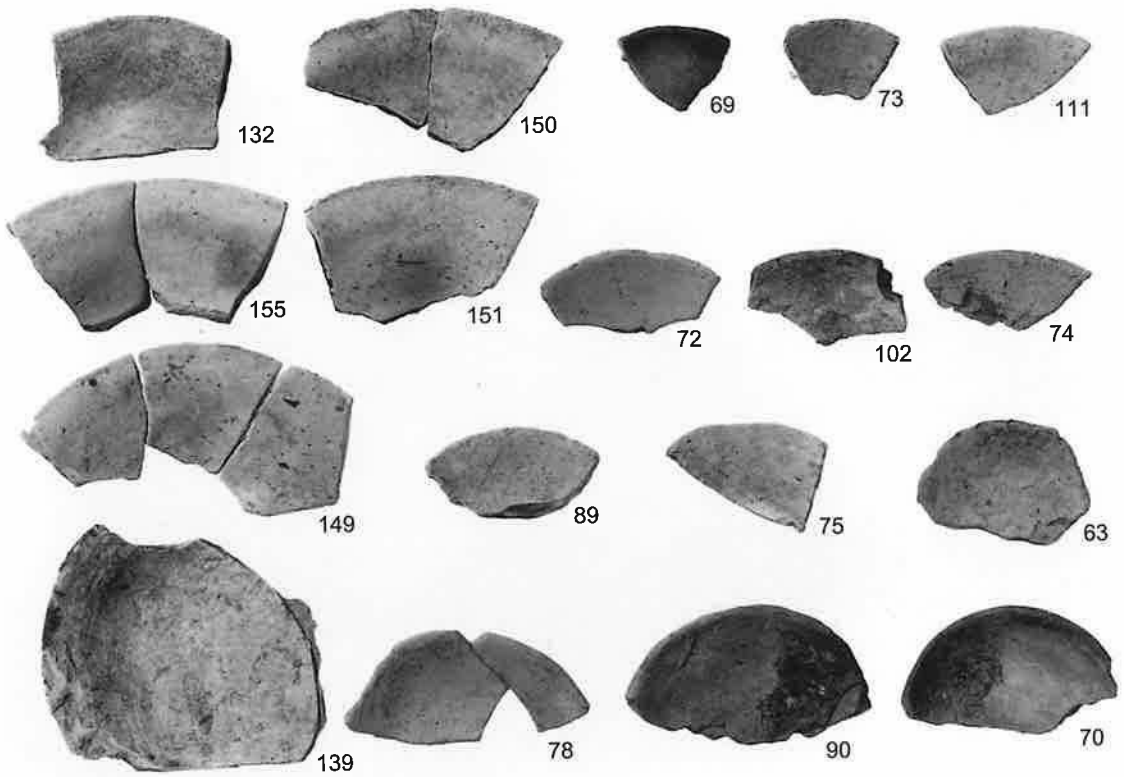
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿7)



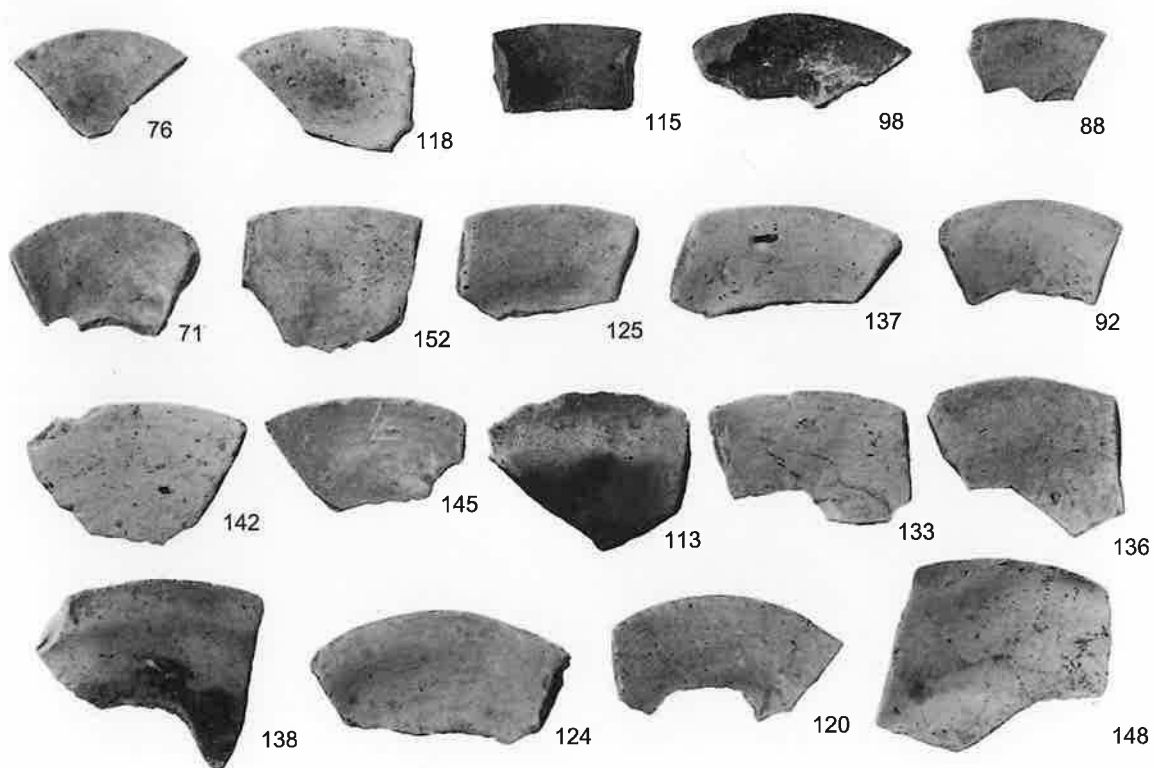
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿8)



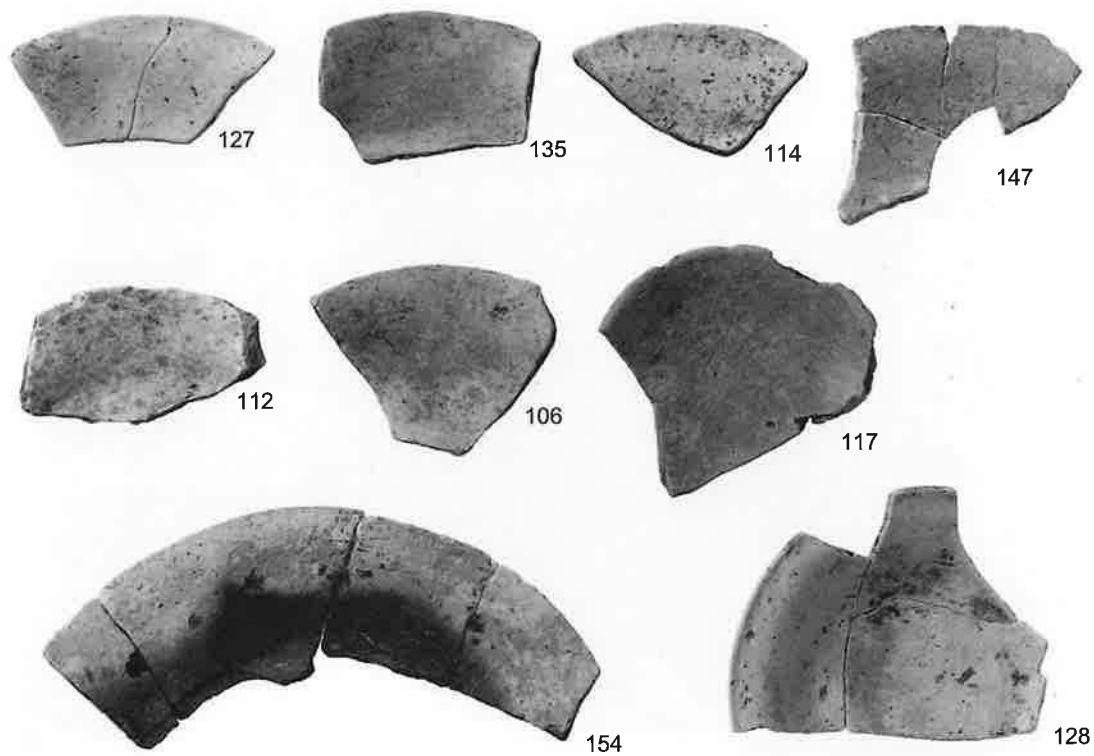
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿9)



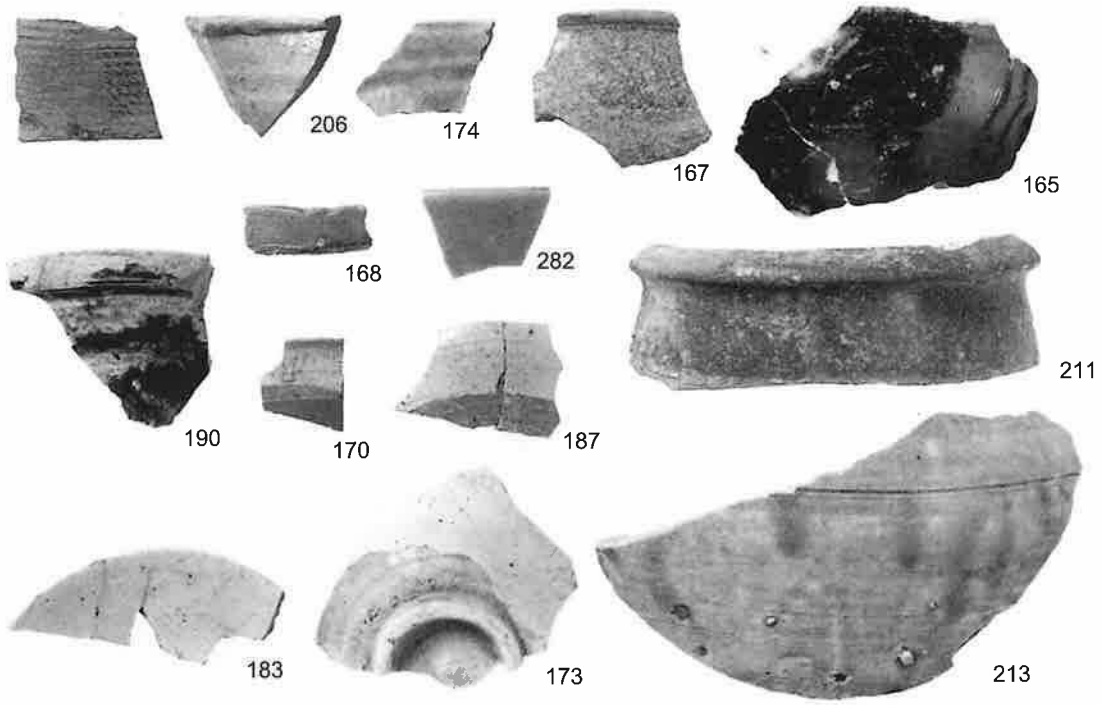
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿10)



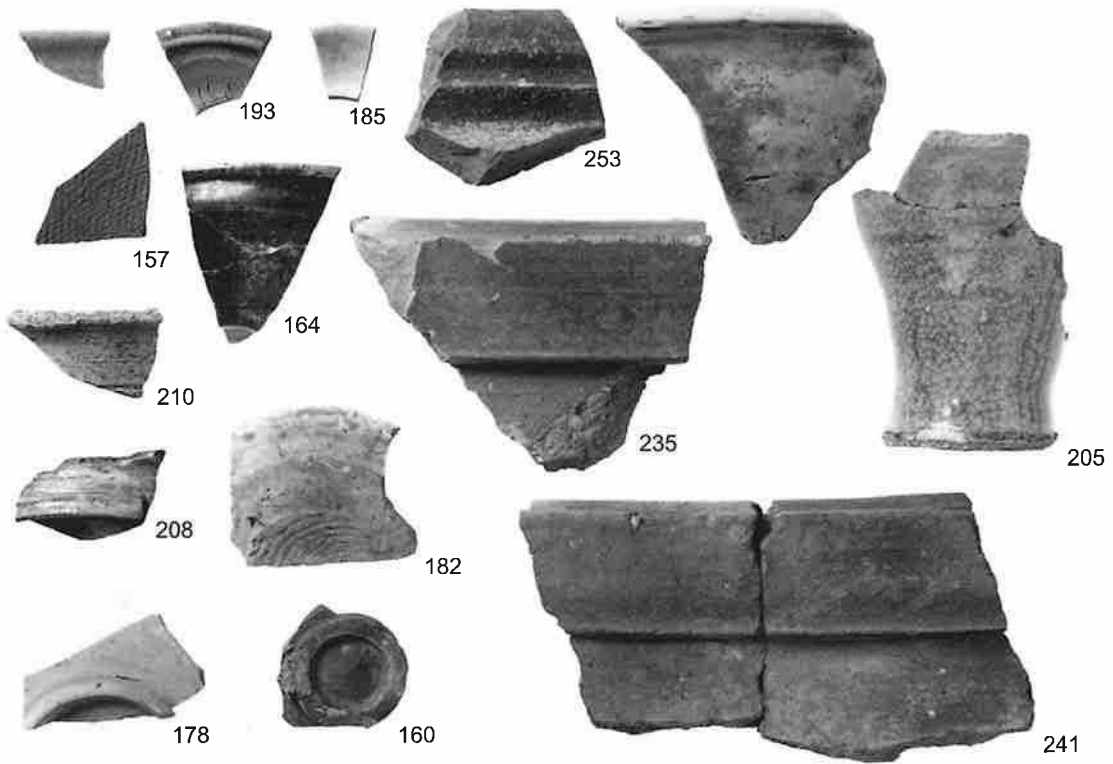
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿11)



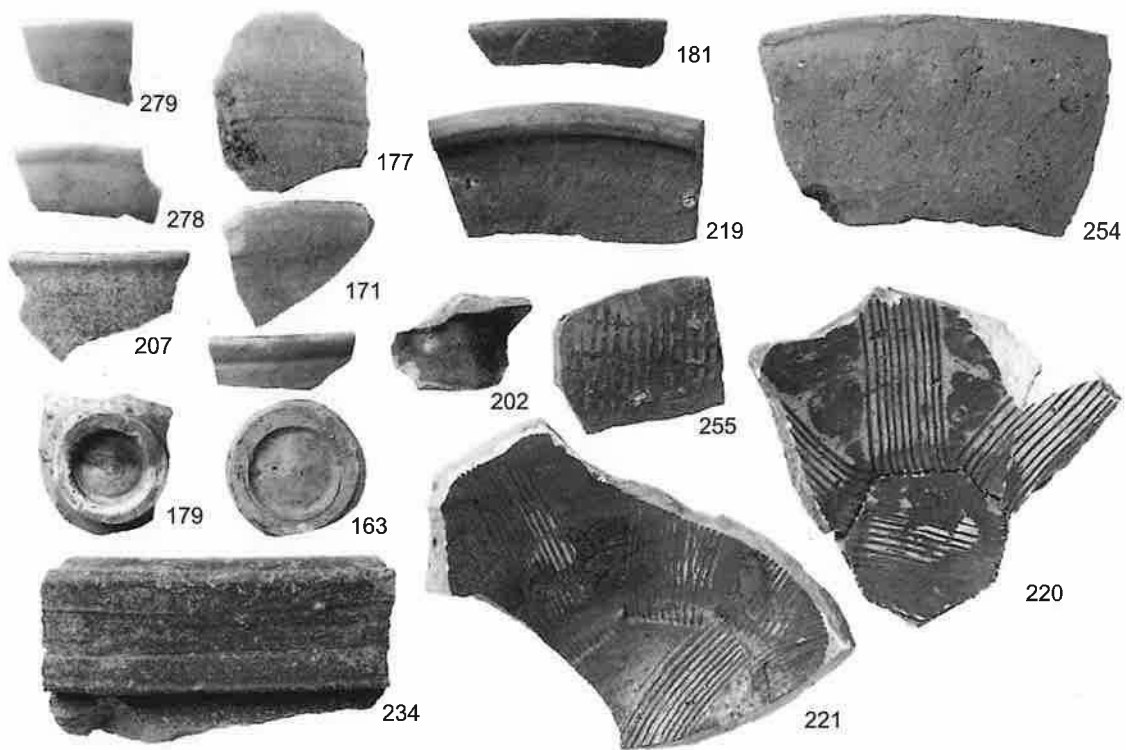
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (土師器皿12)



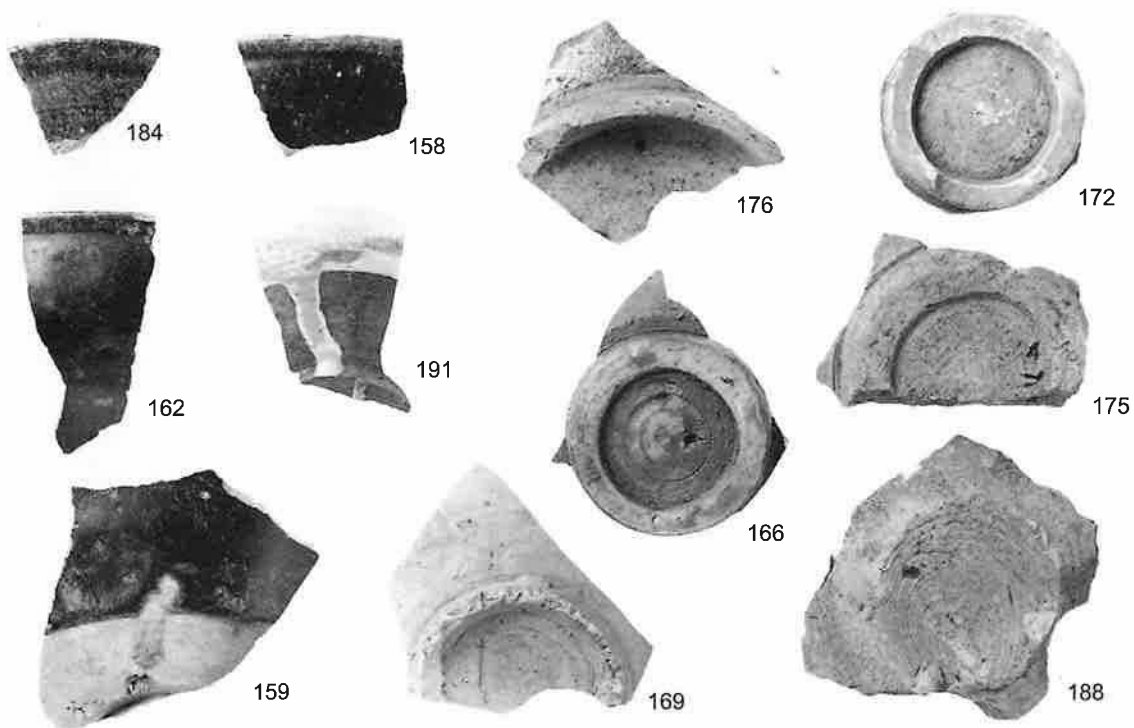
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器 1)



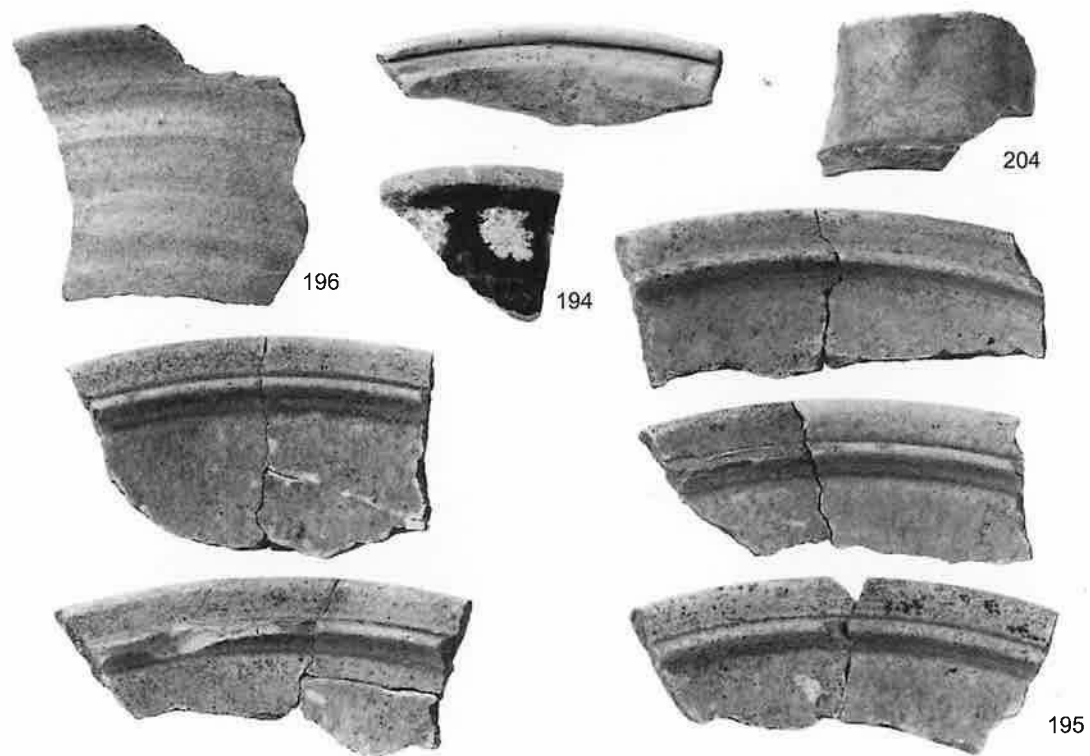
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器 2)



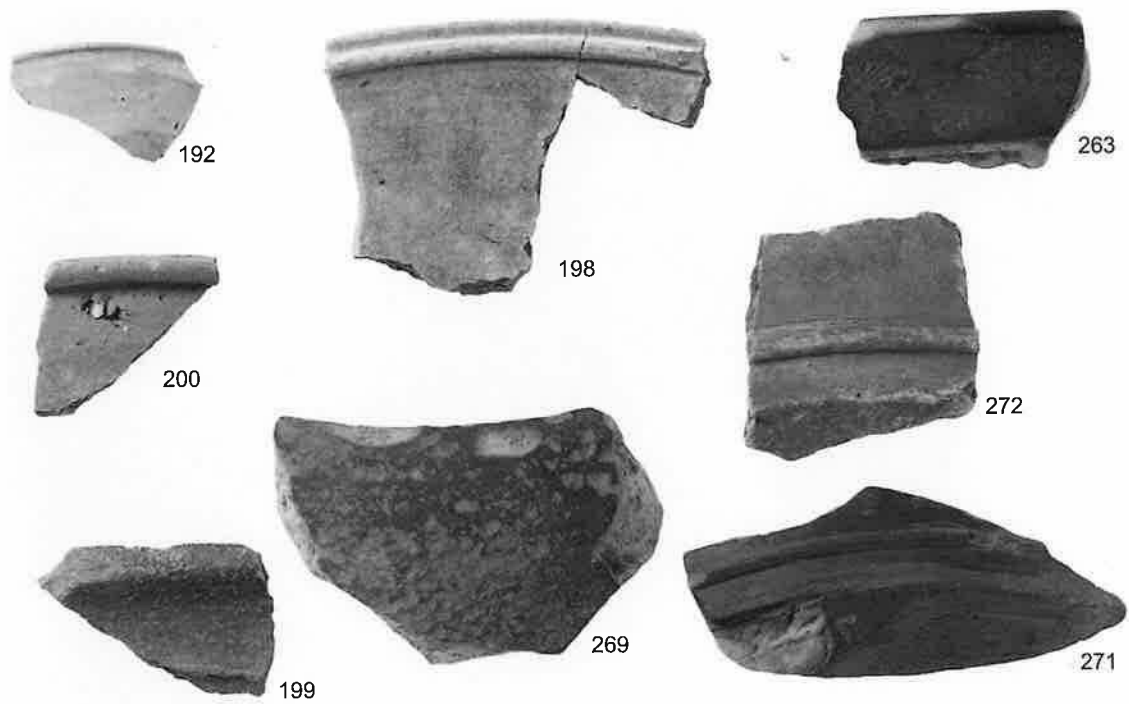
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器 3)



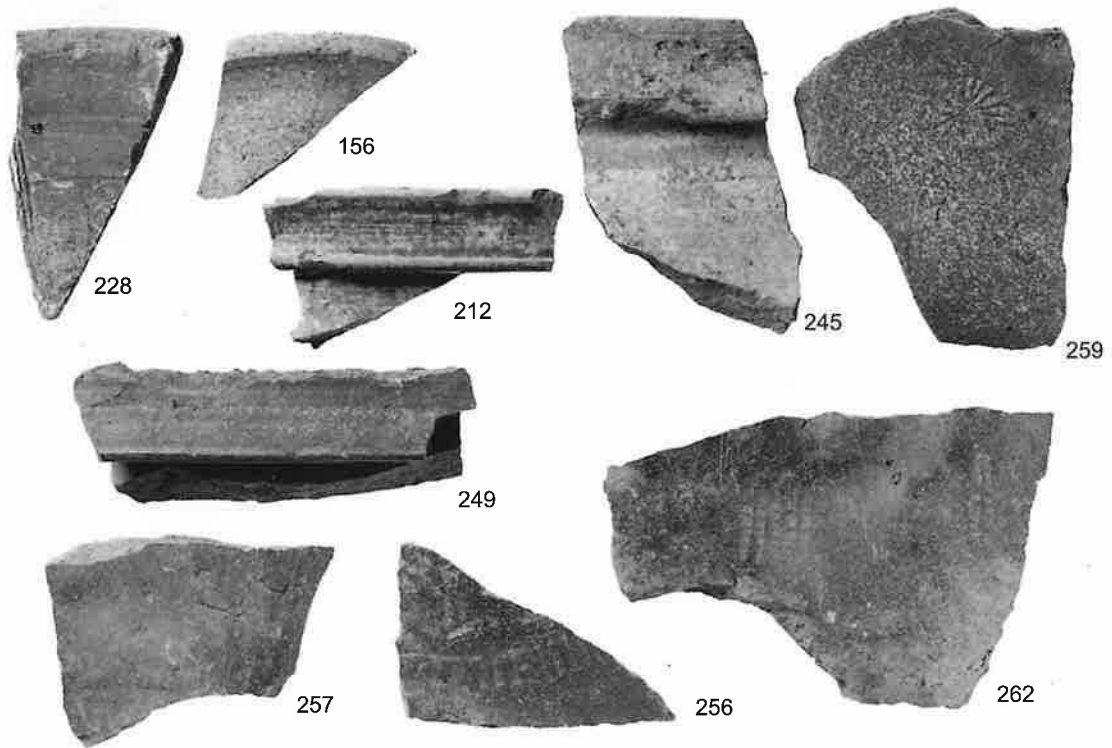
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器 4)



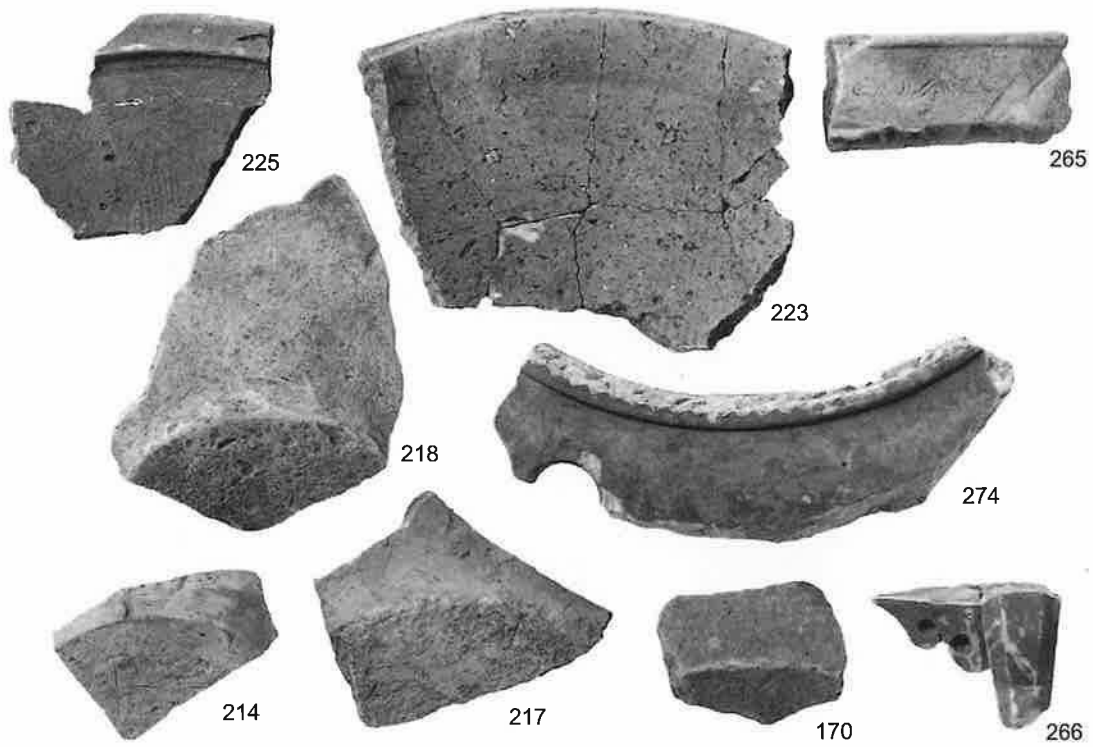
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器 5)



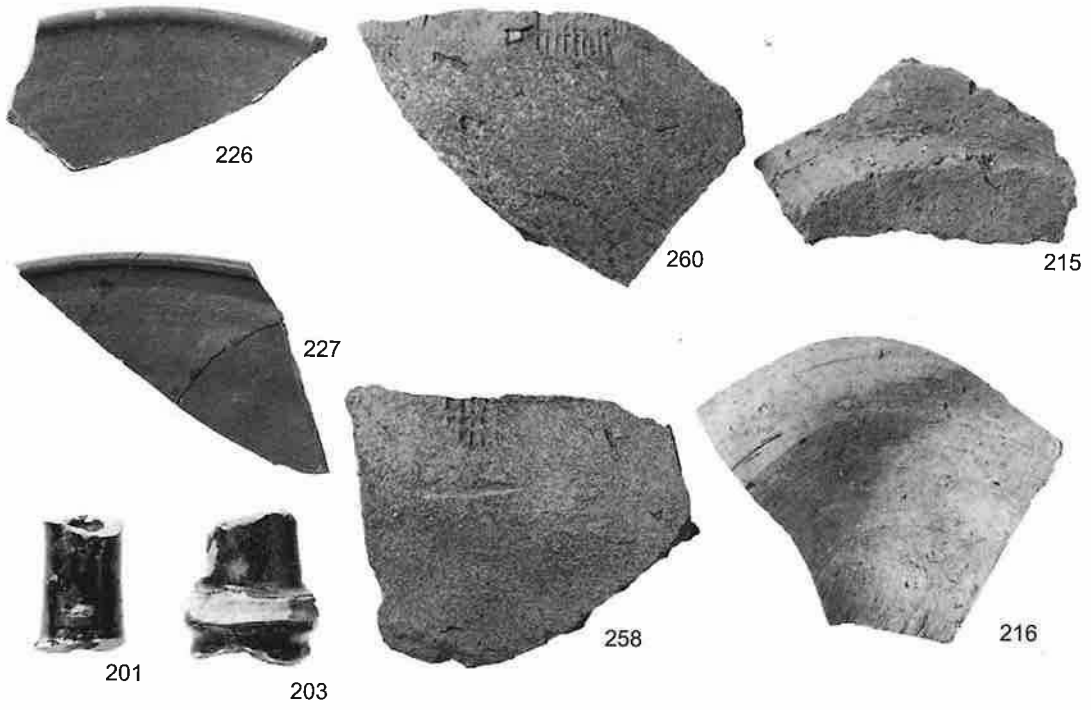
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器 6)



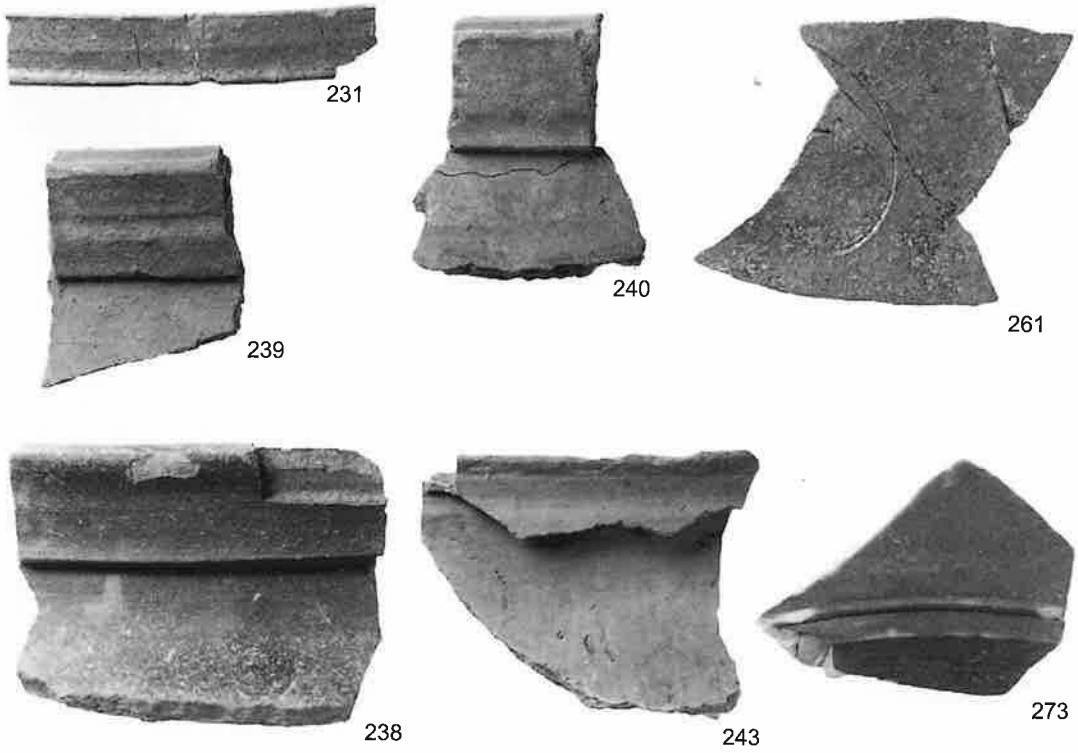
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器 7)



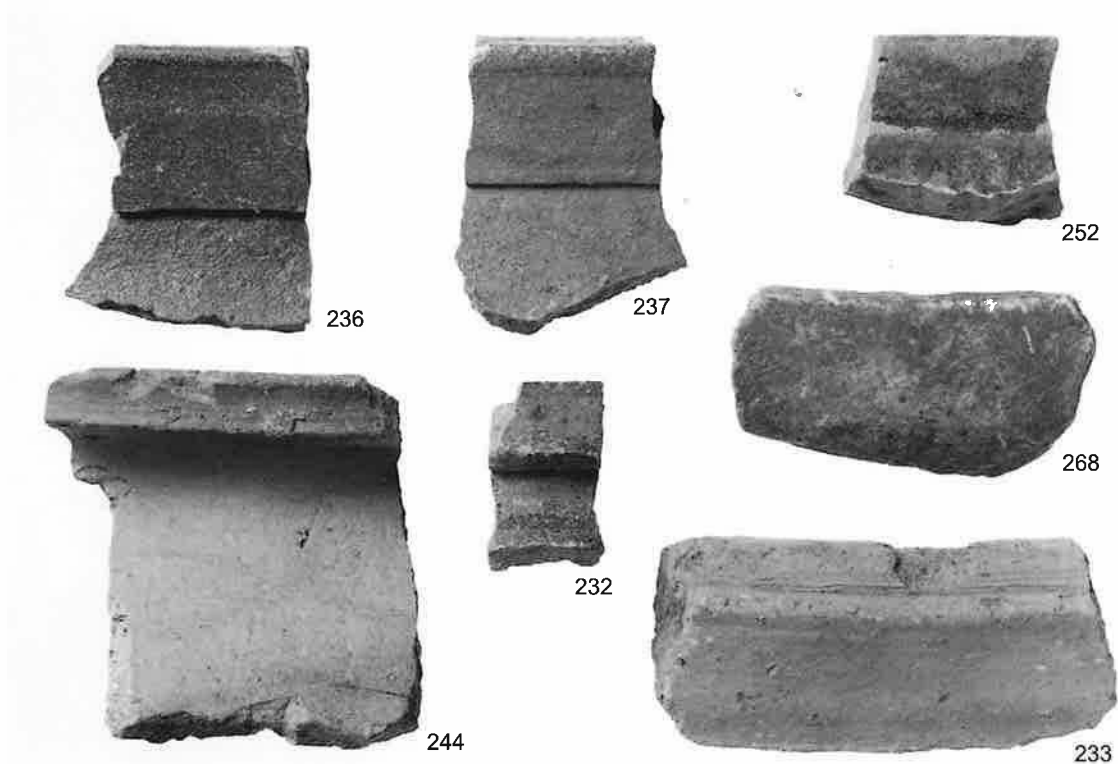
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器 8)



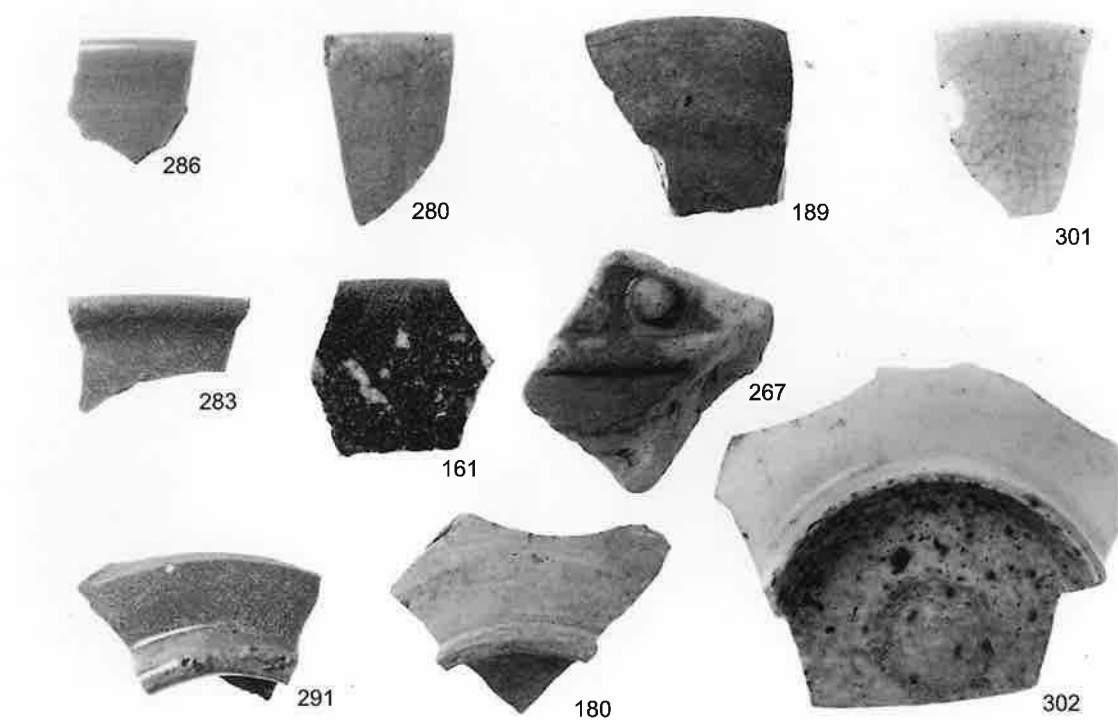
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器9)



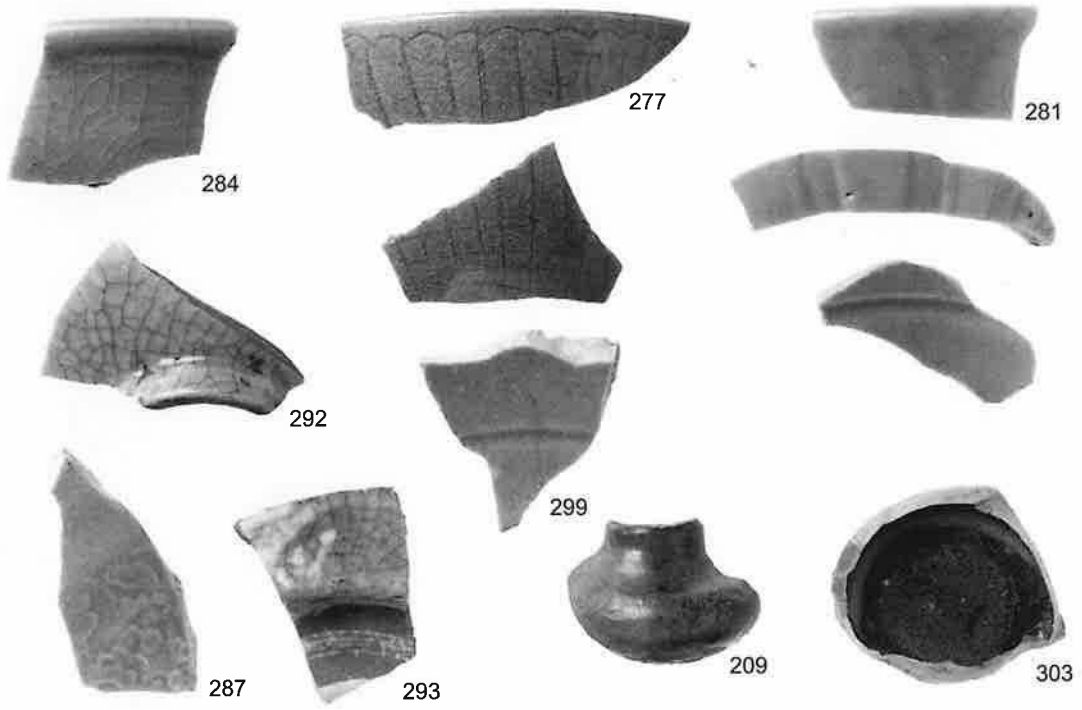
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器10)



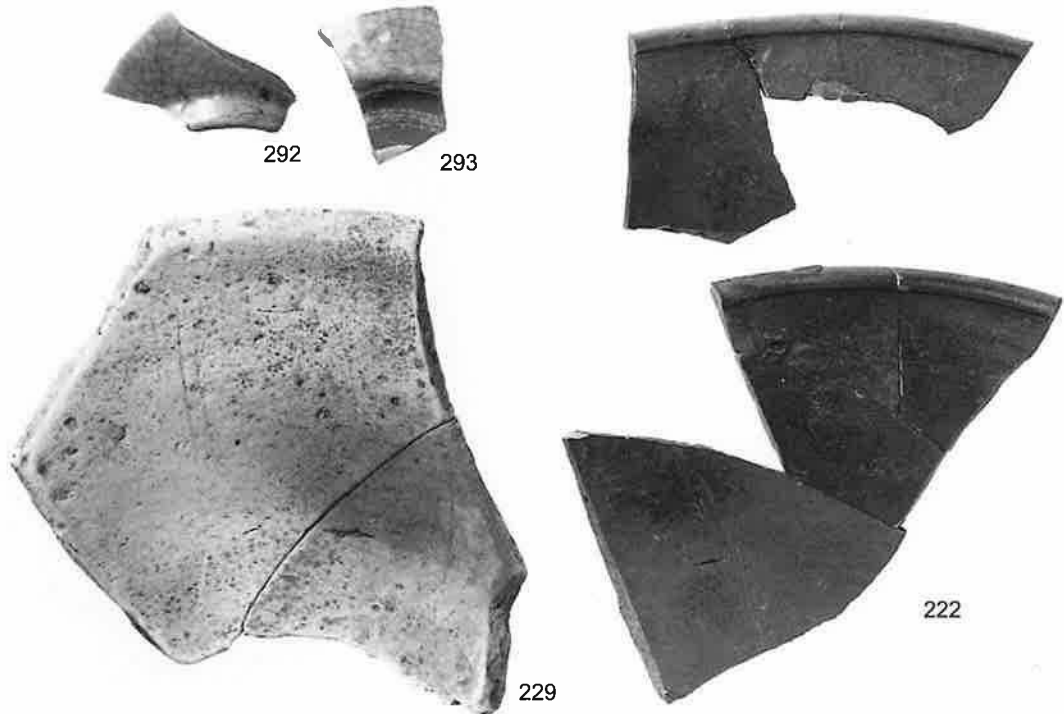
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器11)



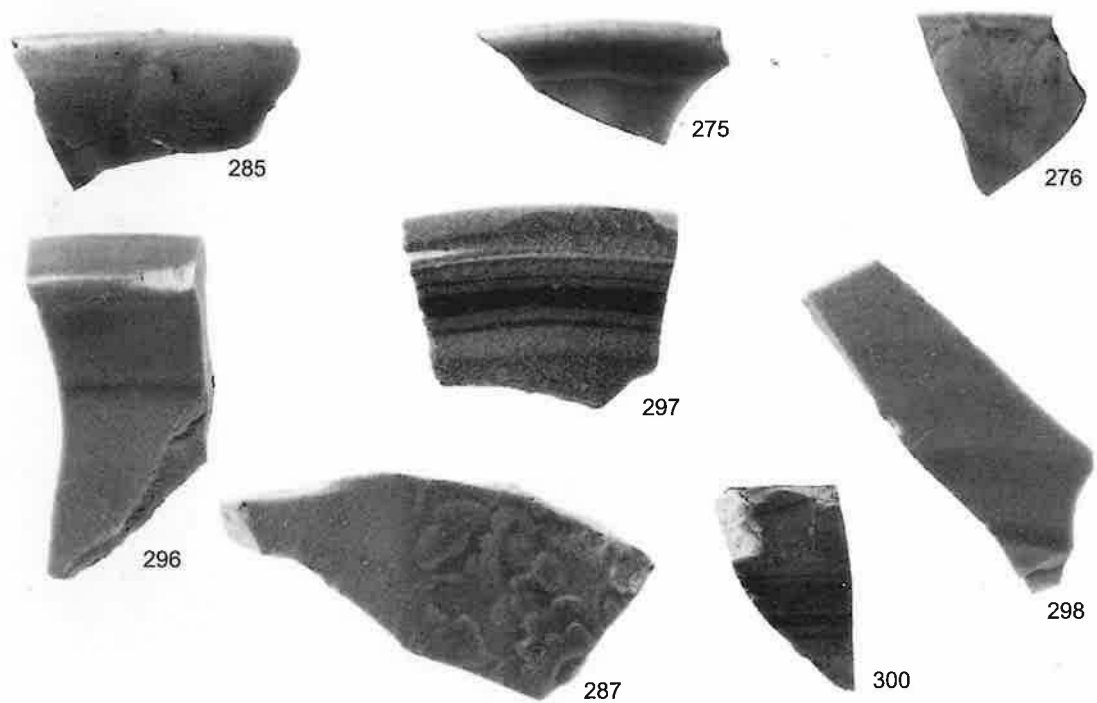
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器12)



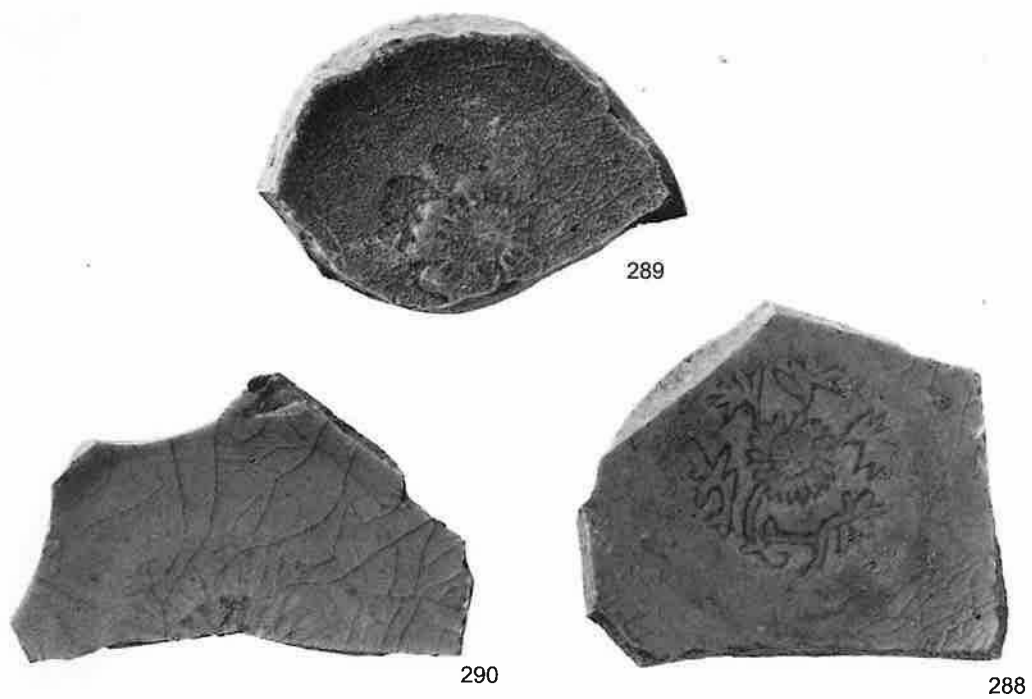
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器13)



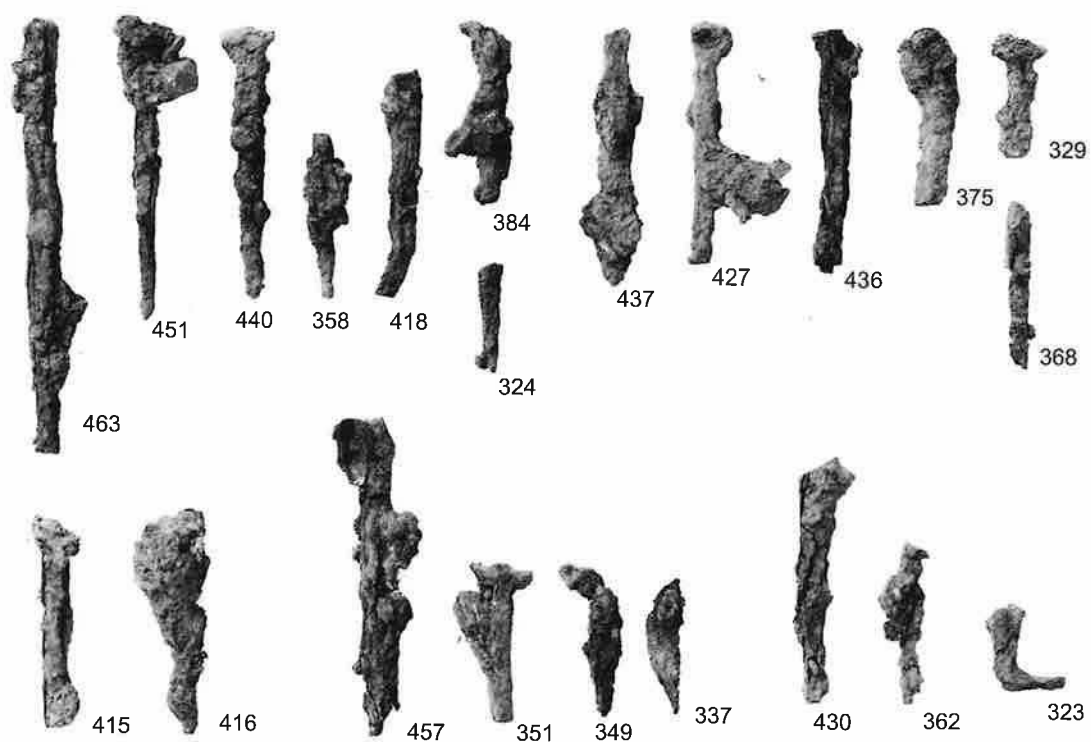
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (国産陶器14)



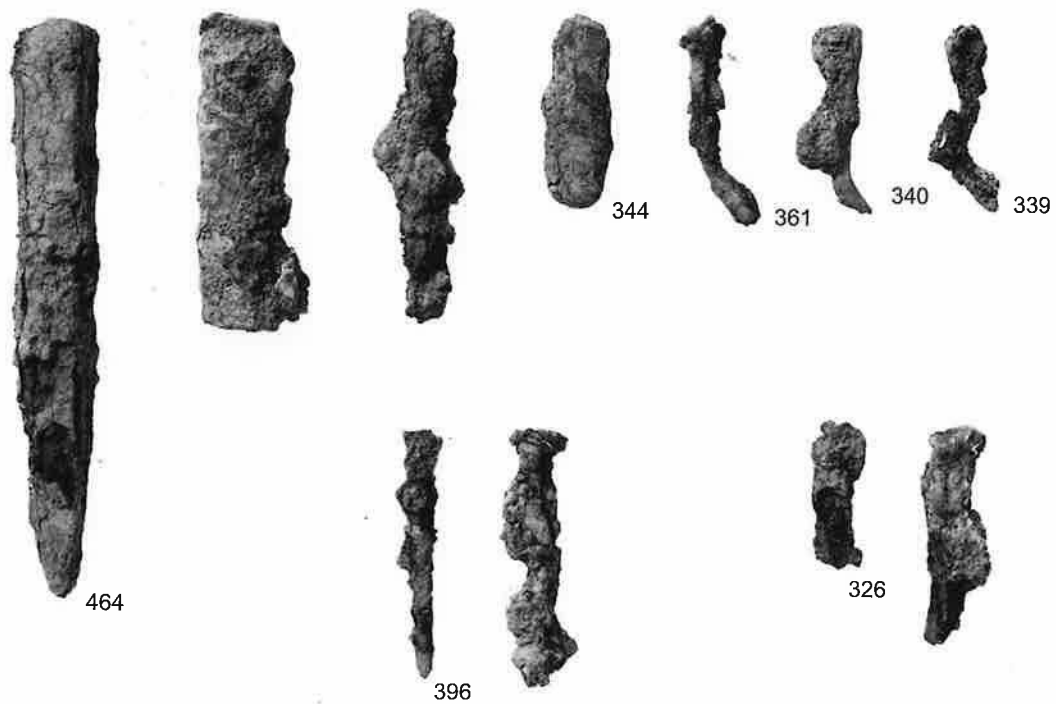
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (貿易陶磁1)



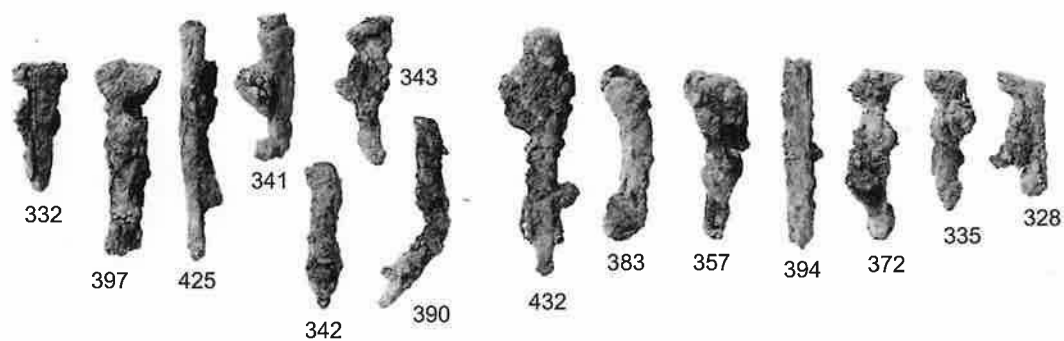
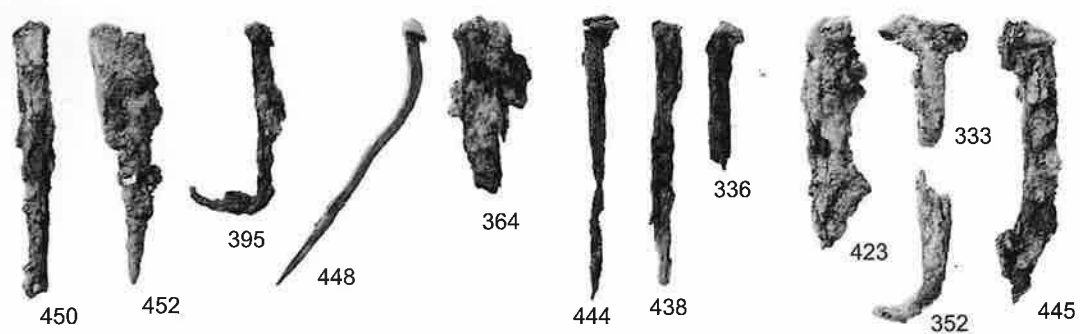
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (貿易陶磁2)



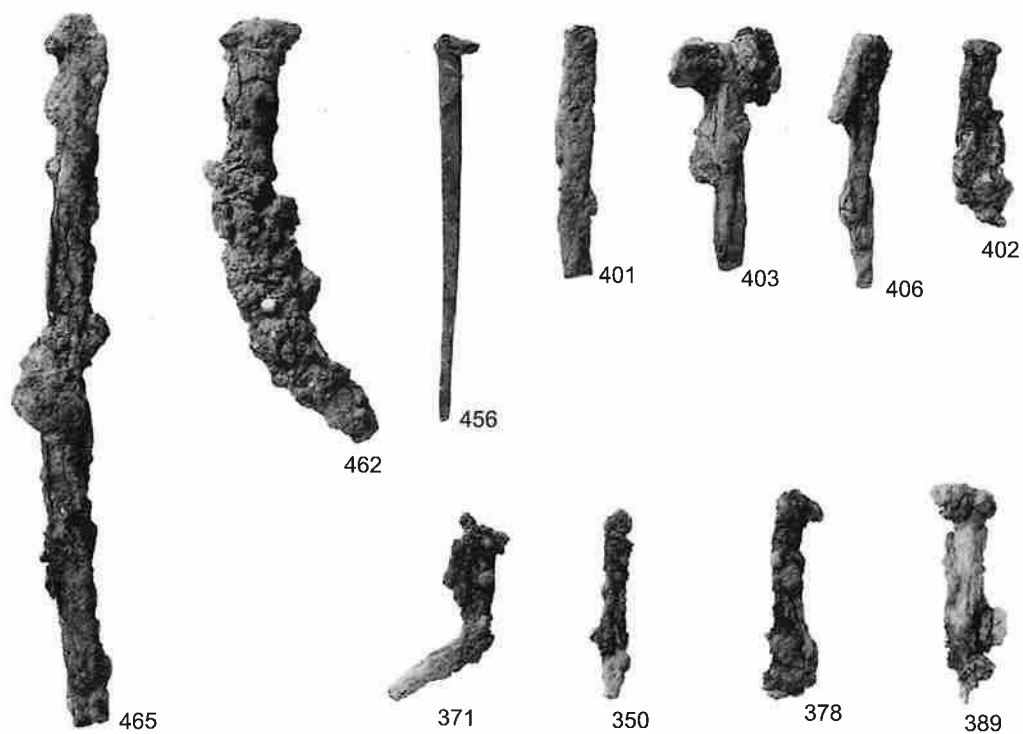
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器 1)



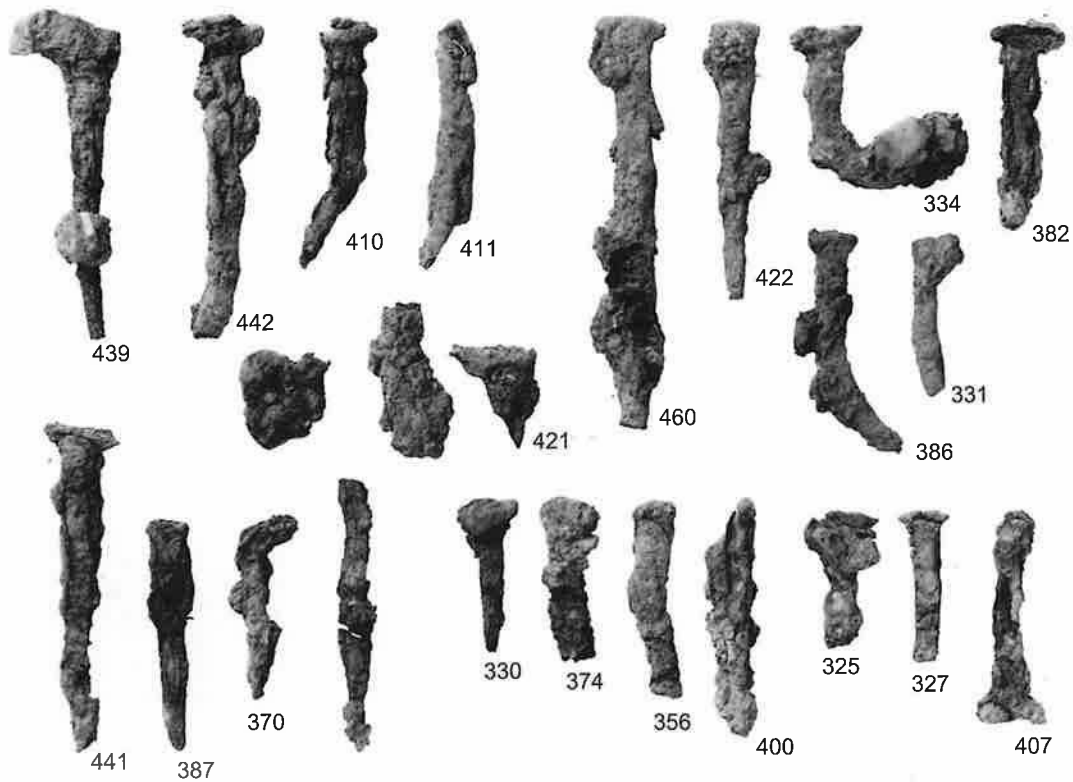
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器 2)



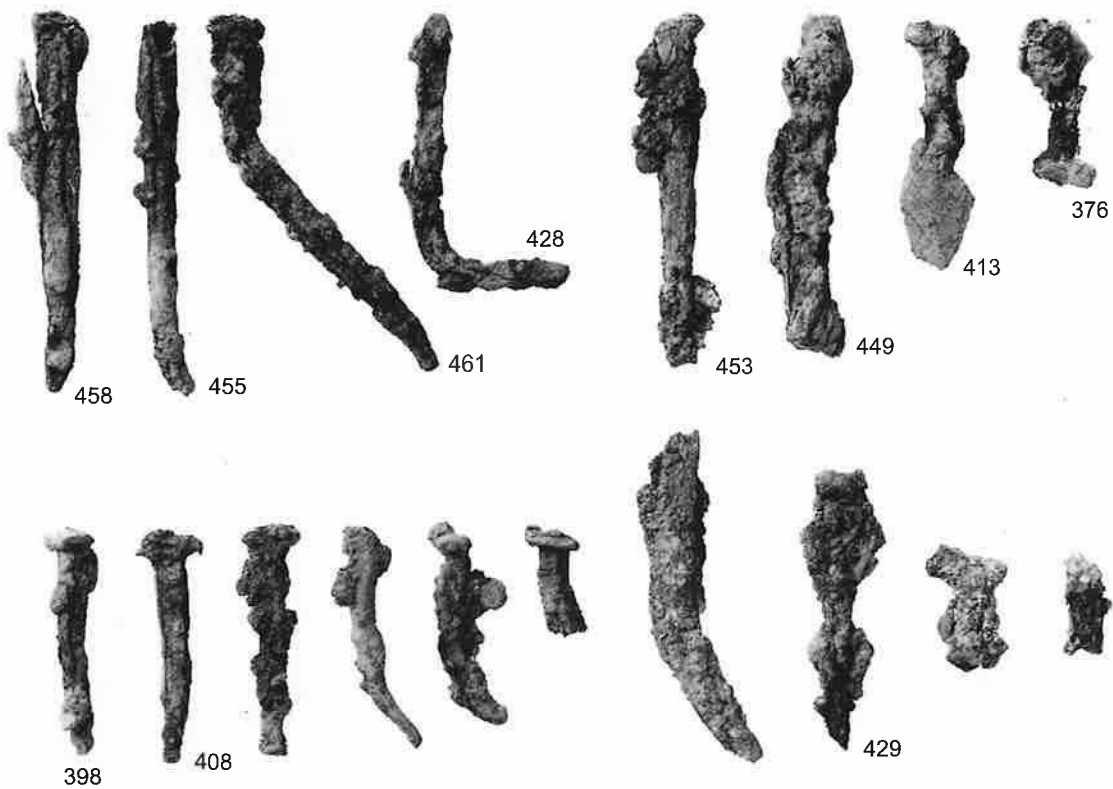
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器 3)



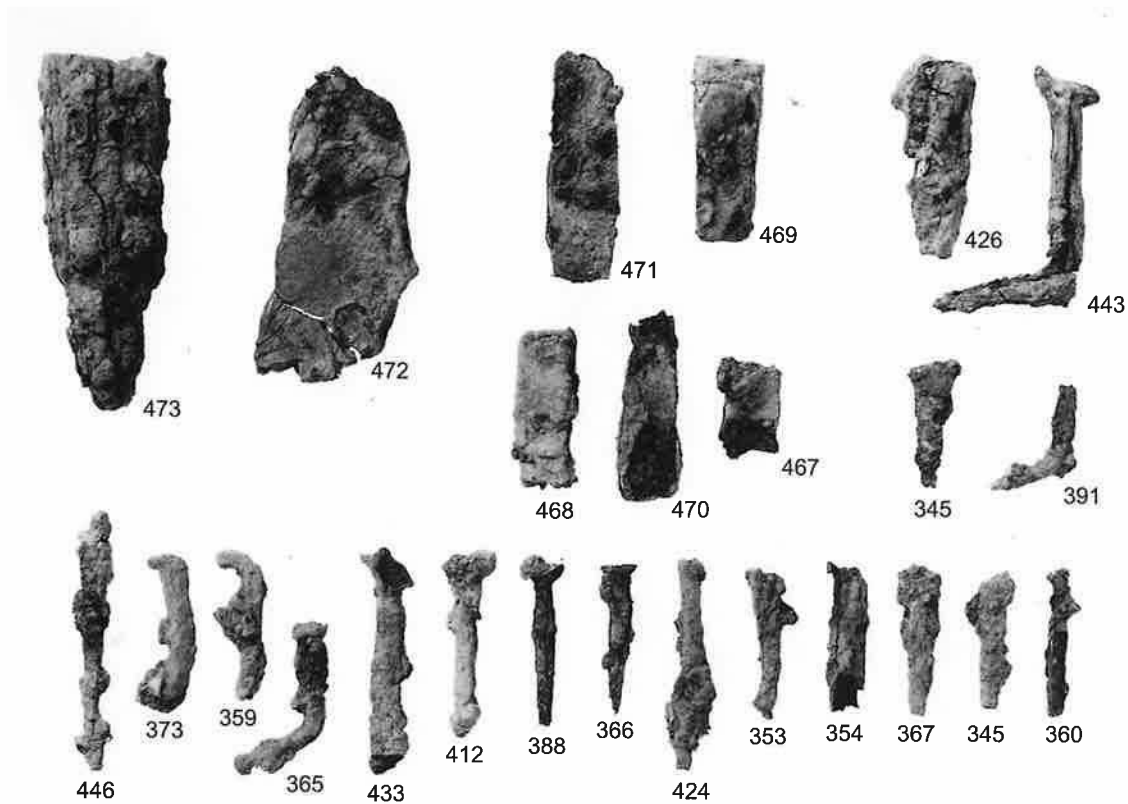
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器 4)



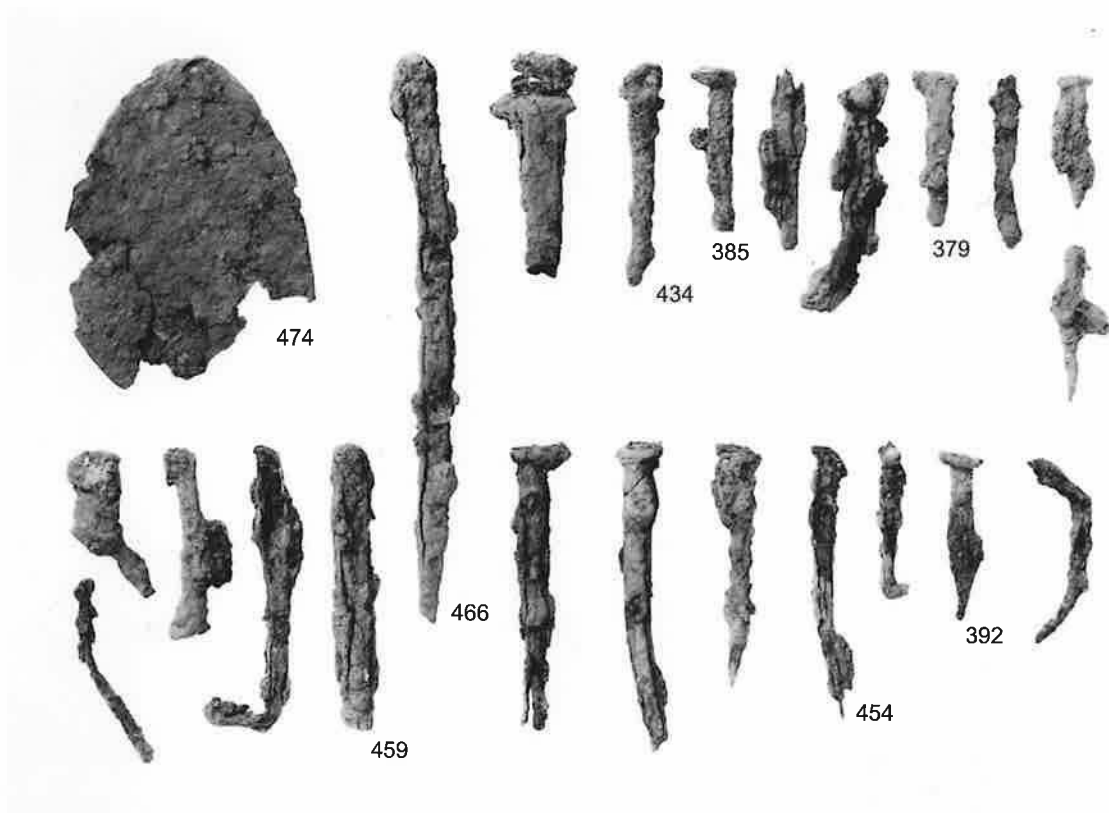
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物（金属器5）



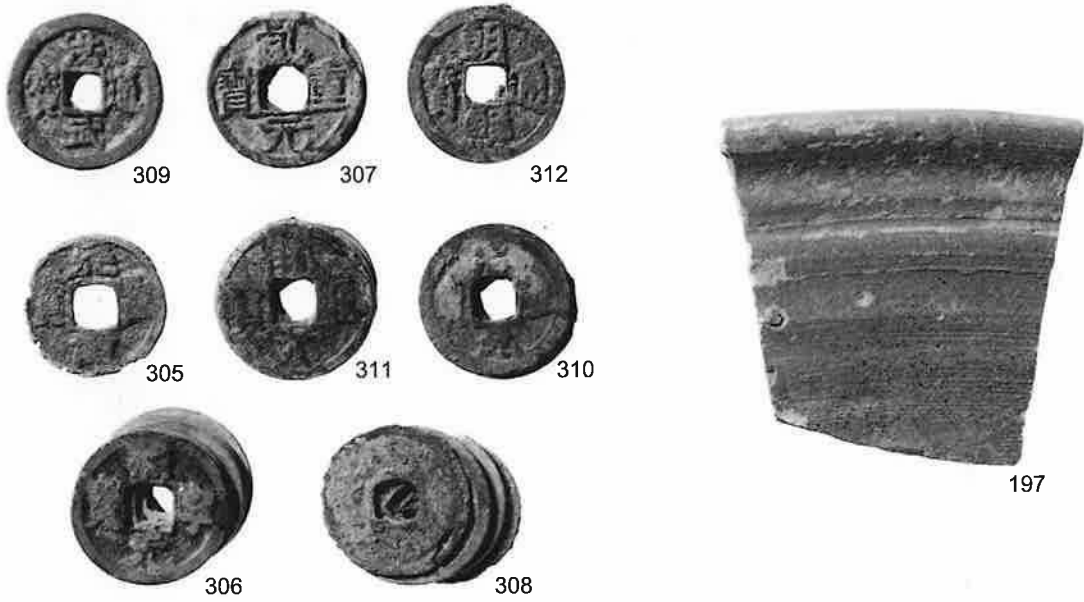
(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物（金属器6）



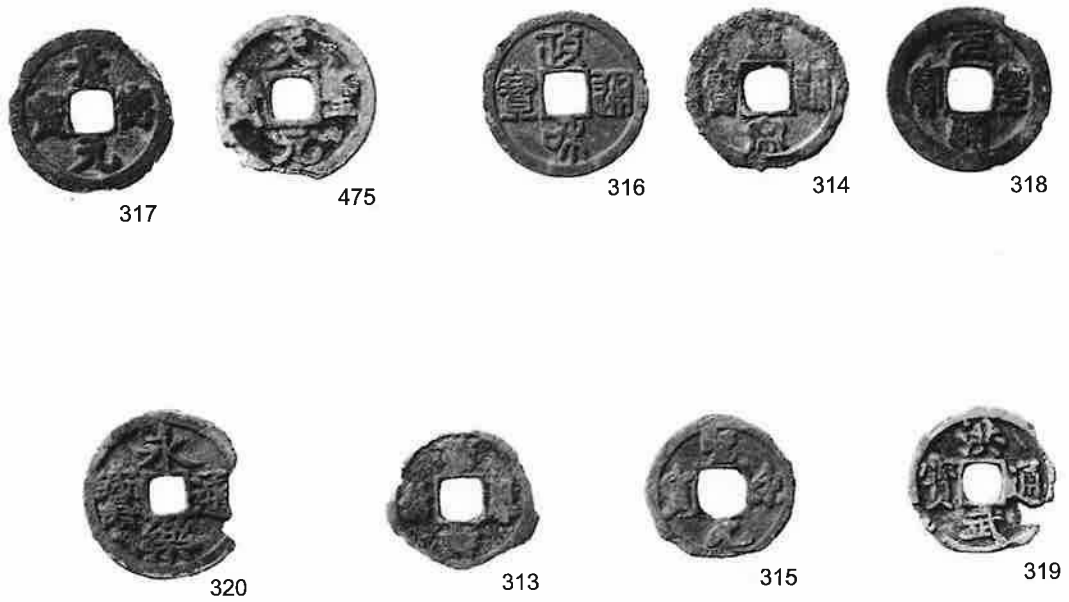
(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器7)



(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (金属器8)



(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物（錢貨／地鎮遺構）



(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物（錢貨2）



(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物（宝冠）



(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物（青磁碗）



(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (瀬戸美濃播鉢・常滑産大甕)



(1) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (石製品1)



(2) 弥高寺跡第2次調査出土遺物 (石製品2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうごくしいせきはつくつちょうさほうこくしょ
書名	京極氏遺跡発掘調査報告書
副書名	京極氏館跡第1～3次、弥高寺跡第1・2次
シリーズ名	米原市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	4
編著者名	高橋順之
編集機関	米原市教育委員会
所在地	滋賀県米原市長岡1050番地の1
発行年月日	平成24年3月31日
ふりがな 所収遺跡名	きょうごくしかたあと や たかじあと 京極氏館跡・弥高寺跡
ふりがな 所在地	じょうへいじ やたか 上平寺・弥高
コード	市町村 461 遺跡No. 042・014
北緯	35° 23' 20" ・ 35° 23' 43"
東経	136° 25' 55" ・ 136° 25' 35"
調査期間	平成17年8月～平成20年11月
調査面積	770m ²
調査原因	確認調査
種別	城館跡、寺院跡
主な時代	平安、中世
主な遺構	礎石建物、庭園遺構、寺院基壇、石垣
主な遺物	須恵器、土師器、貿易陶磁、国産陶器、鉄釘、古銭、宝冠
特記	国の史跡に指定された「京極氏遺跡 一京極氏城館跡・弥高寺跡一」 (所在地：米原市弥高・上平寺・藤川、面積：約108ha)を構成する、京極氏館跡(上平寺)および弥高寺跡(弥高)において、将来の史跡整備と保存活用のための基礎資料を得ることを目的に、遺構の確認をおこなった調査

米原市埋蔵文化財調査報告書第4集
京極氏遺跡調査報告書
—京極氏館跡第1～3次、弥高寺跡第1・2次—

平成24年3月31日

発行 米原市教育委員会
〒521-0292 滋賀県米原市長岡1050番地1
TEL.0749-55-8020・FAX.0749-55-4556

印刷 はなまる商店
〒521-0035 滋賀県米原市醒井304-1